

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第351集

熊谷市

諏訪木遺跡Ⅲ

県道熊谷羽生線（熊谷市地内）埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅲ—

2008

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 桶部倉翅壁板出土状況



2 桶部倉翅壁板 (内面)



3 桶部倉翅壁板 (外面)

卷頭図版 2



1 桶部倉矧壁板 左端部板厚調節加工



2 桶部倉矧壁板 右端部板厚調節加工



3 桶部倉矧壁板 側面部V字谷形加工



4 桶部倉矧壁板 側面部V字谷形加工



1 E区第1号井戸跡



2 E区第1号井戸跡 井戸枠検出状況



4 E区第1号土壌検出状況



5 E区第1号土壌蔵骨器出土状況



3 E区第1号井戸跡出土常滑大甕



6 E区第1号土壌出土蔵骨器と蓋石

諏訪木遺跡の紹介

諏訪木遺跡は、JR高崎線熊谷駅の北東約2km、行田市との市境近くの熊谷市東端にあります。これまでの発掘調査で、縄文時代後期（約3,500年前）から江戸時代のムラ跡が発見されています。なかでも、古墳時代後期（約1,500年前）の「ムラのマツリ」から、斎串などの出土により平安時代（約1,000年前）には「律令祭祀」へ変化した河川祭祀跡は、全国的に注目されています。

今回は、県道熊谷羽生線の建設に伴う調査で、上面の弥生時代（約2,000年前）～戦国時代（450年前）と、下面の縄文時代晩期（約3,000年前）の二面の文化層が検出されました。上面の文化層からは、弥生時代から平安時代の竪穴住居跡や建物跡、鎌倉時代（約750年前）の井戸跡、戦国時代の墓跡などが見つかりました。また、古墳時代前期（約1,650年前）の河川跡からは多量の木製品が出土しました。このなかには、板倉造り建物の壁板が含まれていました。この壁板は「樋部倉矧」と呼ばれる特殊な加工が施され、東日本では最古段階の貴重な発見例となりました。

序

埼玉県5か年計画「ゆとりとチャンスの埼玉プラン」は、総合交通体系の整備を基本目標のひとつとして掲げ、「人と自然にやさしい道づくり」を基本理念とした「時間が読める道づくり」と「安心と活力の道づくり」が進められております。

県北部に位置する熊谷市は、「北部複合都市圏」における業務核都市と位置づけられ、業務・商業などの高次都市機能を集積させて若者に魅力のある定住都市圏の形成が期待されているところです。その市街地を走る県道熊谷羽生線は、平成16年に開催された「彩の国まごころ国体」メイン会場へのアクセス道路として計画され、同時に生活環境の改善を目的とした安心・安全な道路空間づくりが進められてまいりました。

この事業地内に所在する諏訪木遺跡の取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係機関と慎重に協議してまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講じることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代から平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、中・近世の溝跡・井戸跡などの長期間に及ぶ遺構群が発見されました。特に、古墳時代前期の河川跡から出土した板倉造り建物の壁板は、ひまぐらば樋部倉刻という特殊な加工が施され、東日本最古段階の貴重な発見例となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護・普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、熊谷県土整備事務所、熊谷市教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 刈部 博

例言

1. 本書は、埼玉県熊谷市上之に所在する諏訪木遺跡第9次調査・第10次調査・第12次調査の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

諏訪木遺跡 (SWNK)

第9次

埼玉県熊谷市大字上之2873番地他

平成14年5月23日付け 教文第2-18号

第10次

埼玉県熊谷市大字上之2873番地他

平成14年11月8日付け 教文第2-87号

第11次

埼玉県熊谷市大字上之2851番地他

平成15年4月11日付け 教文第2-1号

3. 発掘調査は、県道熊谷羽生線(熊谷市地内)建設事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課(当時)が調整し、埼玉県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 県道熊谷羽生線(熊谷市地内)建設事業に伴う発掘調査報告書は下記のとおりに刊行され、本書は3巻目となる。

池上/諏訪木 事業団報告書第283集 2002

諏訪木遺跡Ⅱ 事業団報告書第336集 2007

5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3の組織により実施した。

第9次調査は、平成14年5月15日から平成14年7月31日まで、山本靖・岡本健一が担当し、宅間清公の補助を受けて実施した。

第10次調査は、平成14年11月1日から平成15年3月27日まで、細田勝・根岸洋・山本・岡本が担当し、宅間の補助を受けて実施した。

第12次調査は、平成15年4月8日から平成15年9月30日まで、西井幸雄・渡辺清志・田代雄介が担当して実施した。

整理報告書作成事業は平成16年4月8日から平成20年3月24日まで実施した。このうち、平成16年4月8日から平成18年9月30日までには渡辺が担当して実施し、平成19年3月20日に事業団報告書第336集として印刷・刊行した。

平成18年10月1日から平成20年3月24日までは山本が担当して実施し、事業団報告書第351集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は、第9・10次調査では中央航業株式会社、第12次調査では株式会社中央測地設計に委託した。

出土木製品の樹種同定はバリノ・サーヴェイ株式会社、出土漆器の保存処理は株式会社吉田生物研究所に委託した。

7. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は山本が行った。また、巻頭図版3-3は、小川忠博氏の協力を得た。

8. 出土品の整理・図版作成は山本が行い、大和田瞳・鈴木理恵の補助を受けた。

9. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、他は山本が行った。

10. 本書の編集は山本が行った。

11. 本書に掲載した資料は、平成20年4月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。

12. 発掘調査、本書の作成にあたり、下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。

熊谷市教育委員会

金子正之・寺社下博・保積裕昌・松田哲・宮瀧文二・宮本長二郎・山田昌久・吉野健

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第Ⅱ系（原点北緯36°00'00"、東経139°50'00"）に基づく座標値を示す。また各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

M-35グリッド北西杭の座標は、X=16,580m、Y=-37,950m、北緯36°08'55.35"、東経139°24'41.57"である。また、世界測地系による換算値は、X=16,935.47m、Y=-38,242.98m、北緯36°09'06.79"、東経139°24'29.96"である。

2. 調査で使用したグリッドは、座標値X=16,700m、Y=-38,300mを基点とし、10m×10mの範囲を1グリッドとして設定した。

3. グリッド名称は、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に算用数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと算用数字を組み合わせた北西隅の名称をグリッド名称とした。

4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。

SJ…竅穴住居跡 SB…掘立柱建物跡
SA…欄跡 SD…溝跡 SE…井戸跡
SK…土塋 SN…水田跡 SR…周溝墓
SX…特殊遺構 Pit…小穴・柱穴

5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。例外的なものについては、個別に示した。

遺構

全測図 1:200

住居跡・井戸跡 1:60 遺構拡大図 1:30

掘立柱建物跡・欄跡・周溝墓 1:80

土塋・溝跡・ピット 1:80

遺物

土師器・須恵器・大型石製品など 1:4



土製品（土鏃・土玉など）・砥石 1:3

金属器・石製紡錘車 1:2

板碑 1:8 古銭 1:1

6. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を表す。

7. 遺構図の各種網掛け部表示は以下のとおりである。

焼土  炭化物 

噴砂  地山 

8. 遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。

断面黒塗り…須恵器

赤彩の範囲…網20%

黒色処理の範囲…網30%

施釉の範囲…網15%

付着物の範囲…網10%

9. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・口径・器高・底径の単位は、cmである。

・口径・底径の（ ）内の数値は推定値、器高の [] 内の数値は現存高を示す。

・胎土は、状態を3段階に分け、含まれる鉱物等のうち特徴的なものを記号で示した。

①緻密 ②普通 ③粗

A石英 B長石 C雲母 D角閃石

E片岩 F白色針状物質 G赤色粒子

H白色粒子 I黒色粒子 J礫

・焼成は、3段階に分けて記号で示した。

A硬質 B普通 C軟質

・色調は、「新版標準土色帖」に照らし、最も近い色相を記した。

・残存率は、図示した器形に対する大まかな遺存程度を5%単位で表した。

・備考には、出土位置、注記No、推定される須恵器産地などを記した。

9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/25000地形図、熊谷市都市計画図1/2500を使用・編集した。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(5) 井戸跡	161
1. 発掘調査に至る経過	1	(6) 土壌・溝跡	162
2. 発掘調査、報告書作成の経過	2	(7) 水田跡	170
3. 発掘調査、報告書作成の組織	3	(8) 河川跡	170
II 遺跡の立地と環境	5	(9) その他の遺物	197
III 遺跡の概要	11	4. G区の遺構と遺物	204
IV 遺構と遺物	17	(1) 住居跡	204
1. D区の遺構と遺物	17	(2) 掘立柱建物跡	234
(1) 掘立柱建物跡	17	(3) 周溝墓	235
(2) 柵跡	27	(4) 性格不明遺構	236
(3) 井戸跡	29	(5) 土壌・溝跡	237
(4) 土壌墓	42	(6) その他の遺物	254
(5) 土壌・溝跡・はたけ跡	46	V 分析・保存処理	255
(6) その他の遺物	100	1. 諏訪木遺跡から出土した建築材の	
2. E区の遺構と遺物	116	樹種同定	255
(1) 竪穴状遺構	116	2. 諏訪木遺跡から出土した漆器の	
(2) 井戸跡・土壌・溝跡	117	高級アルコール法による保存処理	262
(3) その他の遺物	135	VI 調査のまとめ	264
3. F区の遺構と遺物	138	1. 諏訪木遺跡の変遷過程	264
(1) 住居跡	138	2. 縦じ合わせ構造をもつ樋部倉矧の壁板	
(2) 掘立柱建物跡	155	269
(3) 柵跡	155		
(4) 周溝墓	158		

写真図版

挿図目次

第1図	埼玉県地形	5	第31図	D区土壌・溝跡①	47
第2図	周辺の遺跡	6	第32図	D区土壌・溝跡①出土遺物	48
第3図	諏訪木遺跡調査地点位置図	11	第33図	D区土壌・溝跡②(1)	49
第4図	調査区全測図(1)	12	第34図	D区土壌・溝跡②(2)	50
第5図	調査区全測図(2)	13	第35図	D区土壌・溝跡②出土遺物(1)	52
第6図	調査区配置図	14	第36図	D区土壌・溝跡②出土遺物(2)	53
第7図	D区第1号掘立柱建物跡・出土遺物	18	第37図	D区土壌・溝跡③(1)	55
第8図	D区第2・3・4号掘立柱建物跡	19	第38図	D区土壌・溝跡③(2)	56
第9図	D区第5号掘立柱建物跡・出土遺物	20	第39図	D区土壌・溝跡③出土遺物(1)	59
第10図	D区第6号掘立柱建物跡	22	第40図	D区土壌・溝跡③出土遺物(2)	60
第11図	D区第6号掘立柱建物跡出土遺物	23	第41図	D区土壌・溝跡③出土遺物(3)	61
第12図	D区第7・8号掘立柱建物跡	25	第42図	D区土壌・溝跡③出土遺物(4)	62
第13図	D区第9号掘立柱建物跡	26	第43図	D区土壌・溝跡③出土遺物(5)	63
第14図	D区第10号掘立柱建物跡・出土遺物	26	第44図	D区土壌・溝跡③出土遺物(6)	64
第15図	D区第2号欄跡出土遺物	27	第45図	D区土壌・溝跡④(1)	67
第16図	D区第1・2・3・4・5・6号欄跡	28	第46図	D区土壌・溝跡④(2)	68
第17図	D区井戸跡(1)	30	第47図	D区土壌・溝跡④出土遺物	69
第18図	D区井戸跡(2)	31	第48図	D区土壌・溝跡⑤(1)	70
第19図	D区井戸跡出土遺物(1)	33	第49図	D区土壌・溝跡⑤(2)	71
第20図	D区井戸跡出土遺物(2)	34	第50図	D区土壌・溝跡⑤出土遺物(1)	72
第21図	D区井戸跡出土遺物(3)	35	第51図	D区土壌・溝跡⑤出土遺物(2)	73
第22図	D区井戸跡(3)	37	第52図	D区土壌・溝跡⑤出土遺物(3)	75
第23図	D区第10号井戸跡出土遺物(1)	38	第53図	D区土壌・溝跡⑤出土遺物(4)	76
第24図	D区第10号井戸跡出土遺物(2)	39	第54図	D区土壌・溝跡⑤出土遺物(5)	77
第25図	D区第10号井戸跡出土遺物(3)	40	第55図	D区土壌・溝跡⑥(1)	78
第26図	D区第11号井戸跡出土遺物	41	第56図	D区土壌・溝跡⑥(2)	79
第27図	D区第1・2号土壌墓	42	第57図	D区土壌・溝跡⑥出土遺物(1)	81
第28図	D区第1号土壌墓出土遺物(1)	43	第58図	D区土壌・溝跡⑥出土遺物(2)	82
第29図	D区第1号土壌墓出土遺物(2)	44	第59図	D区土壌・溝跡⑥出土遺物(3)	83
第30図	D区第2号土壌墓出土遺物	45	第60図	D区土壌・溝跡⑥出土遺物(4)	84
			第61図	D区土壌・溝跡⑥出土遺物(5)	85
			第62図	D区土壌・溝跡⑦(1)	88
			第63図	D区土壌・溝跡⑦(2)	89
			第64図	D区土壌・溝跡⑦出土遺物	90

第65図	D区土壌・溝跡⑧ (1) ……………	92	第99図	E区土壌・溝跡②出土遺物 (1) ……	129
第66図	D区土壌・溝跡⑧ (2) ……………	93	第100図	E区土壌・溝跡②出土遺物 (2) ……	130
第67図	D区土壌・溝跡⑨ (1) ……………	95	第101図	E区土壌・溝跡③ ……………	132
第68図	D区土壌・溝跡⑨ (2) ……………	96	第102図	E区土壌・溝跡③出土遺物 ……	134
第69図	D区第1号はたけ跡 ……………	97	第103図	E区グリッド遺物 ……………	136
第70図	D区第2号はたけ跡 ……………	98	第104図	E区表採遺物 ……………	137
第71図	D区第1号はたけ跡出土遺物 ……	99	第105図	F区第1号住居跡・出土遺物 ……	138
第72図	D区第2号はたけ跡出土遺物 ……	99	第106図	F区第2号住居跡・出土遺物 ……	140
第73図	D区グリッド遺物 (1) ……………	100	第107図	F区第3号住居跡・出土遺物 ……	141
第74図	D区グリッド遺物 (2) ……………	101	第108図	F区第2・3・4号住居跡 出土遺物 ……………	142
第75図	D区グリッド遺物 (3) ……………	102	第109図	F区第4号住居跡 F区第17・18・19・20号土壌 ……	143
第76図	D区グリッド遺物 (4) ……………	103	第110図	F区第4号住居跡出土遺物 ……	144
第77図	D区グリッド遺物 (5) ……………	104	第111図	F区第5号住居跡 ……………	146
第78図	D区グリッド遺物 (6) ……………	105	第112図	F区第5号住居跡出土遺物 (1) ……	147
第79図	D区グリッド遺物 (7) ……………	106	第113図	F区第5号住居跡出土遺物 (2) ……	148
第80図	D区グリッド遺物 (8) ……………	107	第114図	F区第6号住居跡・出土遺物 ……	149
第81図	D区グリッド遺物 (9) ……………	108	第115図	F区第8号住居跡出土遺物 ……	150
第82図	D区グリッド遺物 (10) ……………	109	第116図	F区第8号住居跡 ……………	151
第83図	D区グリッド遺物 (11) ……………	110	第117図	F区第9号住居跡 ……………	152
第84図	D区第2地点遺物 ……………	113	第118図	F区第9号住居跡出土遺物 ……	153
第85図	D区第3地点遺物 ……………	114	第119図	F区第10号住居跡・出土遺物 ……	153
第86図	D区表採遺物 ……………	115	第120図	F区第11号住居跡・出土遺物 ……	154
第87図	E区第1号堅穴状遺構出土遺物 ……	116	第121図	F区第12号住居跡・出土遺物 ……	154
第88図	E区第1号堅穴状遺構 ……………	117	第122図	F区第1・2号掘立柱建物跡・ 出土遺物 ……………	156
第89図	E区第1号井戸跡 ……………	118	第123図	F区第1・2号欄跡 ……………	157
第90図	E区第1号井戸跡出土遺物 (1) ……	119	第124図	F区第1号周溝墓 ……………	159
第91図	E区第1号井戸跡出土遺物 (2) ……	120	第125図	F区第1号周溝墓出土遺物 (1) ……	160
第92図	E区第1号土壌 ……………	121	第126図	F区第1号周溝墓出土遺物 (2) ……	161
第93図	E区第1号土壌出土遺物 (1) ……	122	第127図	F区第2号周溝墓 ……………	161
第94図	E区第1号土壌出土遺物 (2) ……	123	第128図	F区井戸跡 ……………	162
第95図	E区第2号井戸跡・土壌・溝跡① (1) ……………	124	第129図	F区井戸跡出土遺物 ……………	163
第96図	E区第2号井戸跡・土壌・溝跡① (2) ・② (2) ……………	125	第130図	F区土壌・溝跡① ……………	164
第97図	E区土壌・溝跡② (1) ……………	126	第131図	F区土壌・溝跡② ……………	166
第98図	E区土壌・溝跡①出土遺物 ……	127			

第132図	F区土壌・溝跡③(1) ……………	167	第168図	G区第7号住居跡・G区第1号土壌 ……………	213
第133図	F区土壌・溝跡③(2) ……………	168	第169図	G区第7号住居跡貯蔵穴 G区第12号土壌 ……………	214
第134図	F区土壌・溝跡①②③出土遺物 ……	169	第170図	G区第7号住居跡・G区第1号土壌 出土遺物 ……………	214
第135図	F区第1・2・3号水田跡 ……………	171	第171図	G区第8号住居跡・出土遺物 ……	216
第136図	F区河川跡 ……………	173	第172図	G区第9号住居跡 ……………	217
第137図	F区河川跡出土遺物(1) ……………	174	第173図	G区第9号住居跡カマドB・ 出土遺物 ……………	218
第138図	F区河川跡出土遺物(2) ……………	175	第174図	G区第10号住居跡 ……………	220
第139図	F区河川跡出土遺物(3) ……………	176	第175図	G区第10号住居跡貯蔵穴 ……………	221
第140図	F区河川跡出土遺物(4) ……………	177	第176図	G区第10号住居跡出土遺物(1) ……	221
第141図	F区河川跡出土遺物(5) ……………	178	第177図	G区第10号住居跡出土遺物(2) ……	222
第142図	F区河川跡出土遺物(6) ……………	182	第178図	G区第11号住居跡・出土遺物 ……	223
第143図	F区河川跡出土遺物(7) ……………	183	第179図	G区第12号住居跡・出土遺物 G区第6・9・10・15号土壌 ……	224
第144図	F区河川跡出土遺物(8) ……………	184	第180図	G区第13号住居跡・G区第11号土壌 ……………	225
第145図	F区河川跡出土遺物(9) ……………	186	第181図	G区第13号住居跡・G区第11号土壌 出土遺物 ……………	226
第146図	F区河川跡出土遺物(10) ……………	187	第182図	G区第14号住居跡・出土遺物 ……	227
第147図	F区河川跡出土遺物(11) ……………	188	第183図	G区第15号住居跡・出土遺物 ……	228
第148図	F区河川跡出土遺物(12) ……………	189	第184図	G区第16・18号住居跡・出土遺物 G区第22号土壌 ……………	229
第149図	F区河川跡出土遺物(13) ……………	191	第185図	G区第17号住居跡 ……………	230
第150図	F区河川跡出土遺物(14) ……………	192	第186図	G区第19号住居跡 ……………	231
第151図	F区河川跡出土遺物(15) ……………	193	第187図	G区第19号住居跡出土遺物 ……	232
第152図	F区河川跡出土遺物(16) ……………	194	第188図	G区第20号住居跡・G区第21号土壌 ……………	233
第153図	F区河川跡出土遺物(17) ……………	195	第189図	G区第20号住居跡出土遺物 ……	234
第154図	F区グリッド遺物(1) ……………	198	第190図	G区第1号掘立柱建物跡 ……………	234
第155図	F区グリッド遺物(2) ……………	199	第191図	G区第1号周溝墓 ……………	235
第156図	F区グリッド遺物(3) ……………	200	第192図	G区第1号周溝墓・出土遺物 ……	236
第157図	F区グリッド遺物(4) ……………	201	第193図	G区第1号性格不明遺構 ……………	236
第158図	F区表探遺物 ……………	203	第194図	G区第4・5号性格不明遺構 ……	237
第159図	G区第1号住居跡・出土遺物 ……	204			
第160図	G区第2号住居跡・出土遺物 ……	206			
第161図	G区第3号住居跡 ……………	207			
第162図	G区第3号住居跡出土遺物 ……	208			
第163図	G区第4号住居跡 ……………	208			
第164図	G区第5号住居跡 ……………	209			
第165図	G区第5号住居跡貯蔵穴 ……………	210			
第166図	G区第5号住居跡出土遺物 ……	211			
第167図	G区第6号住居跡・出土遺物 ……	212			

第195図	G区土壌・溝跡①	238
第196図	G区土壌・溝跡②	240
第197図	G区土壌・溝跡③	242
第198図	G区土壌・溝跡④	243
第199図	G区土壌・溝跡⑤(1)	245
第200図	G区土壌・溝跡⑤(2)	246
第201図	G区土壌・溝跡⑥(1)	248
第202図	G区土壌・溝跡⑥(2)	249
第203図	G区土壌・溝跡⑦	250
第204図	G区土壌・溝跡出土遺物(1)	251
第205図	G区土壌・溝跡出土遺物(2)	252
第206図	G区グリッド遺物・表探遺物	254

第207図	樹種同定試料	256
第208図	板倉造り建物復元図	269
第209図	埼玉県深谷市(旧岡部町)中宿古代 倉庫群跡 2号建物(復元)	270
第210図	板材の接ぎ継ぎ方法	271
第211図	諏訪木遺跡の縦じあわせ構造をもつ 樋部倉矧壁の模式図	272
第212図	埼玉県熊谷市北島遺跡から出土した 樋部倉矧の壁板	273
第213図	樋部倉矧壁板の参考資料(1)	274
第214図	樋部倉矧壁板の参考資料(2)	276
第215図	樋部倉矧壁板の参考資料(3)	278

目 次

第1表	発掘調査・整理報告書作成工程表	2
第2表	周辺遺跡一覧表	7
第3表	D区第6号掘立柱建物跡出土遺物 観察表	24
第4表	D区第10号掘立柱建物跡出土遺物 観察表	26
第5表	D区第2号欄跡出土遺物観察表	27
第6表	D区井戸跡出土遺物観察表	41
第7表	D区第2号土壌墓出土遺物観察表	45
第8表	D区土壌・溝跡①出土遺物観察表	48
第9表	D区土壌・溝跡②出土遺物観察表	54
第10表	D区土壌・溝跡③出土遺物観察表	64
第11表	D区土壌・溝跡④出土遺物観察表	69
第12表	D区土壌・溝跡⑤出土遺物観察表	74
第13表	D区土壌・溝跡⑥出土遺物観察表	86
第14表	D区土壌・溝跡⑦出土遺物観察表	90
第15表	D区第1号はたけ跡出土遺物観察表	99
第16表	D区第2号はたけ跡出土遺物観察表	

.....	99	
第17表	D区グリッド遺物観察表	111
第18表	D区第2地点遺物観察表	113
第19表	D区第3地点遺物観察表	115
第20表	E区第1号竪穴状遺構出土遺物 観察表	116
第21表	E区第1号井戸跡出土遺物観察表	118
第22表	E区第2号井戸跡・土壌・溝跡① 出土遺物観察表	127
第23表	E区土壌・溝跡②出土遺物観察表	131
第24表	E区土壌・溝跡③出土遺物観察表	134
第25表	E区グリッド遺物観察表	135
第26表	E区表探遺物観察表	137
第27表	F区第1号住居跡出土遺物観察表	139
第28表	F区第2号住居跡出土遺物観察表	140
第29表	F区第3号住居跡出土遺物観察表	140
第30表	F区第2・3・4号住居跡出土遺物 観察表	142
第31表	F区第4号住居跡出土遺物観察表	145

第32表	F区第5号住居跡出土遺物観察表	146	出土遺物観察表	215	
第33表	F区第6号住居跡出土遺物観察表	150	第52表	G区第8号住居跡出土遺物観察表	216
第34表	F区第8号住居跡出土遺物観察表	150	第53表	G区第9号住居跡出土遺物観察表	219
第35表	F区第9号住居跡出土遺物観察表	153	第54表	G区第10号住居跡出土遺物観察表	219
第36表	F区第10号住居跡出土遺物観察表	153	第55表	G区第11号住居跡出土遺物観察表	223
第37表	F区第11号住居跡出土遺物観察表	155	第56表	G区第12号住居跡・第9号土壌 出土遺物観察表	224
第38表	F区第12号住居跡出土遺物観察表	155	第57表	G区第13号住居跡・第11号土壌 出土遺物観察表	226
第39表	F区第2号掘立柱建物跡出土遺物 観察表	156	第58表	G区第14号住居跡出土遺物観察表	227
第40表	F区第1号周溝墓出土遺物観察表	158	第59表	G区第16号住居跡出土遺物観察表	229
第41表	F区井戸跡出土遺物観察表	162	第60表	G区第19号住居跡出土遺物観察表	232
第42表	F区土壌・溝跡出土遺物観察表	170	第61表	G区第20号住居跡出土遺物観察表	234
第43表	F区河川跡出土遺物観察表	178	第62表	G区第1号周溝墓出土遺物観察表	236
第44表	F区グリッド遺物観察表	197	第63表	G区土壌・溝跡出土遺物観察表	253
第45表	F区表採遺物観察表	203	第64表	G区グリッド・表採遺物観察表	254
第46表	G区第1号住居跡出土遺物観察表	206	第65表	樹種同定結果	257
第47表	G区第2号住居跡出土遺物観察表	206			
第48表	G区第3号住居跡出土遺物観察表	207			
第49表	G区第5号住居跡出土遺物観察表	210			
第50表	G区第6号住居跡出土遺物観察表	212			
第51表	G区第7号住居跡・G区第1号土壌				

写真図版目次

巻頭図版1

- 1 樋部倉矧壁板出土状況
- 2 樋部倉矧壁板 (内面)
- 3 樋部倉矧壁板 (外面)

巻頭図版2

- 1 樋部倉矧壁板 左端部板厚調節加工
- 2 樋部倉矧壁板 右端部板厚調節加工

- 3 樋部倉矧壁板 側面部V字谷形加工

- 4 樋部倉矧壁板 側面部V字谷形加工

巻頭図版3

- 1 E区第1号井戸跡
- 2 E区第1号井戸跡 井戸枠検出状況
- 3 E区第1号井戸跡出土常滑大甕
- 4 E区第1号土壌検出状況

- 5 E区第1号土壙藏骨器出土状況
- 6 E区第1号土壙出土藏骨器と蓋石

図版 1

- 1 D区第4地点全景（東から）
- 2 D区第1地点全景（東から）

図版 2

- 1 D区第1地点全景（西から）
- 2 D区第2地点全景（東から）

図版 3

- 1 D区第5地点全景（東から）
- 2 D区第3地点全景（東から）

図版 4

- 1 D区第3地点全景（西から）
- 2 D区第6地点全景（東から）

図版 5

- 1 D区第6地点全景（西から）
- 2 D区第1号掘立柱建物跡
- 3 D区第2・3・4号掘立柱建物跡
- 4 D区第5号掘立柱建物跡
- 5 D区第6号掘立柱建物跡

図版 6

- 1 D区第7号掘立柱建物跡
- 2 D区第1・2号柵跡
- 3 D区第3・5号柵跡
- 4 D区第4号柵跡
- 5 D区第1号井戸跡
- 6 D区第1号井戸跡遺物出土状況
- 7 D区第1号井戸跡遺物出土状況
- 8 D区第3号井戸跡

図版 7

- 1 D区第5号井戸跡
- 2 D区第7号井戸跡
- 3 D区第8号井戸跡
- 4 D区第9号井戸跡
- 5 D区第10号井戸跡
- 6 D区第10号井戸跡井戸枠

- 7 D区第10号井戸跡掘形

- 8 D区第12号井戸跡

図版 8

- 1 D区第11号井戸跡検出状況
- 2 D区第11号井戸跡検出状況
- 3 D区第11号井戸跡
- 4 D区第11号井戸跡石組状況
- 5 D区第13号井戸跡
- 6 D区第15号井戸跡
- 7 D区第16号井戸跡
- 8 D区第18号井戸跡

図版 9

- 1 D区第1号土壙墓
- 2 D区第2号土壙墓
- 3 D区第8号土壙
- 4 D区第14・15号土壙遺物出土状況
- 5 D区第75号溝跡遺物出土状況
- 6 D区第19号溝跡
- 7 D区第76号溝跡
- 8 D区第73号溝跡

図版 10

- 1 D区第26号溝跡
- 2 D区第24・25号溝跡
- 3 D区第17・18号溝跡
- 4 D区第5・16・17・18号溝跡
- 5 D区第29号溝跡
- 6 D区第10号溝跡
- 7 D区第10号溝跡板石塔婆出土状況
- 8 D区第10号溝跡下駄出土状況

図版 11

- 1 D区第10号溝跡馬頭蓋骨出土状況
- 2 D区第7号溝跡
- 3 D区第7号溝跡埋設管接続部
- 4 D区第37号溝跡
- 5 E区第1地点全景（東から）
- 6 E区第1地点全景（西から）

- 7 E区第1地点東半部全景（東から）
- 8 E区第1地点西半部全景（北西から）

図版12

- 1 E区第2地点全景（東から）
- 2 E区第2地点全景（西から）
- 3 E区第1号竪穴状遺構
- 4 E区第1号井戸跡遺物出土状況
- 5 E区第1号井戸跡井戸枠遺物出土状況
- 6 E区第1号井戸跡掘形
- 7 E区第1号土壌検出状況
- 8 E区第1号土壌・蔵骨器

図版13

- 1 E区第1号土壌蔵骨器
- 2 E区第1号土壌掘形
- 3 E区第5・7号溝跡
- 4 E区第6号溝跡
- 5 E区第3号溝跡遺物出土状況
- 6 E区第2号土壌
- 7 E区第1・2号溝跡
- 8 E区第8号溝跡

図版14

- 1 F区第1地点全景（東から）
- 2 F区第1号住居跡
- 3 F区第2・3・4号住居跡
- 4 F区第2号住居跡
- 5 F区第2号住居跡遺物出土状況

図版15

- 1 F区第3号住居跡
- 2 F区第3号住居跡遺物出土状況
- 3 F区第4号住居跡
- 4 F区第4号住居跡遺物出土状況
- 5 F区第4号住居跡遺物出土状況
- 6 F区第4号住居跡遺物出土状況
- 7 F区第5号住居跡
- 8 F区第5号住居跡遺物出土状況

図版16

- 1 F区第5号住居跡遺物出土状況
- 2 F区第8号住居跡
- 3 F区第9号住居跡
- 4 F区第10号住居跡
- 5 F区第1号周溝墓
- 6 F区第1号周溝墓遺物出土状況
- 7 F区第1号周溝墓遺物出土状況
- 8 F区第1号周溝墓遺物出土状況

図版17

- 1 F区第2号周溝墓
- 2 F区第1号井戸跡
- 3 F区第2号井戸跡
- 4 F区第3号井戸跡
- 5 F区第3～8号溝跡
- 6 F区第12号土壌遺物出土状況
- 7 F区第1号溝跡
- 8 F区第1～3号水田跡検出状況

図版18

- 1 F区第1～3号水田跡
- 2 F区第2地点河川跡木製品出土状況
- 3 F区第2地点河川跡木製品出土状況
- 4 F区第2地点河川跡木製品出土状況
- 5 F区第2地点河川跡木製品出土状況
- 6 F区第2地点河川跡木製品出土状況
- 7 F区第2地点河川跡木製品出土状況
- 8 F区第2地点河川跡木製品出土状況

図版19

- 1 G区第2地点全景（東から）
- 2 G区第1地点全景（東から）

図版20

- 1 G区第3号住居跡（南から）
- 2 G区第3号住居跡カマドA
- 3 G区第3号住居跡（西から）
- 4 G区第3号住居跡カマドB
- 5 G区第2号住居跡
- 6 G区第5号住居跡

7 G区第5号住居跡遺物出土状況

8 G区第5号住居跡貯藏穴

図版21

1 G区第6号住居跡

2 G区第7号住居跡・G区第1号土塙

3 G区第7号住居跡遺物出土状況

4 G区第7号住居跡貯藏穴

5 G区第8号住居跡

6 G区第9号住居跡 (東から)

7 G区第9号住居跡カマドA

8 G区第9号住居跡 (西から)

図版22

1 G区第9号住居跡カマドB

2 G区第9号住居跡カマドB遺物出土状況

3 G区第10・11・13・14号住居跡

4 G区第10号住居跡

5 G区第10号住居跡貯藏穴検出状況

6 G区第10号住居跡貯藏穴遺物出土状況

7 G区第10号住居跡貯藏穴炭化物堆積状況

8 G区第10号住居跡貯藏穴掘形

図版23

1 G区第10号住居跡編物石出土状況

2 G区第11号住居跡

3 G区第11号住居跡遺物出土状況

4 G区第12号住居跡・G区第6・9・10号土塙

5 G区第12号住居跡炭化材検出状況

6 G区第13号住居跡

7 G区第11号土塙

8 G区第11号土塙遺物出土状況

図版24

1 G区第14号住居跡

2 G区第14号住居跡遺物出土状況

3 G区第15号住居跡カマド

4 G区第16号住居跡

5 G区第17・18号住居跡

6 G区第19号住居跡

7 G区第19号住居跡掘形

8 G区第20号住居跡

図版25

1 G区第20号住居跡

2 G区第1号掘立柱建物跡

3 G区第1号周溝墓

4 G区第1号周溝墓遺物出土状況

5 G区第1号性格不明遺構

6 G区第4号性格不明遺構

7 G区第1・2・3号溝跡

8 G区第7号溝跡

図版26

1 D区第1号掘立柱建物跡 (第7図1)

2 D区第6号掘立柱建物跡 (第11図10)

3 D区第6号掘立柱建物跡 (第11図11)

4 D区第6号掘立柱建物跡 (第11図12)

5 D区第6号掘立柱建物跡 (第11図13)

6 D区第6号掘立柱建物跡 (第11図5)

7 D区第6号掘立柱建物跡 (第11図14)

8 D区第6号掘立柱建物跡 (第11図15)

9 D区第6号掘立柱建物跡 (第11図24)

図版27

1 D区第1号井戸跡 (第19図1)

2 D区第1号井戸跡 (第19図2)

3 D区第1号井戸跡 (第19図6)

4 D区第1号井戸跡 (第19図7)

5 D区第1号井戸跡 (第19図4)

6 D区第3号井戸跡 (第19図12)

7 D区第3号井戸跡 (第19図13)

8 D区第11号井戸跡 (第26図47)

図版28

1 D区第11号井戸跡 (第26図50)

2 D区第11号井戸跡 (第26図51)

3 D区第7号井戸跡 (第20図19)

4 D区第7号井戸跡 (第20図20)

5 D区第7号井戸跡 (第20図21)

图版29

- 1 D区第10号井戸跡 (第23图35)
- 2 D区第10号井戸跡 (第23图36)
- 3 D区第10号井戸跡 (第23图37)
- 4 D区第10号井戸跡 (第23图38)
- 5 D区第10号井戸跡 (第24图39)
- 6 D区第10号井戸跡 (第24图40)
- 7 D区第10号井戸跡 (第24图41)
- 8 D区第10号井戸跡 (第24图42)
- 9 D区第10号井戸跡 (第25图43)
- 10 D区第10号井戸跡 (第25图44)
- 11 D区第10号井戸跡 (第25图45)
- 12 D区第10号井戸跡 (第25图46)

图版30

- 1 D区第8号井戸跡 (第20图22)
- 2 D区第12号井戸跡 (第20图23)
- 3 D区第16号井戸跡 (第20图24)
- 4 D区第1号土墳墓 (第28图1)
- 5 D区第1号土墳墓 (第28图2)
- 6 D区第1号土墳墓 (第28图3)
- 7 D区第1号土墳墓 (第28图4)
- 8 D区第1号土墳墓 (第28图5)
- 9 D区第1号土墳墓 (第28图6)

图版31

- 1 D区第1号土墳墓 (第28图7)
- 2 D区第1号土墳墓 (第28图8)
- 3 D区第1号土墳墓 (第28图9)
- 4 D区第1号土墳墓 (第29图10)
- 5 D区第1号土墳墓 (第29图11)
- 6 D区第1号土墳墓 (第29图12)
- 7 D区第1号土墳墓 (第29图13)
- 8 D区第75号溝跡 (第32图2)
- 9 D区第75号溝跡 (第32图3)

图版32

- 1 D区第75号溝跡 (第32图4)
- 2 D区第75号溝跡 (第32图5)

- 3 D区第14号土墳 (第35图4)
- 4 D区第14号土墳 (第35图5)
- 5 D区第14、15号土墳 (第35图2)
- 6 D区第76号土墳 (第35图8)

图版33

- 1 D区第19号溝跡 (第36图19~32)
- 2 D区第19号溝跡 (第36图18)
- 3 D区第20号溝跡 (第35图9)
- 4 D区第17号溝跡 (第39图3)
- 5 D区第21号溝跡 (第40图28)

图版34

- 1 D区第23号溝跡 (第40图32)
- 2 D区第23号溝跡 (第40图33)
- 3 D区第23号溝跡 (第40图34)
- 4 D区第26号溝跡 (第40图40)
- 5 D区第24号溝跡 (第41图45)
- 6 D区第24号溝跡 (第41图46)
- 7 D区第24号溝跡 (第41图48)
- 8 D区第24号溝跡 (第41图52)
- 9 D区第24号溝跡 (第41图56)
- 10 D区第24号溝跡 (第41图57)

图版35

- 1 D区第24号溝跡 (第41图58)
- 2 D区第24号溝跡 (第41图59)
- 3 D区第25号溝跡 (第42图72)
- 4 D区第25号溝跡 (第42图76)
- 5 D区第25号溝跡 (第42图78)
- 6 D区第25号溝跡 (第42图77)
- 7 D区第24、25号溝跡 (第43图101)
- 8 D区第24、25号溝跡 (第43图118)

图版36

- 1 D区第25号溝跡 (第43图107)
- 2 D区第25号溝跡 (第43图112)
- 3 D区第24、25号溝跡 (第43图119)
- 4 D区第24、25号溝跡 (第43图128)
- 5 D区第24、25号溝跡 (第43图129)

6 D区第24・25号溝跡 (第44図138)

7 D区第15号溝跡 (第47図8)

8 D区第14号溝跡 (第50図1)

図版37

1 D区第13号溝跡 (第52図55～67)

2 D区第13号溝跡 (第52図68～第53図80)

図版38

1 D区第13号溝跡 (第53図81～93)

2 D区第13号溝跡 (第53図94～第54図106)

図版39

1 D区第13・14号溝跡 (第51図50)

2 D区第13・14号溝跡 (第51図51)

3 D区第33号溝跡 (第54図107)

4 D区第10号溝跡 (第57図1)

5 D区第10号溝跡 (第57図2)

6 D区第10号溝跡 (第57図3)

7 D区第10号溝跡 (第57図4)

8 D区第10号溝跡 (第57図5)

図版40

1 D区第10号溝跡 (第57図6)

2 D区第10号溝跡 (第57図7)

3 D区第10号溝跡 (第57図9)

4 D区第10号溝跡 (第57図10)

5 D区第10号溝跡 (第57図11)

6 D区第10号溝跡 (第57図12)

7 D区第10号溝跡 (第57図15)

8 D区第10号溝跡 (第57図17)

9 D区第10号溝跡 (第58図35)

図版41

1 D区第10号溝跡 (第58図33)

2 D区第10号溝跡 (第58図34)

3 D区第10号溝跡 (第58図36)

4 D区第10号溝跡 (第59図44)

5 D区第10号溝跡 (第58図38)

6 D区第10号溝跡 (第58図42)

7 D区第10号溝跡 (第58図39)

図版42

1 D区第10号溝跡 (第58図43)

2 D区第11号溝跡 (第60図70)

3 D区第10号溝跡 (第59図46)

4 D区第11号溝跡 (第60図71)

図版43

1 D区第11号溝跡 (第60図57)

2 D区第11号溝跡 (第60図68)

3 D区第11号溝跡 (第60図69)

4 D区第11号溝跡 (第60図72)

5 D区第35号溝跡 (第61図73)

6 D区第35号溝跡 (第61図76)

7 D区第35号溝跡 (第61図77)

8 D区第40号溝跡 (第64図4)

図版44

1 D区第35号溝跡 (第61図96)

2 D区はたけ跡 (第71図6)

3 D区グリッド (第73図9)

4 D区グリッド (第74図31)

5 D区第9号溝跡 (第64図1)

6 D区グリッド (第73図7)

7 D区グリッド (第73図8)

図版45

1 D区グリッド (第74図34)

2 D区グリッド (第74図38)

3 D区グリッド (第74図41)

4 D区グリッド (第82図101)

5 D区グリッド (第82図102)

6 D区グリッド (第74図45)

7 D区グリッド (第74図50)

8 D区第2地点 (第84図3)

図版46

1 D区グリッド (第83図127)

2 D区第3地点 (第85図5)

3 D区第3地点 (第85図19)

4 D区第3地点 (第85図22)

5 D区金属製品

図版47

1 D区土鍾

2 D区砥石・有穴球状石製品

図版48

1 E区第1号整穴状遺構(第87図2)

2 E区第2号井戸跡(第98図4)

3 E区第4号溝跡(第98図5)

4 E区第3号溝跡(第99図7)

5 E区第9号溝跡(第100図33)

図版49

1 E区第2号土壌(第99図1)

2 E区グリッド(第103図6)

3 E区第9号土壌(第102図3)

4 E区表採(第104図3)

5 E区砥石・土玉

図版50

1 F区第2号住居跡(第106図1)

2 F区第3号住居跡(第107図1)

3 F区第4号住居跡(第110図1)

4 F区第4号住居跡(第110図3)

5 F区第4号住居跡(第110図5)

6 F区第4号住居跡(第110図6)

図版51

1 F区第4号住居跡(第110図7)

2 F区第4号住居跡(第110図8)

3 F区第4号住居跡(第110図14)

4 F区第4号住居跡(第110図15)

5 F区第4号住居跡(第110図18)

6 F区第5号住居跡(第112図6)

7 F区第5号住居跡(第112図4)

図版52

1 F区第5号住居跡(第112図10)

2 F区第5号住居跡(第112図15)

3 F区第8号住居跡(第115図1)

4 F区第6号住居跡(第114図3)

5 F区第6号住居跡(第114図2)

6 F区第9号住居跡(第118図3)

図版53

1 F区第9号住居跡(第118図1)

2 F区第9号住居跡(第118図2)

3 F区第11号住居跡(第120図1)

4 F区第1号周溝墓(第125図1)

5 F区第1号周溝墓(第125図2)

6 F区第1号周溝墓(第125図4)

図版54

1 F区第1号周溝墓(第125図3)

2 F区第3号井戸跡(第129図3)

3 F区第2・3号井戸跡(第129図4)

4 F区第12号土壌(第134図9)

5 F区第12号土壌(第134図10)

6 F区第1号土壌(第134図11)

7 F区河川跡(第137図3)

図版55

1 F区第1号溝跡(第134図12)

2 F区河川跡(第137図28)

3 F区河川跡(第137図29)

4 F区河川跡(第137図5)

5 F区河川跡(第137図6)

6 F区河川跡(第138図31)

図版56

1 F区河川跡(第138図35)

2 F区河川跡(第140図105)

3 F区河川跡(第140図106)

4 F区河川跡(第140図107)

5 F区河川跡(第138図41)

6 F区河川跡(第140図109)

7 F区河川跡(第140図111)

8 F区河川跡(第140図112)

図版57

1 F区河川跡(第140図113)

2 F区河川跡(第140図114)

- 3 F区河川跡 (第140図115)
- 4 F区河川跡 (第140図116)
- 5 F区河川跡 (第140図122)
- 6 F区河川跡 (第140図123)
- 7 F区河川跡 (第140図153)
- 8 F区河川跡 (第140図154)

図版58

- 1 F区河川跡 (第142図160)
- 2 F区河川跡 (第142図162)
- 3 F区河川跡 (第142図163)
- 4 F区河川跡 (第142図164)
- 5 F区河川跡 (第143図165)
- 6 F区河川跡 (第143図167)
- 7 F区河川跡 (第143図169表)
- 8 F区河川跡 (第143図169裏)
- 9 F区河川跡 (第143図168)
- 10 F区河川跡 (第144図178)
- 11 F区河川跡 (第145図179表)
- 12 F区河川跡 (第145図179裏)

図版59

- 1 F区河川跡 (第143図166)
- 2 F区河川跡 (第146図182)
- 3 F区河川跡 (第144図176)
- 4 F区河川跡 (第146図183)
- 5 F区河川跡 (第146図183)
- 6 F区河川跡 (第144図177)

図版60

- 1 F区河川跡 (第145図180)
- 2 F区河川跡 (第145図181)
- 3 F区河川跡 (第147図184)
- 4 F区河川跡 (第147図185)
- 5 F区河川跡 (第147図186)
- 6 F区河川跡 (第147図187)
- 7 F区河川跡 (第147図185)
- 8 F区河川跡 (第147図185)

図版61

- 1 F区河川跡 (第148図189)
- 2 F区河川跡 (第149図192)
- 3 F区河川跡 (第149図193)
- 4 F区河川跡 (第149図191)
- 5 F区河川跡 (第150図194)
- 6 F区河川跡 (第150図195)
- 7 F区河川跡 (第150図196)
- 8 F区河川跡 (第150図194)
- 9 F区河川跡 (第150図194)
- 10 F区河川跡 (第150図195)

図版62

- 1 F区グリッド (第154図10)
- 2 F区グリッド (第154図12)
- 3 F区グリッド (第154図13)
- 4 F区グリッド (第154図15)
- 5 F区グリッド (第154図5)
- 6 F区グリッド (第155図40)
- 7 F区グリッド (第155図43)
- 8 F区グリッド (第155図44)
- 9 F区グリッド (第155図46)

図版63

- 1 F区グリッド (第155図45)
- 2 F区グリッド (第156図72)
- 3 F区グリッド (第155図32)
- 4 F区グリッド (第156図67)
- 5 F区グリッド (第157図103)
- 6 F区表採 (第158図5)
- 7 F区グリッド (第157図90)
- 8 F区表採 (第158図1)

図版64

- 1 F区土玉・古銭
- 2 F区石器

図版65

- 1 G区第1号住居跡 (第159図4)
- 2 G区第1号住居跡 (第159図5)
- 3 G区第1号住居跡 (第159図6)

- 4 G区第3号住居跡 (第162图1)
- 5 G区第5号住居跡 (第166图1)
- 6 G区第5号住居跡 (第166图2)
- 7 G区第5号住居跡 (第166图3)
- 8 G区第5号住居跡 (第166图4)
- 9 G区第5号住居跡 (第166图5)
- 10 G区第5号住居跡 (第166图7)

图版66

- 1 G区第5号住居跡 (第166图9)
- 2 G区第5号住居跡 (第166图10)
- 3 G区第5号住居跡 (第166图13)
- 4 G区第5号住居跡 (第166图14)
- 5 G区第5号住居跡 (第166图11)
- 6 G区第5号住居跡 (第166图12)
- 7 G区第5号住居跡 (第166图15)
- 8 G区第5号住居跡 (第166图16)

图版67

- 1 G区第7号住居跡 (第170图1)
- 2 G区第7号住居跡 (第170图2)
- 3 G区第7号住居跡 (第170图5)
- 4 G区第7号住居跡 (第170图4)
- 5 G区第7号住居跡 (第170图7)
- 6 G区第9号住居跡 (第173图3)
- 7 G区第9号住居跡 (第173图4)
- 8 G区第9号住居跡 (第173图5)

图版68

- 1 G区第9号住居跡 (第173图8)
- 2 G区第9号住居跡 (第173图9)
- 3 G区第9号住居跡 (第173图11)
- 4 G区第9号住居跡 (第173图12)
- 5 G区第9号住居跡 (第173图13)

- 6 G区第9号住居跡 (第173图15)
- 7 G区第10号住居跡 (第176图2)
- 8 G区第10号住居跡 (第176图9)
- 9 G区第10号住居跡 (第176图3)

图版69

- 1 G区第10号住居跡 (第176图6)
- 2 G区第10号住居跡 (第176图7)
- 3 G区第10号住居跡 (第176图8)
- 4 G区第10号住居跡 (第177图13)
- 5 G区第10号住居跡 (第177图16)
- 6 G区第10号住居跡 (第177图19)

图版70

- 1 G区第10号住居跡 (第177图14)
- 2 G区第10号住居跡 (第177图15)
- 3 G区第10号住居跡 (第177图18)
- 4 G区第11号住居跡 (第178图1)
- 5 G区第11号住居跡 (第178图2)
- 6 G区第13号住居跡 (第181图1)
- 7 G区第13号住居跡 (第181图2)

图版71

- 1 G区第13号住居跡 (第181图3)
- 2 G区第16号住居跡 (第184图1)
- 3 G区第1号周溝墓 (第192图1)
- 4 G区第7号溝跡 (第204图18)
- 5 G区第11号土壤 (第181图6)
- 6 G区第8号溝跡 (第204图3)
- 7 G区第17号土壤 (第204图5)

图版72

- 1 G区土製品
- 2 G区石製品

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を掲げて、県内道路交通網の整備を推進している。本報告書に係る一般県道熊谷羽生線は、平成16年開催の「彩の国まごころ国体」メイン会場へのアクセス道路としても位置づけられ、既存路線の交通渋滞等を解消するバイパスとして計画されたものである。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、こうした県が実施する公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

当該道路事業に先立ち、道路建設課長（当時）から平成11年9月9日付け道建第271号で、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて、文化財保護課長（当時）あて照会があった。

それに対して文化財保護課は、平成11年12月20日・21日、平成12年11月29日～12月1日、12月4日・7日・8日、平成13年5月22日・23日、及び平成13年8月27日～29日の各時期に遺跡範囲等確認のための試掘調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成11年12月28日付け教文第937-1号、平成12年1月19日付け教文第1013号、平成13年7月11日付け教文第566号、及び平成13年9月14日付け教文第807号で、次の内容の回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

- ① 池上遺跡（遺跡コード No59-054）
種 別：集落跡・古墳・条里跡
時 代：縄文・古墳・奈良・平安
所在地：熊谷市大字上之
- ② 諏訪木遺跡（遺跡コード No59-019）
種 別：集落跡・館跡

時 代：縄文・古墳・奈良・平安・中世
所在地：熊谷市大字上之

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

道路建設課と文化財保護課は、その取扱いについて協議を重ね、現状保存は困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。その後、発掘調査実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路建設課（道路街路課）・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画、調査期間などについて協議した。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出されて発掘調査が実施された。

発掘通知及び発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの催告及び指示通知は次のとおりである。

発掘通知に対する催告：

平成13年6月7日付け教文第3-173号

発掘調査届に対する指示通知：

平成13年6月7日付け教文第2-12号

平成13年7月2日付け教文第2-36号

平成14年5月23日付け教文第2-18号

平成14年11月8日付け教文第2-87号

平成15年4月11日付け教文第2-1号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査、報告書作成の経過

(1) 発掘調査

諏訪木遺跡の発掘調査は、第9・10次調査を平成14年5月15日から平成15年3月27日まで、第12次調査を平成15年4月8日から平成15年9月30日まで実施した。この発掘調査にかかる整理報告書は、既刊の『諏訪木遺跡Ⅱ』（事業団報告書第336集）と本書の2冊に分けて作成するため、重複する発掘調査の経過については割愛する。

なお、第11次調査は、熊谷市教育委員会によって平成14年度に実施されている。

(2) 整理報告書作成

諏訪木遺跡第9・10・12次調査の整理報告書作成作業は、平成16年4月8日から平成20年3月24日まで実施した。この期間のうち、前半の2年6ヶ月間（平成16年4月～平成18年9月）では、縄文時代の遺構・遺物について整理作業を行い、平成19年3月に報告書（『諏訪木遺跡Ⅱ』第336集）を刊行した。後半の1年6ヶ月間（平成18年10月～平成20年3月）では、弥生時代～中・近世の遺構・遺物について整理作業を行い、平成20年3月に報告書（本書・『諏訪木遺跡Ⅲ』第351集）を刊行した。そのため、『諏訪木遺跡Ⅱ』（第336集）にかかる整理報告書作成の経過については割愛する。

平成18年度

10月から出土遺物の水洗・注記を行い、終了後に、接合・復元作業を実施した。並行して、遺構

実測図の整理作業に着手した。各遺構ごとに平面図・土層断面図・遺物出土状況図等の修正・補足・編集を行い、第二原因の作成を始めた。

11月、出土遺物の接合・復元作業と並行して、遺物実測図作成作業を開始した。一部に、三次元実測機を併用した。

12月中旬、遺構第二原因の作成の進行に伴い、順次、トレース作業に着手した。遺構図のトレース作業は、第二原因図をレイアウトした仮図版をスキャナでデジタルデータ化し、パソコンでドローソフトを用いてトレースし、スクリーン・写植等を行い、遺構図版を完成させた。

1月から、木製品の整理作業に着手した。水洗後、出土状況データとの照合、整理番号の附合、接合作業を経て、実測個体の抽出を行った。抽出された個体は、順次、実測図作成作業に取り掛かった。

平成19年度

4月上旬から、平成19年度分の出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業に着手した。並行して、遺構第二原因・トレース・遺構図版の作成、遺物実測図作成作業を実施した。

5月から、遺物実測図のトレース作業も、並行して開始した。

6月末に遺物の接合作業がほぼ終了した。引き続き、写真撮影用の復元作業に着手した。

7月中に、遺構図第二原因作成作業が終了した。

8月には遺物実測図で表現できない遺物の拓本

第1表 発掘調査・整理報告書作成工程表

発掘調査	調査面積	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	報告書
第9次	4,200㎡	■						
第10次		■						
第12次	4,500㎡		■					
整理報告書作成				■	■	■		第336集
整理報告書作成							■	本報告

の採取作業を開始した。

9月末、遺物実測図の作成・拓本採拓作業がほぼ終了した。また採取された拓本とトレースされた遺物実測図の組み合わせを行い、遺物図版組の準備を始めた。遺物の復元作業は、石膏復元部の彩色作業を開始した。

10月末までに遺物図トレース作業が終了し、本格的に遺物図版組に着手した。また、遺物観察表の作成も開始した。

11月には、電子トレースされた遺構図の見直

し・修正作業に着手した。さらに、遺構・遺物のデータをもとに、順次、原稿の執筆も開始した。

12月上旬に遺物写真撮影を実施し、写真図版の編集に着手した。下旬からは、原稿執筆に並行して割付・編集作業も開始した。

1月下旬に印刷会社を選定し、3度の校正を経て、平成20年3月に報告書を刊行した。

3月に遺物や図面・写真等の記録類の整理分類・収納を行い、整理作業を終了した。

3. 発掘調査、報告書作成の組織

平成14年度（発掘調査）

理事長	桐川卓雄	調査部	
常務理事兼管理部長	大館健	調査部長	高橋一夫
管理部		調査部副部长	坂野和信
管理幹	持田紀男	主席調査員（調査第二担当）	昼間孝志
		統括調査員	細田勝
		主任調査員	山本靖
		主任調査員	岡本健一
		調査員	根岸洋

平成15年度（発掘調査）

理事長	桐川卓雄	調査部	
常務理事兼管理部長	中村英樹	調査部長	宮崎朝雄
管理部		調査部副部长	坂野和信
管理部副部长	村田健二	主席調査員（調査第一担当）	昼間孝志
主 席	田中由夫	統括調査員	西井幸雄
		主任調査員	渡辺清志
		調査員	田代雄介

平成18年度（報告書作成）

理 事 長	福 田 陽 充	調 査 部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調 査 部 長	今 泉 泰 之
総務部		調 査 部 副 部 長	小 野 美 代 子
総務部副部長	昼 間 孝 志	整 理 第 二 課 長	富 田 和 夫
総 務 課 長	高 橋 義 和	主 査	山 本 靖

平成19年度（報告書作成）

理 事 長	刈 部 博	調 査 部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総務部副部長	昼 間 孝 志	整 理 第 二 課 長	富 田 和 夫
総 務 課 長	松 盛 孝	主 査	山 本 靖

II 遺跡の立地と環境

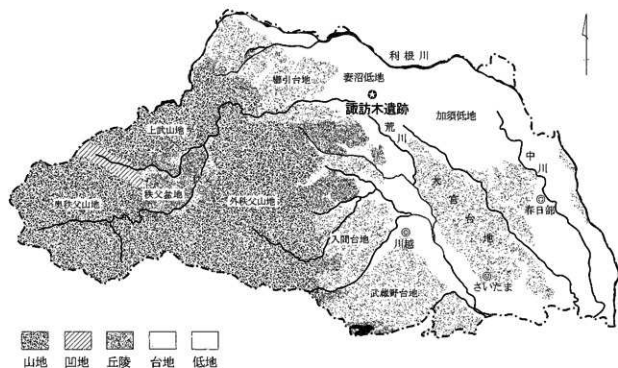
1. 地理的環境

諏訪木遺跡(1)は、熊谷市上之2873番地他に所在し、現市域の中央部東端に位置する。熊谷市は平成17年10月に妻沼町・大里町と、平成19年2月に江南町と合併し、人口20万人を超える県北最大の市として新たに発足した。

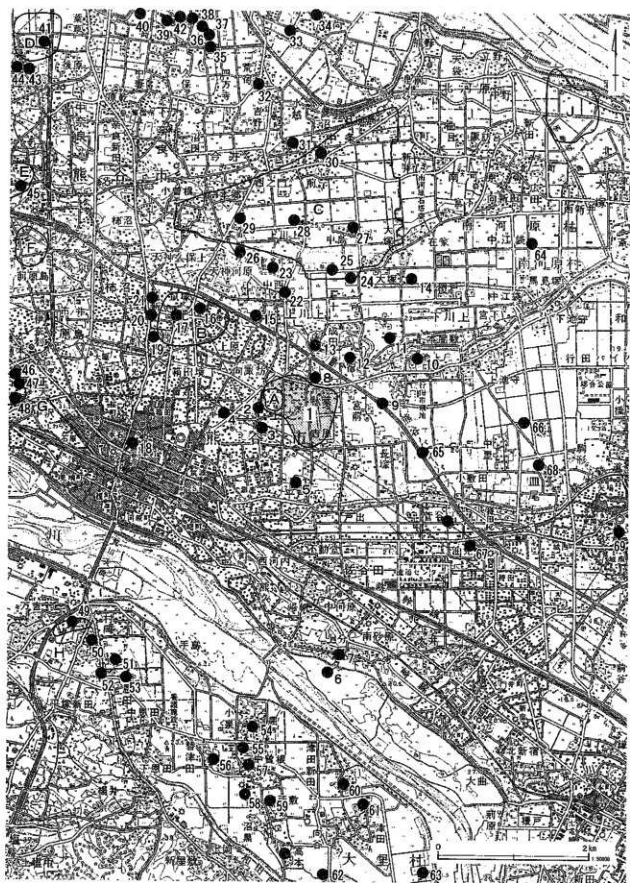
熊谷市は、北側の群馬県との境に流れる利根川と、南側の旧江南町・旧大里町との境に流れる荒川が最も近接する地域にあたる。地形的にみると、市の西側に櫛挽台地、荒川を挟んだ南側に江南台地、北側から東側には妻沼低地が広がっている。櫛挽台地は、寄居町末野付近を扇頂とする荒川扇状地の荒川左岸一帯の総称で、洪積世に形成された。さらに東側には、熊谷市三ヶ尻付近を扇頂とする新荒川扇状地(熊谷扇状地)が、沖積世に広がっている。

諏訪木遺跡は、新荒川扇状地末端と妻沼低地が錯綜する地域に立地する。周囲は扇端部特有の湧水や伏流水に由来する小河川が、扇状地を開析している。さらに利根川・荒川やその支流によって自然堤防が形成される一方で、その氾濫によって埋没した河川が幾筋も存在する。

諏訪木遺跡の北約500mには、荒川の旧流路と目されている星川が、大きく蛇行しながら東へと流れている。また、南約15kmには、忍川が東流する。この両河川の間には、数多くの小河川が流れ、耕地を潤しながら忍川へと注いでいる。このうちの衣川は、熊谷市箱田付近から湧水し、諏訪木遺跡と前中西遺跡(3)を縫うように東流し、諏訪木遺跡の南部をかすめる。その後、南へと流れを変え、やがて忍川へと合流する。また星川の旧流路



第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡

第2表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時 代	No.	遺跡名	時 代
1	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳、奈良、平安、中・近世	40	森谷遺跡	古墳後、奈良、平安
2	藤之宮道跡	古墳、奈良、平安	41	横塚道跡	古墳前、平安
3	前中西道跡	縄文、弥生中、古墳、奈良、平安、中・近世	42	横塚山古墳	古墳
4	新田氏館跡	平安末	43	東通遺跡	古墳後、平安
5	平戸遺跡	弥生中・後、古墳後、平安、中・近世	44	西通遺跡	古墳後
6	久下氏館跡	中世	45	本代道跡	古墳後、近世
7	市田氏館跡	中世	46	天神前遺跡	古墳中・後、中世
8	成田氏館跡	中世	47	丘部裏屋敷跡	中世
9	池上遺跡	縄文後、弥生中、古墳、平安、中・近世	48	御藏場跡	近世
10	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良、平安、中・近世	49	村岡館跡	平安末
11	上河原遺跡	奈良、平安、中・近世	50	北西原遺跡	奈良、平安
12	宮の裏遺跡	古墳後	51	塚本遺跡	古墳、奈良、平安
13	成田遺跡	古墳後	52	西浦道跡	奈良、平安
14	中条条早道跡	古墳前・中、奈良、平安、中・近世	53	腰樋遺跡	奈良、平安
15	河上氏館跡	中世	54	北方遺跡	奈良、平安
16	八幡山遺跡	古墳	55	宮前道跡	奈良、平安
17	出口下遺跡	古墳後、奈良、平安、中・近世	56	西浦町遺跡	奈良、平安
18	熊谷氏館跡	奈良、平安、中世	57	宮前町遺跡	奈良、平安
19	肥塚館跡	中世	58	宮町遺跡	奈良、平安
20	出門上遺跡	古墳後、奈良、平安、中・近世	59	仲町遺跡	奈良、平安
21	肥塚中島遺跡	古墳後、奈良、平安、中・近世	60	旭町遺跡	奈良、平安
22	上川上東遺跡		61	北町遺跡	奈良、平安
23	北島遺跡	弥生中・後、古墳、奈良、平安、中世	62	高城町遺跡	
24	天神東遺跡	古墳前	63	下町遺跡	縄文後、弥生中・後、古墳前・中・後、奈良、平安、中・近世
25	田谷遺跡	弥生、古墳、奈良、平安	64	南河原条早遺跡	奈良、平安
26	天神遺跡	弥生、古墳、奈良、平安	65	小畝田遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良、平安
27	中島遺跡	古墳後、奈良、平安	66	池守遺跡	弥生、古墳、奈良、平安、中・近世
28	女塚遺跡	古墳後、奈良、平安、中世	67	持田藩の宮遺跡	平安初期、中世
29	赤城遺跡	古墳、奈良、平安	68	星宮皿尾遺跡	
30	中条遺跡	古墳前・後、奈良、平安、中世	69	忍城跡	中・近世
31	中条氏館跡	奈良、平安、中・近世	A	上之古墳群	古墳後～末
32	光庭敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	B	肥塚古墳群	古墳後～末
33	先較場遺跡	古墳後、奈良	C	中条古墳群	古墳中期末～後
34	八幡岡遺跡	古墳後、奈良	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
35	英安寺遺跡	古墳後、奈良、平安	E	玉井古墳群	古墳後
36	西城館跡	平安	F	原島古墳群	古墳後
37	長安寺北遺跡	古墳後	G	石原古墳群	古墳後
38	乙綱森遺跡	古墳後	H	村岡古墳群	古墳後
39	鶴森遺跡	弥生後、古墳後、奈良、平安	J	酒巻古墳群	古墳後

を開削したと考えられている現成田用水路は、諏訪木遺跡と池上遺跡(9)の北縁をかすめて東流する。

このような状況下において、扇状地や自然堤防

などの微高地と、開析された谷や埋没河川などの窪地が交錯する複雑な地形を呈している。そして、肥沃な耕地を目前に臨む微高地には、人々の生活の痕跡が残されている。

2. 歴史的環境

諏訪木遺跡の周辺では、旧石器時代から縄文時代の遺跡の発見例はきわめて少ない。なかでも、旧石器時代については、櫛引台地上に立地する籠原裏遺跡の平安時代の住居跡覆土中から出土した黒曜石製の尖頭器が唯一の例である。縄文時代になると、遺跡の発見例も増える。前期の寺東遺跡・三ヶ尻林遺跡や中期から後期の三ヶ尻天王遺跡など、主に熊谷市西部から深谷市域にかかる櫛引台地及び台地直下の妻沼低地自然堤防上に分布が集中する。後期になると、寺東遺跡をはじめ、水久保遺跡・西城切通遺跡・場邊ヶ谷戸遺跡など妻沼低地の自然堤防上への展開が開始される。しかし、晩期には再び遺跡数が減少する。このような縄文時代の集落形成において、諏訪木遺跡は特筆される遺跡である。後期末から晩期の住居跡と多量の遺物が発見され、近辺には同時期の遺跡の確認例がない独立性の高い集落と想定される。

弥生時代の初期段階である前期末から中期前半には、櫛引台地直下の低地上から再葬墓群が検出されている。熊谷市横間栗遺跡・三ヶ尻上古遺跡、旧妻沼町飯塚遺跡・飯塚南遺跡や深谷市上敷免遺跡・明戸東遺跡などが知られている。

中期中頃になると、これまでの状況と一変した本格的な遺跡が展開する。池上遺跡には東日本でも最古段階の環壕集落が営まれ(宮1983・中島1984)、その墓域の行田市小敷田遺跡(65)には関東地方で最も古い段階の方形周溝墓が築造されている(吉田1991)。中期後半には、北島遺跡(23)では住居跡76軒を数える大規模な集落が営まれるとともに、再葬墓や土坑墓から構成される墓地も

形成されている。また水田に水を引き込む水路や堰が造営され、大規模で計画的な土木作業を伴う本格的な水田経営が行われていたことが裏付けられた(吉田2002)。さらに、諏訪木遺跡に隣接する前中西遺跡では、中期後半から後期初頭まで続く集落と、再葬墓・方形周溝墓からなる墓地も営まれている(吉野2002)。

後期の遺跡は前中西遺跡、北島遺跡のほかに、深谷市明戸東遺跡・旧妻沼町弥藤吾新田遺跡・中条遺跡群内の東沢遺跡・行田市池守遺跡(66)などがあげられる。しかし、遺跡数そのものは少なく、妻沼低地の各地に散在する程度である。明戸東遺跡・東沢遺跡・池守遺跡では吉ヶ谷式土器が、弥藤吾新田遺跡では南関東系の弥生町式土器が出土している。

古墳時代になると、低地上への集落の進出が活発化し、遺跡数は爆発的に増加する。諏訪木遺跡に隣接する前中西遺跡でも前期の集落跡が確認され、藤之宮遺跡(2)では水辺祭祀跡も確認されている。北島遺跡では弥生時代に続いて大規模な集落が営まれ、方形周溝墓群からなる墓域も形成されている。特に第19地点からは、方形環濠に囲まれた集落と、竪穴の周囲に溝が巡る住居跡が発見されている。また、小敷田遺跡と同様に、東海地方を始めとする外來系土器が多数出土している。さらに北島遺跡・東沢遺跡・小敷田遺跡では、埋没した河川跡や溝跡から農具や建築材などの多量の木製品が出土している。

古墳時代前期の遺跡はこのほかに多数発見され、多くは熊谷扇状地の末端や妻沼低地に分布す

る自然堤防などの微高地上に立地する。これらの自然堤防は、荒川や利根川、またそれらを源とする中小河川によって形成されているため、古墳時代前期の遺跡も荒川や利根川の流れに沿って分布している。荒川の流れに沿って、前中西遺跡→藤之宮遺跡→諏訪木遺跡→池上遺跡→古宮遺跡(10)ルート、小敷田遺跡→池守遺跡ルート、北島遺跡→田谷遺跡(25)・天神東遺跡(24)→中条条里遺跡(14)ルートがあげられる。このような遺跡の分布は、荒川・利根川の乱流や埋没した中小河川、これらの河川によって形成された自然堤防などの歴史地理的な環境の復元を可能にさせる材料ともなる。

古墳時代の後期になると、遺跡数は爆発的に増加する。台地ばかりでなく、低地部の自然堤防上への進出がさらに積極的に図られている。また、奈良・平安時代へと継続して展開する大規模な集落遺跡が多く営まれている。

国宝金錯銘鉄剣を出土したさきたま稲荷山古墳の築造を契機に、諏訪木遺跡の周辺でも本格的な古墳が造られ始められている。中条古墳群(C)の鯉塚古墳・女塚1号墳と奈良古墳群(D)の横塚山古墳(42)という3基の帆立貝形前方後円墳が5世紀末に築造されている。その後、台地・低地を問わずに多数の古墳群が形成され、概ね6世紀から7世紀ないしは8世紀初頭にかけて造営された。諏訪木遺跡のなかにも上之古墳群(A)が営まれ、発掘された2号墳(円墳)は6世紀初頭の構築と推定されている。熊谷市内の古墳群の特徴として、埋葬施設の石材に利根川流域に近い中条古墳群などでは角閃石安山岩、荒川流域に近い古墳群では川原石が用いられる傾向が指摘されている。また、肥塚古墳群(B)のような混在例もある。

奈良・平安時代の集落は、古墳時代後期以降から引き続き営まれる例が多い。そして、この地域も律令制体制に組み込まれ、北島遺跡周辺の中条条里、旧南河原村の南河原条里(64)、星川右岸の

「池上条里」・「小敷田条里」と称される条里遺跡など、近隣一帯には条里区割の名残が留められている。

このような歴史的背景のなか、通常のムラと捉えることができない遺跡も存在する。その筆頭にあげられるのが、北島遺跡である。

北島遺跡では、300軒以上もの堅穴住居跡のほかに、軸を揃えた大型の掘立柱建物跡群や二重堀に囲まれた方形区画地などの通常のムラでは見ることができない遺構群が発見されている。多量の出土品の中には、「葦」の文字が刻まれた緑釉陶器をはじめとする施釉陶器や墨書土器、八稜鏡などの有力者層を想定させる遺物が数多く含まれている。因みに、別府条里が広がる一本木前遺跡の11世紀初頭の住居跡からも環花鷲鷲八稜鏡が出土している。

小敷田遺跡では、8世紀の土壌から「出挙」に関わる木簡が出土し、律令制下における官箱貸付の利率が初めて解き明かされた。また池上遺跡では、整然と配置された9世紀代の大型掘立柱建物跡が確認されている。

諏訪木遺跡では、溝に画された区画内に四面に庇が付いた大型掘立柱建物跡や軸を揃えた掘立柱建物跡群が発出され、多数の灰釉陶器・緑釉陶器などが出土するなど特殊な様相を示している。また、埋没した河川跡からは、古墳時代後期から平安時代にかけて水辺の祭祀が執り行われた痕跡も発見されている。馬頭骨、管玉・切子玉・勾玉等の玉類、耳環、銅鏡、滑石製の白玉や斎串・人形等の祭祀遺物とともに、土師器・須恵器・農具等の木製品が伴出している。この祭祀跡は、「ムラの祭祀」から「律令体制下の祭祀」への形態変化が確認された例として注目されている。

このように、集落規模ばかりではなく遺構・遺物の質の高さから、古代の諏訪木遺跡およびその周辺は官衙を彷彿させる遺跡が集中する地域といえる。おそらくは、条里区割の形成に裏付けられ

た生産力を基盤とし、荒川・利根川をはじめとする水運や東山道武蔵路などの陸路という交通の利を合わせもつ一大要衝地であったことが窺われる。

平安時代末から中世にかけて、武蔵七党をはじめとする在地武士団が台頭した。熊谷市内でも熊谷直実に代表される熊谷氏、熊谷氏と所領争いを繰り広げた久下氏、鎌倉有力御家人の中条氏、後の忍域城主となる成田氏、成田一族の箱田氏・奈良氏・玉井氏・別府氏、熊谷氏一族の肥塚氏・市田氏のはかに石原氏・原島氏など多くの氏族が輩出されている。それぞれの館跡も比定されているが、実態が判明しているのはほとんどない。このうち成田氏の居館跡(8)は、諏訪木遺跡の北側に隣接する泰蔵院付近があたり、15世紀後半に忍

城を構えるまでの居館とされている。本報告の対象とするD区第3・6地点には居館跡の名残を思わせる区画があった。「秋葉」と称される地名と、成田太郎助廣の五男、成田四郎助綱の弟、秋葉七郎の居宅がこの地にあったという『新編武蔵風土記稿』の記述から、館跡の存在が予想された。しかし調査の結果、館跡を想定させる遺構・遺物は発見されていない。

このような、武士団が割拠する背景には、古代に揺るぎないものとなった生産力と、水運・陸路という交通の利便性があったものと思われる。この伝統のもと、熊谷市は今なお埼玉県北の雄として位置づけられている。

Ⅲ 遺跡の概要

諏訪木遺跡は、南北約750m、東西約1km以上の範囲を有する広大な遺跡である。新荒川扇状地末端と妻沼低地が錯綜する地域に位置するため、旧星川・旧忍川系の中小河川によって形成された起伏に富んだ複数の地形区分上に立地している。そのため、時間的・空間的に多様な遺跡と解釈できる。

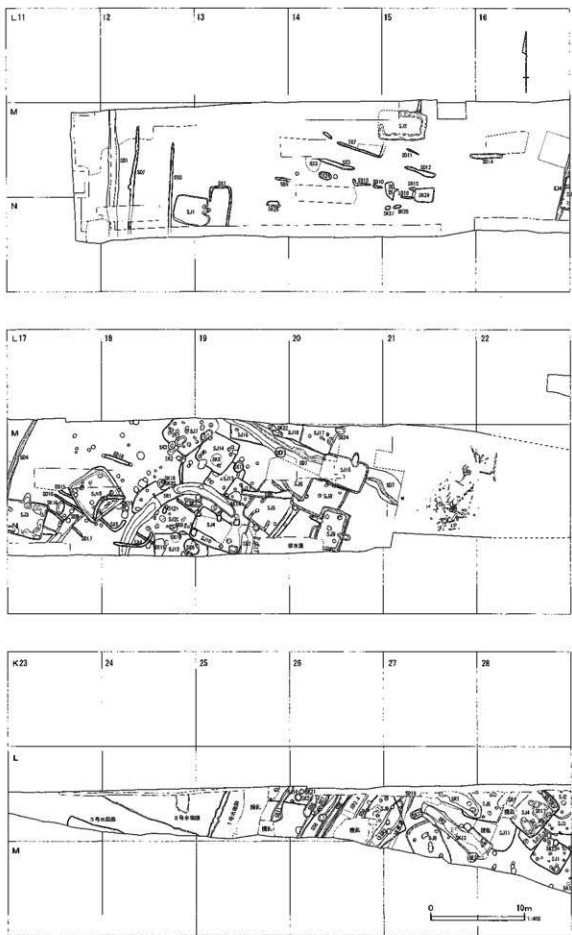
諏訪木遺跡は、熊谷市遺跡調査会によって工業団地建設に先立つ事前調査（平成5年～平成7年）

として、遺跡南東部の28,000㎡が発掘された。また、熊谷市教育委員会によって、土地区画整理事業に伴う断続的な発掘調査が、遺跡北西部を中心に続けられている（平成13年～平成17年）。さらに、本報告もかかる県道熊谷羽生線建設工事に先立つ発掘調査で、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって遺跡全体を東西に貫く形で行われている（平成13年～平成15年）。

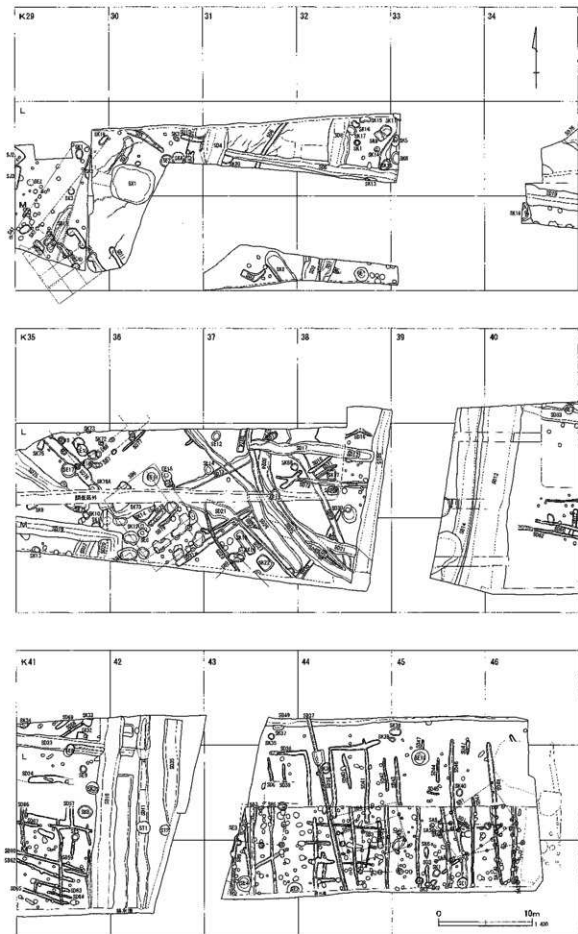
工業団地建設に先立つ発掘調査では、縄文時代



第3図 諏訪木遺跡調査地点位置図



第4图 调查区全测图(1)



第5图 调查区全测图(2)



第6図 調査区配置図

後・晩期から中・近世の遺構・遺物が発見された。主体となるのは、溝に囲まれた空間に四面庇付大型掘立柱建物跡や、これと軸を揃えた掘立柱建物跡群を中心に展開する平安時代の集落跡である。また、古墳時代後期から平安時代までの河川祭祀跡が発見され、銅鏡・三彩陶器・墨土土器・祭祀具をはじめとする木製品などの特殊な遺物が出土した。「ムラの祭祀」から「律令体制下の祭祀」への形態変化が確認された例として注目されている(吉野2001)。

土地区画整理事業に伴う発掘調査では、平安時代から中・近世の集落遺構やその遺物とともに、縄文時代後期から古墳時代までの遺物も出土している。また、諏訪木遺跡内に所在する上之古墳群第2号墳も発掘され、円筒埴輪が出土している(松田2007)。

県道熊谷羽生線建設に先立つ発掘調査は、平成13年度に実施されたA・B・C区と、平成14・15年度に行われたD・E・F・G区に分けられる。

諏訪木遺跡A区は、遺跡の東端部に位置する。東側に隣接する池上遺跡と接し、遺構内容からは両者を分割することはできない。諏訪木遺跡B・C区はD区の東側に連続する区画である。これら3地点からは、縄文時代後期の包含層・古墳時代後期の水田跡・中世の区画堀などが調査された。なお、A・B・C区の発掘調査の成果は、「池上/諏訪木」(第283集)として報告書が刊行されている(黒坂2002)。

諏訪木遺跡D・E・F・G区では、二面の文化層が検出されている。上面からは弥生時代～中・近世、下面からは縄文時代後晩期の遺構と遺物が発見された。このうち本報告では、上面文化層の

遺構と遺物を対象とする。下面からは、縄文時代後晩期の竪穴住居跡16軒を含む集落跡と、遺物包含層が検出されている。諏訪木遺跡の近辺には同時期の遺跡の発見例が無く、独立性の高い集落跡と推定されている。なお、縄文時代後晩期の成果は、「諏訪木遺跡Ⅱ」(第336集)として報告書が刊行されている(渡辺2007)。

本報告が対象とする諏訪木遺跡D・E・F・G区は、延長約320mに及んでいる。それぞれの区は、生活道路・水路の確保や調査手順等の諸条件から、D区を6地点、E・F・G区をそれぞれ2地点ずつの合計12地点に分割して実施した。偶然的な要素が強いが、検出された遺構・遺物の様相は各区ごとにまとめることができる。但し、D区は路線区を横断する水路を境に東西二分され、全体として概ね5区画に分割することが可能である。D区を二分する水路は数度にわたり掘り直されたもので、この水路と並走するD区第13・14・15号溝跡が過去の水路跡に相当する。

D区の水路東側のD区第1・2・4・5地点には中世以降のはたけ跡が広がる。はたけ跡はD区第2・5地点東部のD区第10・11・35号溝跡によって二分される。D区第1・4地点のD区第1号はたけ跡は、B区第1面で検出されたはたけ跡の続きで、東西約50mに及んでいる。これと重複して、掘立柱建物跡5棟・欄跡5列・井戸跡5基が発見された。このうち、D区第10号井戸跡では底の抜けた桶が転用された井戸枠が検出され、D区第1号井戸跡には欠損した板碑2点が投げ込まれていた。一方、D区第2・5地点のD区第2号はたけ跡は遺存状態が悪く、広さも東西15m弱にすぎない。また、はたけ跡を分割するD区第10号溝

跡では、西岸に小型の板碑が建てられ、溝底には馬の頭蓋骨が据えられていた。

水路西側のD区第3・6地点は、調査着手前にはD区第1・2・4・5地点よりも約1mほど高く、また水路を東辺とする変則的な方形区画がみられたことから、『新編武藏風土記稿』による成田秋葉七郎の居宅跡の存在が予想された地点である。そのため、表土除去の段階から慎重に調査を進めたが、中世の建造物の痕跡は発見されなかった。しかし、D区第3地点南西部には直角に屈曲するD区第19号溝跡が位置し、14枚の北宋銭がまともに出て出土している。

但し、D区第3・6地点では、奈良・平安時代の遺構と遺物が主体に検出されている。5棟の掘立柱建物跡が軸を揃えて発見され、方向性が一致する多数の溝跡は同時期の区画溝として位置づけられる。このうちD区第6号掘立柱建物跡は、東面・南面に庇が付く高床の建物跡である。また、遺構外の遺物として、3個体以上となる須恵器の大甕が破砕されたような状態でまともに出て出土している。さらに、D区第75号溝跡からは弥生時代中期の壺形土器2点がまともに出て出土した。多くが調査区外にあるために明確ではないが、D区第22号溝跡と組になって、方形周溝墓であった可能性をもっている。

E区では、東側のD区第3・6地点で検出された奈良・平安時代の遺構・遺物はきわめて少なく、中世の遺構・遺物が中心となる。ひとつには、D区第3地点直角に屈曲するD区第19号溝跡に続く溝跡が、E区第9・10号溝跡として検出された。さらにE区第1・2・8号溝跡とE区第4号溝跡が、これと直交する。これらの溝跡のあり方は、区画を意図したものであり、調査着手前に予想されたものとは異なる区画が発見された。しかしながら、区画内の大部分は調査区外に当たり、建造物の痕跡は発見されていない。数少ない遺構として、区画内部から井戸跡1基、区画外から埋設さ

れた蔵骨器1基・堅穴状遺構1基・井戸跡1基が検出されている。

このような状況の中、特筆される事象も見つかっている。ひとつは、D区第19号溝跡の14枚の北宋銭が溝の屈曲部から出土していることである。方形区画の北東部に位置し、所謂、鬼門の方向にあたっている。他の祭祀的な遺物はみつからないが、14枚の北宋銭が地鎮に用いられたことが推定できる。次に、区画内の井戸跡には胴部下半部の半分ほどを欠損した常滑の大甕が井戸枠として転用されていた。この大甕は13世紀中頃のもので、口縁部から底部までの遺存度は全国的にも屈指のものである。さらに、埋設された蔵骨器は常滑甕に2枚の片岩を蓋とするもので、常滑甕は16世紀前半代の産物である。

F区では、弥生中期～古墳前期に及ぶ11軒の堅穴住居跡と2基の周溝墓、奈良・平安時代の掘立柱建物跡2棟や溝跡など、ごく一般的な集落遺跡となる。これらの遺構の方向性は、E区の中世区画の方向とは異なり、概ねN-45°-E前後の方向に傾いている。おそらくは、自然地形が反映された方向性と推定され、西側に続くG区でも同様の方向性が示されている。

F区第1地点の西端部からF区第2地点においては、居住遺構はなくなる。F区第1地点では、1108年(天仁元)に浅間山噴火に伴う浅間B火山灰に埋もれた水田跡が検出された。さらにF区第2地点は谷状の地形が形成され、古墳時代前期の土器群とともに、多量の木製品が出土している。これらの木製品は、規則的に打ち込まれた杭列と柱状・板状のもので、谷状地形の斜面部を保護するための用途が考えられる。通常では、谷地形の斜面を養生する必要性は乏しいため、検出された谷地形は旧河川の痕跡で、杭列と木材によってその護岸施設が形成されていたものと判断される。木製品は、建物の腐材や破損した木製農具などが転用されたもので、一部には二次的な加工も加え

られている。このなかから、東日本最古に位置づけられる縦じ合せ構造をもつ樋部倉畑の板倉造建物の壁板が発見された。

調査区最西部に位置するG区では、弥生時代中期から平安時代の竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡1棟、周溝墓1基などが発見された。遺構の分布においては、遺構が密集する東半部と疎らな西半部では、明らかに密度が異なっている。東半部の密集する遺構群は河川跡西岸部に沿って造営され、重複も著しい。一方、西半部は遺構自体の残存状態が悪い点も加味しなければならないが、集落域の限界に近くであることは間違いがなく、G区西側の路線内からは遺構・遺物が検出されていない。

竪穴住居跡は、弥生時代・古墳時代前期のほか、古墳時代後期や奈良・平安時代のものがあり、カマドが付設されている。周溝墓も円形に近い隅丸形状に溝が巡り、きちんとした方形をしたF区とは異なる。これらの相違点から、F区第2地点に検出された河川跡を境にした異なる二つのムラ跡と把握することができる。

以上、諏訪木遺跡D・E・F・G区の概観を述

べた。注目されるのは、延長約320mに及ぶ調査範囲を一括した遺構群として捉えることができないことである。遺構・遺物の様相の違いから、概ね5区画に分割される。この線引きは、路線区内に存在する旧来からの生活道路や水路によって区分した調査区と合致している点も興味深い。さらに諏訪木遺跡A・B・C区の成果を加えると、諏訪木遺跡全体に対し、東西に貫くトレンチの役割を果たすもので、遺跡内の生活痕のあり方がより鮮明になってくる。諏訪木遺跡B・C区はD区東半部の遺構群と同一の区画と捉えられる。一方、諏訪木遺跡C区から約300m離れる諏訪木遺跡A区はまた別の遺構群である。このような様相から、南北約750m、東西約1km以上の広大な範囲を有する諏訪木遺跡には、小規模な集落域・生産域、上之古墳群や古代の官衙を彷彿させる遺構群などが複数集まり、縄文時代から中近世に至るさまざまな時代の遺構・遺物が含まれている。遺構・遺物の内容ばかりではなく、空間的・時間的な面も加わった、本当の意味での複合遺跡として位置づけられる。

IV 遺構と遺物

1. D区の遺構と遺物

D区は、K・L・M34～46グリッドの延長約130mに及ぶ範囲である。発掘調査は、第1地点から第6地点までの6地点に分割して実施した。検出された遺構は、掘立柱建物跡10棟・橋跡6列・井戸跡19基・土塋墓2基・溝跡70条・土塋39基・ピット及びはたけ跡2ヶ所である。

掘立柱建物跡は、第1地点から発見された中・近世の建物跡5棟と、第3・6地点から検出され

た奈良・平安時代の建物跡5棟に分類できる。

橋跡は6列が発見され、第1地点のL45・46、M45・46グリッドに集中する。いずれもピットが一行に並ぶ柱穴列である。重複するはたけ跡の耕作痕の一部とも考えられたが、多くの柱穴から、柱痕状の覆上の堆積や柱状の木片が検出されているため、橋跡として報告する。

(1) 掘立柱建物跡

D区第1号掘立柱建物跡（第7図）

L45・46、M45・46グリッドに位置する。D区第1号ははたけ跡の区画の中に所在し、D区第1～6号柵列跡と重複する。

柱間距離に統一性がないが、桁行4間×梁行3間の側柱建物跡と認定される。発見された柱穴は12本で（Pit1～Pit13）、北辺のPit2～Pit4間にあるべき柱穴（Pit3）を欠損する。また、Pit11はL45GrPit10から、Pit13はL46GrPit1から変更された。

桁行を南北に向け、南北軸（梁行）の方位はN-35°-Wを指す。規模は、桁行7.35m×梁行4.80m・面積35.280㎡を測る。柱間距離は不統一で、相対する柱位置も一致しない。北辺がPit1-2.10m-Pit2-5.25m-Pit4、南辺がPit7-2.85m-Pit8-1.35m-Pit13-0.90m-Pit9-2.25m-Pit10、西辺がPit1-1.50m-Pit11-1.05m-Pit5-2.25m-Pit7、東辺がPit4-0.90m-Pit12-1.80m-Pit6-2.10m-Pit10である。

遺物は、Pit7より漆皿(1)が出土している。高台部が楕円形のもので、歪み・欠損が激しい。高台部の長径12.5cm・短径7.2cmと推定され、現存高1.0

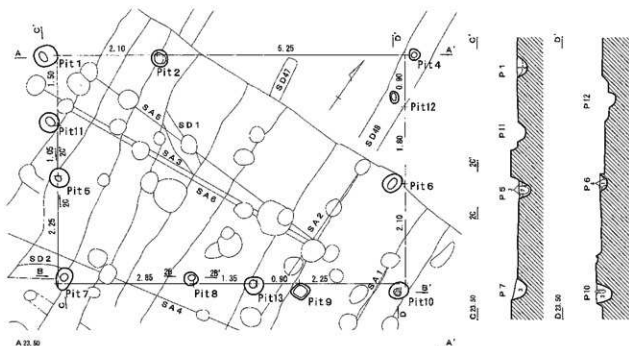
cmを測る。内外面に、赤漆が僅かに残存する。横木取りで、残存率は50%程である。

D区第2号掘立柱建物跡（第8図）

L44・45、M44・45グリッドに位置し、D区第1号ははたけ跡の区画内に所在する。D区第4号掘立柱建物跡と軸を揃える掘立柱建物跡で、D区第3号掘立柱建物跡・D区第5号土塋と重複する。桁行3間×梁行2間の側柱建物跡と認定される。発見された柱穴は10本中9本で（Pit1～Pit5・Pit7～Pit10）、東辺中央のPit6を欠損する。Pit9はD区第3号掘立柱建物跡Pit5と共有する。

桁行を南北に向け、南北軸（梁行）の方位はN-19°-Wを指す。規模は、桁行6.30m×梁行3.45m・面積21.735㎡を測る。柱間距離は不統一で、相対する柱位置も一致しない。南辺の中央間が広く、正面観が色濃く反映されている。北辺がPit1-2.10m-Pit2-1.80m-Pit3-2.40m-Pit4、南辺がPit7-1.65m-Pit8-3.30-Pit9-1.35m-Pit10、西辺がPit1-2.10m-Pit5-1.35m-Pit7、東辺がPit4-3.45m-Pit10である。

遺物は微細な破片のため図示し得ない。



D区第1号掘立柱建物跡

- 1 暗褐色土 柱抜き痕 炭化物粒子少量 鉄分 砂質
- 2 黒褐色土 柱痕 炭化物粒子・ローム粒子少量 鉄分 砂質
- 3 灰褐色土 柱断面充填 炭化物粒子少量 青灰色ブロック 鉄分 砂質
- 4 暗青灰色土 柱断面充填 鉄分 砂質

第7図 D区第1号掘立柱建物跡・出土遺物

D区第3号掘立柱建物跡 (第8図)

L44・45、M44・45グリッドに位置し、D区第1号はたけ跡の区画内に所在する。D区第2・4号掘立柱建物跡とは軸を違えて重複し、D区第5号土壌よりも新しい。

桁行2間×乗行2間の側柱建物跡である。発見された柱穴は8本 (Pit1~Pit8) で、Pit4がD区第4号掘立柱建物跡Pit8と、Pit5がD区第2号掘立柱建物跡Pit9と共有する。

規模は、南北4.20m×東西3.90m・面積16380㎡

D区第2号掘立柱建物跡

- 1 暗灰褐色土 柱痕 炭化物粒子・明灰褐色土ブロック少量 しまり弱
- 2 暗灰褐色土 柱断面充填 ローム粒子・暗灰褐色土ブロック多量 鉄分 しまり強
- 3 明灰褐色土 柱断面充填 暗灰褐色土ブロック微量 鉄分 しまり弱

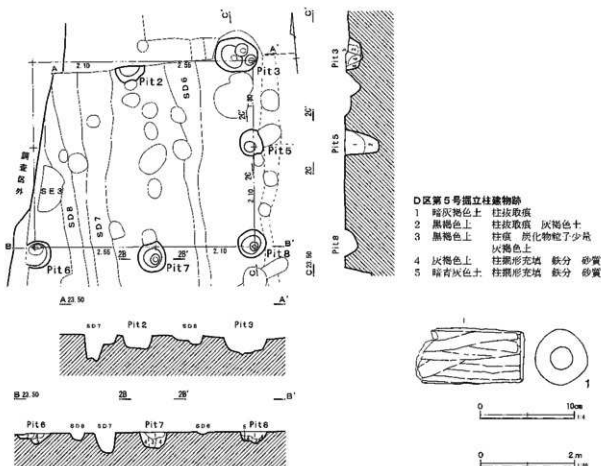
- 8 暗褐色土 柱断面充填 ロームブロック多量
- 9 暗褐色土 柱断面充填 ロームブロック少量
- 10 暗灰褐色土 柱断面充填 黒色土 粘性強

D区第4号掘立柱建物跡

- 11 暗灰褐色土 柱抜き痕 炭化物粒子少量 鉄分・火山灰 しまり強 粘性欠
- 12 暗灰褐色土 柱抜き痕 炭化物粒子多量 鉄分・火山灰 しまり強 粘性欠
- 13 暗灰褐色土 柱痕 炭化物粒子・鉄分量 粘性良・しまり強
- 14 灰褐色土 柱断面充填 砂質 鉄分多 しまり弱 粘性良

D区第3号掘立柱建物跡

- 4 暗灰褐色土 柱抜き痕 火山灰・黒色土
- 5 黒褐色土 柱抜き痕 炭化物粒子
- 6 灰褐色土 柱断面充填 砂質 鉄分
- 7 暗青灰色土 柱断面充填 砂質 鉄分



第9図 D区第5号掘立柱建物跡・出土遺物

を測る。南北軸（梁行）の方位は $N-0^{\circ}-E$ を指す。柱間距離は東西辺2.10m、南北辺1.95mに統一されている。

遺物はPit1～Pit8より出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

D区第4号掘立柱建物跡（第8図）

L44・45、M44・45グリッドに位置し、D区第1号はたけ跡の区画内に所在する。D区第2号掘立柱建物跡と軸を揃える掘立柱建物跡で、D区第3号掘立柱建物跡、D区第5・7号土塼と重複する。

桁行を南北に向ける桁行3間×梁行3間の掘立柱建物跡と認定されるが、桁行北辺と桁行南辺の距離が異なる台形に柱穴が並ぶ。柱穴は12本中9本（Pit1・Pit3・Pit5～Pit11）のみが検出されている。北東隅柱のPit4とPit1～Pit3間のPit2、Pit4～Pit10

間のPit12は見つかっていない。また、Pit1はL44GrPit25から、Pit3はL44GrPit17から、Pit11はM44GrPit11から変更されたもので、Pit8はD区第3号掘立柱建物跡Pit4と共有する。

桁行を南北に向け、南北軸（梁行）の方位は $N-15^{\circ}-W$ を指す。規模は、桁行北辺6.90m・桁行南辺6.65m×梁行4.05mで、面積は27.439㎡を測る。柱間距離には統一性がなく、北辺がPit1-2.10m-(Pit2)-2.25m-Pit3-2.55m-(Pit4)、南辺がPit7-2.00m-Pit8-2.10m-Pit9-2.55m-Pit10、西辺がPit1-1.80m-Pit5-1.20m-Pit11-1.05m-Pit7、東辺が(Pit4)-1.65m-Pit6-2.40m-Pit10である。

遺物はPit8より出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

D区第5号掘立柱建物跡 (第9図)

L43、M43グリッドに位置する。D区第1号はたけ跡の区画内に所在し、D区第3号井戸跡と重複する。西部は調査区外にある。

東西に長い桁行2間×梁行2間の側柱建物跡として復元した。規模は、桁行465m×梁行390m・面積18.135㎡を測る。しかし、桁行辺の柱間距離や調査区外にある西側部分の状況を想定した場合、桁行3間×梁行2間(6.75m×3.90m=26.325㎡)の掘立柱建物跡と考えるほうが妥当かもしれない。

桁行を南北に向け、南北軸(梁行)の方位はN-4°-Wを指す。発見された柱穴は6本(Pit2・Pit3・Pit5~Pit8)で、Pit2はL43GrPit10から変更された。柱間距離は、1.80m・2.10m・2.55mのいずれかに統一されている。北辺は(Pit1)-2.10m-(Pit2)-2.55m-Pit3と推定され、南辺がPit6-2.55m-Pit7-2.10m-Pit8、東辺がPit3-1.80m-Pit5-2.10m-Pit8である。

遺物は、籾の羽口片(1)が出土している。筒状の土製品で、大きさは外径5.8cm・内径2.4cm・現存長11.2cmである。胎土は比較的緻密で、石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子が含まれている。焼成は硬質で、色調はにぶい黄橙である。

D区第6号掘立柱建物跡 (第10図)

L35・36、M36・37グリッドに位置する。D区第6・11・18号井戸跡、D区第14・15号土塼、D区第31・73・78・79号溝跡と重複する。

身舎が3間×3間の側柱建物跡に、南面と東面に庇が付いている。さらに、身舎の柱穴には小さな柱穴が付随するように発見されていることから、床を支える東柱と認定することができる。よって、二面庇付高床式側柱建物跡と断定できる。しかし、

D区第14・15号土塼、D区第12号土塼・D区第78号溝跡の評価如何によっては、総柱建物となる可能性も秘めている。

南列の柱穴の状況は他の列とは異なる状況がみられる。柱穴が溝持ち状に連結した可能のように主柱と東柱の掘形が入り乱れて繋がりが、東柱は身舎の内側に並ぶ列と外側に並ぶ列に明確に分けられる。このような状況から、少なくとも1回は建て替えが行われた建物跡と判断される。

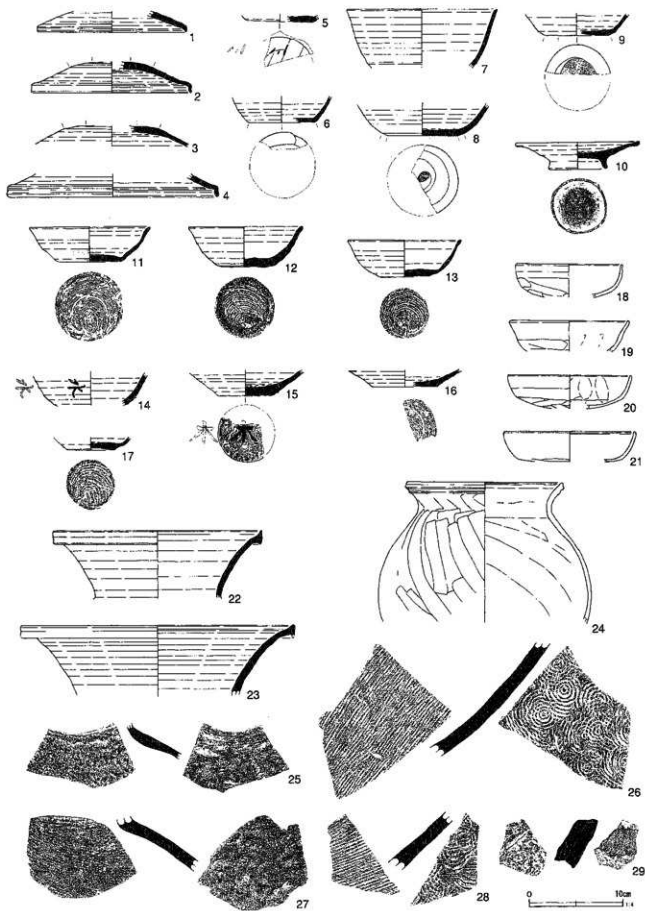
発見された柱穴は15本(Pit1・Pit2・Pit4・Pit6~Pit12・Pit14・Pit16・Pit18~Pit20)で、身舎北東隅柱のPit3(D区第11号井戸跡と重複)、身舎東列のPit5、東面庇列のPit13・15及び南面庇列のPit17を欠く。柱穴の名称は、発掘調査時のD区第6号掘立柱建物跡柱穴名を変更したもの(Pit7=旧Pit1・Pit8=旧Pit5・Pit9=旧Pit4・Pit10=旧Pit2・Pit11=旧Pit4・Pit12=Pit3)と、他の遺構から変更したもの(Pit16=D区第24号土塼・Pit18=D区第25号土塼・Pit19=D区第23号土塼・Pit20=M36GrPit6)がある。

桁行を東西に向け、南北軸(桁行)の方位はN-38°-Wを指す。規模は、身舎桁行6.90m×身舎梁行5.40m・面積37.26㎡に、庇東面1.20m、南列東柱0.75m・庇南面1.65mが加わる。合計すると、桁行9.30m×梁行6.60m・面積61.38㎡の建物跡が復元される。

柱間距離は、身舎北辺がPit1-2.55m-Pit2-2.85m-Pit3、身舎南辺がPit8-1.80m-Pit11-2.10m-Pit12-1.50m-Pit10、身舎西辺がPit1-2.70m-Pit4-2.10m-Pit6-2.10m-Pit8、身舎東辺が(Pit3)-2.70m-(Pit5)-2.10m-Pit7-2.10m-Pit10、身舎南辺-0.75m-東柱外側列である。身

D区第6号掘立柱建物跡

- 1 腐黄褐色土 柱礎取壊 炭化物粒子・地山粒少量 鉄分多
- 2 黒褐色土 柱礎 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 3a 黒褐色土 柱礎形充填 黒色土毛塚 焼土粒子・炭化物粒子微量
- 3b 黒褐色土 柱礎形充填 地山粒子ブロック少量 焼土粒子・炭化物粒子微量
- 3c 黒褐色土 柱礎形充填 地山粒子・ブロック多量 焼土粒子・炭化物粒子微量



第11图 D区第6号掘立柱建物跡出土遺物

第3表 D区第6号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第11回)

番号	種別	器種	I径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	蓋	(15.8)	[2.2]		5	②F	B	灰	Pit16 南北企産 自然軸付着	
2	須恵器	蓋	(16.9)	[3.3]		25	②ABFH	B	灰	Pit7 南北企産	
3	須恵器	蓋		[2.3]		10	②AFHJ	B	灰	Pit6 南北企産	
4	須恵器	蓋	(22.0)	[2.4]		5	②FII	B	灰	Pit18 南北企産	
5	須恵器	坏		[0.8]	(7.0)	5	②ACFI	B	灰	Pit18 墨書「川?」南北企産	26-6
6	須恵器	坏		[2.8]	(7.0)	10	②ABFG	B	灰	Pit16 南北企産	
7	須恵器	椀	(15.9)	[6.3]		10	②ADHI	B	灰	Pit16 末野産	
8	須恵器	椀		[3.4]	(7.4)	30	②FHI	B	灰	Pit16 南北企産	
9	須恵器	坏		[2.4]	(6.8)	15	②AFH	B	灰	Pit16 南北企産	
10	須恵器	高台付皿	13.0	2.8	5.8	85	②FGHI	B	灰	Pit7 南北企産 内外面に自然軸付着	26-2
11	須恵器	坏	(12.6)	3.7	6.8	60	②AF	C	黒褐	Pit16 南北企産	26-3
12	須恵器	坏	12.0	4.2	5.9	80	②AFGHI	B	灰黄	Pit7 南北企産	26-4
13	須恵器	坏	(12.0)	3.9	5.3	50	②BFI	B	灰	南北企産	26-5
14	須恵器	坏		[3.2]		5	②AFIJ	B	灰	墨書「水」南北企産	26-7
15	須恵器	坏		[2.7]	(6.2)		②AFGI	B	灰	Pit16 墨書「木」南北企産	26-8
16	須恵器	坏		[1.8]	(6.9)	5	②AFGH	B	灰	南北企産	
17	須恵器	坏		[1.3]	5.0	20	②AFHJ	B	灰	Pit7-8 南北企産	
18	土師器	坏	(11.2)	[3.5]		15	②ACDHI	B	にぶい橙	Pit16	
19	土師器	坏	(12.6)	[3.3]		10	②ACDGH	B	にぶい赤褐		
20	土師器	坏	(13.0)	[3.5]		30	②ACDHI	B	橙	Pit7	
21	土師器	坏	(13.9)	[3.2]		10	②ACHI	B	にぶい褐	Pit6	
22	須恵器	甕	(22.0)	[7.2]		5	①ADH	A	灰	Pit7 末野産 外面自然軸付着	
23	須恵器	甕	(29.0)	[7.5]		5	②ABDH	B	灰	Pit7	
24	土師器	甕	(16.3)	[14.8]		10	②ACDG	B	にぶい黄褐	Pit7	26-9
25	須恵器	甕					②AHI	B	灰	末野産 外面自然軸付着	
26	須恵器	甕					②III	B	灰	Pit7 末野産	
27	須恵器	甕					②DHJ	B	灰	Pit6 末野産	
28	須恵器	甕					②BGHT	B	灰	Pit18 末野産	
29	須恵器	甕					②AH	B	灰	Pit7 末野産 3破片の接着 自然軸付着	

舎と東面庇の間は1.20m、東面庇柱間距離は(Pit13)-2.70m-Pit14-(2.10m)-(Pit15)-(2.10m)-Pit16-2.40m-Pit20、身舎と南面庇の間は1.65m、南面庇柱間距離は(Pit17)-2.95m-Pit18-2.45m-Pit19-1.20m-Pit20である。

遺物は、Pit2・9~12・18・19より須恵器・土師器が出土している。墨書には「木」(15)・「水」(14)・「川(?)」(5)という文字がみられる。また、29は3点の須恵器甕片が付着したものである。

D区第7号掘立柱建物跡(第12回)

L35・36グリッドに位置し、D区第8号掘立柱建物跡、D区第76号溝跡と重複する。

桁行3間×梁行3間の側柱建物跡と推測される。発見された柱穴はL字形に並ぶ5本(Pit1~5)で、ほかは調査区外にある。

南北軸の方位は、N-41°-Wを指す。規模は、

南北6.75m×東西6.75m・面積45.56㎡と推定される。

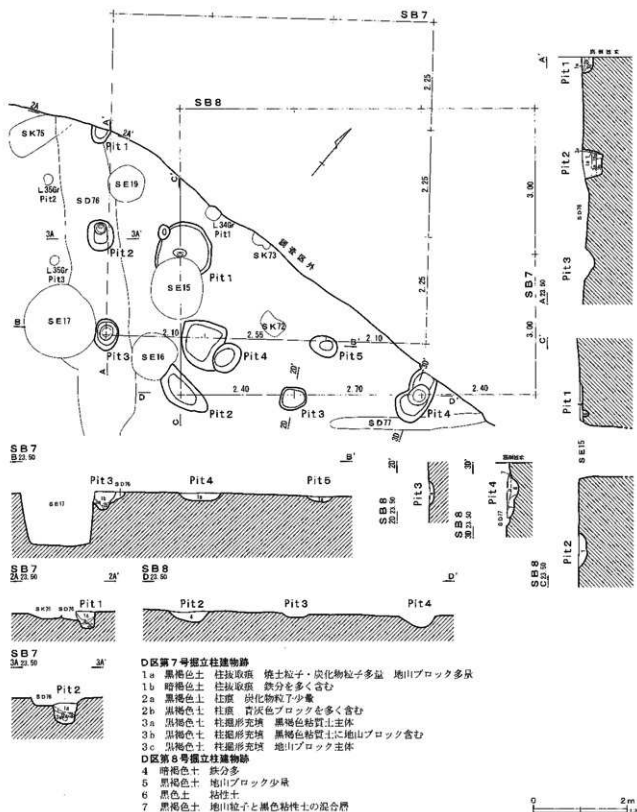
柱間距離は規則性が強く、東西に面する列は2.25mに統一されている。一方、南北に面する列は両脇の柱間が2.10m、中央の柱間が2.55mで、正面視を意識した柱間隔と捉えられる。よって、D区第7号掘立柱建物跡は、桁行を南北に向ける正方形の側柱建物と推定される。

遺物はPit2より出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

D区第8号掘立柱建物跡(第12回)

L35・36グリッドに位置する。D区第7号掘立柱建物跡、D区第14・15号井戸跡、D区第77号溝跡と重複する。

桁行3間×梁行2間の側柱建物跡と推測される。発見された柱穴はL字形に並ぶ4本で、ほかは調査区外にある。いずれの柱穴も、発掘調査段階に



第12図 D区第7・8号掘立柱建物跡

は土壌として調査を行ったが、Pit1・Pit4の底面に残されている柱痕や4基の上壁の間隔、D区第

6・7号掘立柱建物跡との軸方向の一致から、掘立柱建物跡に変更した。発掘調査時の遺構名は

Pit1がD区第69号土壌、Pit2がD区第70号土壌、Pit3がD区第71号土壌、Pit4がD区第74号土壌である。

桁行を南北に向け、南北軸（梁行）の方位はN-43°-Wを指す。規模は、桁行7.50m×梁行6.00m・面積45.00㎡と推定される。柱間距離は、桁行が西から2.40m-2.70m（2.40m）、梁行が北から（3.00m）-3.00mである。

遺物はPit1・Pit2から出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

D区第9号掘立柱建物跡（第13図）

M37グリッドに位置し、D区第18・19号土壌、D区第28号溝跡と重複する。

発掘調査時には、Pit1をD区第20号土壌、Pit2をM37GrPit1として取り扱った。しかし、北側のD区第6号掘立柱建物跡と軸を揃えた位置関係、Pit1のL字形の平面形態・掘形規模と底面に残された柱痕、Pit2の明瞭に柱痕が認められる土層堆積状況から、掘立柱建物跡として報告する。

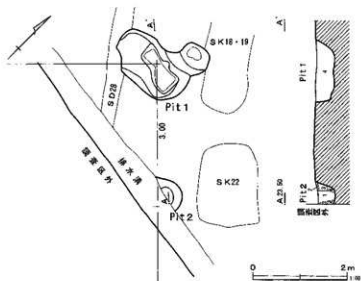
柱穴2本のみを検出であり、形態や規模は不明である。大半は、調査区外にある。L字形隅柱の掘形規模が、D区第6号掘立柱建物跡と遜色がないことから、同等規模程度の掘立柱建物跡が想定される。

遺物は出土していない。

D区第10号掘立柱建物跡（第14図）

M36グリッドに位置し、D区第19号溝跡と重複する。

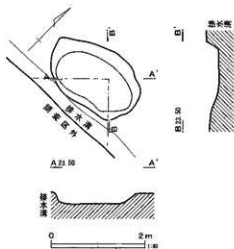
発掘調査段階には、D区第30号土壌として取り扱った。しかし、L字形の平面形態、掘形規模、D区第6号掘立柱建物跡との位置関係から、隅柱がL字形の掘形をもつ掘立柱建物跡として報告す



D区第9号掘立柱建物跡

- 1 黒色土 柱痕 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 黒褐色土 柱掘形充填 炭化物粒子少量
- 3 黒褐色土 柱掘形充填 地山ブロック多量
- 4 暗黄灰褐色土 柱掘形充填 地山ブロック主体層

第13図 D区第9号掘立柱建物跡



第14図 D区第10号掘立柱建物跡・出土遺物

る。形態・規模は不明である。
遺物は、瀬戸美濃の埴輪(1)が混入している。

第4表 D区第10号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	陶器	埴輪	[4.7]	8.3	10	①肌		A	淡黄	瀬戸美濃 灰輪 輪軸目取著	

(2) 柵跡

D区第1号柵跡 (第16図)

L46・M46グリッドに位置する。D区第1号掘立柱建物跡、D区第4号柵跡と重複し、D区第2号柵跡と並行する。

南北に並ぶ柱穴8本・柱間7間の柵列と認定される。全長6.60mを測り、軸方位はN-6° -Wを指す。柱間距離は、Pit1-0.30m-Pit2-1.20m-Pit3-0.75m-Pit4-1.05m-Pit5-1.80m-Pit6-0.60m-Pit7-0.90m-Pit8である。

遺物は、出土していない。

D区第2号柵跡 (第16図)

L46、M46グリッドに位置する。D区第1号掘立柱建物跡、D区第3～6号柵跡と重複し、D区第1号柵跡と並行する。

南北に並ぶ柱穴6本・柱間5間の柵列と認定される。全長6.60mを測り、軸方位はN-0°を指す。柱間距離は、Pit1-0.90m-Pit2-1.80m-Pit3-1.20m-Pit4-1.50m-Pit5-1.20m-Pit6である。

遺物は、かわらけが出土している (第15図1)。

D区第3号柵跡 (第16図)

L45・46グリッドに位置する。D区第1号掘立柱建物跡、D区第2号柵跡と重複し、D区第6号

柵跡と並行する。

東西に並ぶ4本・柱間3間の柵列と認定される。Pit2はL45GrPit11から変更した。全長7.20mを測り、軸方位はN-84° -Eを指す。柱間距離は、Pit1-2.10m-Pit2-3.00m-Pit3-1.80m-Pit4である。

遺物は、出土していない。

D区第4号柵跡 (第16図)

M45・46グリッドに位置し、D区第1号掘立柱建物跡、D区第1・2号柵跡と重複する。

東西に並ぶ柱穴5本・柱間4間の柵列と認定される。全長9.30mを測り、軸方位はN-77° -Eを指す。柱間距離は、Pit1-3.30m-Pit2-2.10m-Pit3-1.80m-Pit4-2.10m-Pit5である。

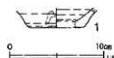
遺物は、出土していない。

D区第5号柵跡 (第16図)

L45・46グリッドに位置する。Pit5をD区第6号柵跡Pit4と共有し、D区第1号掘立柱建物跡、D区第2・3・6号柵跡と重複する。

東西に並ぶ柱穴5本・柱間4間の柵列と認定される。全長6.30mを測り、軸方位はN-90°を指す。柱間距離は、Pit1-0.90m-Pit2-1.80m-Pit3-2.40m-Pit4-1.20m-Pit5である。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。



第15図 D区第2号柵跡出土遺物

D区第1号柵跡

- 1 暗褐色土 柱抜取痕 焼土・炭化物
- 2 暗青灰色土 柱掘形充填 砂質 ローム粒子
しまり欠・粘性欠
- 3 青灰色土 柱掘形充填 砂質 しまり欠・粘性欠

D区第2号柵跡

- 4 黒褐色土 柱痕 炭化物粒子少量
- 5 暗褐色土 柱掘形充填 灰色土・火山灰
しまり良

- 6 灰褐色土 柱掘形充填 砂質 鉄分 しまり良

- 7 暗青灰色土 柱掘形充填 砂質 鉄分

- 8 黒褐色土 柱掘形充填 炭化物粒子・炭土少量

D区第3号柵跡

- 9 暗褐色土 柱抜取痕 ローム粒子・青灰色土少量

- 10 黒褐色土 柱痕 炭化物粒子

- 11 灰褐色土 柱掘形充填 砂質 鉄分

- 12 暗青灰色土 柱掘形充填 砂質 鉄分

D区第4号柵跡

- 13 暗灰褐色土 柱抜取痕 砂質 火山灰

- 14 暗褐色土 柱抜取痕 青灰色土ブロック少量

- 15 灰褐色土 柱掘形充填 砂質 鉄分

D区第5号柵跡

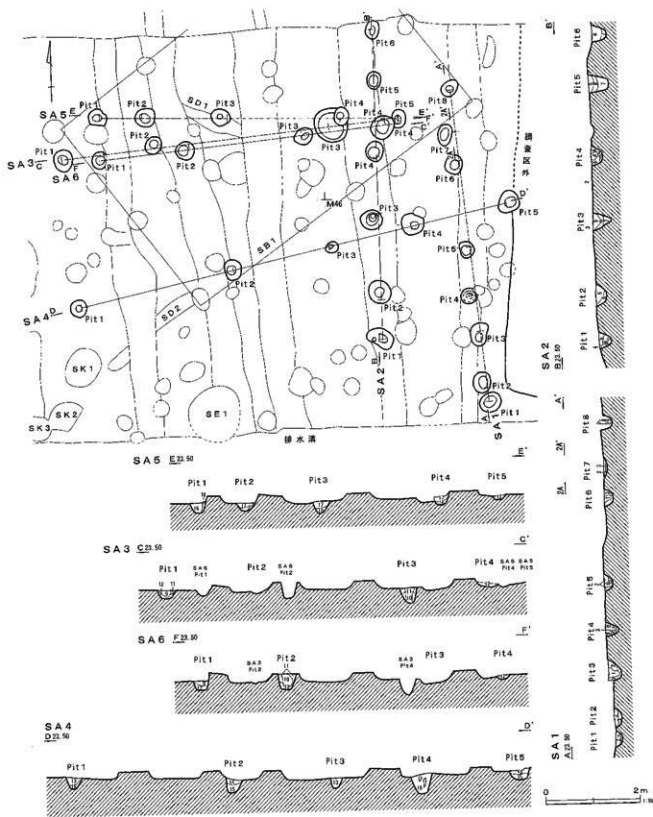
- 16 暗褐色土 柱痕

- 17 暗褐色土 柱抜取痕 炭化物粒子少量

- 18 暗青灰色土 柱掘形充填 砂質 鉄分

第5表 D区第2号柵跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	種類	口径	器高	底径	残存(%)	粘土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	かわらけ	皿		[2.1]	(5.8)	5	②CDG	C	にぶい・黄褐色	Pit1 底面糸切り痕不明瞭 油煙付着	



第16图 D区第1·2·3·4·5·6号横断

D区第6号欄跡 (第16図)

L45・46グリッドに位置する。Pit4をD区第5号欄跡Pit5と共有し、D区第1号掘立柱建物跡、D区第2・3・5号欄跡と重複する。

東西に並ぶ柱穴4本・柱間3間の欄列と認定さ

(3) 井戸跡

D区第1号井戸跡 (第17図)

M45グリッドに位置する。平面形態は円形で、長径1.12m、短径1.05m、深さ1.4m以上、長軸方位N-83°-Eを測る。井戸の埋没途上に、上半部を欠損した板碑2点が投げ込まれている。遺物はこのほかに、かわらけや曲物が出土している。

第19図4は、円形曲物の底板である。長径1.13cm・現存短径10.4cm・厚さ1.1cmと小型である。外周部に段はなく、側面は垂直である。表面には幅1.6cm前後の加工痕が、明瞭にみられる。木取りは柁目である。

5も曲物の底板で、薄く小型である。欠損部が多いが円形と考えられる。56cm×49cmほどが現存し、厚さ0.2cmである。2孔1組の円孔が残存する。木取りは柁目である。

6・7は板石塔婆である。6は現存高69.7cm・幅28.8cm・厚さ3.6cmである。紀年銘は「応安八年(1375)己卯七月一日道可禪門」と紀年銘と供養者名が記される。7は現存高61.9cm・幅30.7cm・厚さ3.9cmである。「応長元年(1311)辛亥十二月日」と紀年銘が記される。

D区第2号井戸跡 (第17図)

M43・44グリッドに位置し、南半は調査区外にある。平面形態は円形で、東西径1.56m、南北径1.03m以上、深さ0.93mを測る。

遺物はかわらけ・内耳鍋が出土し、須恵器瓷片が混入する。

D区第3号井戸跡 (第17図)

L43グリッドに位置し、西半部が調査区外にある。平面形態は円形で、南北径1.00m、深さ0.98m

れる。Pit1をSA3Pit2、Pit2をSA3Pit3、Pit3をL46GrPit5から変更した。全長6.30mを測り、軸方位はN-84°-Eを指す。柱間距離は、Pit1-1.80m-Pit2-3.00m-Pit3-1.50m-Pit4である。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

である。

遺物は、かわらけと板石塔婆(13、現存高168cm・現存幅9.4cm・厚さ2.3cm・梵字付近の破片)が出土している。

D区第4号井戸跡 (第17図)

M43グリッドに位置し、重複するD区第7号溝跡よりも古い。平面形態は円形で、長径1.70m、深さ1.14m、長軸方位N-25°-Wを測る。

遺物は、ろくろ土師器杯・須恵器瓷片が出土している。

D区第5号井戸跡 (第17図)

L41・M41グリッドに位置する。

平面形態は不整形円形で、長径0.82m、短径0.70m、長軸方位N-41°-Eを測る。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第6号井戸跡 (第17図)

M36グリッドに位置し、重複するD区第12号土壙よりも新しい。平面形態は不整形円形で、長径1.08m、短径0.90m、深さ1.13m、長軸方位N-90°を測る。

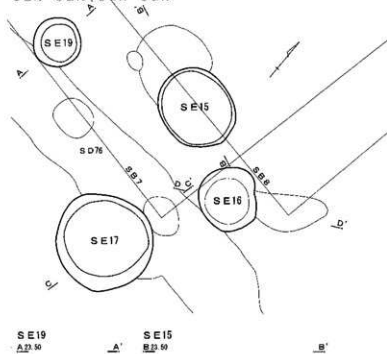
遺物は、ろくろ土師器の高台杯が出土している。

D区第7号井戸跡 (第17図)

K40グリッドに位置する。重複するD区第33号溝跡よりも古い。平面形態は円形で、東西径1.12m、深さ0.89mを測る。

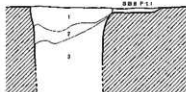
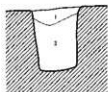
遺物は、方形曲物の底板が3点出土した(第20図19・20・21)。3点とも外形・大きさがほぼ同じで、角を丸くおとした隅丸の方形である。側面は、上下辺を斜めに、左右辺は垂直に削り落とす。19は、大きさ8.4cm×8.2cm・厚さ0.3cmである。2

SE15・SE16・SE17・SE19



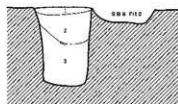
SE19
A22 30

SE15
B22 49

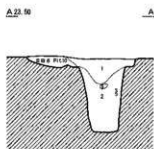
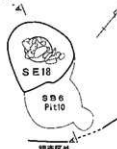


SE17
C22 30

SE16
D22 30



SE18



調査区外

D区第1号井戸跡

- 1 暗灰色土 炭化物粒子
- 2 黒褐色土 炭化物層
- 3 暗褐色土 炭化物土少量 粘性良
- 4 暗青灰色土 鉄分 粘性良

D区第2号井戸跡

- 1 暗青灰色土 砂質 炭化物粒子少量
- 2 黒褐色土 炭化物粒子・ローム粒子
- 3 暗青灰色土 ローム粒子少量
- 4 青灰色土 ローム粒子少量

D区第3号井戸跡

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量 しまり良
- 2 暗褐色土 植物遺存体多量
- 3 暗青灰色土 青灰色土少量

D区第4号井戸跡

- 1 暗褐色土 鉄分多
- 2 黒褐色土 炭化物少量
- 3 暗青灰色土 青灰色土少量

D区第7号井戸跡

- 1 暗褐色土 鉄分 砂粒 炭化物粒子少量
しまり強・粘性強
- 2 暗灰褐色土 暗青灰褐色ブロック
しまり良・粘性強
- 3 黒褐色土 炭化物多 しまり強・粘性強

D区第8号井戸跡

- 1 暗褐色土 褐色土+暗褐色土 砂粒多
- 2 暗灰褐色土 鉄分
- 3 黒褐色土 暗灰褐色土ブロック

D区第9号井戸跡

- 1 暗褐色土 褐色色砂粒多
- 2 暗灰褐色土 茶褐色砂粒少量
- 3 黒褐色土

D区第12号井戸跡

- 1 黒褐色土 青灰色土少量 粘性良・しまり欠
- 2 黒褐色土 粘性良・しまり欠

D区第13号井戸跡

- 1 黒褐色土 鉄分沈殿 地山ブロック少量
- 2 黒土 粘性土

D区第14号井戸跡

- 1 黒褐色土 青灰色土ブロック少量
- 2 黒褐色土 粘性強

D区第15号井戸跡

- 1 黒褐色土 鉄分 青灰色土・地山上多
- 2 黒褐色土 青灰色土多
- 3 黒褐色土 粘性強

D区第16号井戸跡

- 1 暗褐色土 鉄分多
- 2 黒褐色土 青灰色土ブロック少量
- 3 黒褐色土 粘性強

D区第17号井戸跡

- 1 暗褐色土 鉄分多
- 2 黒褐色土 青灰色ブロック多
- 3 黒褐色土 粘性強

D区第18号井戸跡

- 1 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子少量
- 2 黒褐色土 粘質土

D区第19号井戸跡

- 1 七層鉄配なし
- 2 十層鉄配なし



第18図 D区井戸跡 (2)

孔1組の円孔を4箇所に穿つ。いずれも孔内に樹皮紐が残存し、欠損しているが、2孔を通した樹皮紐をひとつに結んでいた。孔の間隔は、上～左と左～下、上～右と右～下が等しい。木取りは柵目である。

20は、上下87cm・厚さ0.3cmである。19と同様に、2孔1組の孔を4箇所に穿ち、1箇所に樹皮紐が残存する。孔の間隔は、上～左と右～下、上～右と左～下が等しい。木取りは柵目である。

21は1/3を欠損し、大きさは上下84cm・厚さ0.4cmである。2孔1組1箇所、単独2箇所に孔を穿つ。木取りは柵目である。

D区第8号井戸跡 (第17図)

K41・L41グリッドに位置する。重複するD区第33号溝跡によって切られている。平面形態は楕円形で、長径1.40m、短径0.92m、深さ1.27m、長軸方位N-33°-Eを測る。

第20図22は建築材で、両端に方形の仕口を作る。現存長31.4cm・幅5.4cm・厚さ3.8cmである。半截材を用いたもので、断面形は半円形の角を面取りされた形である。半截面には二方向の方形加工痕がみられ、表面を平滑に仕上げる。木取りは板目である。形状から、井戸枠の棧の可能性も考えられる。

D区第9号井戸跡 (第17図)

L41グリッドに位置する。平面形態は円形で、長径0.75m、短径0.74m、深さ1.17m、長軸方位N-26°-Wを測る。

遺物は、かわらけが出土している。

D区第12号井戸跡 (第17図)

L37グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、長径1.05m、短径0.86m、深さ1.37m、長軸方位N-30°-Eを測る。

第20図23は桶の底板である。半円形の2枚の板を木釘で結合して1枚の底板にしたもので、大きさは179cm×185cm・厚さ15cmである。2枚の板は材質・断面形・厚さが異なるため、二次的に桶底

材として転用したものと推定される。側面の接合部には5箇所の柄穴状の円孔をそれぞれに穿ち、木釘によって2枚の板を固定する。このうち4箇所には木釘が残存する。いずれの板材も木取りは板目である。

D区第13号井戸跡 (第17図)

L37グリッドに位置し、南半は調査区外にある。平面形態は不整形円形で、東西径0.93m、深さ0.97mを測る。

遺物は、瀬戸製の御目付大皿が出土している。

D区第14号井戸跡 (第17図)

L37グリッドに位置し、重複するD区第73号溝跡よりも新しい。平面形態は不整形円形で、長径1.00m、短径0.90m、深さ0.84m、長軸方位N-38°-Wを測る。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第15号井戸跡 (第18図)

L35グリッドに位置し、重複するD区第8号掘立柱建物跡よりも新しい。平面形態は楕円形で、長径1.30m、短径1.12m、深さ1.4m以上、長軸方位N-29°-Wを測る。

遺物は、陶器軸双耳水注・摺鉢、焙烙等が出土している。

第20図30は凝灰岩製の砥石である。現存長8.4cm・幅4.8cm・厚さ2.9cm・重さ89.7gである。

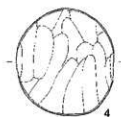
D区第16号井戸跡 (第18図)

L35グリッドに位置する。重複するD区第8号掘立柱建物跡・D区第76号溝跡よりも新しい。

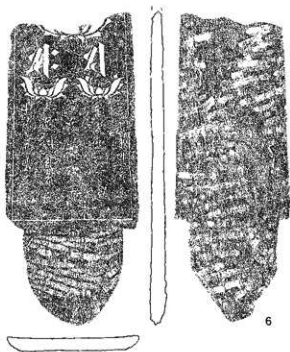
平面形態は不整形円形で、長径1.00m、短径0.88m、深さ1.26m、長軸方位N-0°-Eを測る。

第20図24は曲物の底板である。長軸方向に直線をもつ小判形で、大きさは16.3cm×(13.8)cm・厚さ0.7cmである。側面は直線的な垂直ではなく、丸く曲線的に仕上げられる。孔は中央に1箇所と、左右の直線部側面近くに2孔1組の円孔が穿たれる。木取りは柵目である。

D区第1号井戸跡



D区第4号井戸跡



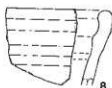
D区第6号井戸跡



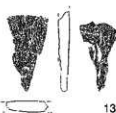
D区第9号井戸跡



D区第2号井戸跡



D区第3号井戸跡

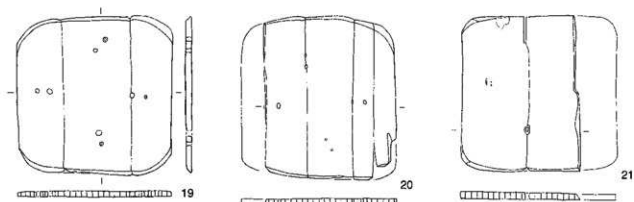


D区第13号井戸跡

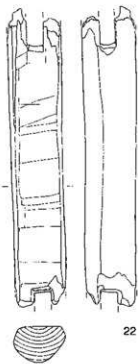


第19图 D区井戸跡出土遺物 (1)

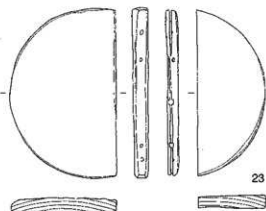
D区第7号井戸跡



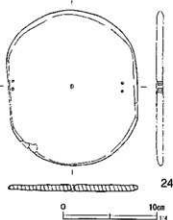
D区第8号井戸跡



D区第12号井戸跡



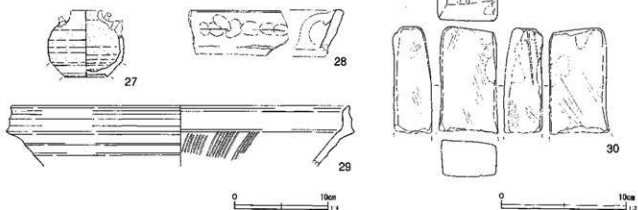
D区第16号井戸跡



D区第17号井戸跡



D区第15号井戸跡

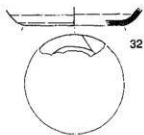


第20图 D区井戸跡出土遺物(2)

D区第18号井戸跡

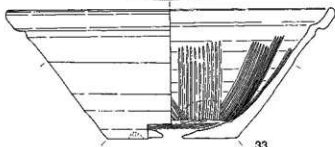
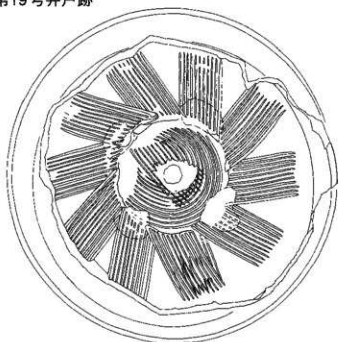


31



32

D区第19号井戸跡



33



34

第21网 D区井戸跡出土遺物 (3)



D区第17号井戸跡 (第18図)

L35グリッドに位置し、重複するD区第7号掘立柱建物跡・D区第76号溝跡よりも新しい。平面形態は円形で、長径1.56m、短径1.53m、深さ1.13m、長軸方位N-38°-Wを測る。

遺物は、須恵器坏・甕等が出土している。

D区第19号井戸跡 (第18図)

L35グリッドに位置し、重複するD区第76号溝跡よりも新しい。平面形態は円形で、長径0.77m、短径0.75m、深さ0.97m、長軸方位N-0°-Eを測る。

遺物は摺鉢2点が出土し、第21図33は二次的に底部が穿孔されている。

D区第18号井戸跡 (第18図)

L36グリッドに位置し、重複するD区第6号掘立柱建物跡よりも新しい。平面形態は不整形円形で、長径1.12m、短径1.08m、深さ1.16m、長軸方位N-23°-Eを測る。覆土に含まれた礫は、隣接する石組みの井戸跡(D区第11号井戸跡)からの流入と考えられる。

遺物は、須恵器壺・椀等が出土している。

D区第10号井戸跡 (第22図)

L45グリッドに位置する。

下半部に底の抜けた桶を設置し、井戸枠として転用した井戸跡である。平面形態は円形で、長径1.83m、短径1.68m、長軸方位N-73°-Eを測る。深さ1.24mの大きな掘形の底部中央には、深さ0.20m程の桶枠を設置するための穴が掘りこまれている。

出土した桶は、12枚の側板が接ぎ合わされて作られたものである(第23~25図35~46)。土圧に

より歪んでいるが、口径40cm・底径35cm・高さ60cmほどの桶に復元される。それぞれの側板は、多くは上端幅が広く下端幅が狭い台形状である。但し、37・38・40・45はやや幅狭で、上・下端幅がほぼ同じ形状である。断面形は弧を描き、外面には丸みを出すためのケズリ加工がほぼ全面に施される。内面には加工痕がほとんどみられないが、丸みを形成したケズリ痕や擦痕がみられるものもある。外面には簾の圧痕が4段みられ、上から11.1cm・32.2cm・50.5cm・55.2cm前後の位置にある。簾は図示し得ないが、竹によって編まれたものである。また、内面の下から1.1~2.1cmの位置には、底板の圧痕がみられる。

12枚の側板の長さ・幅・厚さ・木取りは、次の通りである。

- 35 (60.6cm・15.2cm・2.0cm・板目)
- 36 (60.3cm・17.3cm・2.0cm・板目)
- 37 (59.8cm・10.3cm・2.0cm・板目)
- 38 (59.6cm・12.4cm・1.9cm・板目)
- 39 (59.2cm・14.1cm・1.9cm・板目)
- 40 (59.1cm・10.5cm・2.1cm・板目)
- 41 (59.3cm・17.0cm・2.2cm・板目)
- 42 (58.5cm・15.2cm・1.7cm・板目)
- 43 (58.7cm・15.5cm・2.2cm・板目)
- 44 (59.3cm・15.9cm・2.1cm・板目)
- 45 (58.6cm・13.4cm・2.2cm・板目)
- 46 (59.8cm・19.4cm・2.4cm・板目)

D区第11号井戸跡 (第22図)

L36グリッドに位置する。重複するD区第6号掘立柱建物跡よりも新しく、身舎の北東隅柱の柱穴を削平する。

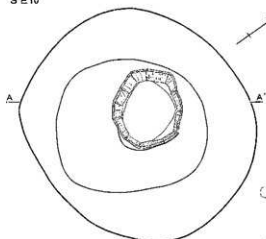
D区第10号井戸跡

- 1 暗茶褐色土 人為的堆積 鉄分多量 下半部に有機物堆積
- 2 暗褐色土 人為的堆積 鉄分多量 暗灰褐色土ブロック少量
- 3 暗青灰褐色土 粘土層
- 4 明褐色土 砂質 鉄分少
- 5 暗灰褐色土 砂質 しまり器・粘土層
- 6 灰褐色土 砂質
- 7 暗青灰褐色土 鉄分少量 砂質

D区第11号井戸跡

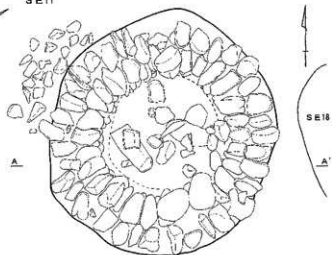
- 1 黒褐色土 粘性土 炭化物粒子少量
- 2 黒色土 粘性土 炭化物粒子・地山粒子少量
- 3 青灰色土 掘形穴境 青灰色土主体・黒色粘質土
- 4 黒色土 掘形穴境 黒色粘質土主体・青灰色砂質土
- 5 黒色土 掘形穴境 黒色粘質土・青灰色砂質土
- 6 黒色土 掘形穴境 黒色粘質土主体・青灰色砂質土

SE10

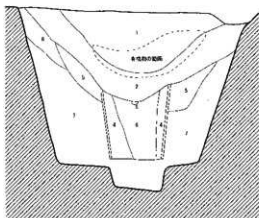


A22.90

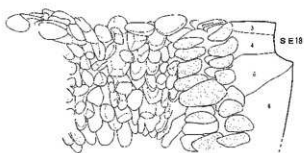
SE11



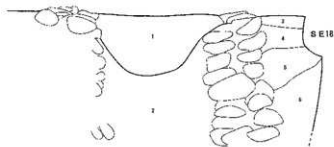
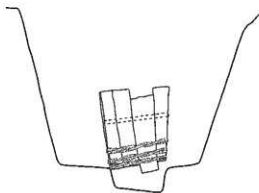
A22.90



A22.90

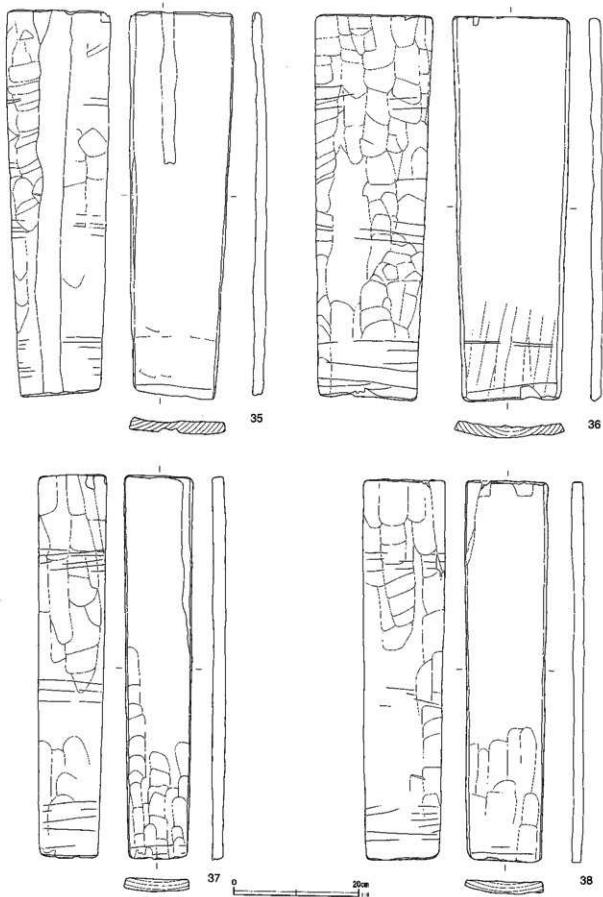


A22.90

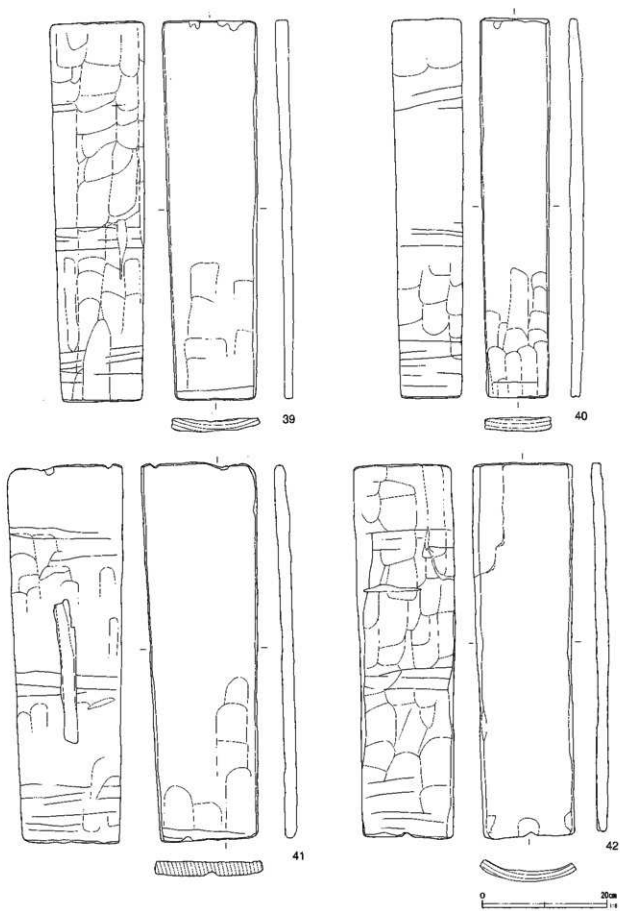


0 1m

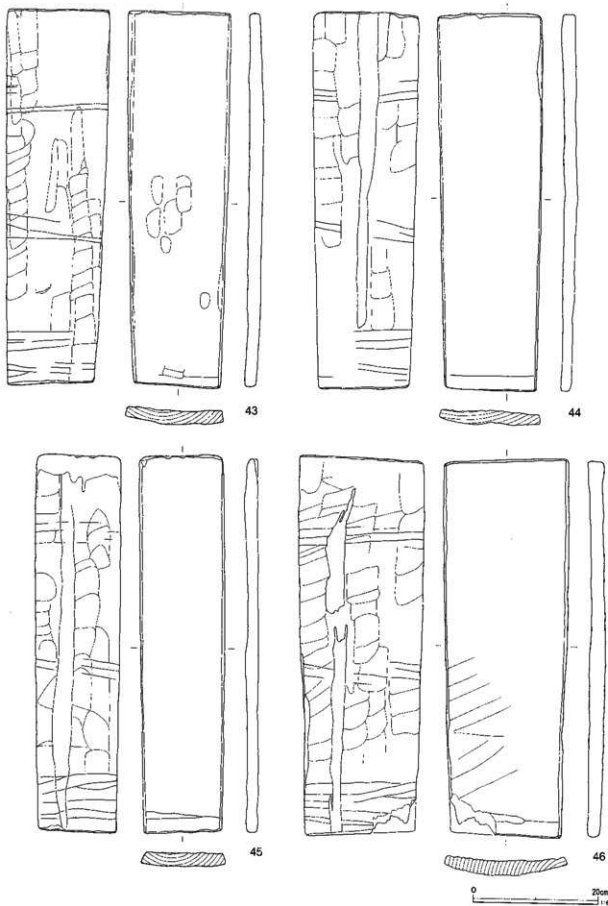
第22図 D区井戸跡 (3)



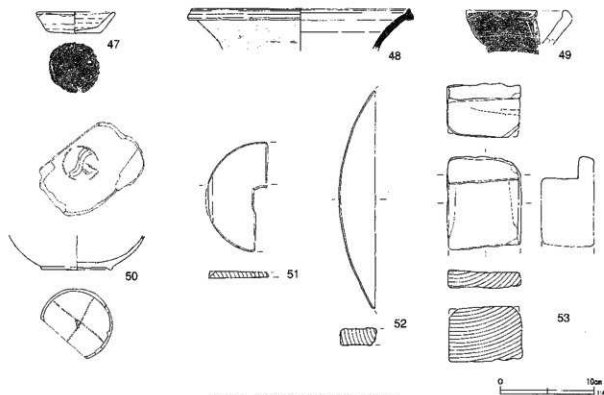
第23图 D区第10号井尸跡出土遗物 (1)



第24图 D区第10号井尸踪出土遗物(2)



第25区 D区第10号井戸跡出土遺物 (3)



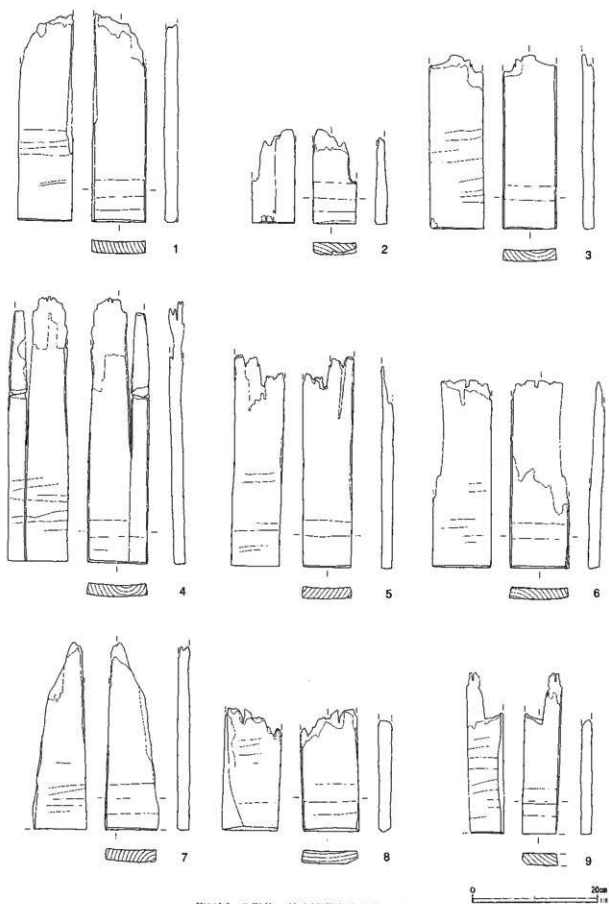
第26図 D区第11号井戸跡出土遺物

第6表 D区井戸跡出土遺物観察表 (第19・20・21・26図)

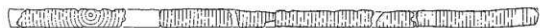
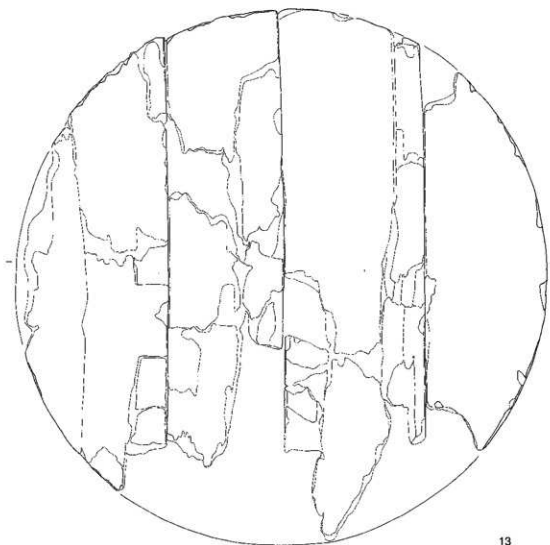
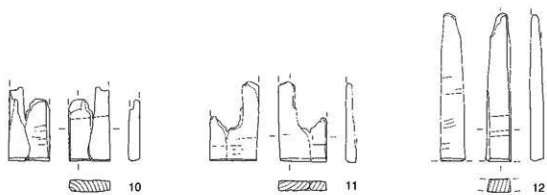
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	かわらけ	皿	(12.0)	[3.3]	(6.8)	35	①CH	B	①におい・補	SE1	27-1
2	かわらけ	皿	(10.6)	3.6	4.0	30	③DGH	B	浅黄橙	SE1	27-1
3	かわらけ	皿		[1.7]	5.0	40	②AGH	B	②におい・橙	SE1 轆轤成形後、内面に指頭ナデ	
8	瓦質土器	鍋	(36.0)	[7.2]		5	②ACH	B	暗灰	SE2 煤付着	
9	かわらけ	皿		[1.2]	5.0	20	②CGH	B	灰白	SE2	
10	かわらけ	皿		[1.7]	(5.0)	15	②G	C	②におい・黄橙	SE2	
11	須恵器	甕					②AGH	B	灰	SE2 末野産	
12	かわらけ	皿	(5.7)	2.1	2.8	65	②DGH	B	②におい・黄橙	SE3 口縁部内外面に油煙付着	27-6
14	ろくろ土師	坏		[2.2]	(5.2)	10	③DGH	C	橙	SE4 底部糸切離し	
15	須恵器	甕					③ADHJ	B	灰	SE4 末野産	
16	ろくろ土師	高台坏		[1.4]	(6.9)	5	②G	B	橙	SE6 高台ナデ付	
17	かわらけ	皿	(11.4)	[3.3]		10	③DHI	B	浅黄橙	SE9	
18	瓦質土器	須恵付大甕					②AGHJ	B	灰白	SE13 瀬戸焼締 13C前～中葉	
25	須恵器	坏		[1.7]	(7.0)	10	③AFH	B	暗青灰	SE17 南北企産	
26	須恵器	甕					③AHJ	A		SE17	
27	陶器	双耳水注		[6.3]	4.6	50	②I	B	執時赤褐	SE15 瀬戸美濃 鉄釉 削出高台 17C後半	
28	瓦質土器	焙烙		[4.7]		5	③DGH	B	黒	SE15 全面に煤付着	
29	陶器	擦鉢	(36.0)	[6.4]		5	②AH	A	②におい・黄橙	SE15 肥前or堺 鉄釉? 御日7本/糸 18C代か	
31	須恵器	甕	(37.0)	[0.8]		5	②ADH	B	灰	SE18 末野産 細片のため器種要検討	
32	須恵器	碗		[1.9]	(10.5)	5	③AFH	B	灰	SE18 南北企産	
33	陶器	播鉢	(34.0)	14.0	13.6	90	③HJ	B	③におい・黄橙	SE19 瀬戸美濃 鉄釉?(暗赤褐) 日跡4 17C後半	
34	陶器	播鉢		[10.3]	(12.0)	10	③AJ	B	③におい・黄橙	SE19 轆轤成形 外面使焼?	
47	かわらけ	皿	8.0	2.3	5.4	100	③C	B	灰黄褐	SE11 灯明皿 油煙付着	27-8
48	須恵器	甕	(23.0)	[4.5]		5	①H	A	灰	SE11	
49	瓦質土器	鉢		[2.6]		5	③AH	B	褐灰	SE11	

平面形態が不整形の掘形の中に、拳大～人頭大程度の丸礫を組み上げた石組みの井戸である。

石は前後2列に組み上げられ、裏側には土が埋め戻されている。石組みの内径は、南北0.94m、東



第28图 D区第1号土城墓出土遗物(1)



第29图 D区第1号土坑墓出土遗物(2)

- 3 (27.3cm・8.5cm・1.7cm・板目)
 4 (41.3cm・9.7cm・1.8cm・板目)
 5 (32.8cm・7.7cm・1.8cm・柾目)
 6 (29.2cm・9.2cm・1.8cm・板目)
 7 (29.2cm・8.0cm・1.9cm・板目)
 8 (18.9cm・9.0cm・1.8cm・板目)
 9 (25.2cm・5.4cm・1.9cm・板目)
 10 (11.6cm・6.5cm・1.8cm・板目)
 11 (12.5cm・7.6cm・1.6cm・板目)
 12 (23.2cm・3.7cm・2.0cm・柾目)

第29図13の底板は、4枚の板を太枘で接いで円形板を形成する。径84.2cmと推定され、厚さ2.7cmである。木取りは板目である。

D区第2号土墳墓 (第27回)

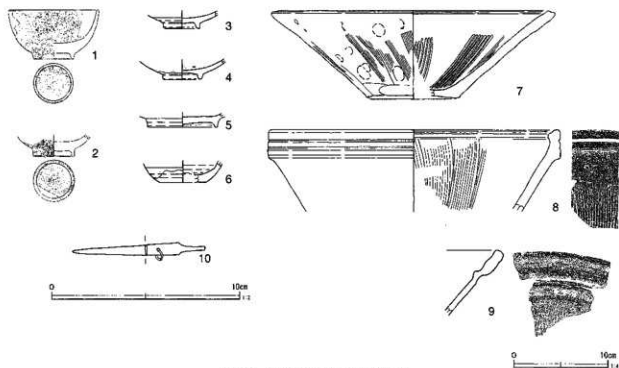
L42・M42グリッドに位置する。

平面形態が円形の掘形の中に、円形の竹籠状の大型木製容器を埋設した土壇である。飾金具や陶磁器が多く出土していることから、土壇墓と推定される。

掘形の規模は長径1.11m、短径1.07m、深さ0.12mを測り、長軸方位はN-5°-Eを指す。

底面は平滑である。竹籠状の大型木製容器は掘形壁面に貼り付いたような状況で検出されたが、脆弱なため取り上げることはできなかった。

遺物は瀬戸美濃の碗・鉢、くらわんか碗や在地産摺鉢等が出土している。



第30図 D区第2号土壇墓出土遺物

第7表 D区第2号土壇墓出土遺物観察表 (第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色澤	出土位置・備考	図版
1	磁器	碗	(9.4)	[5.2]	4.1	45	①I	A	灰白	くらわんか碗 肥前 灰輪(明緑灰) 18C中～後半	
2	磁器	碗		[2.3]	4.2	15	①I	A	灰白	くらわんか碗 肥前 灰輪(明緑灰) 18C中～後半	
3	陶器	碗		[1.8]	3.8	20	②GH	B	にぶい黄澄	瀬戸美濃 灰輪貫入多 18C代?	
4	陶器	碗?		[2.1]	4.1	30	①I	A	灰オリーブ	藤折碗? 瀬戸美濃? 灰輪貫入多(灰黄) 18C代?	
5	陶器	碗		[1.5]	(7.4)	10	②ACG	A	灰白	瀬戸美濃 灰輪貫入多 蛇/目抽割ぎ 17C後～18C後	
6	陶器	碗		[2.3]	(5.0)	5	②III	B	灰黄	瀬戸美濃 鉄輪(褐) 17～18C? 二次的脱熱	
7	瓦質土器	摺鉢	(28.4)	9.3	(10.0)	20	②AHL	C	灰	在地産 輪絞成形 使用痕跡	
8	陶器	摺鉢	(30.0)	[8.7]		5	②III	B	にぶい赤褐	備前or堺(明石) 18C代?	
9	陶器	摺鉢				5	②AGH	B	灰白	瀬戸美濃 鉄輪(暗赤褐) 18C前半	

第30図10の飾金具は、切先から茎まで表現されたような刀子状の形態である。中央付近に穿孔され、針金状の輪が貫いている。長さ7.1cm・幅0.6

cm・厚さ0.1cm・重さ1.9gである。全面が厚く緑青に覆われているため、毛彫りなどの装飾や金鍍金は観察できない。

(5) 土壌・溝跡・はたけ跡

D区第9号土壌 (第31図)

L35グリッドに位置する。

平面形態は、長方形である。長軸長1.15m以上、短軸長0.60m、確認面からの深さ0.42mを測る。長軸方位は、N-59° -Eを指す。底面はU字形に中央が窪む。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第13号土壌 (第31図)

M35グリッドに位置する。

平面形態は、楕円形である。長軸長0.84m、短軸長0.58m、確認面からの深さ0.26mを測る。長軸方位は、N-76° -Wを指す。底面は西から東へ向けて緩やかな傾斜をもつ。

遺物は出土していない。

D区第16号土壌 (第31図)

M34グリッドに位置し、西半部は調査区外にある。

平面形態は、不整長方形である。長軸長1.96m、短軸長0.96m以上、確認面からの深さ0.70mを測る。底面にはグリッドビットが掘り込まれ、凹凸が激しい。

遺物は、須恵器坏が出土している。

D区第75号土壌 (第31図)

L35グリッドに位置し、重複するD区第76号溝跡よりも新しい。

平面形態は、長方形である。残存長軸長1.15m、短軸長0.64m、確認面からの深さ0.09mを測る。長軸方位は、N-26° -Eを指す。底面は中央に向かって窪む。

遺物は出土していない。

D区第78号土壌 (第31図)

L35グリッドに位置し、重複するD区第75号溝跡よりも新しい。

平面形態は、不整円形である。長軸長0.66m、短軸長0.62m、確認面からの深さ0.11mを測る。長軸方位は、N-51° -Wを指す。

遺物は出土していない。

D区第75号溝跡 (第31・33・34図)

L34・35グリッドに位置し、重複するD区第78号土壌よりも先行する。北側は調査区外に至り、南側は明瞭に立ち上がる。

検出長10.00m、幅1.48~2.40mを測る。断面は逆

D区第9号土壌

- 1 暗褐色土 黄褐色ブロック極多
- 2 暗褐色土 灰土・炭化物粒子多
- 3 褐色土 黄褐色ブロック極多

D区第13号土壌

- 1 暗褐色土 砂分多 焼土粒少量
- 2 黒褐色土 粘質土

D区第16号土壌

- 1 黒褐色土 焼土粒子ブロック・炭化物粒子ブロック多量
- 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量 地山黄褐色砂質ブロック粘性強
- 3 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量 地山粒子少量 粘性強

D区第75号土壌

- 1 黒褐色土 炭化物粒子・地山粒子微量 粘性強

D区第19号溝跡

- 1 暗褐色土 灰土・焼土・黄褐色土粒子少量
- 2 黒褐色粘質土 青灰色ブロック多

D区第75号溝跡

- 1 暗褐色土 砂分 炭化物粒子
- 2 暗褐色土 砂質 黄褐色土
- 3 黒褐色土 砂質 黄褐色土・青灰色土
- 4 粘黄褐色土 砂質 黒色土

M340r Pit 1

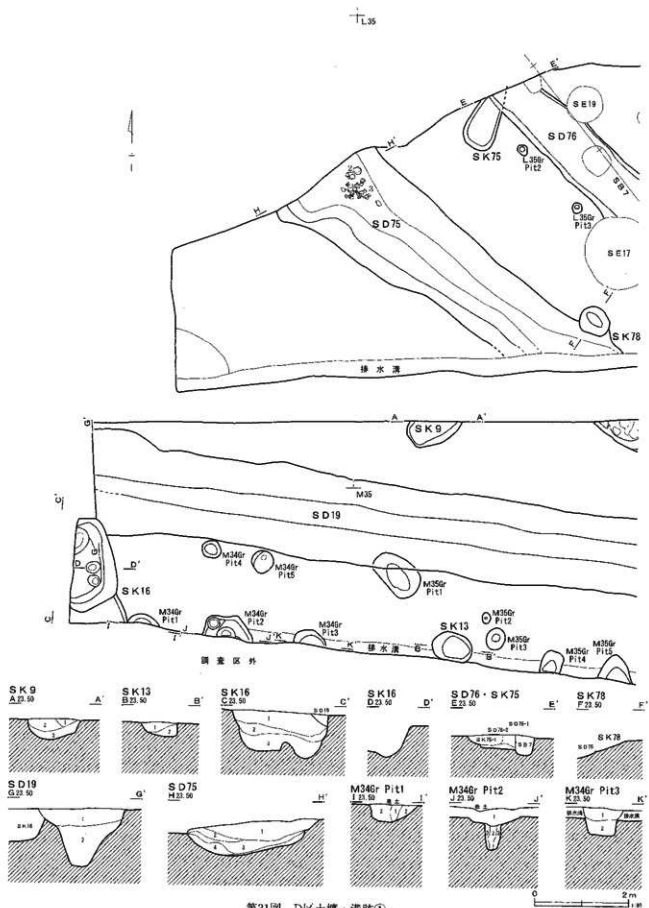
- 1 黒褐色土 柱痕 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 暗褐色土 柱断面充填 版築伏縁なし 焼土粒子炭化物粒子多量

M346r Pit 2

- 1 黒褐色土 地山ブロック少量
- 2 黒色土 柱痕 粘質土
- 3 黒褐色土 柱断面充填 粘質土 地山ブロックやや多

M348r Pit 3

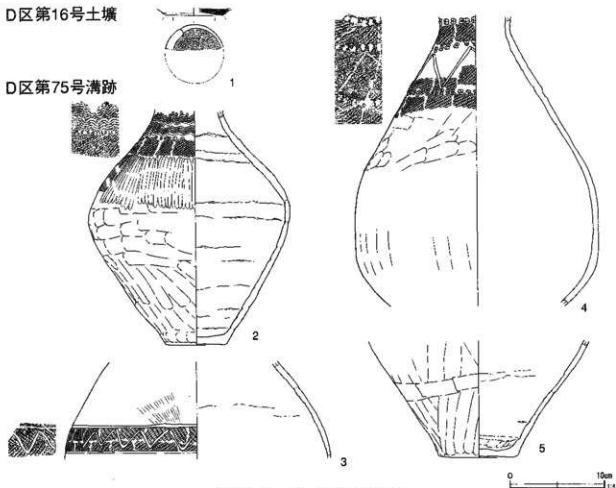
- 1 黒褐色土 地山ブロック多量
- 2 黒褐色土 地山粒子少量



第31図 D区土壌・溝跡①

D区第16号土壌

D区第75号溝跡



第32図 D区土壌・溝跡①出土遺物

第8表 D区土壌・溝跡①出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	埴	[0.8]	(6.1)		5	①AFI	B	灰	SK16 南北倉産	
2	弥生	壺	[24.5]	6.0			②AGI	B	浅黄~黄灰	SD75 No1	31-8
3	弥生	壺	[10.2]				③AGI	B	にぶい橙	SD75 No2	31-9
4	弥生	壺	[30.4]			60	④AGIII	B	にぶい黄橙	SD75 5と同一個体	32-1
5	弥生	壺	[12.1]	8.6			⑤AGHI	B	にぶい黄橙	SD75 4と同一個体	32-5

台形で、底面は東から西に向かって傾斜する。確認面からの深さは0.32~0.50mほどである。溝底標高は、北西付近22.35m、中央付近22.42m、南東端付近22.44mを計測し、走行方位は、 $N-55^{\circ}-W$ を指す。

遺物は、弥生中期の壺形土器3点以上が、溝底からまとも出土している。

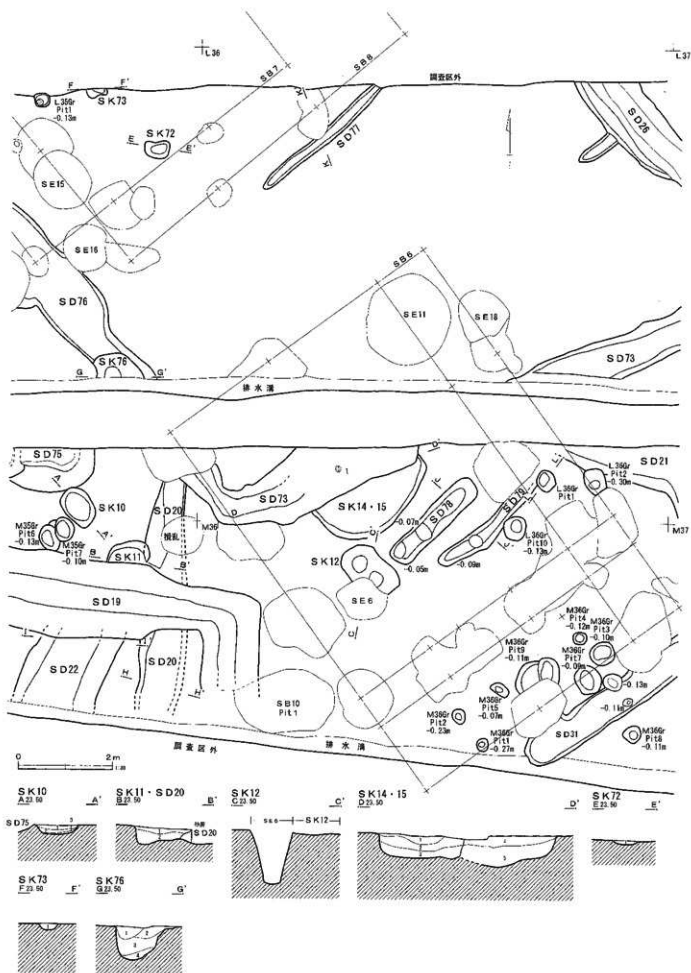
至近のD区・E区には同時期の遺構は発見されていないこと、唐突に立ち上がる南端部の状況、遺物の出土状態・器種、底面の傾斜具合、南端から直角に屈曲した箇所に同規模のD区第22号溝跡が存在等から、2条の溝跡が組になった方形周溝

墓であった可能性もある。しかしながら、多くの部分が調査区外にあり、断定することは難しい。

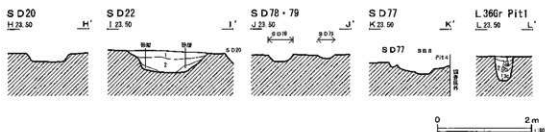
D区第76号溝跡(第31・33・34図)

L35グリッドに位置する。重複するD区第7号掘立柱建物跡、D区第16・17・19号井戸跡、D区第75号土壌よりも先行する。北西部は調査区外にあり、南東端はD区第76号土壌と重複する。可能性として、D区第73号溝跡と同一の溝跡と考えることができ、この場合、方形に区画する溝跡となる。

検出長7.50m、幅0.75~1.20m、確認面からの深さ0.13~0.18mを測る。溝底標高は、北西端付近



第33图 D区土壤・溝跡②(1)



D区第10号土壌

- 1 暗褐色土 焼上粒子・黄褐色土粒子少
- 2 黒褐色土 粘質土 青灰色ブロック
- 3 暗褐色土

D区第11号土壌

- 1 暗褐色土 鉄分多 焼上粒子微量
- 2 黒褐色粘質土 炭化物粒子微量

D区第14号土壌

- 1 暗灰黄褐色土 炭化物粒子・焼上粒子微量
- 2 黒褐色土 粘質土 地山粒子・炭化物粒子微量
- 3 黒褐色土 粘質土 地山ブロック少量

D区第15号土壌

- 1 黒褐色土 粘質土 地山粒子・炭化物粒子少量
- 2 黒褐色土 粘質土 地山ブロック少量

D区第72号土壌

- 1 暗褐色土 砂質 黄褐色土

D区第73号土壌

- 1 暗褐色土 黄灰色土ブロック多

D区第76号土壌

- 1 暗青灰色土 粘性土 炭化物粒子少量
- 2 黒青灰色土 粘質土 炭化物粒子少量
- 3 黒褐色土 粘性土 炭化物粒子・地山粒子少量
- 4 黒色土 粘性土 炭化物粒子少量

D区第22号溝跡

- 1 黒褐色土 黄灰色地山ブロック少量
- 2 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子・焼上粒子微量

L 366r Pit 1

- 1 暗茶褐色土 鉄分多量
- 2 黒色土 柱状 炭化物粒子微量
- 3a 黒褐色土 柱状形充填 黒褐色土主体 炭化物粒子微量
- 3b 黒褐色土 柱状形充填 地山土主体 炭化物粒子微量
- 3c 黒褐色土 柱状形充填 黒褐色土主体 炭化物粒子微量

第34図 D区土壌・溝跡② (2)

2272m、中央付近22717m、南東端付近22717mを計測する。走行方向は、N-137° -Eを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第19号溝跡 (第31・33・34図)

L34・35、M34~36グリッドに位置する。D区第10号掘立柱建物跡、D区第11・16号土壌、D区第20・22号溝跡と重複する。

L34・35、M34・35グリッドでは走行方向N-98° -Eの方向に東西に走り、M36グリッドでN-180° -Eの方向に南に屈曲する。L34・M34グリッド西側は調査区外を経てE区第9号溝に繋がる。M36グリッドの屈曲部以南は調査区外に至り、詳細は不明である。

検出長は東西方向約16.5m+南北方向約1.4m=総延長17.9m、幅0.90~2.24mを測る。断面は葉研状で、確認面からの深さは0.99~1.19mほどである。溝底標高は、東端付近22.06m、中央付近22.07m、西端付近22.07mを計測し、平坦である。

遺物は須恵器甕・壺片、常滑壺片、木栓、金属製品のほかに、屈曲部付近から14枚の北宋銭がまとまって出土している。

第36図18の木栓は、削材を加工したものである。上面より下面が広く、下面は平坦で上面はわずかに突き出る。長さ2.6cm・幅2.0cm・厚さ2.0cmを測る。側面には縦方向の面が残る。木取りは框目である。

14枚の北宋銭 (第36図19~32) の内訳は、開元通寶 (唐・621年) 1枚 (19: 径2.4cm×重さ3g)・淳化元寶 (北宋・990年) 1枚 (20: 2.5cm×2.9g)・至道元寶 (北宋・995年) 1枚 (21: 2.4cm×3.8g)・嘉祐通寶 (北宋・1056年) 1枚 (22: 2.4cm×4.3g)・熙寧元寶 (北宋・1068年) 3枚 (23: 2.4cm×3.8g, 24: 2.4cm×3.5g, 25: 2.4cm×3.3g)・元祐通寶 (北宋・1086年) 1枚 (26: 2.2cm×2.9g)・紹聖元寶 (北宋・1094年) 4枚 (27: 2.2cm×3g, 28: 2.5cm×3.9g, 29: 2.4cm×3.6g, 30: 2.4cm×3.9g)・聖宋元寶 (北宋・1101年) 1枚 (31: 2.5cm×3.2g)・宣和通寶 (北宋・1119年) 1枚 (32: 2.4cm×3.2g) である。

第36図33は金属製の扁平な破片で、刀子の茎と思われる。現存長4.7cm・最大幅0.7cm・最大厚0.25cm・重さ2.5gである。

D区第10号土壌 (第33・34図)

L35・M35グリッドに位置する。

平面形態は、長方形である。長軸長0.86m、短軸長0.60m、確認面からの深さ0.18mを測る。長軸方位は、N-40° -Wを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第11号土壌 (第33・34図)

M35グリッドに位置する。D区第19号溝跡と重複し、D区第20号溝跡よりも新しい。

平面形態は、長方形と推定される。長軸長0.95m、短軸長0.46m、確認面からの深さ0.32mを測る。長軸方位は、N-75° -Eを指す。

遺物は出土していない。

D区第12号土壌 (第33・34図)

M36グリッドに位置し、D区第6号井戸跡と重複する。D区第6号掘立柱建物跡の中央付近に位置し、北側に位置するD区第14・15号土壌、東側に位置するD区第78号溝跡の評価とも関連するが、D区第6号掘立柱建物跡が総柱建物の場合には柱穴となる。现阶段においては、断定できない。

平面形態は、長方形である。長軸長1.30m、短軸長0.78mを測り、長軸方位は、N-45° -Wを指す。確認面からの深さ0.04mほどと浅く、D区第6号掘立柱建物跡の柱穴として取り扱うには躊躇させる。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第14・15号土壌 (第33・34図)

L36・M36グリッドに位置し、土層観察の結果、2基の土壌の重複と判断した。そのため、個々の土壌の平面形態や規模は明確ではない。長軸長2.50m、短軸長1.80m、確認面からの深さ0.10mを測る。長軸方位は、N-60° -Eを指す。

D区第73号溝跡と重複する。D区第6号掘立柱建物跡の中央付近に位置し、南側に位置するD区第12号土壌・D区第78号溝跡の評価とも関連するが、D区第6号掘立柱建物跡が総柱建物の場合に

は柱穴となる。现阶段において、断定はできない。

遺物は、須恵器はそう・蓋坏等が出土している。このうち底面に墨書された坏があり、「木」と書かれている可能性が高い(第35図5)。

D区第72号土壌 (第33・34図)

L35グリッドに位置する。

平面形態は、不整形である。長軸長0.53m、短軸長0.50m、確認面からの深さ0.05mを測る。長軸方位は、N-82° -Wを指す。

遺物は出土していない。

D区第73号土壌 (第33・34図)

L35グリッドに位置し、北半部は調査区外にある。

平面形態は、不整形である。長軸長0.45m、短軸長0.19m、確認面からの深さ0.10mを測る。長軸方位は、N-90° を指す。

遺物は出土していない。

D区第76号土壌 (第33・34図)

L35グリッドに位置する。D区第76号溝跡と重複する。

平面形態は、不整形である。長軸長1.00m、短軸長0.50m、確認面からの深さ0.68mを測る。長軸方位は、N-90° を指す。

遺物は、須恵器はそう・甕の破片が出土している。

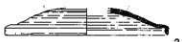
D区第20号溝跡 (第33・34図)

L35・M35グリッドに位置する。北端部がD区第6号掘立柱建物跡・D区第73号溝跡と重複し、中央付近ではD区第19号溝跡と交錯する。D区第11号上層よりも先行する。

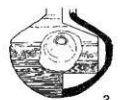
検出長4.6m、幅0.40~0.90m、確認面からの深さ0.21~0.24mを測る。溝底標高は、北端付近22.75m、中央付近22.79m、南端付近22.83mを計測する。走行方位は、N-5° -Eを指す。

遺物は須恵器坏が出土している。

D区第14・15号土壌



D区第20号溝跡

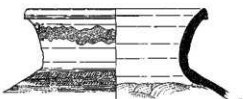


2

D区第76号土壌



7



D区第22号溝跡



10

M35グリッド Pit5



11

M36グリッド Pit2



12

0 10m

第35区 D区土壌・溝跡②出土遺物 (1)

D区第22号溝跡 (第33・34図)

M35グリッドに位置し、南側は調査区外にある。北端部でD区第19号溝跡と重複する。

検出長1.60m、幅1.68～1.70m、確認面からの深さ0.46～0.48mを測る。溝底標高は、北端付近2259m、中央付近2256m、南端付近2256mを計測する。走行方位は、N-157° -Wを指す。

遺物は弥生中期の変形土器片が出土している。

位置関係や出土遺物の時期の共通性から、D区第75号溝跡と組み合わせられて隅が切れるタイプの方形周溝墓となる可能性もあるが、大半が調査区外にあるため、断定はできない。

D区第31号溝跡 (第33・34・37・38図)

M36・37グリッドに位置する。D区第6号掘立柱建物跡、D区第80号溝跡と重複し、D区第27・28号溝跡と交差する。

検出長9.70m、幅0.62～0.76m、確認面からの深さ0.01～0.11mを測る。溝底標高は、北東端付近2279m、中央付近2285m、南西端付近2287mを計

測する。走行方位は、N-55° -Eを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第77号溝跡 (第33・34図)

L36グリッドに位置し、北側は調査区外に至る。D区第8号掘立柱建物跡と重複する。

検出長3.30m、幅0.24～0.28m、確認面からの深さ0.01～0.07mを測る。溝底標高は、北東端付近2272m、中央付近2273m、南西端付近2275mを計測する。走行方位は、N-48° -Eを指す。

遺物は出土していない。

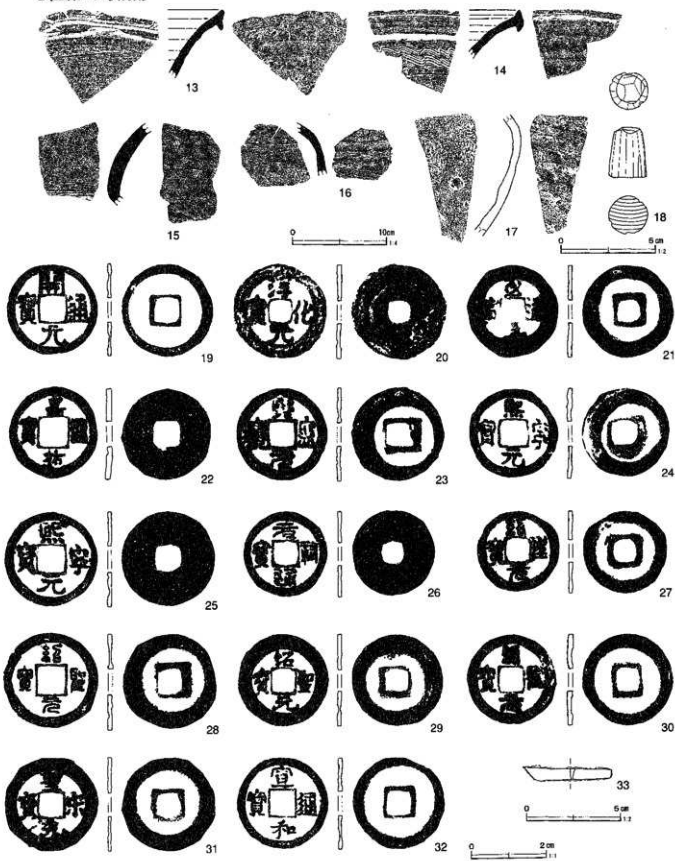
D区第78号溝跡 (第33・34図)

L36・M36グリッドに位置する。

検出長2.40m、幅0.45～0.54m、確認面からの深さ0.09～0.13mを測る。溝底標高は、北東端付近2284m、中央付近2285m、南西端付近2285mを計測する。走行方位は、N-46° -Eを指す。

D区第6号掘立柱建物跡の中央付近に位置し、D区第12・14・15号土壌の評価とも関連するが、D区第6号掘立柱建物跡が総柱建物の場合には溝

D区第19号清跡



第36图 D区土城·清跡②出土遺物 (2)

第9表 D区土壌・溝跡②出土遺物観察表(第35・36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.0)	[4.5]		35	②ACDGH	B	にぶい黄橙	SK14-15	
2	須恵器	はそう	10.9	[9.4]			②AH	B	灰	SK14-15 No1	32-5
3	須恵器	蓋	17.0	[2.8]		20	②FHI	B	灰	SK14-15 南比企産	
4	須恵器	坏		[3.5]	6.4	70	②ADFIH	B	灰	SK14-15 南比企産 油志庚	32-3
5	須恵器	坏		[1.9]	(6.6)	20	②AI	B	灰	SK14-15 墨書「木?」末野産	32-4
6	須恵器	坏		[1.3]	(6.0)	10	②APGH	B	灰	SK14-15 南比企産	
7	須恵器	はそう					②AH	A	暗灰	SK76 末野産	
8	須恵器	蓋	18.7	[9.6]		5	②AH	B	黒褐	SK76	32-6
9	須恵器	坏	(12.8)	4.0	6.8	45	②FHI	B	灰	SD20 南比企産	33-3
10	弥生	壺					②AGI	B	にぶい橙	SD22	
11	須恵器	はそう					②AGH	B	灰	M35Gr-Pit1	
12	土師器	坏	(11.8)	[3.4]		20	②CHI	B	橙	M36Gr-Pit3	
13	須恵器	甕					②AHJ	B	灰	SD19 末野産 内面自然釉付着	
14	須恵器	甕					②AH	B	灰	SD19 末野産	
15	須恵器	甕					②B	B	外:灰白 内:灰	SD19 末野産	
16	須恵器	壺					②BDGHI	B	外:灰白 内:灰	SD19 末野産 内面自然釉付着	
17	陶器	甕					②HIJ	A	灰黄	SD19 常滑 厚部自然釉付着	

持ち柱穴となるが、現段階においては断定できない。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第79号溝跡(第33・34図)

L36・M36グリッドに位置し、D区第6号掘立柱建物跡と重複する。

検出長2.70m、幅0.26～0.48m、確認面からの深さ0.04～0.05mを測る。溝底標高は、北東端付近22.92m、中央付近22.90m、南西端付近22.90mを計測する。走行方位は、N-137° -W→N-61° -Wを指す。

遺物は出土していない。

D区第17号土壌(第37・38図)

M37グリッドに位置し、D区第26・27号溝跡と重複する。

平面形態は、不整形である。長軸長0.69m、短軸長0.43m以上、確認面からの深さ0.18mを測る。長軸方位は、N-41° -Wを指す。

遺物は出土していない。

D区第18・19号土壌(第37・38図)

M37グリッドに位置する連続する土壌である。D区第9号掘立柱建物跡と重複する。

平面形態は、長方形である。2基の土壌を合せた長軸長2.84m、短軸長1.00m以上、確認面からの

深さ0.15mを測る。長軸方位は、N-38° -Wを指す。

いずれの土壌からも、遺物は出土していない。

D区第22号土壌(第37・38図)

M37グリッドに位置する。

平面形態は、長方形である。長軸長1.75m、短軸長1.30m、確認面からの深さ0.20mを測る。長軸方位は、N-47° -Wを指す。

遺物は出土していない。

D区第68号土壌(第37・38図)

L37・38グリッドに位置する。

平面形態は、円形である。長軸長0.79m、短軸長0.79m、確認面からの深さ0.42mを測る。長軸方位は、N-90° を指す。

遺物は、須恵器坏が出土している。

D区第77号土壌(第37・38・45・46図)

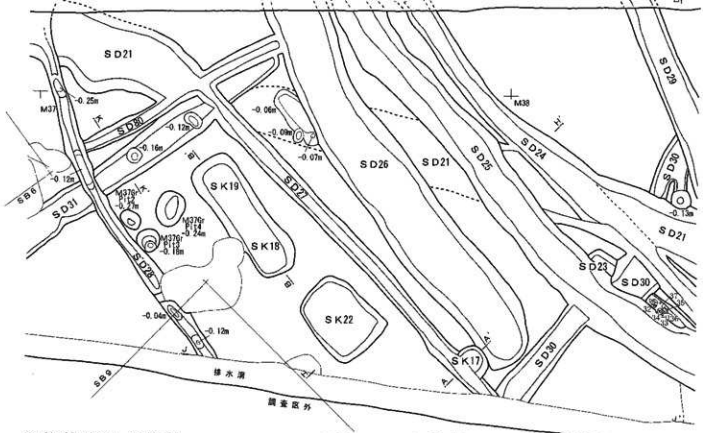
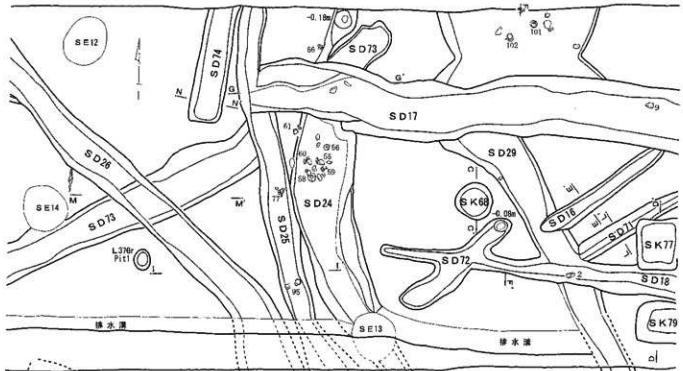
L38グリッドに位置し、D区第18・71号溝跡と重複する。

平面形態は、方形である。長軸長1.06m、短軸長0.94m以上、確認面からの深さ0.26mを測る。長軸方位は、N-0° を指す。

第39図2は砥石である。現存長5.5cm・幅2.8cm・厚さ2.2cm・重さ38.8gである。

TL37

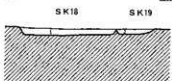
L38



SD26・27・SK17
A 23.50



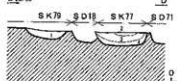
SK18・19
B 23.50



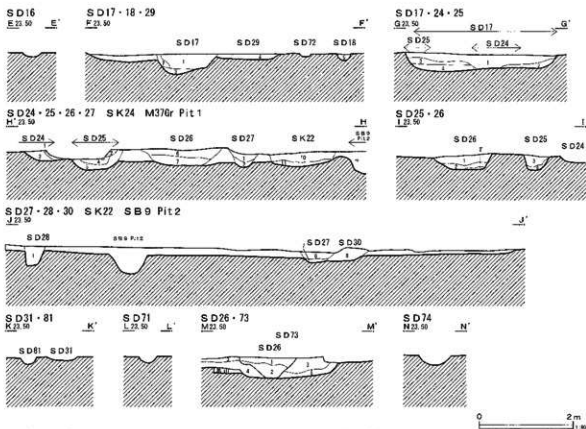
SK68
C 23.50



SK79・77
D 23.50



第37图 D区土筑・溝跡③ (1)



- D区第17号土壌**
 1 黒褐色土 粘性強 地山ブロック少量
D区第18号土壌
 1 黒褐色土 地山ブロック多量
D区第19号土壌
 2 黒褐色土 地山ブロック多量
D区第68号土壌
 1 暗褐色土 青灰色土 粘性欠・しまり欠
 2 黒褐色土 鉄分 しまり欠
D区第77号土壌
 2 暗黄褐色土
 3 暗灰褐色土 炭化物粒子・焼土粒子少量
 4 黒褐色土 底部に炭化物層 炭化物粒子少量 粘性強
D区第79号土壌
 1 暗灰褐色土 砂質 鉄分多量 粘性欠
D区第17号清跡
 1 暗褐色土 黄褐色土粒子少量 炭化物
 2 暗褐色土 青灰色土ブロック多量
 3 暗青灰色土 グライ化 粘性良・しまり良
D区第29号清跡
 4 暗灰色土 黄褐色土ブロック多量 粘性良
D区第18号清跡
 2 黒褐色土 砂多量 粘性欠・しまり欠
D区第17号清跡
 1 暗褐色土 黄褐色土粒子少量 炭化物
D区第24号清跡
 2 暗褐色土 青灰色土ブロック多量
D区第25号清跡
 3 暗青灰色土 グライ化 粘性良・しまり良
 4 青灰色土 グライ化 黒褐色土
D区第24号清跡
 3 暗灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- D区第25号清跡**
 4 暗灰褐色土 鉄分・黒褐色粘質土ブロック少量
 5 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
D区第26号清跡
 6 黒褐色土 鉄分・砂粒多量 炭化物粒子 地山ブロック少量
 7 黒褐色土 粘質土 地山ブロック多量
D区第27号清跡
 8 暗褐色土 炭化物粒子少量
 9 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子少
D区第22号土壌
 10 黒褐色土 地山粒子 炭化物粒子少量
 11 黒褐色土 粘質土 地山ブロック多
D区第26号清跡
 1 黒褐色土 鉄分・砂粒多量 炭化物粒子 地山ブロック少量
 2 黒褐色土 粘質土 地山ブロック多量
D区第25号清跡
 3 暗灰褐色土 鉄分・黒褐色粘質土ブロック少量
 4 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
D区第28号清跡
 1 黒褐色土
 8 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子 地山ブロック少量
D区第26号清跡
 1 暗褐色土 鉄分多
 2 黒褐色土 青灰色粒子
D区第73号清跡
 3 暗褐色土 鉄分多
 4 黒褐色土 青灰色ブロック多
 5 黒褐色土 砂質

第38図 D区上層・清跡③ (2)

D区第79号土壌 (第37・38・45・46図)

M38グリッドに位置する。

平面形態は、方形である。長軸長1.22m、短軸

長0.86m、確認面からの深さ0.20mを測る。長軸方位は、N-90°を指す。

遺物は出上していない。

D区第16号溝跡 (第37・38・45・46図)

L38グリッドに位置し、D区第17・29号溝跡と重複する。

東端部付近で屈曲し、検出長6.00m、幅0.26～0.46m、確認面からの深さ0.01～0.12mを測る。溝底標高は、北東端付近22.80m、中央付近22.87m、南西端付近22.88mを計測する。走行方位は、N-55° -E→N-67° -E→N-120° -Eを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第17号溝跡 (第37・38・45・46図)

L37・38グリッドに位置し、D区第15・16・24・25・29・73号溝跡と重複する。

D区第25号溝跡からD区第15号溝跡に至る検出長13.2m、幅0.95～1.35mの溝跡である。確認面からの深さは0.12～0.34mほどで、溝底標高は、東端付近22.58m、中央付近22.59m、西端付近22.60mを計測する。走行方位は、N-96° -Eを指す。

遺物は須恵器環・高台付碗・壺・甕・甌、ろくろ土師器環、土錘等が出土している。須恵器環には体部外面に「木」と墨書されたもの(第39図3)が含まれる。

第39図13は土錘である。長さ4.3cm・幅1.8cm・孔径0.4cm・重さ13.4gである。

D区第21号溝跡 (第33・34・37・38・45・46図)

L37、M37・38グリッドに位置する。西側からD区第28・80・31・27・26・25・24・30・29・15号溝跡と重複する。

検出長19.3m、幅1.20～1.50m、確認面からの深さ0.11～0.24mを測る。溝底標高は、東端付近22.75m、中央付近22.76m、西端付近22.88mを計測する。走行方位は、N-107° -Eを指す。

遺物は灰釉陶器高台付碗、須恵器蓋環類・甕、土師器環、土錘等が出土している。

第40図31は土錘である。長さ5.5cm・幅2.4cm・孔径0.4cm・重さ28.5gである。

D区第23号溝跡 (第37・38図)

M38グリッドに位置し、D区第25・30号溝跡と

重複する。

検出長2.90m、幅0.24～0.36m、確認面からの深さ0.01～0.07mを測る。溝底標高は、北西端付近22.87m、中央付近22.86m、南東端付近22.82mを計測する。走行方位は、N-128° -Eを指す。

遺物は、須恵器高台付碗、ろくろ土師器高台付碗、土師器甕等が出土している。

D区第24号溝跡 (第37・38・45・46図)

L37、M37・38グリッドに位置する。D区第25号溝跡と併走し、D区第13号井戸跡、D区第15・17・21・29・30・73号溝跡と重複する。

検出長1.66m、幅0.48～1.35m、確認面からの深さ0.15～0.35mを測る。溝底標高は、北端付近22.63m、中央付近22.70m、南端付近22.72mを計測する。走行方位は、N-47° -W→N-35° -W→N-0° を指す。

遺物は、須恵器蓋環類・壺・甕、土師器台付甕、土錘等が出土している。第41図48は須恵器環体部外面に「木」、52は須恵器環底面に「大(?)川」という墨書がみられる。

第41図67は土錘である。現存長3.0cm・幅2.0cm・孔径0.4cm・重さ10.7gである。

D区第25号溝跡 (第37・38・45・46図)

L37、M37・38グリッドに位置する。D区第24号溝跡と併走し、D区第15・17・21・23・29・30・73号溝跡と重複する。

検出長20.3m、幅0.53～1.00m、確認面からの深さ0.32～0.41mを測る。溝底標高は、北端付近22.62m、中央付近22.60m、東端付近22.57mを計測する。走行方位は、N-172° -E→N-143° -Eを指す。

遺物は、灰釉陶器碗、須恵器蓋環類・瓶類・壺甕類、土師器環・台付甕等が出土している。第42図77・78は、体部外面に「木」と墨書された須恵器環である。また、第24・25号溝跡一括遺物として取り上げた、第43図121・122では須恵器環底面に「木」と墨書されている。さらに、第44図

134は、南比企産の須恵器双耳環である。

D区第26号溝跡 (第33・34・37・38図)

L36・37、M37・38グリッドに位置し、D区第21・73・80号溝跡と重複する。

検出長19.0m、幅0.62～1.42m、確認面からの深さ0.14～0.33mを測る。溝底標高は、北西端付近22.49m、中央付近22.61m、南東端付近22.66mを計測する。走行方位は、N-45° -W→N-38° -Wを指す。

遺物は須恵器提瓶、土師器壺が出土している。

D区第27号溝跡 (第37・38図)

M37グリッドに位置する。D区第17号土塼、D区第21・30・31・80溝跡と重複する。

検出長8.2m、幅0.32～0.48m、確認面からの深さ0.32～0.48mを測る。溝底標高は、北西端付近22.77m、中央付近22.71m、南東端付近22.66mを計測する。走行方位は、N-136° -Eを指す。

遺物は出土していない。

D区第28号溝跡 (第37・38図)

L36・37、M37グリッドに位置する。D区第9号掘立柱建物跡、D区第21・31・80号溝跡と重複する。

検出長7.00m、幅0.30～0.40m、確認面からの深さ0.26～0.33mを測る。溝底標高は、北端付近22.70m、中央付近22.67m、南端付近22.63mを計測する。走行方位は、N-162° -E→N-142° -Eを指す。

遺物は出土していない。

D区第29号溝跡 (第37・38・45・46図)

L37・38、M38グリッドに位置し、D区第16・17・18・21・24・25・30・71号溝跡と重複する。

検出長13.2m、幅0.67～1.80m、確認面からの深さ0.11～0.18mを測る。溝底標高は、北端付近22.87m、中央付近22.87m、南端付近22.82mを計測する。走行方位は、N-155° -Eを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第30号溝跡 (第37・38・45・46図)

L38・M37・38グリッドに位置し、D区第21・23・24・25・27・29号溝跡と重複する。

検出長8.4m、幅0.35～0.76m、確認面からの深さ0.02～0.12mを測る。溝底標高は、北端付近22.89m、中央付近22.87m、南端付近22.72mを計測する。走行方位は、N-148° -Wを指す。

遺物は出土していない。

D区第71号溝跡 (第37・38・45・46図)

L38グリッドに位置し、D区第18・29号溝跡、D区第77号土塼と重複する。

検出長2.6m、幅0.20～0.40m、確認面からの深さ0.02～0.10mを測る。溝底標高は、北東端付近22.91m、中央付近22.90m、南東端付近22.82mを計測する。走行方位は、N-121° -Wを指す。

遺物は出土していない。

D区第72号溝跡 (第37・38図)

L37・38グリッドに位置し、D区第18号溝跡と重複する。

検出長2.90m、幅0.40～0.58m、確認面からの深さ0.03～0.05mを測る。溝底標高は、北東端付近22.88m、中央付近22.89m、南東端付近22.90mを計測する。走行方位は、N-51° -Eを指す。

遺物は出土していない。

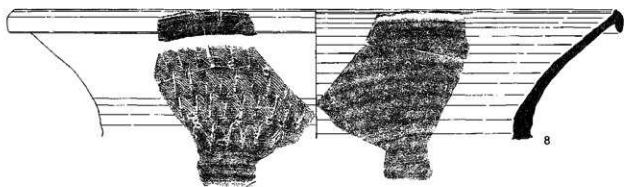
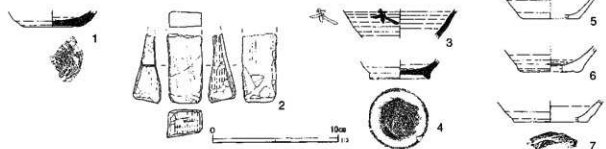
D区第73号溝跡 (第33・34・37・38図)

L35～37、M36グリッドに位置する。西端はL35グリッドでD区第6号掘立柱建物跡・D区第20号溝跡と重複する。L36・M36グリッドで直角に屈曲し、L36・37グリッドを直進し、立ち上がる。この間に、D区第4号井戸跡、D区第26・17・24・25号溝跡と重複・交差する。D区第6号掘立柱建物跡をはさんでD区第76号溝跡が位置し、同一の溝跡となる可能性がある。この場合、調査区を方形に区画する溝跡となる。

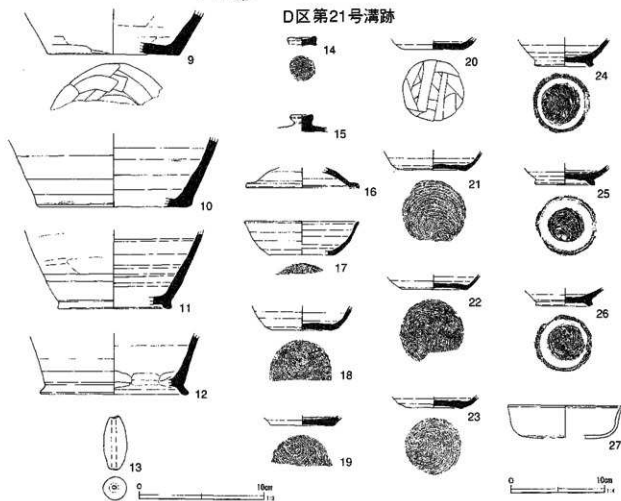
検出長20.0m、幅0.46～1.32m、確認面からの深さ0.05～0.65mを測る。溝底標高は、北東端付近22.86m、中央付近22.44m、南西端付近22.27mを計

D区第68号土坑 D区第77号土坑

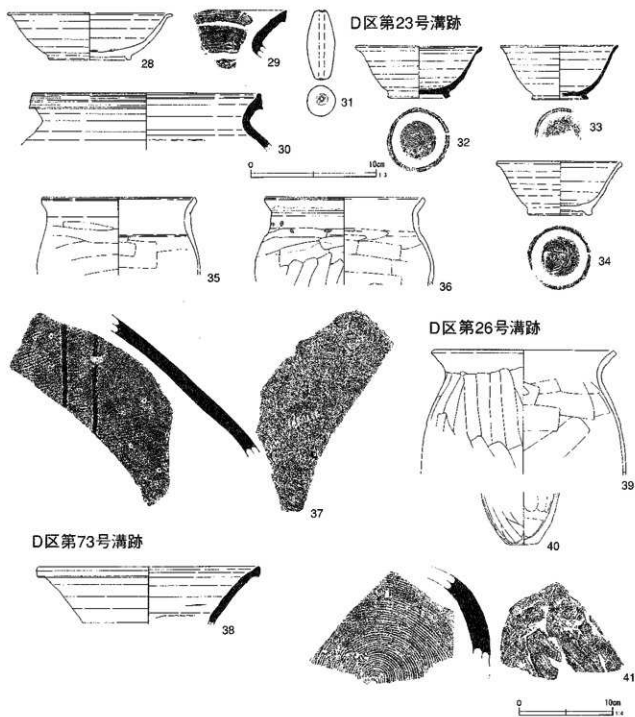
D区第17号沟迹



D区第21号沟迹



第39图 D区土坑·沟迹③出土遗物(1)



第40図 D区土坑・溝跡③出土遺物(2)

測する。走行方位は、N-76° - W → N-36° - Wを指す。

遺物は須恵器甕が出土している。

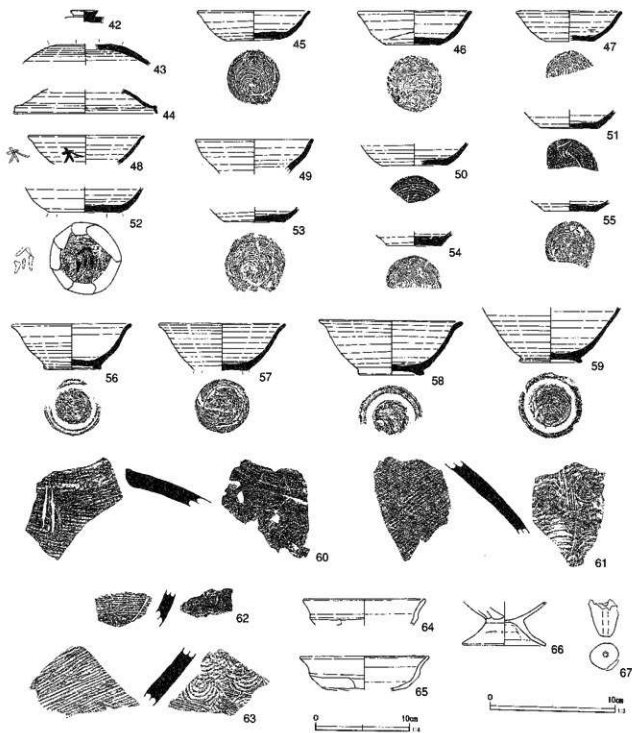
D区第74号溝跡(第37・38図)

L37グリッドに位置し、北側は調査区外にある。

検出長25m、幅0.62~0.70m、確認面からの深さ0.11~0.24mを測る。溝底標高は、北端付近2284m、中央付近2279m、南端付近2274mを計測する。走行方位は、N-170° - Wを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第24号溝跡



第41図 D区土壌・溝跡③出土遺物 (3)

D区第80号溝跡 (第37・38図)

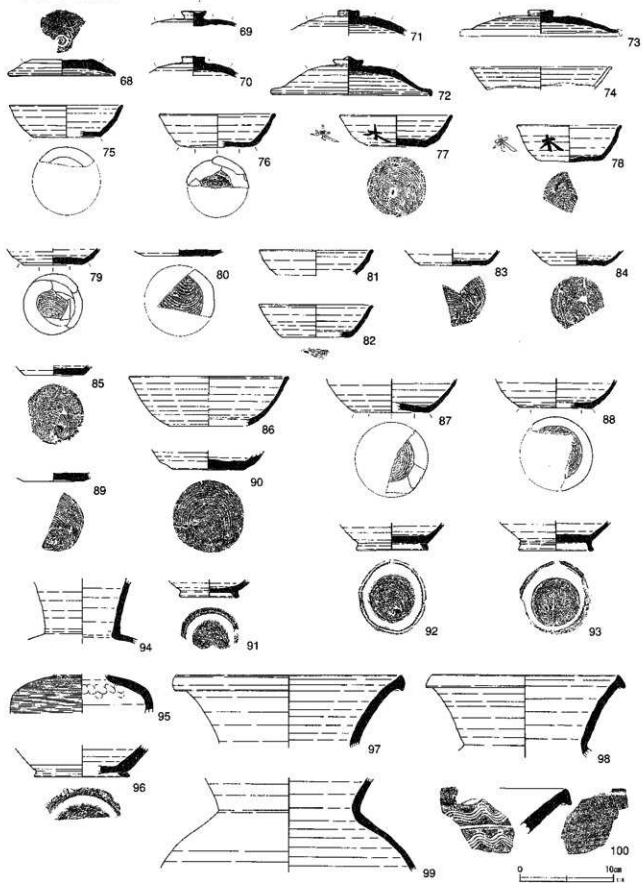
L37・M37グリッドに位置する。D区第31号溝跡と併走し、D区第21・26・27・28号溝跡と重複する。

検出長4.6m、幅0.30～0.45m、確認面からの深さ

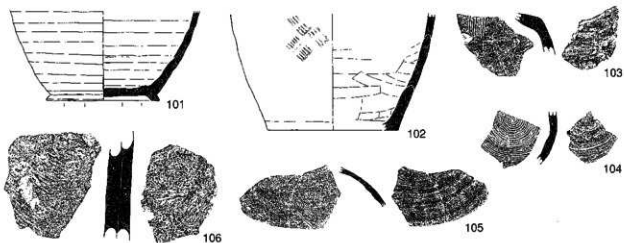
0.04～0.11mを測る。溝底標高は、北東端付近2271m、中央付近2274m、南西端付近2289mを計測する。走行方位は、N-61°-Eを指す。

遺物は出土していない。

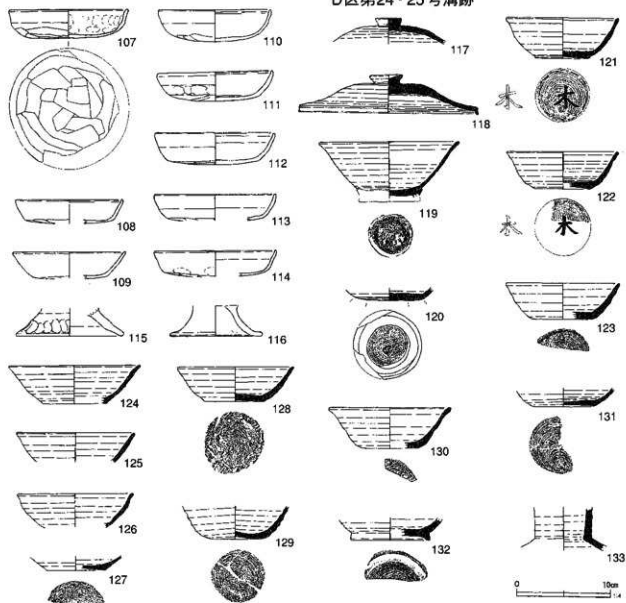
D区第25号沟迹



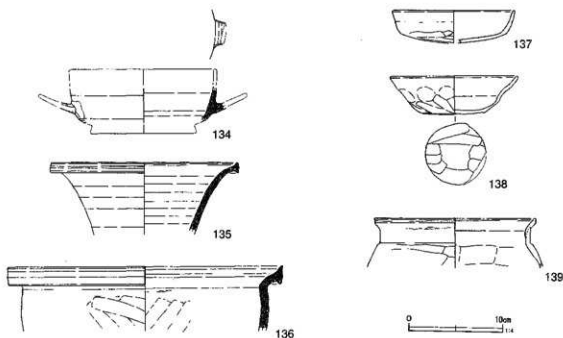
第42图 D区土壤·沟迹③出土遗物(4)



D区第24・25号溝跡



第43图 D区土坑·溝跡③出土遺物(5)



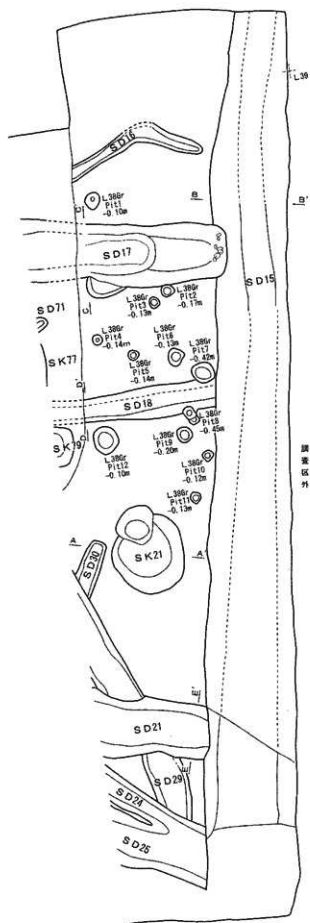
第44図 D区土壌・溝跡③出土物(6)

第10表 D区土壌・溝跡③出土物観察表(第39~44図)

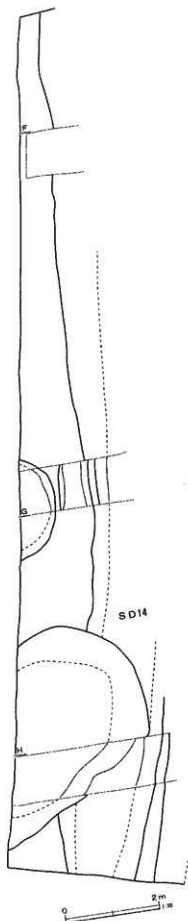
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	坏	[1.7]	(6.0)		10	②I	B	灰白	SK68 末野産	
3	須恵器	坏	[2.9]			5	②AHI	B	灰	SD17 墨書「木」末野産	33-4
4	須恵器	高台付坏	[2.0]	6.4		20	②CDGHI	C	灰白	SD17 末野産	
5	ろくろ土師	坏	(11.7)	4.0	(6.0)	10	②CHIJ	C	暗灰	SD17 口縁部に油煙付着	
6	ろくろ土師	坏	[2.7]	(6.6)		5	②GI	B	浅黄褐色	SD17	
7	ろくろ土師	坏	[2.3]	(7.8)		10	②GH	B	黄	SD17	
8	須恵器	甕	(6.0)	[13.5]		5	②H	B	灰	SD17 末野産	
9	須恵器	甕	[4.8]	(14.0)		5	②ADFH	B	灰	SD17No8 南比企産	
10	須恵器	甕	[7.4]	(15.0)		5	③ADGHIJ	B	褐灰	SD17 末野産	
11	須恵器	甕	[8.3]	(12.0)		5	②HI	A	灰	SD17 末野産	
12	須恵器	瓶	[6.4]	(15.6)		5	②FGHIJ	C	にぶい褐	SD17 南比企産	
14	須恵器	甕	[0.9]			5	②PIII	B	灰	SD21 南比企産	
15	須恵器	甕	[1.7]			5	②PIIJ	B	灰	SD21 南比企産	
16	須恵器	甕	(11.8)	[2.1]		10	②DFGHIJ	B	灰	SD21 南比企産	
17	須恵器	坏	(11.9)	3.5	(7.0)	20	②FHI	B	灰	SD21 南比企産	
18	須恵器	坏	[2.5]	6.0	30	③FHI	B	灰	SD21 南比企産		
19	須恵器	坏	[1.2]	(6.6)		30	②AHJ	B	にぶい褐	SD21 末野産	
20	須恵器	坏	[1.2]	6.5	30	②DGIH	C	にぶい褐	SD21 末野産 底部手持ヘラ		
21	須恵器	坏	[2.0]	6.9	30	③AFGHJ	B	暗灰	SD21 南比企産 周辺ヘラ		
22	須恵器	坏	[1.5]	7.0	30	②AFHI	B	灰	SD21 南比企産		
23	須恵器	坏	[1.3]	6.2	20	②AFHI	B	灰	SD21 南比企産		
24	須恵器	高台付坏	[3.0]	6.3	30	③ABDEHIJ	B	灰	SD21 末野産		
25	須恵器	高台付坏	[2.1]	6.1	30	②ACDIJ	C	灰	SD21 末野産		
26	須恵器	高台付坏	[1.9]	6.1	30	③AEHI	C	橙	SD21 末野産		
27	土師器	坏	(12.0)	[3.5]		20	②ACDHI	B	橙	SD21	
28	灰釉陶器	高台付碗	(17.0)	5.0	(8.8)	20	①HI	A	灰白	SD21 内面に灰釉 日立痕3	33-5
29	須恵器	甕				20	②AH	B	灰	SD21 末野産	
30	須恵器	甕	(24.0)	[6.1]		5	②AGH	C	にぶい黄褐色	SD21 末野産	

番号	種別	機種	口径	器高	底径	残存(%)	胎十	焼成	色调	出上位区・備考	図版
32	須恵器	高台付椀	13.2	5.5	5.8	95	②ADGI	C	にぶい・黄緑	SD23No1 末野産 上輪寅	34-1
33	須恵器	高台付椀	(12.4)	[5.7]	(6.0)	45	③ABCJ	C	明赤褐	SD23No3-SD-25 二次的な被熱	34-2
34	ろろ上師	高台付椀	13.0	5.7	6.8	90	②ACDGHJ	C	にぶい・橙	SD23No2-9	34-3
35	土師器	壺	(16.0)	[8.2]		5	②ACDGHJ	B	橙	SD23No4	
36	土師器	壺	(16.7)	[9.2]		10	②ACDGHJ	B	橙	SD23No4-SD25	
37	須恵器	壺					②AHJ	B	灰	SD23No5 末野産 外面自然釉付着	
38	須恵器	壺	(23.3)	[6.1]		5	①FHI	A	灰	SD73 南北企産 内面自然釉付着	
39	土師器	壺	(19.0)	[13.1]		20	②ADGI	B	にぶい・黄緑	SD26	
40	土師器	小型壺		[8.6]	3.3	10	②ADGH	B	にぶい・黄緑	SD26	34-4
41	須恵器	提瓶		[10.5]		10	②AI	B	灰	SD26 末野産	
42	須恵器	壺		[1.2]		5	②HI	B	灰	SD24 末野産	
43	須恵器	壺		[2.2]		10	②AFIJ	B	灰	SD24 南北企産	
44	須恵器	壺	(15.0)	[2.6]		10	②FIJ	B	灰	SD24 南北企産	
45	須恵器	坏	(11.7)	3.2	5.5	75	②FIJ	B	灰白	SD24 末野産	34-5
46	須恵器	坏	11.9	3.5	5.8	80	②FIJ	B	灰	SD24 南北企産	34-6
47	須恵器	坏	(11.0)	3.2	(5.1)	20	③AFJ	B	灰	SD24 南北企産	
48	須恵器	坏	(12.2)	[3.0]		5	②AFIJ	B	灰	SD24 南北企産 墨書「木」	34-7
49	須恵器	坏	(12.4)	[3.6]		10	②AF	B	灰白	SD24 南北企産	
50	須恵器	坏		[2.4]	(6.8)	10	②DEFJ	B	灰白	SD24 末野産	
51	須恵器	坏		[1.9]	(6.2)	10	②FIJ	B	灰白	SD24 末野産	
52	須恵器	坏		[2.6]	7.8	40	②AFI	B	灰	SD24 南北企産 墨書「?」	34-8
53	須恵器	坏		[1.6]	6.3	20	②FIJ	B	灰	SD24 南北企産	
54	須恵器	坏		[1.5]	5.8	20	②FI	B	灰	SD24 南北企産 火だすき痕	
55	須恵器	坏		[1.2]	5.4	20	②DHI	B	灰白	SD24No3 末野産	
56	須恵器	高台付椀	(12.3)	4.7	6.0	50	③GHI	B	灰	SD24No4 末野産 重ね焼き痕	34-9
57	須恵器	高台付椀	(13.3)	4.9		80	③AHJ	B	灰	SD24 末野産	34-10
58	須恵器	高台付椀	15.0	5.7	7.0	95	③ADGHJ	C	灰白	SD24No1 末野産 重ね焼き痕	35-1
59	須恵器	高台付椀		[5.9]	6.7	40	③EGJ	C	にぶい・橙	SD24No2 末野産	35-2
60	須恵器	壺					③DHI	B	灰	SD24No6 末野産	
61	須恵器	壺					③AHJ	B	灰	SD24No5 末野産	
62	須恵器	壺				5	③HI	A	灰	SD24 末野産	
63	須恵器	壺					③HJ	B	灰	SD24 末野産	
64	土師器	坏	(12.8)	[2.8]		10	②CDH	B	にぶい・橙	SD24	
65	土師器	坏	(13.5)	[3.6]		25	②ADGHI	B	橙	SD24	
66	土師器	台付甕		[4.6]	8.6	30	②AGII	B	暗赤褐	SD24No7	
68	須恵器	壺	(11.2)	[1.2]		20	②CDGHI	B	灰白	SD25 産地不明	
69	須恵器	壺		[1.6]		10	③DHIJ	B	灰白	SD25 末野産	
70	須恵器	壺		[2.2]		10	③FHJ	B	灰	SD25 南北企産	
71	須恵器	壺		[2.7]		20	①CH	B	灰白	SD25 末野産	
72	須恵器	壺	(16.8)	4.1		60	③ADHI	B	黄灰	SD25 末野産	35-3
73	須恵器	壺		[2.4]		30	③AFJ	B	灰	SD25 南北企産	
74	灰釉陶器	椀	(15.0)	[2.4]		5	①HI	A	灰白	SD25 灰釉(オリーブ黄) 濱付掛付	
75	須恵器	坏	(12.0)	3.3	(7.1)	20	③AFIJ	B	灰	SD25 南北企産 11線部自然釉付着	
76	須恵器	坏	(12.3)	3.5	(7.9)	25	①FIJ	B	灰	SD25 南北企産 周辺手持へう	35-4
77	須恵器	坏	(11.8)	3.3	6.4	60	③AFIII	B	灰	SD25No3 南北企産 墨書「木」	35-6
78	須恵器	坏	(11.0)	3.9	(7.0)	10	③AFH	B	暗赤褐・灰	SD25 南北企産 墨書「木」	35-5
79	須恵器	坏		[1.8]	6.2	30	③FHI	B	黄灰	SD25No1 南北企産	
80	須恵器	坏		[0.8]	(7.4)	5	①DFG	A	灰	SD25 南北企産 磨痕あり	
81	須恵器	坏	(11.9)	[2.7]		5	③FHI	B	灰	SD25 南北企産	
82	須恵器	坏	(12.0)	[3.4]	(7.0)	10	③CFIII	B	灰	SD25 南北企産	
83	須恵器	坏		[1.8]	(7.0)	15	③FHI	B	灰	SD25 南北企産	
84	須恵器	坏		[1.7]	5.8	30	③AHI	B	灰	SD25 末野産	
85	須恵器	坏		[1.1]	6.2	20	③AF	B	灰白	SD25 南北企産	
86	須恵器	椀	(16.9)	[5.2]		10	③AFH	A	灰	SD25 南北企産	

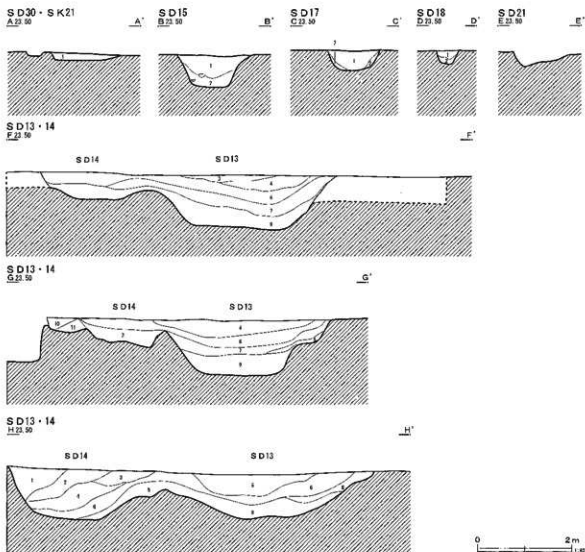
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存 (%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
87	須恵器	甗		[3.5]	(8.0)	20	②AFHI	B	灰	SD25 南比企産	
88	須恵器	甗		[3.1]	(7.8)	30	②HI	B	灰	SD25 末野産	
89	須恵器	坏		[0.9]	6.4	10	①APHJ	B	灰	SD25 南比企産	
90	須恵器	甗		[2.1]	7.8	30	②FGHIJ	B	灰	SD25 南比企産	
91	須恵器	高台付坏		[1.9]	(5.8)	10	②HIJ	A	灰	SD25 末野産	
92	須恵器	高台付甗		[2.9]	7.6	30	②HIJ	A	灰	SD25 末野産	
93	須恵器	長頸壺		[3.2]	(7.6)	10	②FH	B	灰	SD25 南比企産	
94	須恵器	長頸壺		[.6.9]		10	②AHI	B	灰白	SD25 末野産	
95	須恵器	長頸壺		[.4.1]		5	③AB	B	灰	SD25No2	
96	須恵器	長頸壺		[.3.4]	(10.2)	5	②GHJ	B	灰	SD25	
97	須恵器	甗	(24.0)	[7.7]		10	②AIJ	A	灰	SD25-M37-15Gr 末野産 自然軸付着	
98	須恵器	甗	(19.6)	[.8.7]		10	②HI	B	灰	SD25 末野産 自然軸付着	
99	須恵器	甗		[9.9]		5	②HI	A	灰	SD25 末野産? 自然軸付着	
100	須恵器	甗					②ADHI	A	黒	SD25 末野産	
101	須恵器	長頸壺		[.9.6]	11.9	20	②AGH	C	褐灰	SD25 末野産	35-7
102	須恵器	甗		[12.4]	(13.9)	10	②AHJ	B	灰	SD25 末野産	
103	須恵器	甗					①AB	A	灰	SD25 末野産	
104	須恵器	提瓶		[5.7]		5	②ADH	A	灰	SD25 末野産	
105	須恵器	壺					②FGH	B	灰	SD25 南比企	
106	須恵器	甗					②DHIJ	A	暗灰	SD25 末野産	
107	土師器	坏	(12.5)	3.0		70	②ACDGH	B	橙	SD25No24	36-1
108	土師器	坏	(11.3)	[2.5]		20	②ADH	B	橙	SD25 風化顯著	
109	土師器	坏	(12.0)	[2.8]		15	②ADGH	B	にぶい橙	SD25 風化顯著	
110	土師器	坏	(11.8)	3.3		20	②ADH	B	橙	SD25 風化顯著	
111	土師器	坏	12.0	3.0		30	②CDG	B	橙	SD25	
112	土師器	坏	12.5	3.4		80	②ACDGH	B	橙	SD25	36-2
113	土師器	坏	(12.7)	[2.8]		10	②ACDGH	B	にぶい赤褐	SD25	
114	土師器	坏	(12.8)	[2.7]		20	②CDG	B	にぶい橙	SD25	
115	土師器	台付甗		[3.0]	(11.1)	5	②CD	B	にぶい黄褐	SD25	
116	土師器	台付甗		[3.3]	9.7	5	②ADGH	B	橙	SD25	
117	須恵器	甗		[2.7]		40	②DFG	B	灰	SD24-25 南比企産	
118	須恵器	甗	(19.0)	4.0		50	②ADEGI	C	にぶい橙	SD24-25-M37-14Gr 末野産	35-8
119	須恵器	高台付甗	(14.6)	[5.4]		30	②AHI	B	灰	SD24-25 末野産	36-3
120	須恵器	坏		[1.6]	7.3	30	②FHIJ	B	灰	SD24-25 南比企産	
121	須恵器	坏	(11.8)	4.3	5.8		②AFII	B	赤灰	SD24-25南比企産 墨書「木」	
122	須恵器	坏	(11.6)	3.9	(6.0)	20	②FH	B	灰	SD24-25 南比企産 墨書「木?」	
123	須恵器	坏	(12.0)	[3.8]	(6.2)	20	②FI	B	灰白	SD24-25 南比企産	
124	須恵器	坏	(13.8)	[4.0]	(6.7)	20	②SGH	B	灰白	SD24-25-SD17 末野産	
125	須恵器	坏	(12.5)	[3.1]		20	①FHI	B	灰白	SD24-25 南比企産 自然軸付着	
126	須恵器	坏	(12.2)	[3.6]		20	②BII	B	灰	SD24-25 末野産	
127	須恵器	坏		[1.5]	(6.4)	20	②CEGHIJ	C	にぶい黄橙	SD24-25 末野産	
128	須恵器	坏	(12.3)	3.6	6.0	50	②ADGI	B	灰	SD24-25 末野産	36-4
129	須恵器	坏		[3.5]	5.5	50	②DGH	C	灰白	SD24-25 末野産	36-5
130	須恵器	坏	(12.6)	4.4	(6.0)		②ADHJ	B	灰	SD24-25 末野産	
131	須恵器	坏		[1.9]	6.5	20	②AFHI	B	灰白	SD24-25-SD17-L40Gr 南比企産	
132	須恵器	高台付甗		[2.4]	(8.4)	10	②ADGH	C	灰白	SD24-25 末野産	
133	灰胎陶器	長頸瓶		[4.6]		5	①HI	A	灰白	SD24-25 産地不明 自然軸付着	
134	須恵器	双耳坏				5	②FH	B	灰褐色	SD24-25 南比企産	
135	須恵器	甗	(19.6)	[7.6]		5	②AHI	B	灰	SD24-25 秋田産?	
136	須恵器	甗	(29.0)	[6.8]		5	②FHI	B	灰	SD24-25 南比企産	
137	土師器	坏	(12.8)	[3.5]		5	②ACDGI	B	にぶい橙	SD24-25-SD17	
138	土師器	坏	13.5	4.0	6.4	90	②BCDGH	C	にぶい黄橙	SD24-25	36-6
139	土師器	甗	(17.0)	[5.3]		5	②ADGH	B	にぶい赤褐	SD24-25	



1/200



第45図 D区土坑・溝跡④ (1)



D区第21号土壌
1 灰褐色土 鉄分多量

D区第15号溝跡

1 暗灰褐色土 鉄分多

2 黒褐色土 炭化物粒子多量 粘性高

D区第17号溝跡

1 赤褐色土 焼土粒子・ローム粒子・炭化物粒子微量

2 黒褐色土 地山の黄灰褐色土ブロック多量

D区第18号溝跡

1 赤褐色土 ローム粒子・炭化物粒子多量

2 黒褐色土 地山ブロック多量

D区第13・14号溝跡

1 暗褐色土 粘質土

2 暗灰色土 青灰色粘土ブロック多

3 暗灰黄褐色土 シルト質 鉄分多 青灰色粘土ブロックなし

4 暗青灰色土 青灰色粘土ブロック多 暗灰色粘土・暗黄褐色土

しまり良・粘性弱

5 暗褐色土 砂・泥・腐植植物多

6 暗灰色土 粘質土 青灰色粘土ブロックがマーブル状に混じる

しまり良

7 暗灰色土 粘質土

8 暗灰色土 粘質土 炭化物粒子・焼土粒が多

9 暗灰色粘土 青灰色粘土ブロック多 炭化物粒子 しまり欠

10 暗褐色土 黄褐色土ブロック・炭化物 しまり良

11 暗黄褐色土 炭化物粒子多

第46図 D区土壌・溝跡④(2)

D区第21号土壌 (第45・46図)

L38・M38グリッドに位置する。

平面形態は、不整円形である。長軸長1.90m、短軸長1.52m、確認面からの深さ0.20～0.74mを測る。長軸方位は、N-15°-Wを指す。

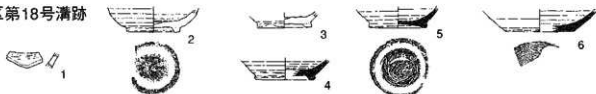
遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第18号溝跡 (第37・38・45・46図)

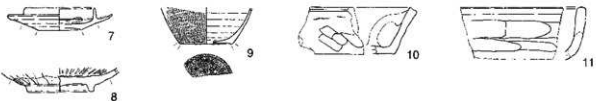
L37・38グリッドに位置し、D区第15・29・71・72号溝跡と重複する。

検出長9.80m、幅0.21～0.70m、確認面からの深

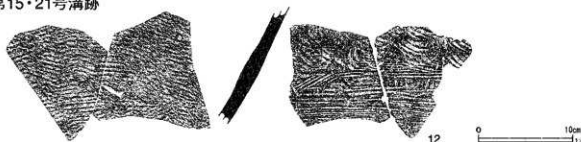
D区第18号溝跡



D区第15号溝跡



D区第15・21号溝跡



第47図 D区土壌・溝跡④出土遺物

第11表 D区土壌・溝跡④出土遺物観察表(第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	緑釉陶器	碗					④G	C	灰	SD18	
2	ろくろ土師	高台付坏	[2.6]	5.7		20	④AGHI	C	灰黄褐	SD18Na1	
3	ろくろ土師	高台付坏	[1.6]	5.7		20	④HI	C	灰白	SD18 末野産?	
4	須恵器	高台付坏	[2.2]	(6.0)		5	④AGHI	C	灰白	SD18 末野産	
5	須恵器	高台付坏	2.3	6.3		20	④AFHI	B	黄灰	SD18 南比企産	
6	須恵器	坏	[2.3]	(7.0)		10	④ADHI	B	褐灰	SD18 末野産	
7	陶器	灯明受皿 (7.2)	[2.3]	(4.6)		10	④HI	B	灰褐	SD15 志戸岡 タール付着 18C後半 最大径117	
8	陶器	菊皿	[2.5]	(6.7)		30	④AI	B	灰白	SD15 瀬口美濃 灰釉 削出高台 17C中～後半	36-7
9	陶器	碗	[3.8]	(5.3)		10	④I	B	にぶい黄緑	SD15	
10	瓦質土器	焙烙 (34.8)	4.9	(31.0)		5	④DGH	B	黒灰	SD15 薬付着	
11	瓦質土器	焙烙 (39.2)	[5.6]			5	④DGH	B	黒褐	SD15 薬付着	
12	須恵器	甕					④ADHJ	B	灰	SD15-21 末野産 M37Gr変Aと酷似	

さは0.06～0.36mを測る。溝底標高は、東端付近22.60m、中央付近22.71m、西端付近22.90mを計測する。走行方位は、N-95° -Eを指す。

遺物は、緑釉陶器碗片(第47図1)、須恵器坏類、ろくろ土師器高台付碗等が出土している。

D区第15号溝跡(第45・46図)

K38・L38・M38グリッドに位置する。

検出長18.1m、幅1.10～1.90m、確認面からの深さ0.02～0.04mを測る。溝底標高は、北端付近

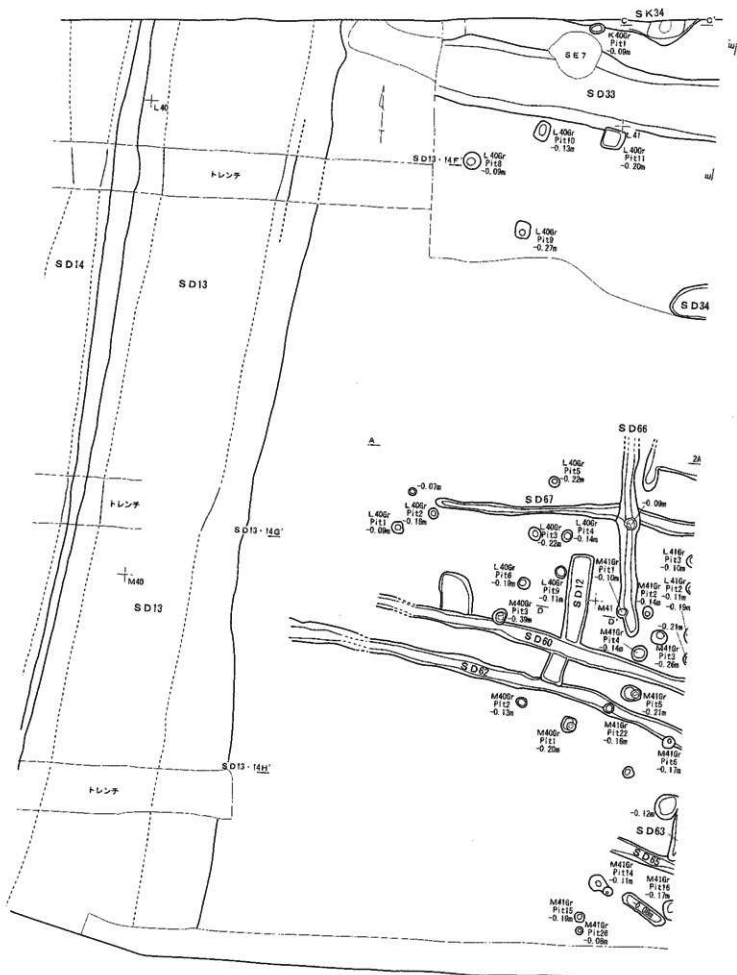
22.87m、中央付近22.88m、南端付近22.92m計測する。走行方位は、N-10° -Eを指す。

遺物は、陶器碗・菊皿・灯明皿、焙烙等が出土している。

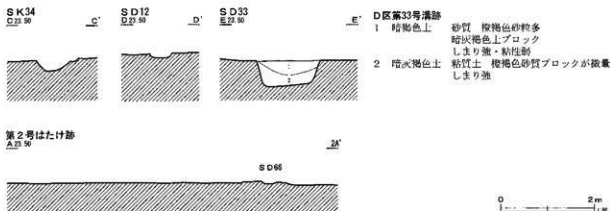
D区第13・14号溝跡(第45・46・48・49図)

K39・40、L39・40、M39・40グリッドに位置し、併走する2条の溝跡である。

D区第13号溝跡は、検出長19.7m、幅3.50～4.40m、確認面からの深さ0.09～0.23mを測る。溝



第48図 D区土坑・溝跡⑤ (1)



第49図 D区土壌・溝跡⑤ (2)

底標高は、北端付近22.77m、中央付近22.69m、南端付近22.63mを計測する。走行方位は、N-171°-Wを指す。

D区第14号溝跡は、検出長18.3m、幅1.50~2.45m、確認面からの深さ0.01~0.09mを測る。溝底標高は、北端付近22.85m、中央付近22.77m、南端付近22.77mを計測する。走行方位は、N-176°-Wを指す。

遺物はD区第13号溝跡から52枚の寛永通寶が一括して発見され、D区第13・14号溝跡から磁器碗・鉢、陶器碗・皿・鉢、常滑甕、在地産鉢類、焙烙、かわらけ、瓦片等や、板石塔婆・土鍾・砥石・漆椀・木製柄杓が一括出土している。

第51図49は丸瓦である。凹面には布とじ「S」型が残り、上下とも合わせ目がある。布目は非常に細かい。側面部はヘラにより端面が調整される。凸面は丁寧なヘラナアが施される。現存長8.0cm・厚さ1.9cmである。胎土には赤色粒子・白色粒子が含まれる。焼成は、外面部が還元焰・内部が酸化焰の状態である。

50は板石塔婆で、梵字周辺部の破片である。現存高10.2cm・現存幅9.3cm・厚さ2.3cmである。

52の土鍾は、葉巻型の器形側面の長軸方向に糸を巻きつける溝を拵えたもので、管式の穿孔は行われていない。長さ6.7cm・幅2.5cm・厚さ1.8cm・重さ32.0gである。

53・54は砥石である。53は現存長9.2cm・幅3.1

cm・厚さ3.2cm・重さ158.2g、凝灰岩製である。54は現存長8.4cm・幅4.8cm・厚さ2.7cm・重さ200.2g、凝灰岩製である。

第50図1はD区第14号溝跡から出土した内外面赤漆塗りの漆椀である。体部下半に明瞭な稜をもち、口縁部を欠損する。推定底径5.4cm・現存高4.7cm・残存率50%ほどで、横木取りである。

第51図51は柄杓の側板である。結合部付近のみが残ったもので、径は不明である。高さ4.9cmと浅い。方形で横長の柄孔を結合部付近に穿つ。柄孔の両脇で樹皮紐によって結合する。内面には幅4~5mm間隔でケビキをひく。残存長17.5cm・厚さ0.6cmで、木取りは柁目である。

D区第34号土壌 (第48・49図)

K34グリッドの調査区北端に位置し、大半が調査区外にある。

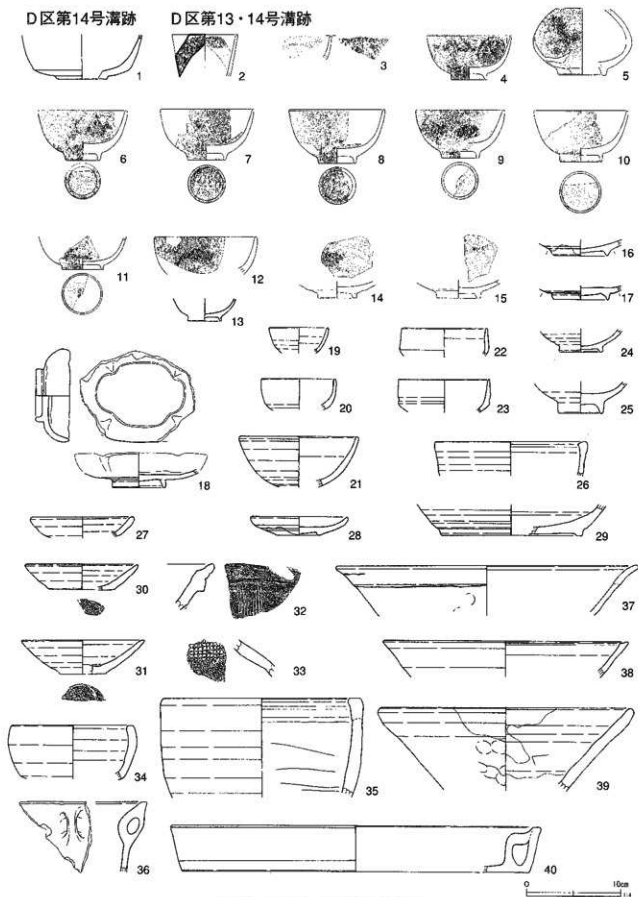
平面形態は方形と推定され、東西長0.74m、短軸長0.38mの範囲が検出され、確認面からの深さ0.22mを測る。

遺物は出土していない。

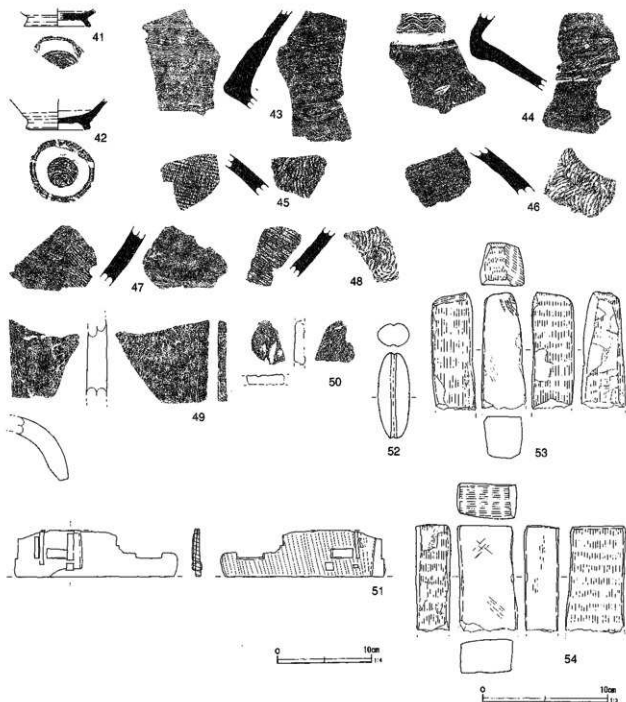
D区第33号溝跡 (第48・49・55・56図)

K40・41、L41・42グリッドに位置し、D区第7・8号井戸跡、D区第32号土壌と重複する。東端部でD区第10・11号溝跡と交差し立ち上がる。

検出長13.4m、幅1.22~1.50m、確認面からの深さ0.44~0.57mを測る。溝底標高は、東端付近22.25m、中央付近22.29m、西端付近22.40mを計測



第50图 D区上城・溝跡⑤出土遺物(1)



第51図 D区土壘・溝跡⑤出土遺物(2)

する。走行方位は、N-97° -Eを指す。

第54図107は、内外面赤漆塗りの漆椀である。体部が薄く仕上げられるのに対し、底部は厚い。底径5.3cm・現存高5.3cm・残存率25%、横木取りである。

D区第34号溝跡(第48・49・55・56図)

L41グリッドに位置する。

検出長3.80m、幅0.53~0.09m、確認面からの深

さ0.08~0.09mを測る。溝底標高は、東端付近22.70m、西端付近22.71mを計測する。走行方位は、N-90°を指す。

遺物は出土していない。

D区第8号土壘(第55・56図)

L41グリッドに位置する。

平面形態は、円形である。長軸長1.58m、短軸長1.32m、確認面からの深さ0.14mを測る。長軸方

第12表 D区土壌・溝跡⑤出土遺物観察表 (第50・51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎上	焼成	色調	出土位置・備考	図版
2	磁器	蕎麦猪口?	(7.0)	[4.5]		5	①I	A	灰白	SD13-14 肥前 染付 灰釉 18C代	
3	磁器	鉢		[2.6]		5	①	A	灰白	SD13-14 肥前 染付 灰釉 18C代	
4	磁器	碗	(9.0)	4.7 (3.7)	45	①I	A	灰白	SD13-14 肥前? 灰釉 18C後半		
5	磁器	碗		[7.1]	(5.1)	15	①	A	明青灰	SD13-14 雑形 肥前 灰釉 18C後半	
6	磁器	碗	(9.2)	5.3	3.8	50	①I	A	明オリブ灰	SD13-14 肥前 くらわんか碗 灰釉 18C中～後	
7	磁器	碗	(9.8)	5.4	3.8	40	②I	A	灰白	SD13-14 肥前 くらわんか碗 灰釉 買入多 18C中～後半	
8	磁器	碗	(10.1)	5.7	4.0	35	①I	A	灰白	SD13-14 肥前 くらわんか碗 灰釉 18C中～後	
9	磁器	碗	(9.4)	5.1	4.0	30	①I	A	明緑灰	SD13-14 肥前 くらわんか碗 灰釉 18C中～後	
10	磁器	碗	(9.8)	5.4	4.2	30	①	A	染付(具須弥?)	SD13-14 肥前 くらわんか碗 灰釉 買入多 18C中～後半	
11	磁器	碗		[3.5]	(4.4)	5	①I	A	灰白	SD13-14 肥前 灰釉 買入多 18C前半	
12	磁器	碗	(10.8)	[4.0]		10	①I	A	明緑灰	SD13-14 肥前 灰釉 18C中～後	
13	磁器	猪口?		[2.4]	3.5	50	①I	A	灰白	SD13-14 ハマ跡? 釉無	
14	陶器	皿		[1.8]	(4.0)	10	①H	B	灰白	SD13-14 瀬戸美濃 灰釉(浅黄) 買入多 トナリ跡? 18C前半	
15	陶器	皿or鉢		[1.9]	(4.6)	10	①	A	灰白	SD13-14 瀬戸美濃 灰釉(浅黄) 買入多 鉄釉(黒灰) 18C前半?	
16	陶器	高台付皿					③III	A	灰	SD13-14 瀬戸美濃 灰釉 18C代	
17	陶器	原		[1.5]	5.8	10	①HI	A	灰黄	SD13-14 瀬戸美濃 灰釉(浅黄) 買入多 17C代?	
18	陶器	形打皿		3.6	5.4	40	①	B	灰白	SD13-14 瀬戸美濃 型打 灰釉 買入多 18C前半	
19	陶器	小碗	(6.0)	[2.7]		25	①HI	A	灰白	SD13-14 瀬戸美濃 灰釉 買入多 19C代前半?	
20	陶器	小碗	(7.6)	[3.3]		25	①	A	にぶい黄橙	SD13-14 瀬戸美濃 灰釉(灰白) 買入多 18C代?	
21	陶器	碗	(12.4)	[5.3]		30	①I	B	灰白	SD13-14 瀬戸美濃 灰釉 買入多 18C代?	
22	陶器	碗	(9.2)	[3.0]		5	①HI	A	明オリブ灰	SD13-14 京・信楽? 雑形 灰釉 買入多 18C代?	
23	陶器	碗	(9.4)	[3.4]		20	①I	A	灰白	SD13-14 瀬戸美濃 灰釉(せんじ) 買入多 18C中	
24	陶器	碗		[2.5]	4.6	20	②HI	A	灰白	SD13-14 瀬戸美濃 内面灰釉 外面鉄釉 18C後半	
25	陶器	碗		[3.4]	(4.5)	30	①H	B	灰白	SD13-14 肥前 灰釉 買入多 17C後～18C前半	
26	陶器	片口鉢	(16.0)	[3.7]		5	①III	A	灰白	SD13-14 瀬戸美濃 灰釉(灰オリブ) 買入多 17C後半?	
27	かわらけ	皿	(10.6)	[2.1]		20	②GH	B	浅黄橙	SD13-14	
28	陶器	皿	(10.0)	1.9	4.6	45	①H	A	灰白	SD13-14 瀬戸美濃 灰釉(黄褐) 買入多 18C後半	
29	陶器	鉢			[3.3]	(15.0)	10	A	灰黄	SD13-14 灰釉(浅黄)	
30	かわらけ	皿	(11.9)	2.7	(6.8)	10	②CI	B	にぶい黄橙	SD13-14	
31	かわらけ	皿	(12.8)	[3.6]	(5.9)	25	②ADGHI	C	灰白	SD13-14	
32	陶器	指鉢				5	②AB	A	SD13-14 碧? 刻印「長上」?	18C前半	
33	陶器	壺				5	②AH	B	灰褐	SD13-14 常滑	
34	瓦質土器	鉢	(12.6)	[5.7]			②ACGHI	B	灰白	SD13-14	
35	瓦質土器	鉢	(20.9)	[10.5]		5	②CDH	B	灰	SD13-14	
36	瓦質土器	焙烙	(36.0)	[7.4]		5	②CD	B	褐灰	SD13-14 煤付着	
37	瓦質土器	鉢		[5.4]		5	②DH	B	黒	SD13-14 在地産 外面煤付着	
38	瓦質土器	播鉢?	(26.0)	[3.8]		5	②CI	B	褐灰	SD13-14 在地産?	
39	瓦質土器	鉢	(26.3)	[8.8]		10	②AG	B	灰褐	SD13-14 在地産? 煤付着	
40	瓦質土器	焙烙	(39.0)	4.8	(37.2)	5	②DGI	B	灰黄	SD13-14 外面煤付着	
41	須臾器	高台付杯		[1.9]	(6.9)	5	②HI	B	灰	SD13-14 本野産	
42	須臾器	高台付杯		[3.2]	6.8	20	②AGHI	C	褐	SD13-14 本野産	
43	須臾器	壺				5	②AII	B	灰	SD13-14 本野産	
44	須臾器	壺					②AFHI	B	褐灰	SD13-14 南北産	
45	須臾器	壺					②AHJ	B	灰	SD13-14 本野産	
46	須臾器	壺					②ADJ	B	灰	SD13-14 本野産	
47	須臾器	壺					②CHI	B	黄灰	SD13-14 本野産	
48	須臾器	壺					②AGH	B	灰	SD13-14 本野産	

位は、N-90°を指す。

遺物は出土していない。

D区第31号土壌 (第55・56図)

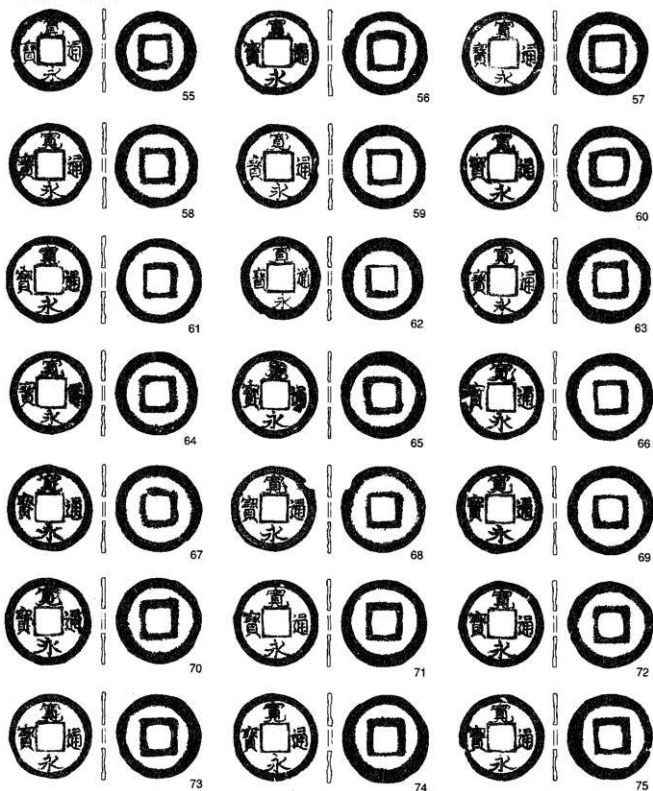
L41グリッドに位置し、D区第10号溝跡と重複

する。

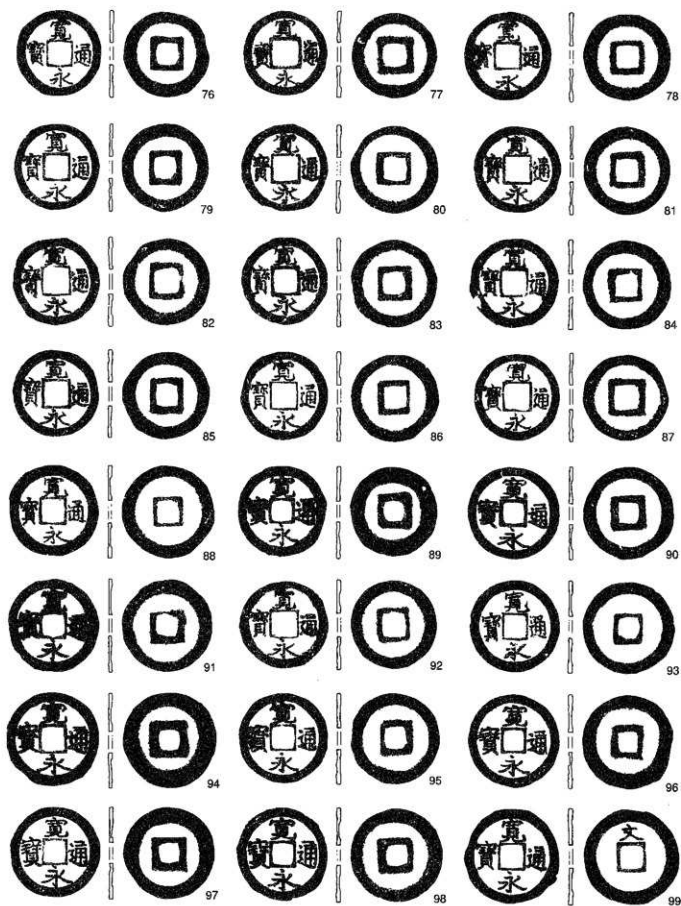
平面形態は、円形である。長軸長1.33m、短軸長1.27m、確認面からの深さ0.30mを測る。長軸方

位は、N-34° - Wを指す。

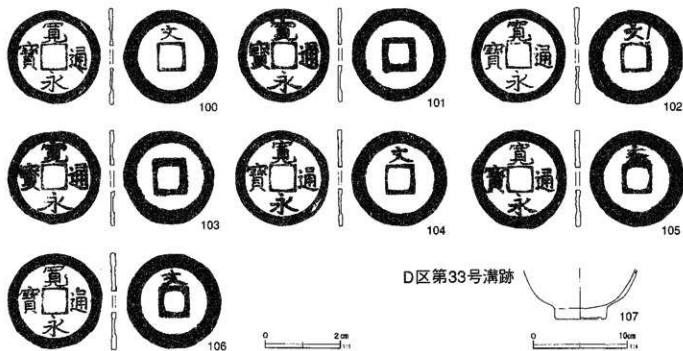
D区第13号满跡



第52图 D区土坑·满跡⑤出土遺物 (3)



第53图 D区土坑·溝跡(5)出土遺物(4)



第54図 D区土壌・溝跡⑤出土遺物(5)

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

D区第32号土壌(第55・56図)

K41グリッドに位置し、D区第33号溝跡と重複する。

平面形態は、方形である。東西長1.08m、南北長0.72m以上、確認面からの深さ0.41mを測る。東西軸方位は、N-77° -Wを指す。

遺物は出土していない。

D区第33号土壌(第55・56図)

K41グリッドに位置し、北半部は調査区外にある。D区第68号溝跡と重複する。

平面形態は、不整形である。東西長1.02m、南北長0.78m以上、確認面からの深さ0.09mを測る。東西軸方位は、N-69° -Wを指す。

遺物は出土していない。

D区第10号溝跡(第55・56図)

K41・42、L41・42、M41・42グリッドに位置し、D区第11号溝跡と併走する。D区第31号土壌・D区第33号溝跡と重複する。

検出長20.0m、幅2.05~2.45m、確認面からの深さ0.80~1.15mを測る。溝底標高は、北端付近

21.86m、中央付近21.57m、南端付近21.50mを計測する。走行方位は、N-175° -Wを指す。西側に位置するD区第13・14・15号溝跡と同様に、区画性の高い溝跡である。調査途中で台風によって壁が崩落し、Mグリッド部分の平面図は作成できなかった。

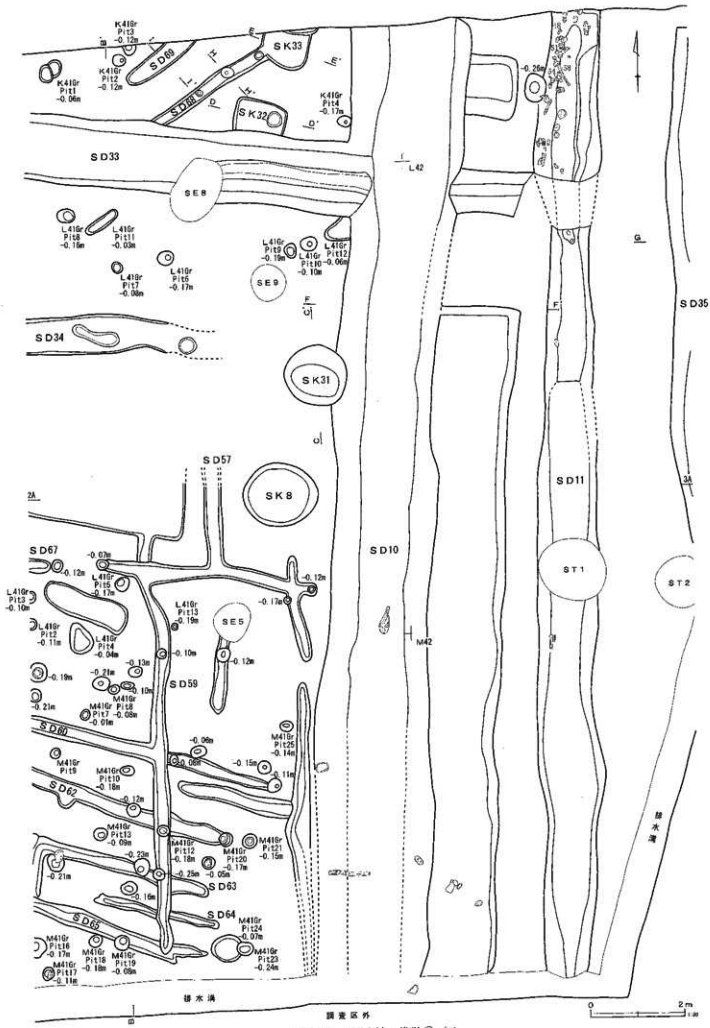
M41グリッドの西側上端付近には、板石塔婆(第58図35)が表面を岸側に向けた逆さの状態でも出土している。また対岸のM42グリッドの東壁付近からは、木製下駄が見つかっている。さらにL41グリッドの溝底部には、ウマの頭蓋骨が置かれた状態で発見されている。このウマ頭蓋骨は眉間部が欠損している。

この他に、かわらけ、内耳土鍋、鉢、壺、香炉や砥石、板石塔婆や漆碗、椀、曲物、建築材が出土している。

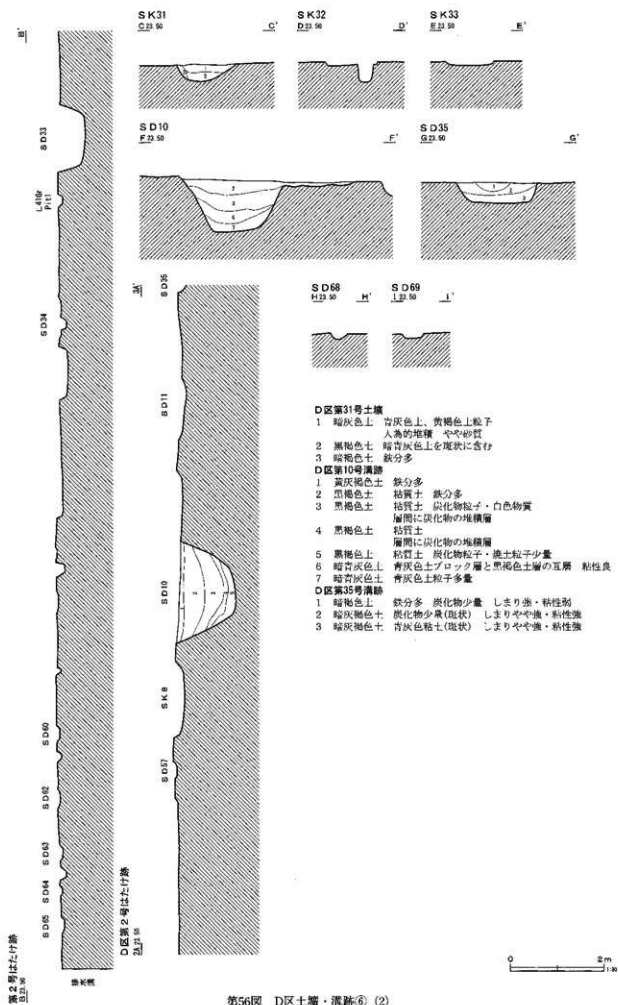
第58図33~36は板石塔婆である。

33は現存高39.5cm・幅18.0cm・厚さ2.1cmである。種子・連座部のみが残存し、紀年銘部は欠損している。

34は現存高23.9cm・幅(18.9)cm・厚さ2.0cmであ



第55号 D区土坑・溝跡⑥ (1)



第56図 D区土層・溝跡⑥(2)

る。種子部のみの現存で、紀年銘部は欠損している。

36は現存高32.6cm・現存幅23.3cm・厚さ3.1cmである。「正和五」年(1316)の紀年銘が記されている。

36は現存高28.5cm・現存幅10.6cm・厚さ2.3cmである。種子のごく一部の破片である。

第58図37は砥石である。現存長6.6cm・幅3.6cm・厚さ3.1cm・重さ99.3g、凝灰岩製である。

第58図43は、一木造りの連筒下駄である。台部の平面形は左右辺が平行な楕円形で、断面は均一的な厚さをもつ。歯は垂直で前後の開きが無く、平行である。歯の形は台形で、上面から見ると台部からやや歯が出ている。筒高は5.0cmである。前壺は前歯の前、後壺は後歯の前に穿つ。前壺は左右に寄らず中央に穿つ。壺は方形である。台部には、右足形の圧痕がみられる。長さ20.0cm・幅10.8cm・高さ6.2cmで、木取りは板目である。

第58図38・39・41・42は漆椀である。

38は外面黒漆、内面赤漆塗りで、外面には赤で草と雲の文様を描く。推定口径13.9cm・現存高5.9cm・残存率15%で、横木取りである。

39は内外面赤漆塗りで、無様である。底径7.9cm・現存高5.5cm・残存率40%で、横木取りである。

41は内外面黒漆塗りの破片である。大きさは不明である。横木取りである。

42は外面黒漆、内面赤漆塗りの破片である。内面に赤で草木の文様が描かれる。大きさは不明である。

第58図40は白木の椀である。口縁部付近が薄く、内面の体部中央付近に段をもつ。この段より下側は厚くなり、底部に至る。高台は低く、底部部外周付近がつく。内外面ともろくろ目が明瞭にみられ、外面にはろくろ後の丸い加工痕がみられる。推定口径11.6cm・底径6.7cm・高さ4.9cm・残存率80%で、横木取りである。

第59図44は、小型の方形曲物の底板で、半分ほ

ど遺存品である。樹皮紐を通す円孔2孔1組が、3組残存する。長さ8.5cm・現存幅4.1cm・厚さ0.4cmで、木取りは柱目である。

第59図45は、建築材の一部で出柄である。上下面には、製作・転用時に加工された歯状の刃物痕がみられる。上部四面には、使用時の圧痕がみられる。長さ3.1cm・幅7.1cm・厚さ2.8cm、木取りは板目である。

第59図46はウマの頭蓋骨である。長さ47.5cm・高さ12.8cm・最大幅18.5cmである。眉間部を欠損する以外は、残存度はきわめて高い。

D区第11号溝跡(第55・56図)

K42・L42・M42グリッドに位置し、D区第1号土壌墓と重複する。D区第10号溝跡と併走するが、深さは極端に異なる。方向性から区画的な意味合いの高い溝跡と推定されるが、D区第10号溝跡とは異なる用途が考えられる。

検出長20.0m、幅0.80~1.45m、確認面からの深さ0.05~0.28mを測る。溝底標高は、北端付近22.37m、中央付近22.58m、南端付近22.60mを計測する。走行方位は、N-1°-Eを指す。

遺物は、陶器碗・皿・徳利、かわらけ、焙烙、須恵器環・長頸壺のほか、砥石や漆椀等が出土している。

第60図63は匙で、全面に金鍍金が施された非実用的な製品である。一枚の金属から成形された打ち物である。全長17.9cm・柄長12.0cm・重さ10.6gである。皿部は長軸方向に緩やかに湾曲し、両脇の逆刺は浅い。幅3.0cmである。柄部末端部も皿状に成形され、幅1.0cmである。

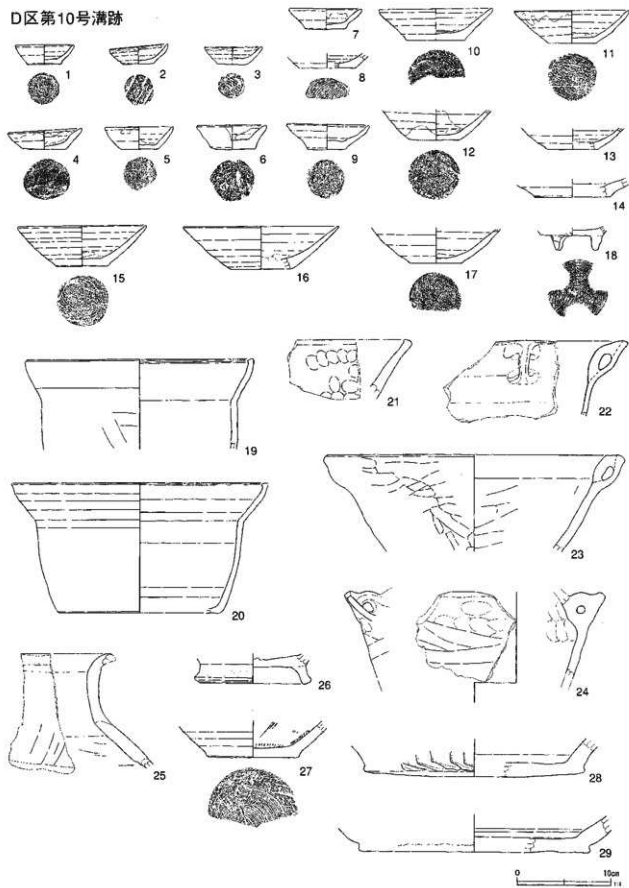
第60図64~67は凝灰岩の砥石である。

64は現存長10.3cm・幅4.6cm・厚さ2.6cm・重さ194.3gである。

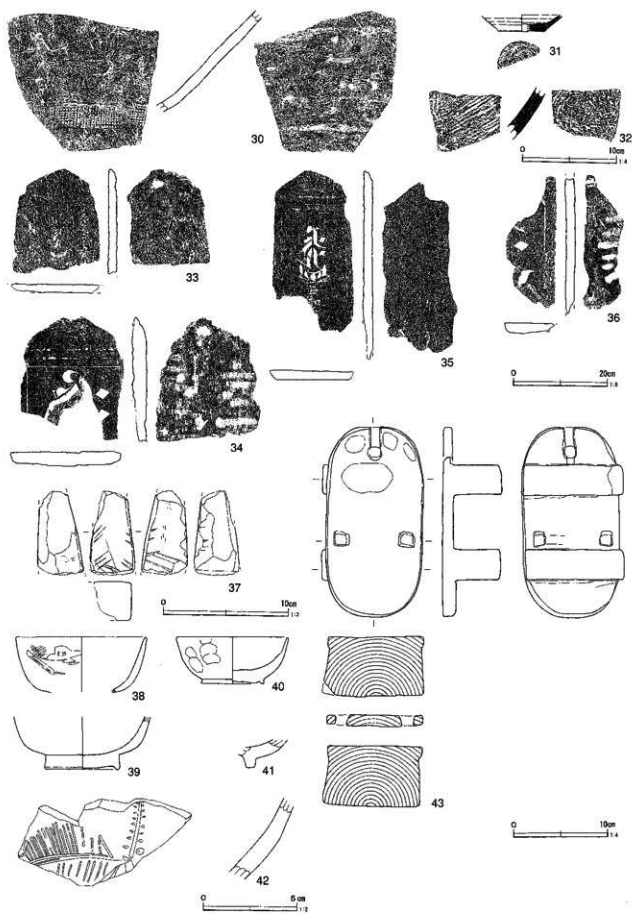
65は四角錐形で、現存長7.9cm・幅5.3cm・厚さ3.3cm・重さ107.3gである。

66は現存長5.2cm・幅3.9cm・厚さ3.1cm・重さ89.7gである。

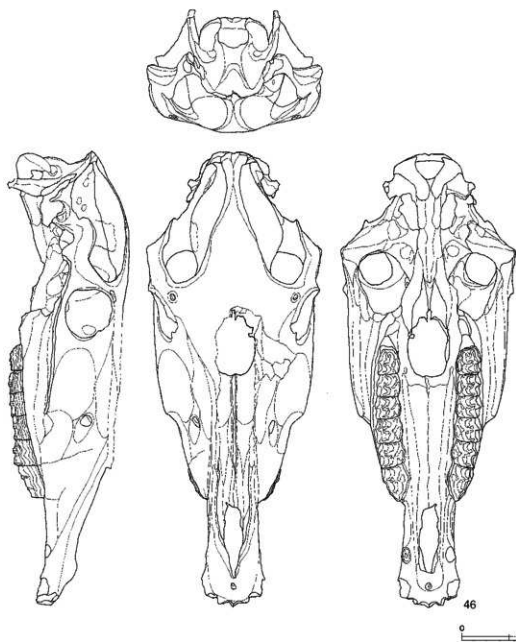
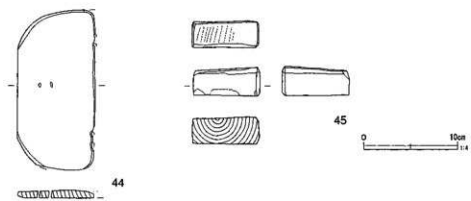
D区第10号溝跡



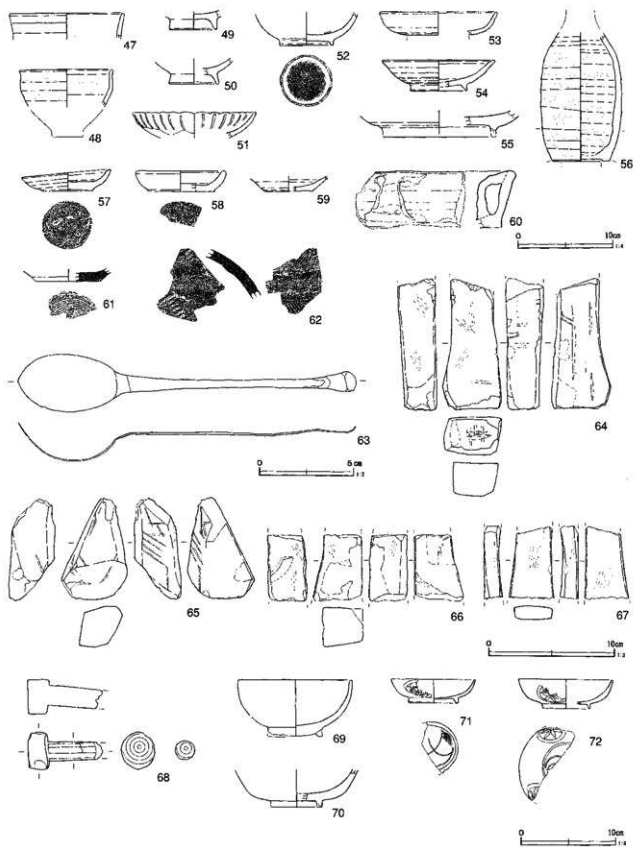
第57図 D区土坑・溝跡⑩出土遺物 (1)



第58图 D区土塚・溝跡⑥出土遺物(2)

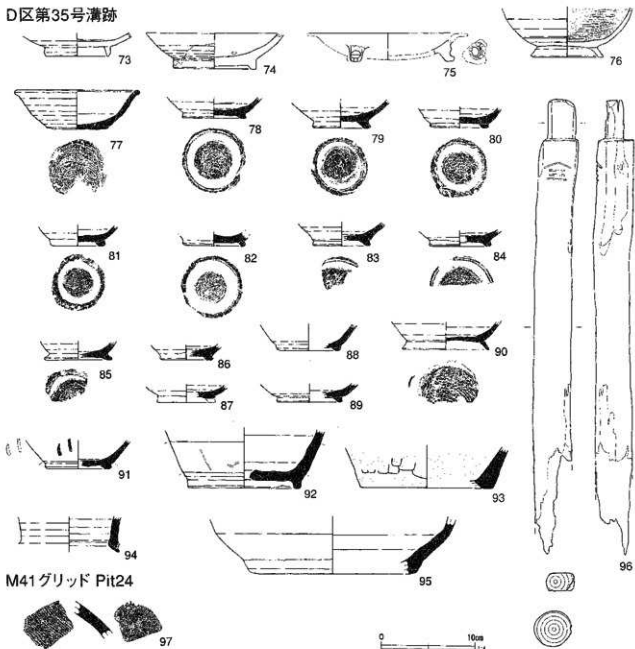


第59图 D区土坑·溝跡⑥出土遺物(3)



第60图 D区土坑·溝跡(4)出土遺物(4)

D区第35号溝跡



第61図 D区土塚・溝跡⑥出土遺物 (5)

67は現存長5.7cm・幅3.5cm・厚さ1.1cm・重さ38.0gである。

第60図68は経糸具と考えられる。野球のバットのグリップエンドとよく似た形状をしている。芯持ち材の一本造りで、軸部と端部の段差は削り出される。軸に対し、端部は斜めである。軸には、使用された痕跡はみられない。端部には樹皮が残存する。現存長7.9cm・軸径2.0cm・端部径3.9cm・端部厚さ2.3cmである。

第60図69～72は漆碗である。

69は、内外面赤漆塗りである。体部は丸く、底部は厚い。高台の大部分が欠損する。推定口径11.9cm・推定底径5.8cm・器高6.0cm・残存率50%、横木取りである。

70は、外面黒漆、内面赤漆塗りである。図化できなかったが、体部外面の三方向には丸で囲った文様を、底部外面には円の文様を描く。器厚は、体部・底部とも厚い。推定底径5.4cm・現存高3.9

第13表 D区土壌・漂砂⑥出土遺物観察表 (第57~61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	かわらけ	皿	6.1	2.1	3.5	95	③ADGH	C	にぶい澄	SD10	39-4
2	かわらけ	皿	6.0	1.9	3.2	90	②GI	B	にぶい澄	SD10 灯明皿 口縁部油煙付着	39-5
3	かわらけ	皿	5.9	1.9	3.0	70	③DGI	B	灰白	SD10 灯明皿 口縁部油煙付着	39-6
4	かわらけ	皿	7.7	2.2	4.7	95	③CGH	B	灰黄	SD10 灯明皿 口縁部油煙付着	39-7
5	かわらけ	皿	(7.2)	2.4	4.2	45	②HI	B	灰	SD10 灯明皿 油煙付着	39-8
6	かわらけ	皿	(7.2)	2.6	4.8	80	②CI	B	浅黄澄	SD10 灯明皿 油煙付着顯著	40-1
7	かわらけ	皿	7.5	2.2	4.3	60	②HI	B	にぶい黄澄	SD10 灯明皿 油煙付着	40-2
8	かわらけ	皿		[1.6]	(6.0)	5	②G	B	灰黄褐	SD10	
9	かわらけ	皿	(8.6)	2.6	4.0	60	②DGI	B	にぶい澄	SD10	40-3
10	かわらけ	皿	(12.0)	[3.3]	(6.0)	30	③CGH	B	にぶい澄	SD10	40-4
11	かわらけ	皿	12.0	3.5	5.0	95	②DHI	B	灰白	SD10-L42Gr 灯明皿 油煙付着	40-5
12	かわらけ	皿		[3.3]	5.3	40	②CI	B	灰黄褐	SD10 灯明皿 油煙付着	40-6
13	かわらけ	皿		[2.2]	(5.3)	5	②DHI	B	灰黄	SD10	
14	かわらけ	皿		[2.0]	(7.9)	5	③CDGH	B	にぶい黄澄	SD10 二次的被熱?	
15	かわらけ	坏	(13.6)	4.2	5.3	60	②DHI	B	灰褐	SD10-L41Gr	40-7
16	かわらけ	坏	(16.4)	[4.5]	(6.6)	20	③HI	B	にぶい黄澄	SD10	
17	かわらけ	坏		[3.7]	5.6	30	②DH	B	灰白	SD10	40-8
18	土師質	三足香炉		[2.5]	6.6	85	③CDGH	B	にぶい黄澄	SD10	
19	瓦質土器	鉢	(24.0)	[9.5]		5	②DHI	B	灰	SD10	
20	瓦質土器	鉢	(27.0)	13.7	(16.8)	10	②ACH	B	黒灰	SD10 外面煤付着 被熱による風化	
21	瓦質土器	鉢	(30.4)	[6.3]		5	③CGH	B	にぶい黄澄	SD10 外面煤付着	
22	瓦質土器	内耳鍋				5	②ADH	B	灰	SD10	
23	瓦質土器	内耳鍋	(30.6)	[11.4]		5	②AHI	B	灰黄	SD10 外面煤付着	
24	瓦質土器	土釜		[9.6]		5	②ACDEH	B	黒	SD10 在地産? 煤付着	
25	陶器	甕				5	①AHI	B	黒褐	SD10 甕突? 二次的被熱	
26	陶器	大鉢?		[3.2]	(11.0)	5	②I	B	灰白	SD10 瀬戸美濃 灰輪 時期不明	
27	陶器	楕鉢?		[4.0]	9.8	10	②AGI	C	褐灰	SD10 瀬戸美濃 二次的被熱煤付着 時期不明	
28	陶器	甕		[4.1]	(23.1)		②AC	A	暗褐	SD10 常滑 二次的被熱煤付着	
29	陶器	甕		[4.0]	(24.0)	5	②AH	B	にぶい赤褐	SD10 常滑 二次的被熱煤付着	
30	陶器	甕				5	②J	A	暗赤灰	SD10 常滑 格子目タキ 二次的被熱	
31	須恵器	坏		[1.8]	(5.0)	25	②ABH	B	灰	SD10 未野産	
32	須恵器	甕					②ABDH	B	灰	SD10 未野産	
47	陶器	碗	(12.0)	[2.7]		5	①I	B	灰白	SD11 瀬戸美濃 灰輪 貫入多 18C代?	
48	陶器	碗	(9.7)	[4.0]		5	①	B	灰白	SD11No2 瀬戸美濃 黒天目茶碗 18C中~後	
49	陶器	碗		[2.0]	5.0	10	①I	B	灰白	SD11 肥前 灰輪 17C後半?	
50	陶器	碗		[2.7]	(5.0)	5	③I	A	灰白	SD11 肥前 灰輪(浅黄) 17C後半?	
51	陶器	菊皿	(12.9)	[2.8]		15	③G	A	浅黄	SD11No4 瀬戸美濃(清洲?) コロシ打ち 灰輪+縁部黒入多 18C代?	
52	陶器	碗		[3.5]	5.6	30	①I	B	浅黄	SD11 肥前(京焼風) 灰輪+縁部(模写) 17C末~18C前半	
53	陶器	皿	(12.4)	[2.4]		10	①I	A	灰	SD11 瀬戸美濃? 灰輪(灰ナリブ) 18C代?	
54	陶器	皿	(11.9)	3.2	(6.0)		①I	A	灰白	SD11No7 瀬戸美濃 灰輪 貫入多 17C後半	
55	陶器	皿		[2.8]	(12.0)	5	②H	B	灰白	SD11 灰輪 産地・時期不明	
56	陶器	徳利		[13.6]	6.0		①HI	A	灰	SD11 瀬戸美濃 灰輪 18C中	
57	かわらけ	皿	9.2	1.9	5.2	90	③ADGHI	A	にぶい澄	SD11	43-1
58	かわらけ	皿	(9.2)	2.2	(7.0)	20	②DGH	B	浅黄澄	SD11No6 静止糸切? 内面煤付着	
59	かわらけ	皿		[1.6]	(5.0)	10	③G	B	灰白	SD11	
60	瓦質土器	焙烙		6.0		5	②DGEH	A	褐灰	SD11	
61	須恵器	坏		[1.3]	(6.4)	10	②FH	C	灰白	SD11 南比企産	
62	須恵器	長頸壺					③ADGH	B	黄灰	SD11 未野産 外面自然輪付着	
73	灰釉陶器	皿		[2.5]	(6.6)	20	②AHI	B	灰	SD35 内面に重ね焼き前	43-5
74	陶器	鉢		[3.8]	(8.7)	10	①	A	浅黄	SD35 片口鉢? 瀬戸美濃 灰輪(浅黄) 18C代	
75	灰釉陶器	三足盤		[2.3]		5	①III	A	灰白	SD35 三足盤の脚部	
76	内黒土器	高台付碗		[5.4]	7.6	45	①AGH	C	にぶい澄	SD35 内面黒色焼	43-6

番号	種別	器種	口径	器高	口径	残存率	胎上	作成	色調	出土位置・備考	図版
77	須恵器	坏	(12.7)	4.1	6.4	30	③ACHJ	C	黄灰	SD35 末野産	43-7
78	須恵器	高台付坏		[2.3]	6.7	25	③GH	B	灰	SD35 末野産 重ね焼き痕	
79	須恵器	高台付坏		[3.2]	5.8	20	②AHJ	B	灰	SD35 末野産 重ね焼き痕	
80	須恵器	高台付坏		[2.1]	6.2	20	③ABH	B	灰	SD35 末野産	
81	須恵器	高台付坏		[2.2]	5.3	30	③HI	B	灰	SD35 末野産	
82	須恵器	高台付坏		[1.5]	(6.2)	10	②GI	B	褐灰	SD35 末野産	
83	須恵器	高台付坏		[2.5]	(6.0)	5	②HT	B	灰	SD35 末野産	
84	須恵器	高台付坏		[1.7]	(6.0)	10	③ABGH	B	灰	SD35 末野産	
85	須恵器	高台付坏		[2.0]	(7.0)	10	②GHJ	C	にぶい黄褐色	SD35 末野産 酸化硫気味	
86	須恵器	高台付坏		[1.6]	(5.6)	10	③ABH	B	灰	SD35 末野産	
87	須恵器	高台付坏		[1.4]		5	②AH	B	灰	SD35 末野産	
88	須恵器	高台付坏		[2.8]	(6.4)	10	②DHI	B	褐灰	SD35 末野産	
89	須恵器	高台付坏		[2.0]	(7.0)	5	②DGH	A	灰白	SD35 末野産 重ね焼き痕	
90	須恵器	高台付坏		[2.9]	(9.0)	20	②ACHI	B	灰白	SD35 末野産	
91	須恵器	高台付坏		[3.1]	(6.4)	5	③ADHJ	C	褐灰	SD35 末野産 墨書[?]	
92	須恵器	壺		[6.5]	(11.6)	10	②AGI	B	灰白	SD35 末野産	
93	須恵器	壺		[4.4]	(14.0)	5	①AH	A	灰	SD35 末野産 自然釉付着	
94	須恵器	壺		[3.7]		5	①AH	B	灰	SD35 末野産	
95	須恵器	壺		[6.1]	(18.0)	5	②BHI	A	灰	SD35 末野産 自然釉付着	
97	須恵器	壺					②AHI	B	灰	M41GrPt24 末野産	

cm・残存率30%、横木取りである。

71は、外面黒漆、内面赤漆塗りである。体部外面の三方向には、赤で丸と木瓜に桔梗の文様を描く。また、底部外面には、斜格子を放射線で囲った文様を描く。器厚は、口縁部・体部・底部とも薄い。推定口径8.8cm・推定底径5.3cm・器高2.5cm・残存率30%、横木取りである。

72は、外面黒漆、内面赤漆塗りである。体部外面には丸に二花五葉の文様、底部外面には円を描く。推定口径9.8cm・推定底径5.0cm・器高3.1cm・残存率30%、横木取りである。

D区第35号溝跡(第55・56・62・63図)

K42・L42グリッドに位置し、D区第10・11号溝跡と併走する。

検出長11.6m、幅1.00~1.88m、確認面からの深さ0.18~0.50mを測る。溝底標高は、北端付近22.20m、中央付近22.23m、南端付近22.50mを計測する。走行方位は、N-0° -Eを指す。

遺物は灰釉陶器皿・三足盤、須恵器坏類・壺・甕、黒色土器、鉢や、木製建築材が出土している。第61図91の外面には、文字は不明であるが墨書が

みられる。

第61図96は建築材である。丸木を加工したもので、上端に出納を造り出す。上部の左右側面部にのみ、加工痕がみられる。材にはやや振れがあり、直線的ではない。端部に山に三の字が刻まれる。現存長47.8cm・幅39cm・厚さ3.7cmの芯持材である。

D区第68号溝跡(第55・56図)

K41グリッドに位置し、北端がD区第33土壙、南端がD区第33号溝跡と重複する。

検出長29m、幅0.22~0.32m、確認面からの深さ0.06~0.08mを測る。溝底標高は、北東端付近22.77m、南西端付近22.75mを計測する。走行方位は、N-127° -Wを指す。

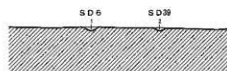
遺物は出土していない。

D区第69号溝跡(第55・56図)

K41グリッドに位置し、北側は調査区外にある。検出長1.7m、幅0.28~0.46m、確認面からの深さ0.06~0.07mを測る。溝底標高は、北東端付近22.77m、中央付近22.76m、南西端付近22.76mを計測する。走行方位は、N-122° -Wを指す。

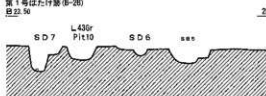
遺物は出土していない。

第1号はたけ跡(A-2A)
A 23 50



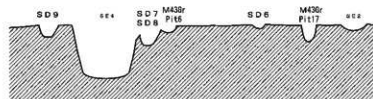
2A

第1号はたけ跡(B-2B)
B 23 50



2B

第1号はたけ跡(C-3C)
C 23 50



2C

SK37
D 23 50

D'

L43Gr Pit15 E' 23 50 L43Gr Pit8 F' 23 50 L44Gr Pit1 G' 23 50 L44Gr Pit2 H' 23 50 M43Gr Pit4 I' 23 50 M43Gr Pit8 J' 23 50 M43Gr Pit12 K' 23 50 M43Gr Pit15 L' 23 50



M43Gr Pit16 M' 23 50 M43Gr Pit19 N' 23 50 M44Gr Pit1 O' 23 50 L43Gr Pit7-Pit9 P' 23 50 L43Gr Pit13 Q' 23 50 M43Gr Pit13 R' 23 50 M43Gr Pit17 S' 23 50



D区第1号はたけ跡

D区第6号溝跡

1 暗褐色土 鉄分多 炭化物少量 しまり強・粘性弱

D区第29号溝跡

2 暗灰褐色土 炭化物少量(斑状) しまりやや強・粘性強

L43Gr Pit15

1 暗褐色土 鉄分・黒色土

2 暗褐色土 青灰色土ブロック

3 黒褐色土 鉄分

4 暗青灰色土 砂質 鉄分

L43Gr Pit18

1 暗褐色土 ロームブロック・黒色土ブロック

2 黒褐色土 鉄分

3 灰褐色土 砂質 鉄分

L44Gr Pit1

1 暗褐色土 ローム粒子少量

2 暗灰褐色土 砂質 鉄分

L44Gr Pit2

1 暗褐色土 粘土粒子・炭化物粒子多量

2 暗青灰色土 砂質 鉄分

3 黒灰褐色土 鉄分・青灰色土ブロック

M43Gr Pit4

1 暗褐色土 黒色土粒子・ローム粒子

2 灰褐色土 暗褐色土粒子

M43Gr Pit8

1 暗灰褐色土 火山灰

2 暗褐色土 黒色土ブロック・ロームブロック

3 黒褐色土 炭化物粒子

4 暗青灰色土 砂質 鉄分

M43Gr Pit12

1 暗灰褐色土 火山灰

2 黒褐色土 炭化物粒子・灰褐色土少量

3 灰褐色土 砂質 鉄分

4 暗青灰色土 砂質 鉄分

M43Gr Pit15

1 暗褐色土 青灰色土ブロック

2 暗青灰色土 砂質

M43Gr Pit16

1 暗灰褐色土 青灰色土ブロック

2 暗褐色土 炭化物

3 暗褐色土 ローム粒子

4 暗青灰色土 砂質 鉄分

M43Gr Pit19

1 暗褐色土 黒色土粒子・ローム粒子

2 黒褐色土 木片

3 灰褐色土 砂質

4 暗青灰色土 砂質

M44Gr Pit1

1 暗灰褐色土 焼土粒子微量 炭化物粒子・灰褐色土

ブロック少量 鉄分 しまり強・粘性大

2 灰褐色土 砂質 黒灰褐色土ブロック微量 鉄分多

しまり強・粘性大

3 黒灰褐色土 炭化物粒子・焼土粒多量

灰褐色土ブロック少量 しまり弱・

粘性やや強

D区第37号土壌

1 暗褐色土 砂質 青灰色土粒子・黄褐色土粒子

人為的堆積

4 暗青灰色土 柱状形充填 砂質 鉄分

L43Gr Pit7

1 暗灰褐色土 火山灰

2 黒褐色土 柱状取

3 灰褐色土 柱状形充填 砂質 鉄分

L43Gr Pit9

4 暗灰褐色土 火山灰・焼土

5 灰褐色土 鉄分

L43Gr Pit13

1 黒褐色土 柱状取 炭化物粒子少量

2 暗灰褐色土 柱状形充填 火山灰

3 灰褐色土 柱状形充填 砂質 鉄分

4 暗青灰色土 柱状形充填 砂質 鉄分

M43Gr Pit13

1 暗褐色土 黒色土粒子・ローム粒子

2 暗褐色土 柱状 炭化物粒子 木片

3 暗青灰色土 柱状形充填 砂質

M43Gr Pit17

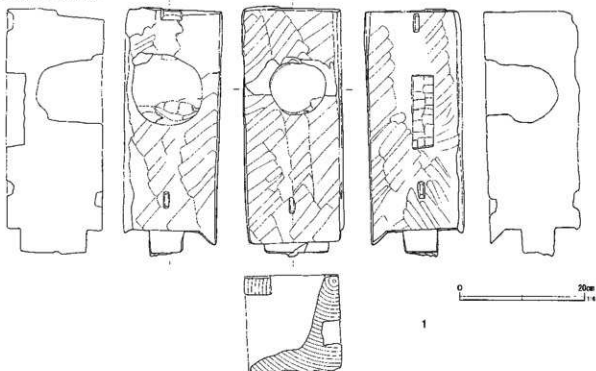
1 暗灰褐色土 青灰色土ブロック

2 黒褐色土 柱状取 炭化物粒子

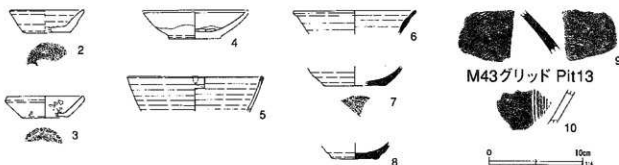
3 灰褐色土 柱状形充填 砂質

第63図 D区土壌・溝跡⑦(2)

D区第9号溝跡



D区第49号溝跡



第64図 D区土壌・溝跡⑦出土遺物

第14表 D区土壌・溝跡⑦出土遺物観察表 (第64図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
2	かわらけ	皿	(7.8)	[2.4]	(5.0)	30	①C	C	にぶい黄橙	SD49	44-5
3	かわらけ	皿	(8.0)	2.3	(5.0)	20	②DI	B	にぶい黄橙	SD49 灯明皿 油櫃付着	43-8
4	かわらけ	皿	[2.9]	5.5	65	③C	B	黒	SD49 灯明皿 全体的に油櫃付着		
5	緑釉陶器	輪花鉢	(14.3)	[3.7]		5	①I	A	灰青リブ	SD49	
6	須恵器	坏	(12.9)	[2.5]		5	②H	B	灰	SD49 末野産 承ね焼き直	
7	須恵器	坏	[2.1]	(6.6)		5	②HT	A	灰	SD49 末野産	
8	須恵器	高台付坏		[1.7]	(4.0)	10	①CH	B	にぶい橙	SD49 末野産	
9	須恵器	蓋					②ADHI	B	灰	SD49 末野産	
10	瓦質土器	櫛鉢					③CHI	B	灰	M43GrPit13 在地産	

D区第37号土壌 (第62・63図)

K43グリッドに位置し、北半部がD区第49号溝跡と重複する。

平面形態は、方形である。東西長120m、南北長0.50m以上、確認面からの深さ0.21mを測る。東西軸方位は、N-90°を指す。

遺物は出土していない。

D区第7号溝跡 (第62・63図)

L43・M43グリッドに位置し、D区第4号井戸跡と重複する。

竹筒が埋設された暗渠遺構で、南端部からは管と管を繋ぐ接合材 (第64図1) が発見された。

検出長9.3m、幅0.42～0.75m、確認面からの深さ0.35～0.46mを測る。溝底標高は、北端付近22.33m、中央付近22.37m、南端付近22.43mを計測する。走行方位は、N-0°を指す。

第64図1は暗渠管の接続部材である。中央に穿たれた円孔部で管が屈曲・接続される。建築材が転用され、上面には鋸状の刃物痕がみられる。また、柵と方形の柵穴が残存する。背面は荒れている。高さ38.9cm・幅15.1cm・厚さ14.8cmで、円孔径8.1cm・方孔11.5cm×3.4cm×1孔、2.5cm×0.7cm×2孔である。木取りは、分割材である。

D区第49号溝跡 (第62・63・65～68図)

K43～46グリッドに位置する調査区際の溝跡である。D区第37号土壌・D区第37号溝跡重複する。

検出長27.6m、幅0.28～0.90m以上、確認面からの深さ0.21～0.67mを測る。溝底標高は、東端付近21.78m、中央付近22.02m、西端付近22.23mを計測する。走行方位は、N-90°-Eを指す。

遺物は、緑釉陶器輪花碗、かわらけ、須恵器坏類・甕等が出土している。

D区第3号土壌 (第65・66図)

M45グリッドに位置し、D区第2号土壌・D区第3号溝跡と重複する。

平面形態は、円形である。長軸長0.60m、短軸長0.54m、確認面からの深さ0.11mを測る。長軸方位は、N-90°を指す。

遺物は出土していない。

D区第5号土壌 (第65・66図)

L45・M45グリッドに位置し、D区第4号掘立柱建物跡と重複する。

平面形態は、楕円形である。長軸長1.74m、短

軸長0.96m、確認面からの深さ0.13mを測る。長軸方位は、N-41°-Eを指す。

遺物は出土していない。

D区第36号土壌 (第65・66図)

L44グリッドに位置する。D区第37・38号溝跡と重複する。

平面形態は、円形である。長軸長1.16m、短軸長0.86m以上、確認面からの深さ0.02mを測る。長軸方位は、N-0°を指す。

遺物は出土していない。

D区第37号溝跡 (第65・66図)

K44・L44・M44グリッドに位置し、南北ともに調査区外に至る。D区第4号掘立柱建物跡、D区第36号土壌、D区第49号溝跡と重複する。

D区第7号溝跡と同様に、竹筒が埋設された暗渠遺構である。検出長18.6m、幅0.33～1.22m、確認面からの深さ0.05～0.43mを測る。溝底標高は、北端付近22.41m、中央付近22.34m、南端付近22.29mを計測する。走行方位は、N-168°-Eを指す。D区第36号土壌と重複する北側の地点では、幅1.22m、長さ1.58mの広がりがあるが、土壌の重複の可能性が高い。

遺物は出土していない。

D区第1号土壌 (第67・68図)

M45グリッドに位置する。

平面形態は、楕円形である。長軸長0.88m、短軸長0.70m、確認面からの深さ0.09mを測る。長軸方位は、N-49°-Eを指す。

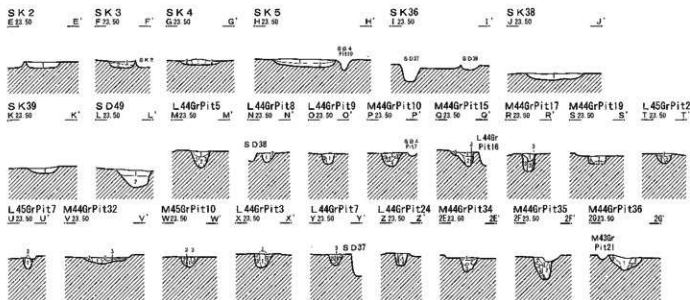
遺物は出土していない。

D区第2号土壌 (第67・68図)

M45グリッドに位置し、D区第3号土壌と重複する。

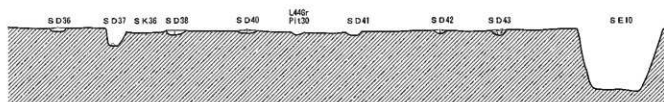
平面形態は、不整形である。長軸長0.66m、短軸長0.54m、確認面からの深さ0.10mを測る。長軸方位は、N-32°-Eを指す。

遺物は出土していない。



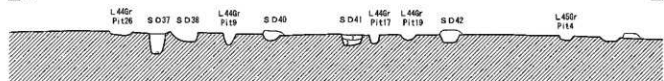
第1号はたけ跡
2A 23 50

3A



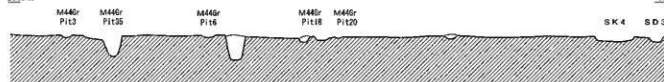
第1号はたけ跡
2B 23 50

3B



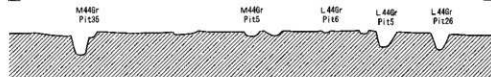
第1号はたけ跡
2C 23 50

3C



第1号はたけ跡
2D 23 50

D'



0 2m
1m

第66図 D区土壌・溝跡②

D区第40号土壌 (第67・68図)

L 45グリッドに位置する。

平面形態は、円形である。長軸長0.82m、短軸

長0.70m、確認面からの深さ0.21mを測る。長軸方位は、N-11°-Eを指す。

遺物は出土していない。

D区第2号土塊	
1 暗青灰色土	ローム土・黒色土
D区第3号土塊	
1 暗褐色土	炭化物粒少量
2 暗青灰色土	砂質
D区第4号土塊	
1 暗褐色土	はたけ跡部埋土
2 暗褐色土	炭化物粒子・ローム粒少量
D区第5号土塊	
1 暗褐色土	ロームブロック・黒色土
2 暗青灰色土	砂質 鉄分
D区第36号土塊	
1 暗青灰色土	砂質 黒色土粒少量
D区第38号土塊	
1 暗褐色土	砂質 青灰色十粒子・黄褐色十粒子 人為的堆積
D区第39号土塊	
1 暗褐色土	砂質 青灰色十粒子・黄褐色十粒子 人為的堆積
D区第49号溝跡	
1 暗褐色土	砂質 鉄分 しまり強・粘性良
2 暗褐色土	水成層 やや砂質 しまり弱・粘性良
L44Gr Pit5	
1 黒灰色土	黄褐色土・黒色土ブロック
2 黒褐色土	柱状取痕 鉄分
3 灰褐色土	柱形充填 砂質 鉄分
L44Gr Pit8	
1 黒灰色土	柱状取痕 鉄分・火山灰 榛土粒子少量
2 暗褐色土	ブロック多量 しまり強・粘性欠
3 明灰褐色土	柱形充填 鉄分多量 炭化物粒子微量
	灰褐色ブロック多量 しまり強・粘性欠
L44Gr Pit9	
1 黒灰色土	柱状取痕 鉄分少量 灰褐色土ブロック多量 しまり良・粘性良
2 暗褐色土	柱形充填 鉄分微量 炭化物粒少量 しまり良・粘性良
M44Gr Pit10	
1 暗褐色土	鉄分 炭化物粒子・灰褐色ブロック少量 しまり強・粘性弱
2 黒灰色土	柱状取痕 鉄分 炭化物粒子・灰褐色ブロック多量 しまり弱・粘性強
3 暗褐色土	柱形充填 しまり弱・粘性強
4 灰褐色土	柱形充填 砂質 鉄分少量 しまり弱・粘性強
M44Gr Pit15	
1 暗褐色土	柱状取痕 鉄分・炭化物粒子・灰褐色土ブロック・暗褐色土ブロック少量 しまり強
2 灰褐色土	柱状取痕 鉄分 灰褐色土ブロック多量 しまり弱・粘性良
3 灰褐色土	柱形充填 砂質 鉄分微量 灰褐色土ブロック少量 しまり強
M44Gr Pit17	
1 黒灰色土	柱状取痕 鉄分 しまり強・粘性欠
2 暗褐色土	柱状取痕 鉄分 灰褐色土ブロック・青灰色土ブロック微量 しまり弱・粘性良
3 黒灰色土	柱形充填 鉄分・黒褐色土ブロック微量 しまり弱・粘性良
M44Gr Pit19	
1 黒灰色土	柱状取痕 鉄分微量 暗褐色土ブロック少量 灰褐色土ブロック微量 しまり良・粘性良 底部に礫層
2 明灰褐色土	鉄分 灰褐色土ブロック少量 しまり弱・粘性強
L45Gr Pit2	
1 暗褐色土	炭化物粒子少量
2 暗褐色土	鉄分
3 青灰色土	砂質

D区第1号溝跡 (第67・68図)

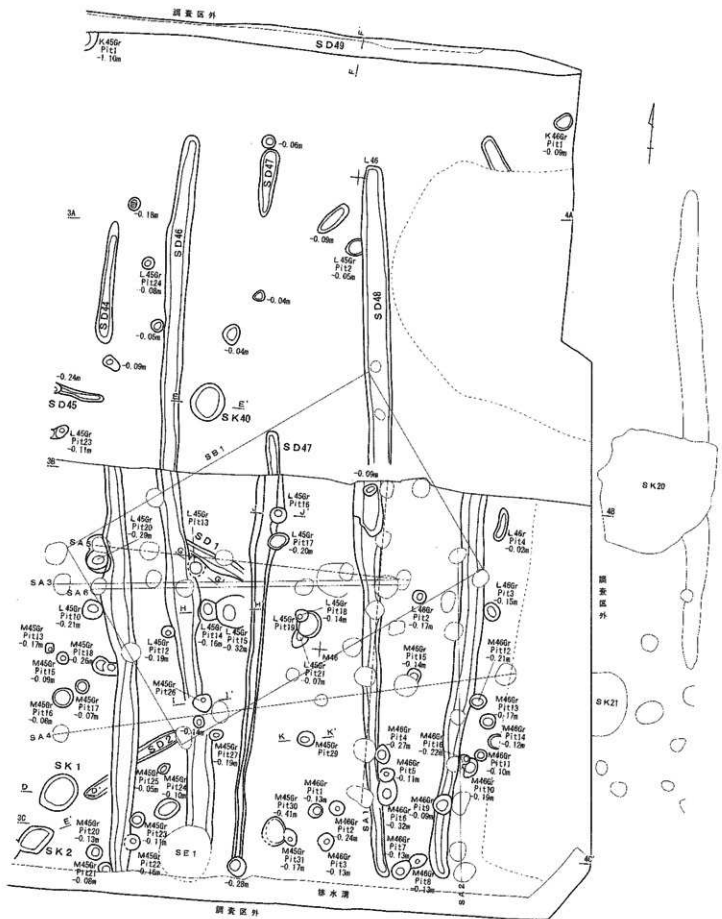
L45グリッドに位置し、東端がD区第47号溝跡、西端がD区第46号溝跡と重複する。

検出長1.40m、幅0.23～0.32m、確認面からの深

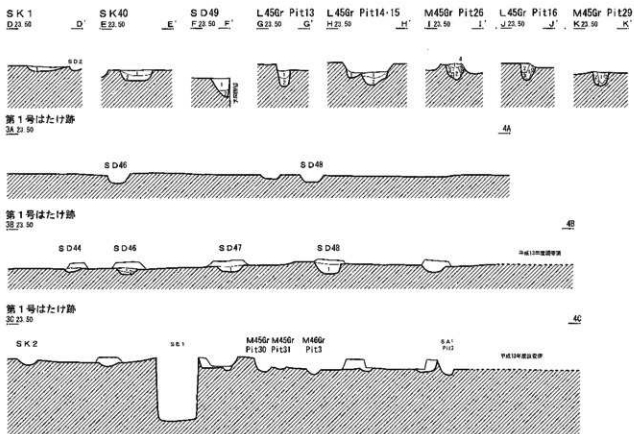
L45Gr Pit7	
1 暗褐色土	炭化物粒子少量
2 灰褐色土	鉄分
M44Gr Pit32	
1 暗褐色土	柱状取痕 鉄分 炭化物粒子少量 灰褐色砂質ブロック微量 鉄分 しまり強
2 暗褐色土	鉄分 暗褐色土ブロック少量 しまり強
3 灰褐色土	砂質 鉄分 しまり弱
M45Gr Pit10	
1 黒褐色土	柱状取痕 炭化物少量
2 灰褐色土	柱形充填 砂質 鉄分
3 青灰色土	柱形充填 砂質 鉄分
D区第1号はたけ跡	
D区第36号溝跡	
1 暗褐色土	鉄分多量 炭化物少量 しまり強・粘性弱
D区第38号溝跡	
1 暗褐色土	鉄分多量 炭化物少量 しまり強・粘性弱
D区第40号溝跡	
1 暗褐色土	鉄分多量 炭化物少量 しまり強・粘性弱
D区第41号溝跡	
1 暗褐色土	炭化物少量 (斑状) しまりやや強・粘性強
2 暗褐色土	青灰色粘土 (斑状) しまりやや強・粘性強
D区第42号溝跡	
1 暗褐色土	鉄分多量 炭化物少量 しまり強・粘性弱
2 暗褐色土	炭化物少量 (斑状) しまりやや強・粘性強
3 暗褐色土	青灰色粘土 (斑状) しまりやや強・粘性強
L44Gr Pit3	
1 黒褐色土	榛土粒子・炭化物粒多量
2 灰褐色土	砂質 鉄分・黒褐色土
3 暗青灰色土	砂質 鉄分・黒褐色土
L44Gr Pit7	
1 黒褐色土	木片
2 黒褐色土	炭褐色土少量
3 暗青灰色土	砂質
L44Gr Pit24	
1 炭化物粒子	ロームブロック
2 砂質 鉄分	
M44Gr Pit34	
1 暗褐色土	鉄分多量 炭化物粒子・榛土粒子多量 しまり強・粘性良
2 黒灰色土	炭化物粒子少量 榛土粒子微量 木片 しまり強・粘性良
3 灰褐色土	鉄分多量 しまり弱・粘性強
M44Gr Pit35	
1 黒褐色土	柱状取痕 鉄分多量 炭化物粒子・火山灰微量 しまり強・粘性欠
2 暗褐色土	柱状取痕 鉄分微量 炭化物粒少量 しまり弱・粘性良
3 灰褐色土	柱形充填 鉄分多量 黒灰色土ブロック少量 炭化物粒微量 しまり強・粘性良
4 暗褐色土	柱形充填 鉄分多量 しまり弱・粘性良
5 灰褐色土	柱形充填 鉄分少量 灰褐色土ブロック微量 しまり弱・粘性良
6 青灰色土	柱形充填 鉄分微量 しまり弱・粘性良
M44Gr Pit36	
1 暗褐色土	柱状取痕 鉄分・青灰色土ブロック
2 灰褐色土	柱形充填 砂質 鉄分
3 暗青灰色土	柱形充填 砂質 鉄分

さ0.08～0.12mを測る。溝底標高は、東端付近2254m、西端付近2262mを計測する。走行方位は、N-74° -Eを指す。

遺物は出土していない。



第67图 D区土填・跡跡①(1)



D区第1号土壌	砂質 鉄分
1 暗青灰色土	
D区第40号土壌	
1 黒褐色土	ローム質 暗褐色土混入 しまり弱・粘性欠
2 灰褐色土	砂質 鉄分多
D区第49号溝跡	
1 暗褐色土	砂質 鉄分多 しまり強・粘性良
2 暗灰褐色土	水成層 砂質 しまり弱・粘性良
L45Gr Pit13	
1 暗褐色土	しまり良
2 暗褐色土	砂質
L45Gr Pit14	
1 灰褐色土	シルト質 鉄分多 青褐色土 しまり良
L45Gr Pit15	
1 灰褐色土	シルト質 鉄分多 青褐色土 しまり良
2 灰褐色土	シルト質 鉄分・青褐色土多 しまり良
M45Gr Pit26	
1 灰褐色土	火山灰
2 灰褐色土	柱頭 炭化物少量
3 灰褐色土	柱頭形充填 砂質 鉄分
4 青灰色土	柱頭形充填 砂質 鉄分

D区第1号はたけ跡	
D区第44号溝跡	
1 暗褐色土	鉄分多 炭化物少量 しまり強・粘性弱
D区第46号溝跡	
1 暗褐色土	鉄分多 炭化物少量 しまり強・粘性弱
2 暗灰褐色土	炭化物少量(凝状) しまりやや強・粘性強
D区第47号溝跡	
1 暗褐色土	鉄分多 炭化物少量 しまり強・粘性弱
D区第48号溝跡	
1 暗褐色土	鉄分多 炭化物少量 しまり強・粘性弱
L45Gr Pit16	
1 黒褐色土	炭化物少量
2 灰褐色土	砂質 鉄分少量
3 青灰色土	砂質
M45Gr Pit29	
1 黒褐色土	炭化物少量
2 灰褐色土	砂質 鉄分
3 青灰色土	砂質 鉄分

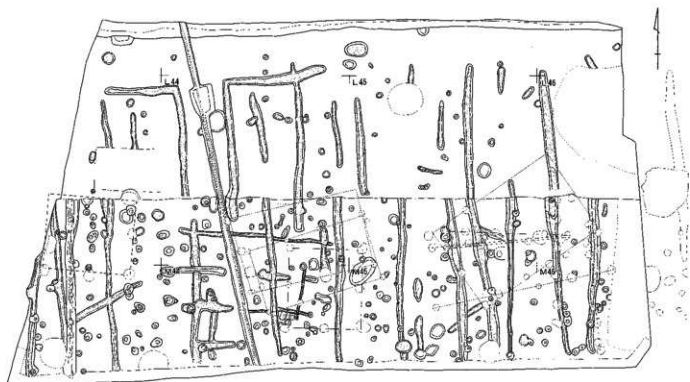
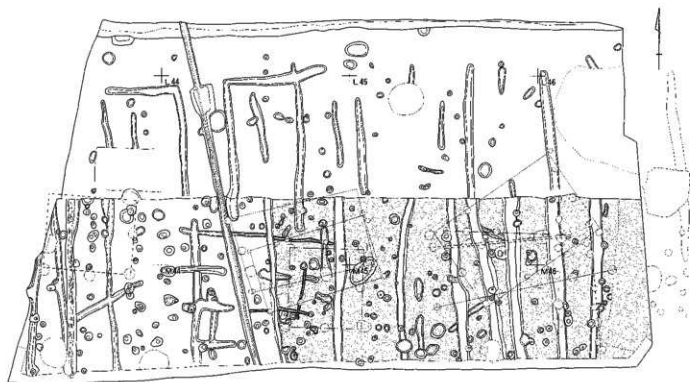


第68図 D区土壌・溝跡② (2)

D区第1号はたけ跡 (第69・62・63・65~68図)

D区第1・4地点から検出された幅狭の溝跡、土壌、グリッドピットがD区第1号はたけ跡の掘形に相当する。東側に隣接する諏訪木遺跡B区のはたけ跡も同一の遺構で、東西50mにおよぶ範囲に広がる。

D区第1地点での遺存状況はきわめて良好で、土が盛り上がった畝状遺構も検出された。遺構確認当初は、第69図1の黒色部のように幅1.5~3m前後の平行する溝群が発見された。調査の進行に伴って、幅広の溝状遺構同士の間の黄褐色帯が盛土されたものであることが判明した。さらに、こ



第69図 D区第1号はたけ跡

0 5m
1cm

の盛土を除去すると、幅狭の溝状の掘形が検出された。また幅広の溝状遺構の下からは、これと交差する幅狭の溝状遺構が見つかった。このような調査状況から、はたけ跡と断定した。

第62・63・65・66・67・68図に掲載した遺構のなかで、土壌・溝跡として報告しなかったものほとんどのグリッドピットがD区第1号はたけ跡の掘形に相当する。溝跡は幅0.2～0.4m前後で、浅いものが多い。ピット状の掘形は、はたけ跡掘形最下部の残欠である。掘形には南北方向と東西方向の二つの方向性が認められる。耕作方法との関連も考えなければならないが、仮に新旧関係ならば、南北方位の方が新しい。

遺物は、第71図に調査次の遺構番号を付して掲載した。中・近世の陶磁器、須恵器、土師器など時代的な統一感に欠ける。

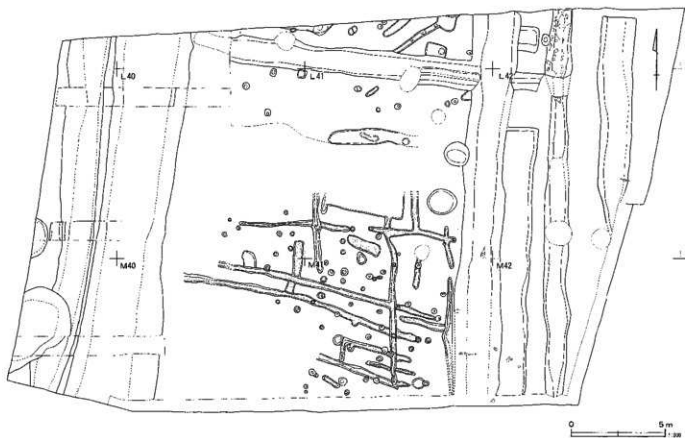
D区第2号はたけ跡（第70・48・49・55・56図）

D区第2・5地点のD区第10・13号溝跡に挟まれた区域から検出された幅狭の溝跡・土壌・グリッドピット等が、D区第2号はたけ跡の掘形に相当する。東西約15mの範囲に広がる。

D区第1号はたけ跡に比べて遺存状態は悪く、D区第1地点で検出された盛上された畝状遺構と幅広の黒色帯はなく、第5地点ではその下部の幅狭の溝状の掘形も検出されていない。

D区第1号はたけ跡と同様に、南北・東西の二つの方向性が認められる。

遺物は、第72図に調査次の遺構番号を付して掲載した。ほとんどがD区第12号溝跡とした南北方向の掘形から出土している。灰釉陶器、須恵器・土師器、土師器や中世の在産片口鉢等、D区第1号はたけ跡と同様に時代的な統一感に欠ける。

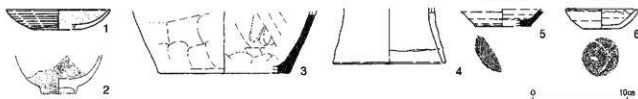


第70図 D区第2号はたけ跡

D区第9号溝跡

D区第7号土壌

D区第43号溝跡

L43グリッド
Pit15M43グリッド
Pit6

第71図 D区第1号はたけ跡出土遺物

第15表 D区第1号はたけ跡出土遺物観察表 (第71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	陶器	灯明皿	(10.8)	[2.1]	(5.0)	25	②I	B	にぶい黄橙	SD9 輪軸(明燭)	
2	磁器	碗	[4.1]	3.6		20	①I	A	灰白	SD9 くらんかん碗 肥前 灰輪(明燭) 18C中~後半	
3	須恵器	壺	[6.6]	(13.7)		5	②AHI	B	灰	SK7 木野産	
4	土師器	台付壺	[5.9]	(11.8)		5	②ADHI	B	にぶい黄橙	SD43	
5	須恵器	環	[1.9]	(6.0)		5	②FH	B	灰	L43GrPit15 南比企産	
6	かわらけ	灯明皿	7.6	2.1	4.1	90	②DIII	B	灰白	M44GrPit6 灯明皿 L線部油煙付着	44-2

D区第12号溝跡



D区第12・17号溝跡

第72図 D区第2号はたけ跡出土遺物

第16表 D区第2号はたけ跡出土遺物観察表 (第72図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	環	(13.1)	[3.2]	(7.0)	15	②DFHI	B	灰	SD12 南比企産	
2	須恵器	環	[1.7]		(5.6)	10	②FHI	B	褐灰	SD12 南比企産	
3	須恵器	はそう	(16.8)	[2.4]		5	②AI	C	灰	SD12 木野産	
4	須恵器	壺	[4.7]	(12.0)		5	②ADHI	B	灰	SD12 木野産	
5	土師器	環	(11.6)	[2.8]		15	②ACDGH	B	黄	SD12	
6	ろくろ上師	環	(13.3)	[3.7]		10	②ACH	C	にぶい橙	SD12	
7	須恵器	高台付環	[1.1]	(7.8)		5	②FH	B	灰白	SD12 糸切り南比企産	
8	須恵器	高台付環	[1.9]	(6.8)		5	③ADHI	B	灰	SD12 木野産	
9	灰輪陶器	高台付輪	[2.2]	(9.0)		15	③AHI	C	灰白	SD12 国転ヘラケズリ 内外面一部輪軸	
10	土師器	高環	[9.3]			15	②ADGHI	B	にぶい黄橙	SD12 赤彩 磨減している 調整不明	
11	陶器	甕				5	②CDGHJ	A	赤褐	SD12 常滑	
12	瓦質土器	片口鉢	(31.7)	[7.2]		5	②ACD	B	褐灰	SD12-17 在地産 煤付着	

(6) その他の遺物

発見されたグリッドが明確ではあるが、その一方で、帰属する遺構が不明な遺物を、グリッド遺物として取り扱った(第73～83図)。

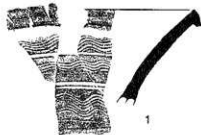
この中には、M37グリッドから破砕されたような状態でまとまって出土した数個体の須恵器の大甕も含まれている。故に、M37グリッドの出土量が必然的に多くなっている。この遺物に直接伴う遺構はないが、掘立柱建物跡や溝跡等の平安時代の遺構が密集する区画内に位置する。また、遺物の出土状況は、祭祀的な意味合いを強く感じさせる

ものである。このうち、第75図54～第77図70、第70図71～第78図78、第79図79～第81図87は、それぞれ異なる同一の個体である。この3個体に属さない破片も含まれることから、5～6個体の須恵器甕のまとまりと想定される。

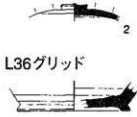
また、第73図7・8はL37グリッドから検出され、須恵器坏底面に「木」の墨書がみられる。

第82図100は、M37グリッドから検出された有穴球状石製品である。僅かな平坦部が残るが、球状に加工した礫の1箇所に、円孔が穿たれている。

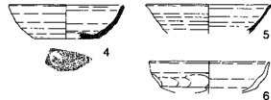
M34グリッド



L35グリッド



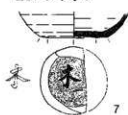
M36グリッド



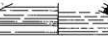
L36グリッド



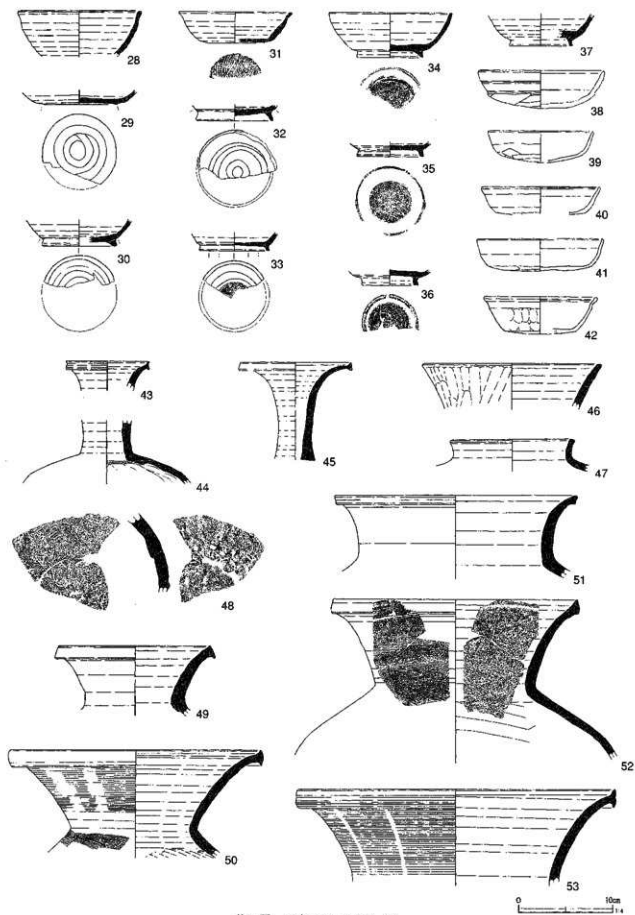
L37グリッド



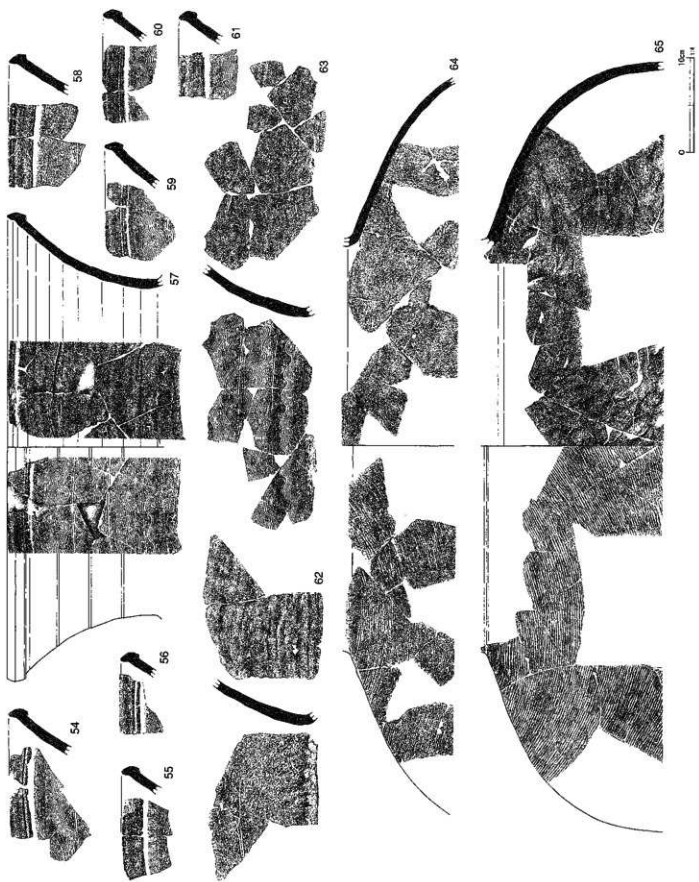
M37グリッド



第73図 D区グリッド遺物 (1)



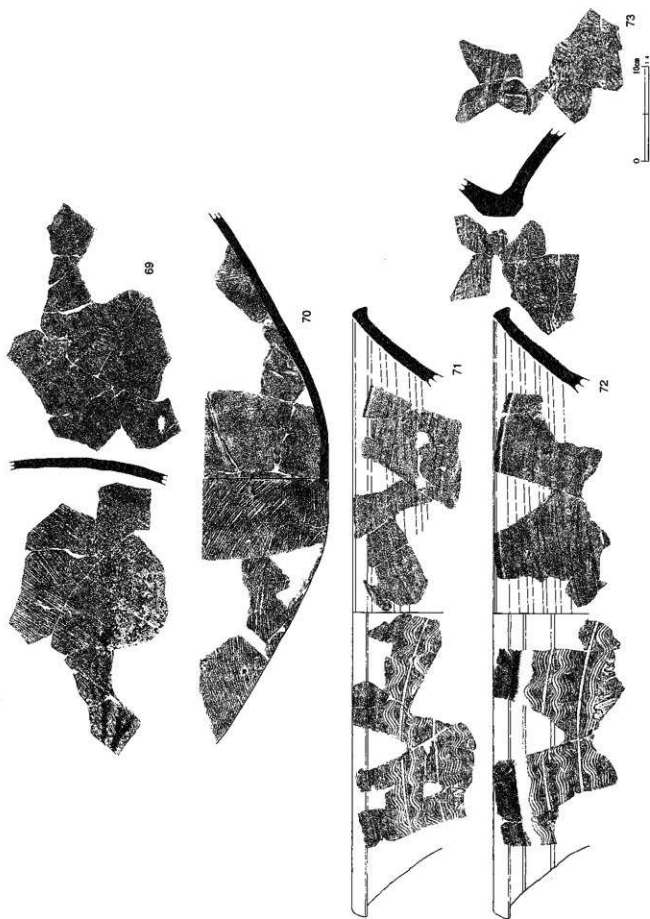
第74図 D区グリッド遺物 (2)



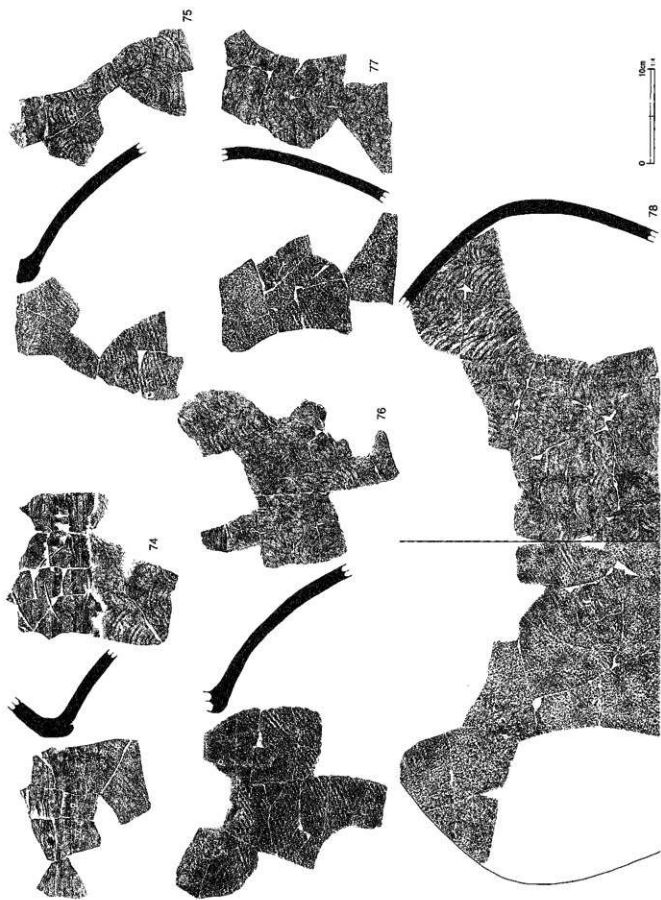
第75図 D区グリッド遺物 (3)



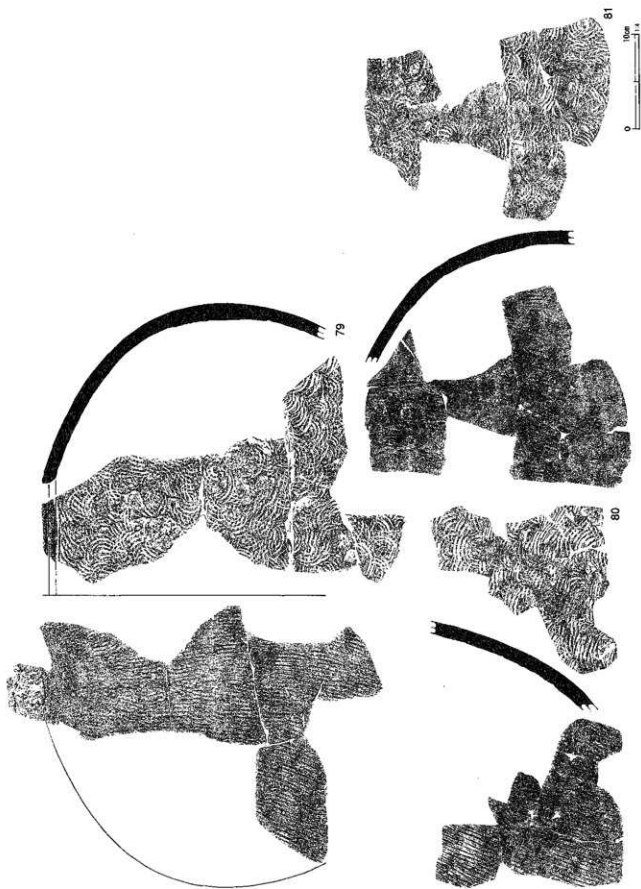
第76図 D区グリッド遺物 (4)



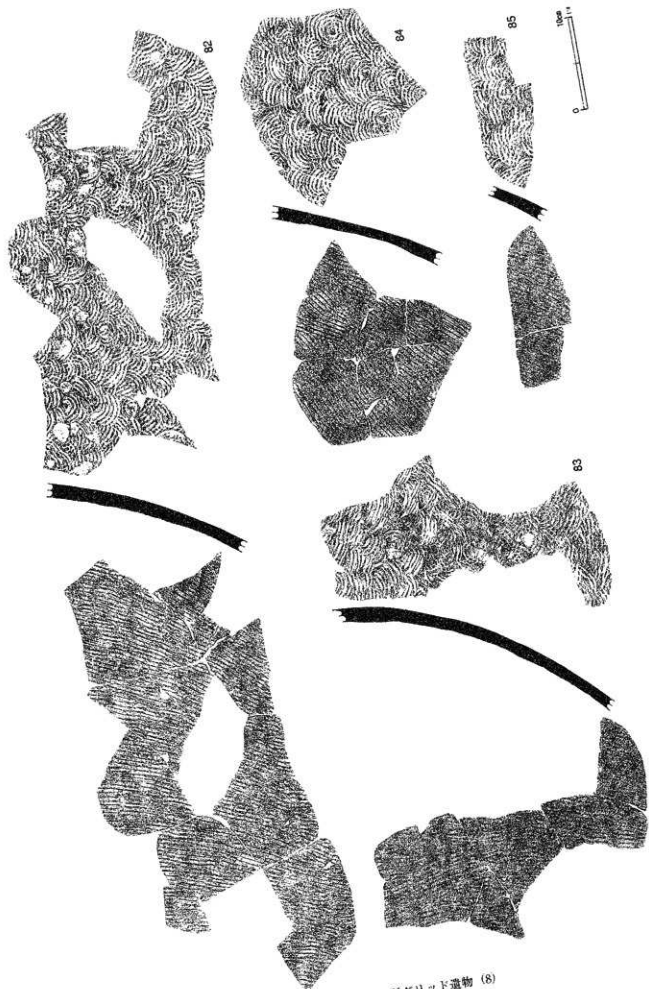
第77図 D区グリッド遺物 (5)



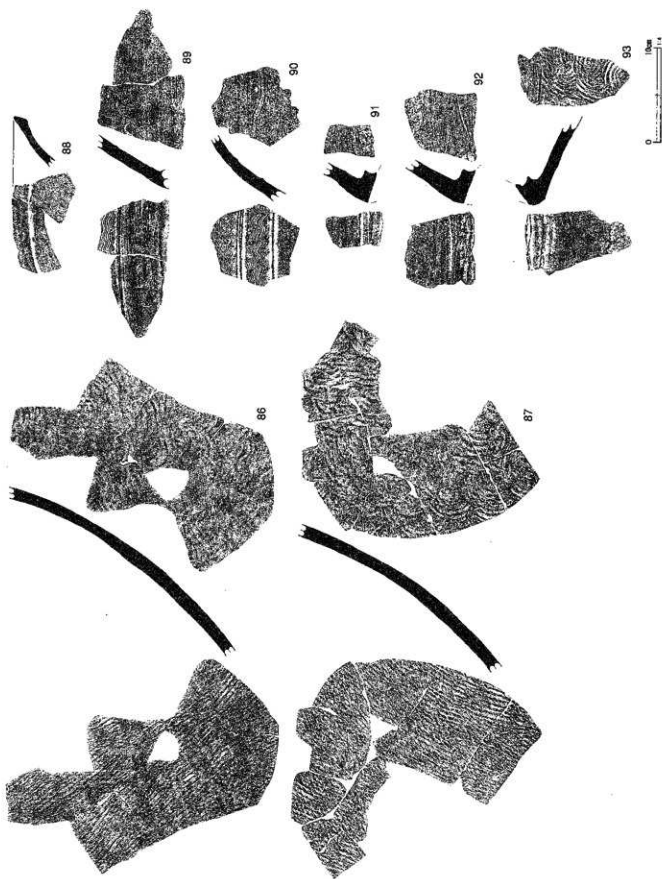
第78図 D区グリッド遺物 (6)



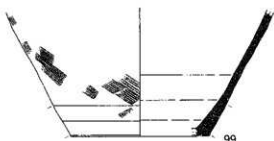
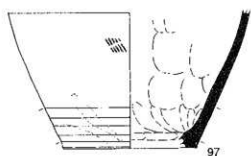
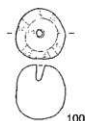
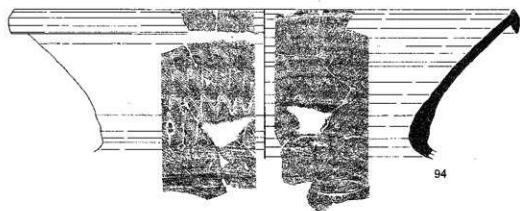
第79図 D区グリッド遺物 (7)



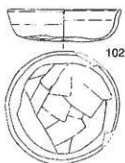
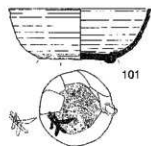
第80回 D区グリッド遺物 (8)



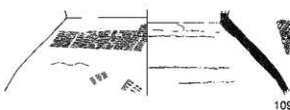
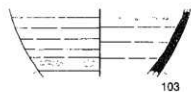
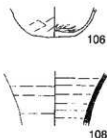
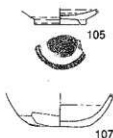
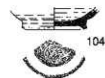
第81図 D区グリッド遺物 (9)



L38グリッド

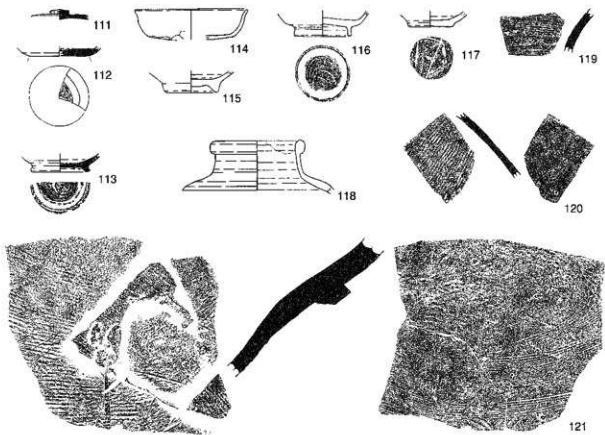


L39グリッド

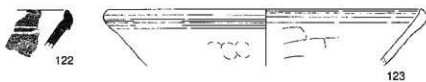


第82図 D区グリッド遺物 (10)

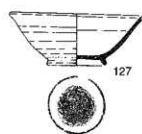
L40グリッド



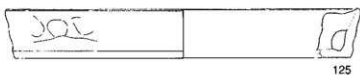
M40グリッド



L42グリッド



L41グリッド



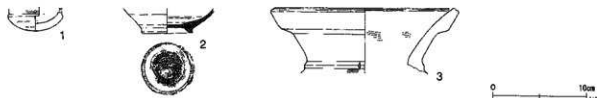
第83図 D区グリッド遺物 (11)

第17表 D区グリッド遺物観察表(第73~83回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	甕					①ADHI	A	灰	M34-14Gr-M37-14Gr 墓C 末野産 内外面自然輪付着	
2	須恵器	蓋		[1.8]			②ADGHI	C	にぶい・黄緑	L35Gr 末野産 つまみ径2.7	
3	須恵器	蓋		[3.1]	(12.0)	5	①HI	A	灰	L36Gr 末野産	
4	須恵器	坏	(12.0)	3.6	(7.0)		③AF	B	灰	M36Gr 南比企産	
5	須恵器	坏	(13.3)	[3.1]		15	②ABI	B	灰	M36Gr 末野産	
6	土師器	坏	(12.6)	[3.3]		30	②AGH	B	にぶい・橙	M36Gr	
7	須恵器	坏		[2.7]	7.0	20	③AFGHI	B	灰	L37Gr 南比企産 墨書「木」	44-6
8	須恵器	坏		[1.0]	5.8	10	③AFHI	B	灰白	L37Gr 南比企産	44-7
9	須恵器	坏	(12.6)	3.9	(6.4)	40	②FHI	B	灰	L37Gr 南比企産	44-3
10	須恵器	坏		[1.8]	6.3	20	②FIJ	B	灰	L37Gr 南比企産	
11	須恵器	甕	(12.2)	2.9		40	②FH	B	灰	M37-14-15Gr 南比企産 重ね焼き灰	
12	須恵器	蓋		[2.0]		10	②DHI	B	灰白	M37-13Gr 末野産	
13	須恵器	蓋		[2.3]		10	①DGH	B	灰白	M37-14Gr 末野産	
14	須恵器	蓋	(13.9)	[2.8]		10	③FHIJ	A	灰	M37-14Gr 南比企産	
15	須恵器	蓋		[1.8]		10	②DHJ	B	灰白	M37Gr 末野産	
16	須恵器	蓋		[3.0]		25	②FIJ	B	灰	M37-14Gr 南比企産	
17	須恵器	蓋	(14.3)	[2.0]		10	②FHI	B	灰	M37-14Gr 南比企産	
18	須恵器	蓋	(14.2)	[1.4]		5	③FH	B	灰	M37-14Gr 南比企産	
19	須恵器	蓋		[2.1]		20	②FHIJ	B	灰	M37-15Gr 南比企産	
20	須恵器	蓋		[1.7]		20	②HI	B	灰	M37Gr 末野産	
21	須恵器	蓋		[2.8]		15	②GHI	B	にぶい・橙	M37-14-15Gr 末野産	
22	須恵器	蓋	(19.2)	[3.3]		5	②FIJ	B	黄灰	M37Gr 南比企産	
23	須恵器	蓋	(20.3)	[2.3]		5	①FI	B	灰	M37Gr 南比企産	
24	須恵器	高盤		[3.4]		10	③BFJ	A	灰	M37-15Gr 南比企産	
25	須恵器	高盤		[1.5]		30	①HI	A	黒	M37-14Gr 末野産 自然輪付着	
26	須恵器	高台付皿	(11.3)	[1.2]		30	②DII	C	灰	M37Gr 末野産	
27	須恵器	高台付皿		[1.5]		40	③DEIJI	B	灰白	M37Gr 末野産	
28	須恵器	椀	(12.8)	[4.9]		10	③DFJ	B	灰	M37Gr 南比企産	
29	須恵器	椀		[1.6]	7.9	20	③FHJ	B	褐灰	M37Gr 南比企産	
30	須恵器	高台付椀		[2.8]	(7.9)	10	②FGHI	B	灰	M37-14Gr 南比企産	
31	須恵器	坏	(11.8)	[3.3]	(6.2)	40	②FGIJ	B	灰	M37-14Gr 南比企産	44-4
32	須恵器	高台付椀		[1.7]	(8.1)	10	①ADGHI	B	灰白	M37-14Gr 末野産	
33	須恵器	高台付椀		[2.0]	(7.4)	10	②FHJ	B	灰	M37-15Gr 南比企産	
34	須恵器	高台付椀	(12.8)	4.8	(7.0)	20	②ADGHI	A	灰	M37-14Gr 末野産 自然輪付着	45-1
35	須恵器	高台付坏		[1.6]	7.0	20	①FIJ	B	灰	M37-14-15Gr-第3地点 南比企産	
36	須恵器	高台付坏		[1.7]	(6.0)	20	③GJ	C	にぶい・橙	M37-15Gr 末野産	
37	須恵器	高台付坏		[3.4]	(6.7)	10	③EHI	B	黄灰	M37Gr 末野産	
38	土師器	坏	(13.3)	4.0		60	②DG	B	褐灰	M37Gr	
39	土師器	坏		[11.0]	[3.4]	20	②ADGHI	B	明赤褐	M37-14Gr	
40	土師器	坏	(12.5)	[2.9]		20	②ACDGH	B	橙	M37-14Gr	
41	土師器	坏	(13.2)	[3.4]		50	②ACDGH	B	橙	M37-15Gr-第3地点	
42	土師器	坏	(11.8)	[3.9]		10	①CGH	B	にぶい・橙	M37Gr	45-3
43	須恵器	長頸甕	(8.8)	[3.2]		5	②ADHI	B	灰	M37-14Gr 末野産 自然輪付着	
44	須恵器	長頸甕		[6.8]		5	②DHI	B	灰	M37-14Gr 末野産 自然輪付着	
45	須恵器	長頸甕	(11.6)	[0.3]		30	③AFHI	A	灰	M37Gr 南比企産	45-6
46	須恵器	鉢	(18.6)	[4.9]		5	③DFHI	B	灰	M37-15Gr 南比企産	
47	須恵器	短頸甕	(13.2)	[3.4]		5	①DHI	A	灰	M37-15Gr 末野産 自然輪付着	
48	須恵器	提瓶					②AGHJ	B	灰	M37-15Gr 末野産	
49	須恵器	甕	(16.0)	[7.4]		10	②AGI	B	黒褐	M37-14Gr 末野産 自然輪付着	
50	須恵器	甕	26.4	[11.3]		20	②AGH	A	灰	M37-14Gr 末野産	45-7
51	須恵器	甕	(25.5)	[8.8]		5	③AHI	A	灰	M37-14Gr 末野産	
52	須恵器	甕	(25.8)	[16.8]		5	③AHI	A	灰	M37-14-15Gr-第3地点 末野産 自然輪付着	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
53	須恵器	甕	33.4	[10.3]		5	②AG	A	灰	M37-14Gr 末野産 自然軸付着	
54	須恵器	甕					②AH	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕B	
55	須恵器	甕					③AH	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕B	
56	須恵器	甕					②AGHI	A	灰	M37-14Gr 末野産 甕B	
57	須恵器	甕	(48.4)	[16.5]		5	②AHJJ	A	灰	M37-14Gr 末野産 甕B	
58	須恵器	甕					③AH	A	灰	M37Gr 末野産 甕B	
59	須恵器	甕					②AHJJ	A	灰	M37-14Gr 末野産 甕B	
60	須恵器	甕					③AH	A	灰	M37-15Gr 末野産 甕B	
61	須恵器	甕					①AHI	A	灰	M37-15Gr 末野産 甕B	
62	須恵器	甕					②AHJJ	B	灰	M37-14Gr 末野産 甕B	
63	須恵器	甕					②AHJJ	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕B	
64	須恵器	甕		[11.8]			③AHI	A	灰	M37-14-15Gr-第3地点 末野産 甕B 自然軸付着	
65	須恵器	甕					③AHI	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕B	
66	須恵器	甕					③AH	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕B	
67	須恵器	甕					③AHI	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕B	
68	須恵器	甕					②AGHIJ	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕B	
69	須恵器	甕					②AHJJ	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕B	
70	須恵器	甕		[12.8]			③AHI	A	灰	M37-14-15Gr-第3地点 末野産 甕B 内面自然軸付着	
71	須恵器	甕	(62.4)	[9.6]		5	②ADHI	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕C 内面自然軸付着	
72	須恵器	甕	(62.4)	[10.1]		5	②ADHI	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕C 内面自然軸付着	
73	須恵器	甕					②ADHI	A	灰	M37-15Gr 末野産 甕C	
74	須恵器	甕					②ADHI	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕C	
75	須恵器	甕					②ADGHI	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕C	
76	須恵器	甕					②ADHI	A	灰	M37-14-15Gr-第3地点 末野産 甕C	
77	須恵器	甕					②ADHI	A	灰	M37-14-15Gr 末野産 甕C	
78	須恵器	甕		[27.7]			③ADHI	A	灰	M37-14-15Gr-第3地点 末野産 甕C	
79	須恵器	甕		[30.2]			②ADHI	A	暗灰	M37-15Gr-第3地点 末野産 甕A	
80	須恵器	甕					②DGIH	A	暗灰	M37-13-14-15Gr 末野産 甕A	
81	須恵器	甕					②ADHI	A	暗灰	M37-14-15Gr 末野産 甕A	
82	須恵器	甕					②ADHI	A	暗灰	M37-14-15Gr-M38Gr 末野産 甕A	
83	須恵器	甕					②ADGHIJ	A	暗灰	M37-14-15Gr 末野産 甕A	
84	須恵器	甕					②ADHI	A	暗灰	M37-14-15Gr 末野産 甕A	
85	須恵器	甕					③ADHIJ	A	暗灰	M37-15Gr-第3地点 末野産 甕A	
86	須恵器	甕					①ADHIJ	A	暗灰	M37-14-15Gr-第3地点 末野産 甕A	
87	須恵器	甕					①ADHIJ	A	暗灰	M37-14-15Gr-第3地点 末野産 甕A	
88	須恵器	甕					②AHJ	A	灰	M37-15Gr-第3地点 末野産 内外面自然軸付着	
89	須恵器	甕					②ADGH	A	暗灰	M37-14-15Gr 末野産 90と同一個体	
90	須恵器	甕					②ADGH	A	暗灰	末野産 89と同一個体	
91	須恵器	甕					②ADHI	A	暗灰	M37-15Gr 末野産 92と同一個体	
92	須恵器	甕					③ADHIJ	A	暗灰	注記なし 末野産 91と同一個体	
93	須恵器	甕					②ADHI	A	灰	M37-14Gr 末野産	
94	須恵器	甕	(52.8)	[15.8]		5	②AHJ	B	灰	SD25-M37-14-15Gr 末野産 95-96と同一個体	
95	須恵器	甕					③AHJ	B	灰	M37-13Gr 末野産 94-96と同一個体	
96	須恵器	甕					③AHJ	B	灰	M37-14Gr 末野産 94-95と同一個体	
97	須恵器	甕					③AHJ	B	灰	M37Gr 末野産	
98	須恵器	甕	[14.6]	[14.2]			③HI	B	灰	M37-14-15Gr 末野産 自然軸付着	
99	須恵器	甕	[7.3]	[12.0]		5	③AHI	A	灰	M37-14Gr-第3地点 末野産 自然軸付着	
100	須恵器	甕	[13.4]	[14.7]		5	③AHI	A	灰	M37-14Gr-第3地点 末野産 自然軸付着	
101	須恵器	碗	(14.9)	5.4	7.8	60	②AFIJ	B	灰	L38GrNo4 南比企産 墨書「木」	45-4
102	土師器	坏	11.9	3.4		95	③ACDHI	C	横	L38GrNo2	45-5
103	須恵器	壺		[7.2]		5	①AFHI	B	灰	L38Gr 南比企産	
104	須恵器	高台付坏		[2.3]	(7.0)	20	②AH	B	灰	L39Gr 末野産	
105	乃くろ十師	高台付坏		[1.7]	(5.4)	10	③ACGHI	B	黒	L39Gr 黒色処理?	
106	土師器	坏		[3.2]	4.5	30	③ADH	B	灰褐	L39Gr	
107	土師器	坏		[3.6]	6.2	30	③ADGI	C	灰白	L39Gr	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎上	焼成	色調	出土位置・備考	図版
108	須臾器	長頸壺		[5.7]		5	②AH	B	黒	L39Gr 末野産	
109	須臾器	壺		[8.9]		5	②AGHI	B	灰	L39Gr 末野産 二次的焼結	
110	須臾器	壺					①DHI	A	ネリブ灰	L39Gr 末野産	
111	須臾器	壺		[1.1]		5	②CFI	A	黄灰	L40Gr 南比企産 つまみ径20cm	
112	須臾器	坏		[1.0]	(6.3)	10	②AFH	B	灰	L40Gr 南比企産	
113	須臾器	高台付坏		[1.9]	6.2	10	②AGHIJ	B	黄灰	L40-11Gr 末野産	
114	土師器	坏	(11.8)	[3.2]		15	②ACDGI	B	橙	L40Gr	
115	ろくろ土師	高台付		[2.3]	5.2	20	②ADHJ	C	にぶい赤褐	L40GrNo17	
116	ろくろ土師	高台付坏		[2.8]	6.0	10	②ACGI	B	橙	L40Gr	
117	ろくろ土師	高台付坏		[1.6]	4.8	20	②ACDI	B	浅黄橙	L40Gr	
118	陶器	短頸壺	(9.0)	[5.7]		5	①H	A	灰	L40Gr 四耳壺? 自然輪付着	
119	須臾器	壺					②ADGHI	B	灰	L40-15Gr 末野産	
120	須臾器	壺					②ADHI	B	灰	L40-3・4・8・9Gr 末野産	
121	須臾器	壺					②HI	B	灰	L40-19Gr 末野産 焼成時2片接着	
122	須臾器	壺					②AHJ	B	暗灰	M40-2Gr 在野産 内面自然輪付着	
123	瓦質土器	鉢	(33.2)	[6.0]		5	②ADGI	B	灰褐	M40-2Gr 在野産 外面煤付着	
124	須臾器	坏		[1.3]	(6.0)	5	②ADH	B	灰	L41-20Gr 末野産	
125	瓦質土器	焙烙	(37.4)	[5.1]	(36.5)	5	②DHI	B	にぶい黄橙	L41-2Gr 底部に補修孔 外面煤付着	
127	須臾器	高台付碗	14.0	5.3	6.0	85	②ADFGHI	B	にぶい橙	L42Gr 南比企産	46-1



第84図 D区第2地点遺物

第18表 D区第2地点遺物観察表(第84図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎上	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	ミニチュア		[2.6]		80	②AGH	C	にぶい赤褐		
2	須臾器	高台付坏		[2.6]	5.4	40	②AHJ	B	灰	末野産	
3	土師器	壺	(18.8)	[6.9]		10	②ADGHI	B	淡橙		45-8

円孔は貫通せずに、中心付近までで止まっている。長さ3.9cm・幅3.9cm・厚さ4.3cm・孔径0.7cm・重さ88.4gである。石材は凝灰岩である。

第82図101は、L38グリッドから検出され、須臾器碗の底面に墨書がみられる。字風は他の土器に書かれたものとは大きく異なるが、「木」と読める。

第83図121は、L40グリッドから検出されている。2枚の須臾器壺片が接着したもので、焼成時に焼台等に用いられていた別破片が付着したものである。

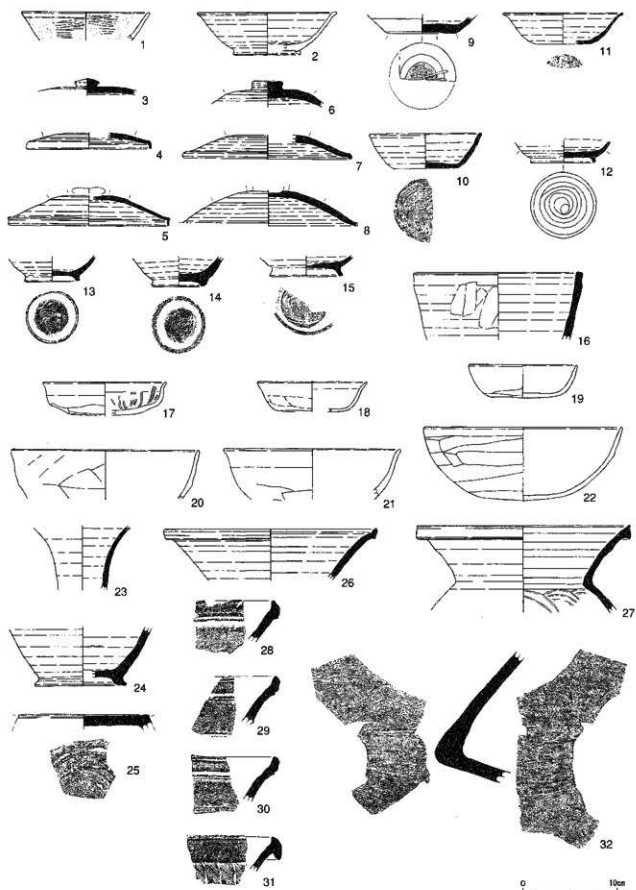
第83図126は、L41グリッドから検出された土

鉢である。現存長2.1cm・径0.9cm・孔径0.2cm・重さ1.7gである。

さらに、D区第2地点表土除去中に一括して検出された遺物は第84図に、D区第3地点表土除去中に一括して検出された遺物は第85図にそれぞれまとめた。

上記のいずれにも属さない遺物は、表採遺物として第86図に掲載した。

1は、平瓦で、凹面に布目痕、凸面にタキ痕が残る。現存長8.5cm・現存幅7.5cm・厚さ2.1cmである。覆土には白色粒子・黒色粒子が含まれている。焼成は普通で、色調は灰色である。

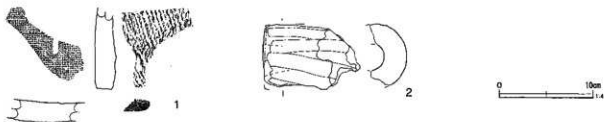


第85图 D区第3地点遗物

0 10cm

第19表 D区第3地点遺物観察表(第85回)

番号	種別	器種	LJ径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	緑釉陶器	碗	(13.5)	[3.0]		5	①H	B	灰白	施釉(灰オリーブ)	
2	灰釉陶器	高台付碗	(14.8)	[4.5]	(7.1)	10	①HI	A	灰白	内面施釉	
3	須恵器	蓋		[1.8]		20	②FGH	B	灰	南北企業	
4	須恵器	蓋	(13.0)	[1.7]		20	②FIH	B	灰	南北企業	
5	須恵器	蓋	(17.0)	[3.2]		30	②AFHI	B	灰	南北企業	46-2
6	須恵器	蓋		[2.8]		20	②FIJ	B	浅黄	南北企業	
7	須恵器	蓋	(17.6)	[2.5]		20	②EHJ	B	灰	未野産	
8	須恵器	蓋		[3.7]		20	②AFJ	B	灰	南北企業 重ね焼き痕	
9	須恵器	坏		[2.0]	(7.0)	20	②FHI	B	灰	南北企業	
10	須恵器	坏	(11.7)	3.7	(6.8)	40	②AFIJ	B	灰	南北企業	
11	須恵器	坏	(12.3)	[3.3]	(5.9)	20	②EIJ	B	灰	未野産	
12	須恵器	高台付坏		[2.3]	6.8	20	②FIJ	B	灰	南北企業 研磨痕	
13	須恵器	高台付坏		[2.6]	5.9	30	②DFHJ	C	褐灰	未野産	
14	須恵器	高台付坏		[3.1]	5.8		②HIJ	B	灰白	未野産	
15	須恵器	高台付坏		[2.2]	(7.8)	10	②AFHIJ	A	灰	南北企業 ヘラ記号	
16	須恵器	鉢	(18.0)	[7.1]		5	②FI	B	灰	南北企業	
17	土師器	坏	(13.0)	[3.5]		30	②ACDGI	B	にぶい褐	内面に放射暗文	
18	土師器	坏	(11.5)	[3.2]		20	②ADI	B	にぶい橙		
19	土師器	坏	(11.4)	3.5		70	②ADGHI	B	にぶい橙		46-3
20	土師器	鉢	(19.8)	[5.2]		5	②ACDGI	B	にぶい橙		
21	土師器	鉢	(18.4)	[5.3]		5	②ADGHI	B	橙		
22	土師器	鉢	20.8	7.8		75	②ADGHI	B	にぶい橙		46-4
23	土師器	長頸壺		[6.8]		5	②FIJ	B	灰	南北企業 自然輪付着	
24	須恵器	長頸壺		[6.2]	(9.8)	5	①AGH	B	灰	未野産 自然輪付着	
25	須恵器	碗	(13.8)	[1.6]		5	②AHJ	B	灰	未野産	
26	須恵器	蓋	(22.3)	[5.4]		5	②ADFHJ	B	灰	南北企業 自然輪付着	
27	須恵器	蓋	(22.4)	[9.1]		10	②AHI	B	暗灰	未野産 自然輪付着	
28	須恵器	蓋					②AHI	B	灰	未野産 自然輪付着 M37Gr蓋Bと酷似	
29	須恵器	蓋					②ADH	B	灰	未野産 30と同一個体	
30	須恵器	蓋					②ADH	B	灰	未野産 29と同一個体	
31	須恵器	蓋					②AHJ	B	灰	未野産	
32	須恵器	蓋					②AHI	A	灰	未野産	



第86図 D区表採遺物

2は、輪の羽口片である。筒状の遺物で、現存長10.4cm・推定外径3.5cm・推定内径1.5cm・厚さ2.4cmである。胎土は粗く、石英・角閃石・黒色粒子・礫が含まれている。色調はにぶい橙色で、一部褐灰色に変色している。

2. E 区の遺構と遺物

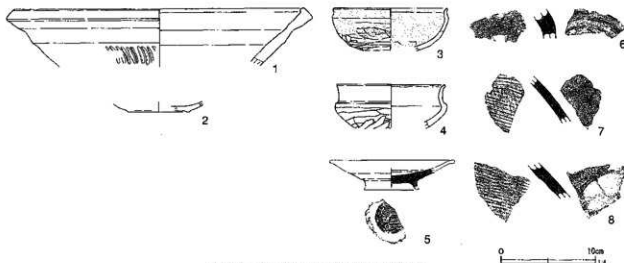
E区は、L・M29～33グリッドの延長約35mに及ぶ範囲である。東側に位置するD区とは道路を挟んで対峙するが、西側のF区とは境界がない。中央に位置する生活道路によって、第1・2地点に分割して調査を実施した。検出された遺構は、竪穴状遺構1基・井戸跡2基・土塼17基・溝跡12条・ピットである。

(1) 竪穴状遺構

E区第1号竪穴状遺構（第88図）

L30・M30グリッドに位置する。重複するE区第7号溝跡よりも新しい。

平面形態は東西に長軸をもつ方形で、長軸長4.65m、短軸長3.85m、東西長軸方位N-71°-Wを指す。覆土の堆積状況は、壁周辺部の崩落以降は自然堆積である。周囲には大地震に伴う噴砂痕がみられるが、E区第1号竪穴状遺構はこの噴砂痕を掘り込んで形成されている。



第87図 E区第1号竪穴状遺構出土遺物

第20表 E区第1号竪穴状遺構出土遺物観察表（第87図）

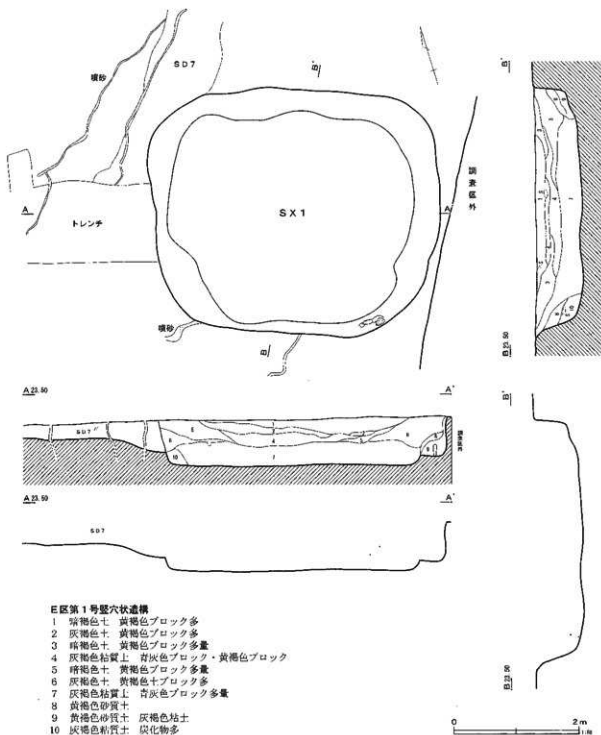
番号	種別	器種	1径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	瓦質土器	鉢	(30.4)	[6.1]		5	②ABH	C	黒	在地産	48-1
3	土師器	坏	(12.0)	[4.5]		20	②ABDGHJ	A	赤	外面赤彩	
4	土師器	坏	(11.4)	[4.6]		30	②CDGH	B	明赤褐		
5	須恵器	高台皿		[2.2]	(5.2)	5	②FHI	B	灰	南比企産	
6	須恵器	提瓶					②ACHIJ	A	灰白	末野産	
7	須恵器	甕					②AHI	B	暗灰	末野産	
8	須恵器	甕					②AHJ	B	暗灰	末野産	

E区西半地域からF区・G区にかけて、大地震に伴う噴砂痕がみられる。この噴砂痕を残した大地震は、弘仁9年(818)もしくは元慶2年(878)と推定されている。特筆されるのは、E区第1号竪穴状遺構が噴砂痕を掘り込んで形成されていることで、遺構の時期や地震発生時期を類推する資料となる。

ピット、炉跡、貯蔵穴、壁溝などの施設は一切認められない。

遺物は、中世の鉢のほか、須恵器高台皿・提瓶・甕・土師器坏、漆椀等が出土している。

第87図2は、内外面とも黒漆塗りの漆椀である。高台は、底部外面を浅く削った低いものである。推定底径6.6cm・現存高1.1cm・残存率20%、横木取りである。



E区第1号壁穴状遺構

- 1 暗褐色土 黄褐色ブロック多
- 2 灰褐色土 黄褐色ブロック多量
- 3 暗褐色土 黄褐色ブロック多量
- 4 灰褐色粘質土 青灰色ブロック・黄褐色ブロック
- 5 暗褐色土 黄褐色ブロック多量
- 6 灰褐色土 黄褐色土ブロック多
- 7 灰褐色粘質土 青灰色ブロック多量
- 8 黄褐色砂質土
- 9 黄褐色砂質土 灰褐色粘土
- 10 灰褐色粘質土 炭化物多

第88回 E区第1号壁穴状遺構

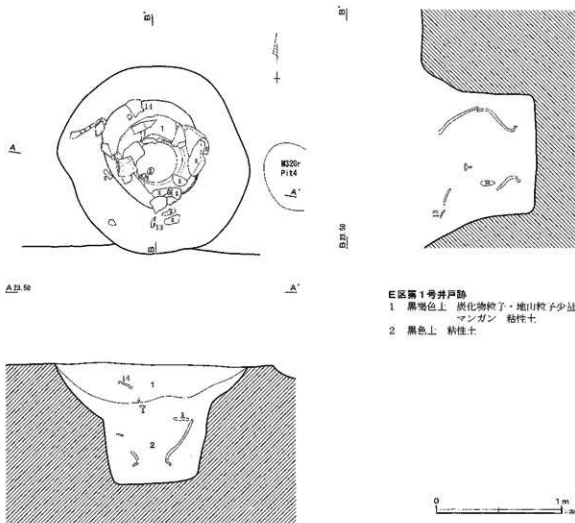
(2) 井戸跡・土壇・溝跡

E区第1号井戸跡 (第89回)

M32グリッドに位置する。

平面形態は、不整形である。長径1.50m、短径1.37m、長軸方位N-37°-Wを測る。底部付近

からは、常滑の大甕が伏せられた状態で出土した。胴部下半部の約1/2を欠損しているのみで、特に口縁部から肩部にかけては完存率が極めて高い。出土状況と遺構の性格から、井戸枠に転用された



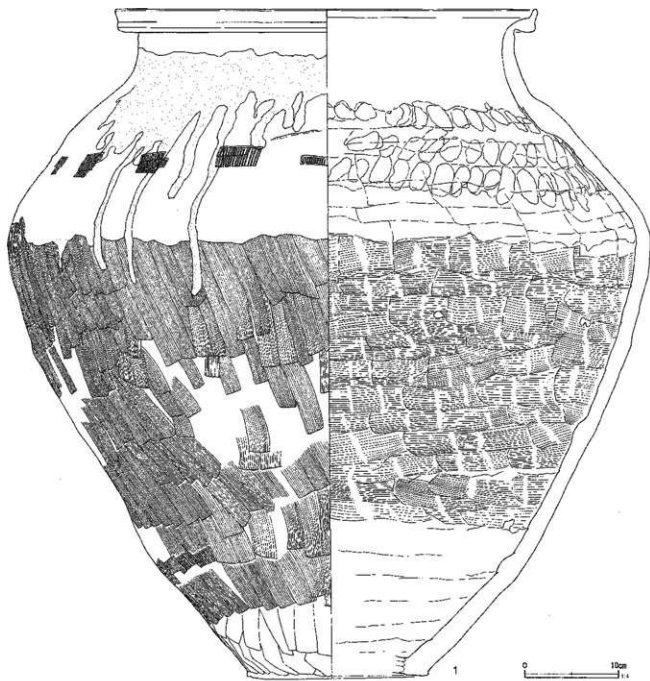
E区第1号井戸跡

1 黒褐色土 炭化物粒了・地山粒子少量
マンガン 粘性土
2 黒色土 粘性土

第89図 E区第1号井戸跡

第21表 E区第1号井戸跡出土遺物観察表 (第90・91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	常滑	壺	44.5	70.1	19.2	70	②AIJ	A	にぶい・未施	No1	巻頭3
2	山茶碗	片口鉢	(20.0)	[4.8]		10	①AHI	A	灰	内面自然釉付着 13C前半	
5	須恵器	坏		[2.0]	(5.8)	20	②ACFH	A	灰白	南北金産 9C後(鳩山竇)	
6	須恵器	高台付坏		[1.8]	5.0	10	①IJ	B	灰白	末野産? 10C前半	
7	須恵器	类					②AGH	B	灰	自然釉付着	
8	須恵器	壺					②AII	B	灰	末野産	
9	須恵器	壺					②ACDHIJ	B	灰	末野産	
10	須恵器	壺					②AHI	B	灰	末野産	
11	須恵器	类					②AFGHI	B	灰	南北金産	
12	須恵器	壺					②H	B	灰	末野産 外面自然釉付着	
13	須恵器	壺				5	②AHJ	B	灰	No4 末野産	
14	須恵器	类					②ADHI	B	灰	No6 末野産	
15	須恵器	壺					②AHI	B	灰	末野産	
16	須恵器	壺					②AFHI	B	灰	南北金産 自然釉付着	
17	須恵器	类					②AII	B	灰	末野産	
18	須恵器	壺					②AHI	B	灰	末野産 自然釉付着	



第90図 E区第1号井戸跡出土物(1)

ものと判断される。常滑大甕(第90図1)は13世紀中頃と推定される。口径44.5cm・底径19.2cm・器高70.1cmである。残存率は70%前後で、この時期の出上品としてきわめて遺存度が高い。

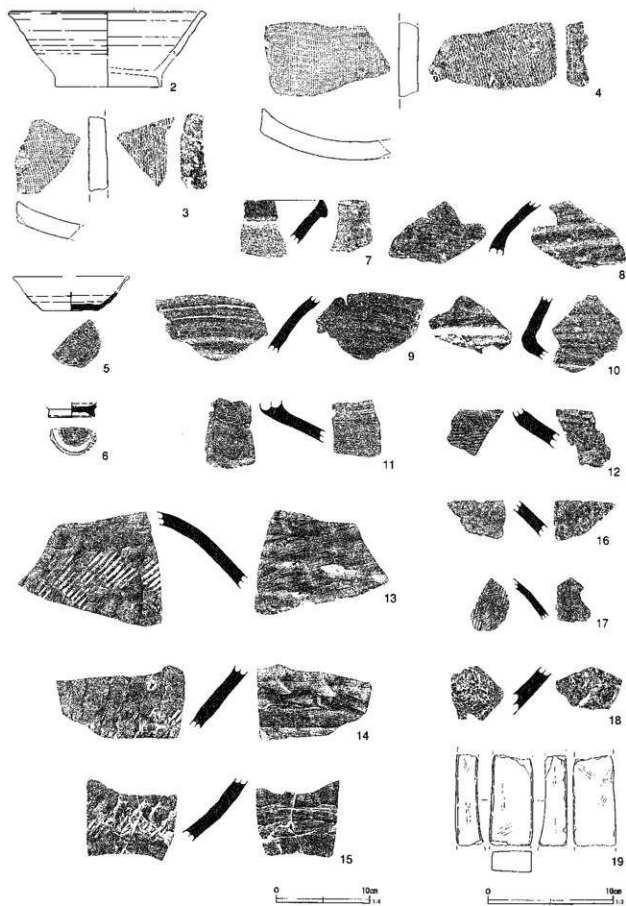
遺物はこのほかに、山茶碗系の片口鉢や瓦片・砥石が出土し、須恵器甕・坏片等が混入している。

第91図3・4は、平瓦である。両者ともに凹面

には布目痕、凸面にはタタキ痕がみられる。

3は、現存長7.7cm・現存幅6.6cm・厚さ2.0cmである。胎土の状態は普通で、石英・雲母・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通で、色調は灰色である。

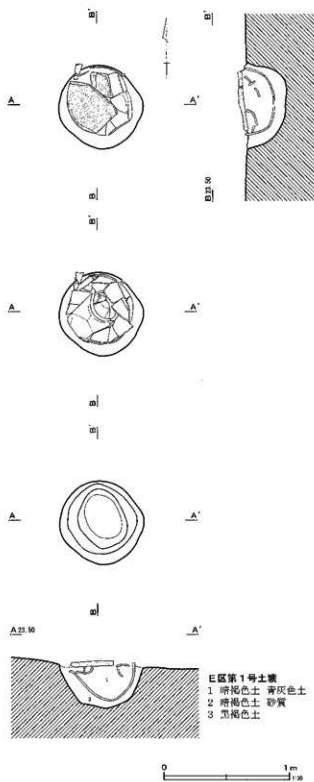
4は、現存長7.8cm・現存幅13.8cm・厚さ2.0cmである。胎土の状態は普通で、石英・白色粒子・黒



第91图 E区第1号井戸跡出土遺物 (2)

色粒子を含む。焼成は普通で、色調は灰色である。

19は、凝灰岩製の砥石である。現存長7.1cm・幅3.4cm・厚さ1.7cm・重さ77.4gである。



第92図 E区第1号土壙

E区第1号土壙 (第92図)

L32グリッドに位置する。

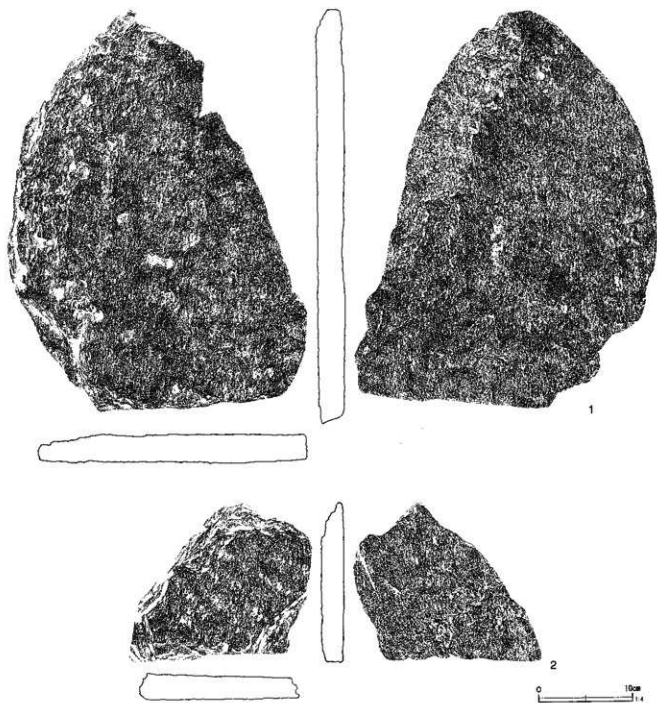
土壙のなかに蔵骨器を埋設した土壙墓である。蔵骨器は、常滑甕を2枚の緑泥片岩によって蓋をしたものである。埋設後の土圧によって、甕は潰れた状態で出土したが、甕の内部からは多量の骨片・骨粉が発見された。残念ながら、きわめて脆弱な状態で、取り上げることはできなかった。また、出土遺物からは被葬者を特定することもできない。

土壙掘形の平面形態は、円形である。長軸長0.68m、短軸長0.66m、確認面からの深さ0.43mを測る。長軸方位は、 $N-83^{\circ}-E$ を指す。

第93図1・2は蔵骨器の2枚の蓋石で、両者には接合関係がない。部分的に工具痕が見られるが、常滑甕に対応させるような特別な加工は施されていない。また梵字や紀年銘等の痕跡等がまったく見られないことから、板石塔婆の転用でもない。1は現存長43.5cm・現存幅31.9cm・厚さ3.0cm、2は現存長16.9cm・現存幅20.6cm・厚さ2.8cmである。

第94図3は、蔵骨器に用いられた常滑甕である。口縁部の特徴から、16世紀前半頃と推定される。口径26.4cm・高さ51.6cm・底径14.3cmで、一部欠損する。胎土の状態は普通で、白色粒子・礫が含まれる。焼成は普通で、色調はにぶい赤褐色である。外面上半部と内面下半部の自然軸の付着が著しい。

このほかに、平瓦片(4)が出土している。凹面には布目痕、凸面にはタタキ痕が見られる。大きさは、現存長5.9cm・現存幅1.3cm・厚さ1.7cmである。胎土の状態は普通で、石英・雲母・白色粒子・黒色粒子が含まれる。焼成は普通で、色調は灰色である。



第93図 E区第1号土城出土遺物 (1)

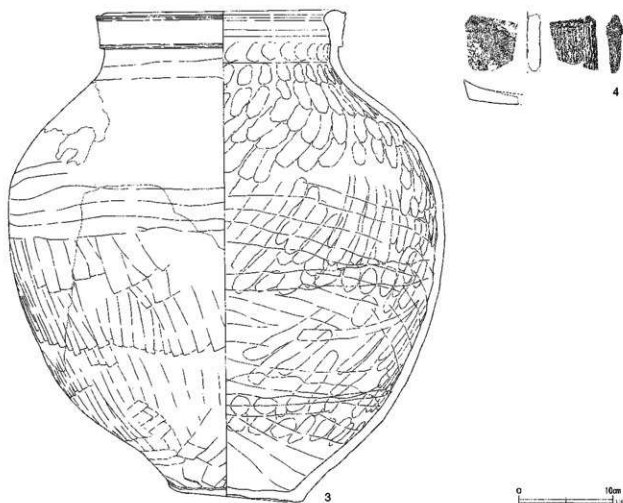
E区第2号井戸跡 (第95図)

L30グリッドに位置し、南東部が調査区外にある。E区第4号土城と重複する。

平面形態は円形である。南北径1.36m、東西径0.94m以上、南北軸方位N-38°-Eを測る。確認からの深さは1.1m以上で、調査中の安全を図るため、底面まで達していない。

遺物は、焙烙、木製下駄等が出土している。

第98図4は一本造の連歯下駄である。前壺より前部の爪先部分を欠損する。推定長17.3cm・幅7.3cm・高さ5.1cmの小型品である。台部は、平面が隅丸長方形、断面が中心に厚みをもつ長方形である。厚さは2.1cmである。南部は前後に開かず平行である。刃幅は上下で等しく、台部より外には張り出



第94図 E区第1号土坑出土遺物(2)

していない。歯高は32cmである。前壺は前歯の前に1孔、後壺は後歯の前に2孔穿つ。いずれも、歯をやや削りこんでいる。前壺は左右に片寄らず、ほぼ中央に穿つ。壺形は円形である。木取りは板目である。

E区第3号土坑(第95・96図)

L30グリッドに位置する。

平面形態は、楕円形である。長軸長0.67m、短軸長0.44m、確認面からの深さ0.41mを測る。長軸方位は、N-56° -Wを指す。

遺物は出土していない。

E区第4号土坑(第95・96図)

L30グリッドに位置し、南端が調査区外にある。

E区第2号井戸跡と重複する。

平面形態は円形である。東西長1.26m、確認面からの深さ0.12mを測る。

遺物は出土していない。

E区第19号土坑(第95・96図)

L29グリッドに位置する。

平面形態は、不整楕円形である。長軸長1.26m、短軸長0.46m、確認面からの深さ0.07mを測る。長軸方位は、N-42° -Eを指す。

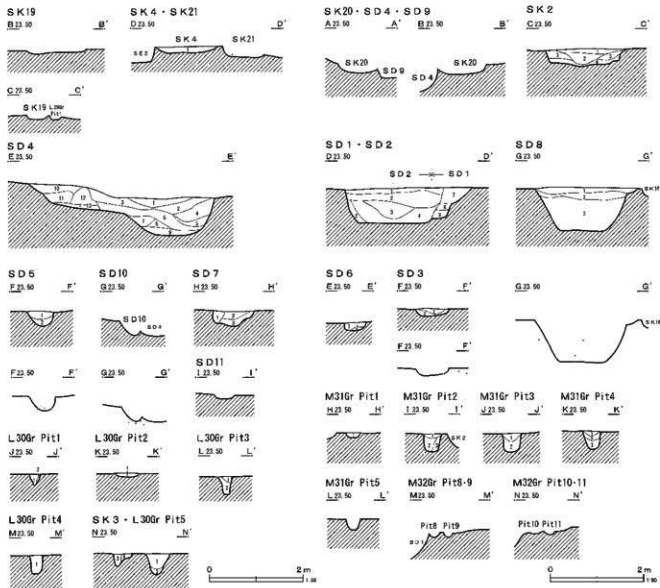
遺物は出土していない。

E区第21号土坑(第95・96図)

L30グリッドに位置し、南部は調査区外にある。

E区第4号溝跡と重複する。

平面形態は、不整形である。東西長0.88m、南北長1.35m以上、確認面からの深さ0.20mを測る。



E区第4号土層

- 1 暗褐色土 炭土・炭化物粒子・黄褐色ブロック

E区第4号溝跡

- 1 灰褐色粘質土
2 灰褐色粘質土 植物性腐食物
3 灰褐色粘質土 炭化物粒子・黄褐色砂質土
4 灰褐色粘質土 炭化物粒子
5 灰褐色粘質土 炭化物粒子多
6 灰褐色粘質土 青灰色粘土ブロック
7 暗灰褐色粘質土 炭化物多
8 灰褐色粘質土 炭化物多
9 灰褐色粘質土 青灰色粘土ブロック多
10 暗褐色土 黄褐色ブロック
11 暗褐色土 黄褐色ブロック多 焼土粒子・炭化物粒子多
12 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子
13 暗褐色土 黄褐色ブロック多

E区第5号溝跡

- 1 暗褐色土 均一性高い層
2 暗褐色土 黄褐色土多量

E区第7号溝跡

- 1 暗褐色土 炭化物粒子多量
2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・黄褐色土多
3 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多 黄褐色土少

E区 L300grid Pit1

- 1 暗褐色土 炭土・炭化物粒子
2 暗褐色土 黄褐色土ブロック

E区 L300grid Pit2

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック
E区 L300grid Pit3

- 1 暗褐色土 黄褐色土多
2 暗褐色土 炭化物粒子多

E区 L300grid Pit4

- 1 暗褐色土 黄褐色土少
E区第3号土層

- 1 暗褐色土 炭化物粒子
2 暗褐色土 黄褐色ブロック多
L300grid Pit5

- 3 暗褐色土 炭化物粒子
4 暗褐色土 黄褐色ブロック多

E区第2号土層

- 1 暗褐色土 鉄分少量
2 暗褐色土 砂少量
3 暗灰褐色土 暗色上

E区第2号溝跡

- 第1号溝跡を第2号溝跡が切る
1 暗褐色土 鉄分多
2 暗褐色土 炭化物少量
3 黒褐色土 炭化物粒子多量
4 黒褐色土 粘性強 均一性の高い層

E区第1号溝跡

- 7 黒褐色土 黄褐色土 鉄分
8 黒褐色土 暗褐色土少量
9 暗灰褐色土 青灰色土ブロック多

E区第6号溝跡

- 1 暗褐色土 やや砂質
2 暗褐色土 やや砂質

E区第3号溝跡

- 1 暗褐色土 炭化物粒子少量
2 暗黄褐色土

E区第8号溝跡

- 1 暗褐色土 鉄分多
2 暗灰褐色粘質土 焼土粒子・炭化物粒子少
3 灰褐色粘土 青灰色粘土ブロック多

M31Gr Pit1

- 1 灰褐色粘質土 黄褐色ブロック

M31Grid Pit2

- 1 灰褐色粘質土
2 暗灰褐色粘質土 黄褐色上

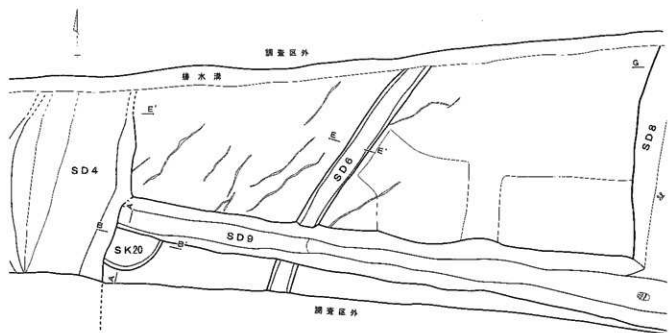
M31Grid Pit3

- 1 灰褐色粘質土
2 暗灰褐色粘質土 黄褐色上

M31Grid Pit4

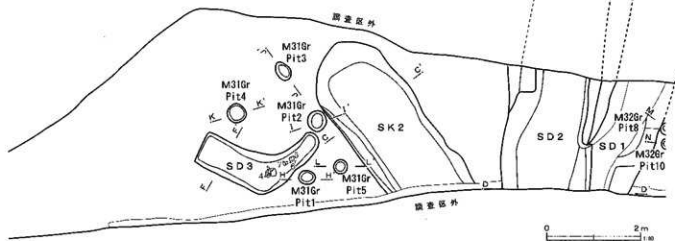
- 1 灰褐色粘質土
2 暗灰褐色粘質土 黄褐色上
3 暗灰褐色粘質土

第96図 E区第2号井戸跡・土層・溝跡①(2)・②(2)



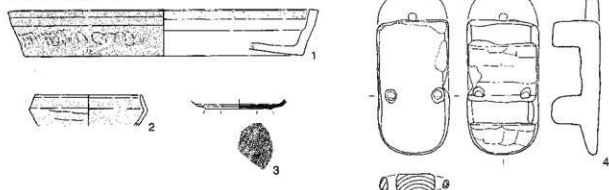
M31

M32

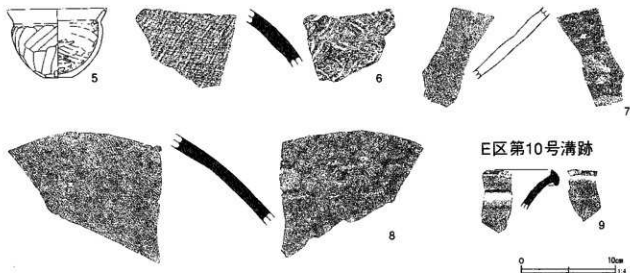


第97网 E区土壕・溝跡② (1)

E区第2号井戸跡



E区第4号溝跡



E区第10号溝跡



第98図 E区土壌・溝跡①出土遺物

第22表 E区第2号井戸跡・土壌・溝跡①出土遺物観察表 (第98図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径・残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
1	瓦質土器	焙烙	(32.8)	[4.9]	(29.0)	②H	A	黒灰	SE2-L30Gr		
2	土師器	椀	(11.2)	[3.3]	5	②DGH	B	赤	SE2 内外面赤彩		
3	須恵器	坏		[1.0]	(7.0)	5	②APH	B	灰	SE2 南北念座 手持ヘラ?	
5	土師器	椀	(10.5)	[7.2]	3.0	30	②ADH	B	黒黒	SD4	48-3
6	須恵器	甕				②AH	B	灰白	SD4 自然輪付着		
7	陶器	甕				②ACHJ	B	にぶい赤褐色	SD4 常滑? 二次的被熱		
8	須恵器	甕			5	②AH	B	暗灰	SD4		
9	須恵器	甕				②H	B	灰	SD10 内面自然輪付着		

遺物は出土していない。

E区第4号溝跡 (第95・96図)

L31グリッドに位置し、北側・南側ともに調査区外に至る。E区第9・10号溝跡と交差し、E区第20・21号土壌と重複する。

検出長3.22m、幅2.56～3.99m、確認面からの深さ0.21～0.59mを測る。溝底標高は、東端付近22.19m、西側付近22.92m、南側付近22.26m、北端

付近22.29mを計測する。走行方位は、N-13° - Eを指す。

遺物は須恵器壺・甕片、土師器椀等が出土している。

E区第5号溝跡 (第95・96図)

L30グリッドに位置し、北西側は調査区外に至る。

検出長4.36m、幅0.42～0.78m、確認面からの深

さ0.06～0.32mを測る。溝底標高は、北端付近22.97m、中央付近22.83m、南端付近23.10mを計測する。走行方位は、N-58° -Wを指す。

遺物は出土していない。

E区第7号溝跡(第95・96図)

L30グリッドに位置し、E区第1号壑穴状遺構跡と重複する。

検出長4.42m、幅0.82～1.12m、確認面からの深さ0.12～0.36mを測る。溝底標高は、北端付近22.71m、中央付近22.78m、南端付近22.98mを計測する。走行方位は、N-28° -Eを指す。

遺物は出土していないが、覆土の堆積状況から、大地震に伴う噴砂痕以後の遺構である。

E区第11号溝跡(第95・96図)

M30グリッドに位置し、南側は調査区外に至る。

検出長2.38m、幅0.44～0.68m、確認面からの深さ0.04～0.11mを測る。溝底標高は、北端付近23.13m、中央付近23.10m、南端付近23.73mを計測する。走行方位は、N-29° -Wを指す。

遺物は微細な破片のため図示し得ない。

E区第2号土壙(第96・97図)

M31グリッドに位置し、南部は調査区外にある。

平面形態は、長方形である。東西長1.74m、南北長4.2m以上、確認面からの深さ0.25mを測る。南北軸方位は、N-35° -Eを指す。

遺物は弥生壺形土器が出土している。

E区第20号土壙(第96・97図)

L31グリッドに位置し、E区第4・9号溝跡と重複する。

平面形態は、円形と思われる。現存長は東西1.02m、南北0.86m、確認面からの深さ0.28mを測る。

遺物は出土していない。

E区第6号溝跡(第96・97図)

L31グリッドに位置し、北側・南側ともに調査区外に至る。E区第9号溝跡と交差する。

検出長5.6m、幅0.42～0.51m、確認面からの深さ

0.03～0.18mを測る。溝底標高は、北端付近22.82m、中央付近22.77m、南端付近22.74mを計測する。走行方位は、N-148° -Wを指す。

遺物は、須恵器長頸瓶片が出土している。

E区第3号溝跡(第96・97図)

M31グリッドに位置する。

屈曲する溝状の遺構で、検出長3.04m、幅0.38～0.84m、確認面からの深さ0.06～0.20mを測る。溝底標高は、西端付近23.07m、中央付近23.00m、東端付近23.07mを計測する。走行方位は、N-114° -E→N-45° -Eを指す。

遺物は、古墳時代前期の土師器壺・壺・椀等が出土している。

E区第1・2号溝跡(第96・97図)

M32グリッドに位置し、ほぼ平行する溝跡である。北側は調査区外を経て、E区第1地点のE区第8号溝跡に繋がるものと予想される。南側は調査区外に至る。

E区第1号溝跡は、検出長2.42m、幅1.32～1.52m、確認面からの深さ0.57～0.61mを測る。溝底標高は、北端付近22.28m、中央付近22.25m、南端付近22.32mを計測する。走行方位は、N-17° -Eを指す。

E区第2号溝跡は、検出長2.48m、幅1.62～1.87m、確認面からの深さ0.61～0.77mを測る。溝底標高は、北端付近22.27m、中央付近22.15m、南端付近22.11mを計測する。走行方位は、N-175° -Wを指す。

遺物は、須恵器壺片・土師器坏等が出土している。

E区第8号溝跡(第96・97・101図)

L32グリッドに位置し、E区第17号土壙と重複する。北側は調査区外にいたり、また調査区南際でE区第9号溝跡と交差する。南側は調査区外を経て、E区第2地点のE区第1・2号溝跡に繋がるものと予想される。

検出長5.08m、幅2.32～2.42m、確認面からの深

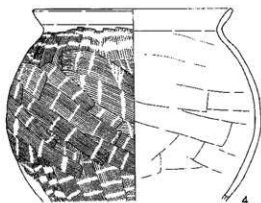
E区第2号土壤



E区第1~2号沟迹



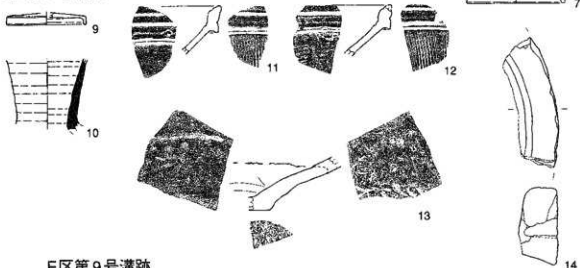
E区第3号沟迹



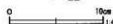
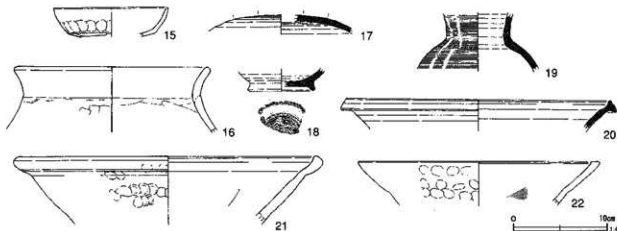
E区第6号沟迹



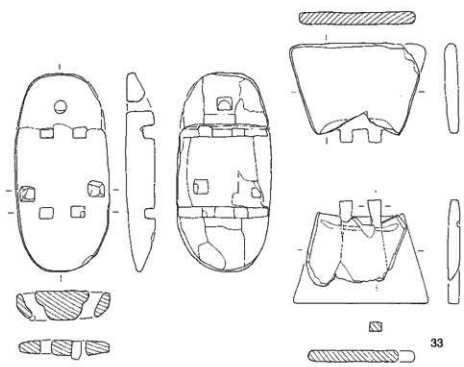
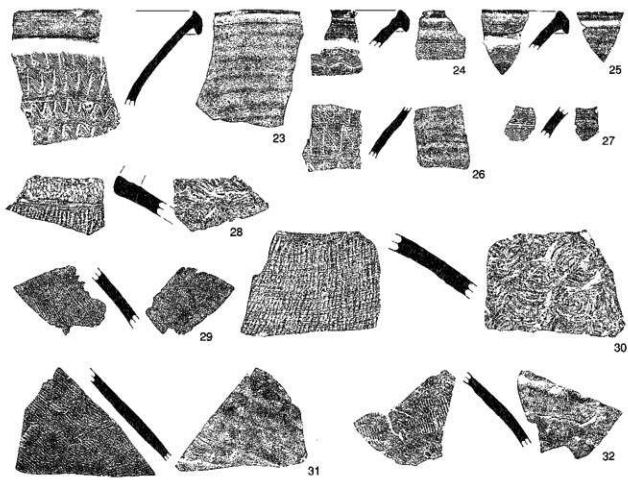
E区第8号沟迹



E区第9号沟迹



第99图 E区土壤·沟迹②出土遗物 (1)



第100图 E区土坑·溝跡②川土遺物 (2)

第23表 E区土坑・溝跡②出土遺物観察表 (第99・100図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	弥生	壺	(8.8)	[3.3]		10	②ADGHI	B	にぶい・黄緑	SK2-M31Gr 赤彩	49-1
2	土師器	坏	(12.0)	[2.9]		15	②CDI	B	にぶい・橙	SD1-2	
3	須恵器	甕					②ACHI	B	暗灰	SD1-2 木野産 外面自然釉付着	
4	土師器	壺	(20.8)	[20.3]		30	②ADUJ	B	灰褐	SD3No3	
5	土師器	壺	(12.6)	[9.7]		10	②ADGHIJ	B	にぶい・橙	SD3No1-M31Gr	
6	土師器	皿	(18.0)	[2.5]		5	②AGH	B	橙	SD3No1-M31Gr	
7	土師器	高坏		[7.9]	(10.2)	10	②GIT	B	にぶい・橙	SD3No2	48-4
8	須恵器	長頸壺					②AFH	B	灰	SD6 南北金産	
9	灰釉陶器	壺	(8.3)	[1.3]		25	②GH	B	灰	SD8	
10	須恵器	長頸壺		[7.4]		5	①AFHI	A	灰	SD8 南北金産 内外面自然釉付着	
11	陶器	播鉢		[5.1]		5	①AH	A	暗赤褐	SD8 堺or備前 18C代? SD8-12と同一個体	
12	陶器	播鉢		[5.5]		5	①AH	A	暗赤褐	SD8-11と同一個体	
13	陶器	壺		[5.7]	(19.4)		②AHJ	A	にぶい・橙	SD8	
15	土師器	坏	(12.0)	[3.1]		20	②ACDGI	B	にぶい・橙	SD9	
16	土師器	甕	(20.2)	[6.9]		5	②CGH	B	にぶい・橙	SD9	
17	須恵器	壺		[2.1]		15	②BDF	B	灰	SD9 南北金産	
18	須恵器	高台付坏		[2.3]	(6.8)		②CGH	C	灰黄褐	SD9 末野産	
19	須恵器	壺		[6.2]		5	②AHI	B	褐灰	SD9 末野産 自然釉付着	
20	須恵器	甕	(28.0)	[3.3]		5	②AI	B	灰	SD9 末野産 自然釉付着	
21	瓦質土器	鉢	(32.0)	[7.2]		5	②AI	B	褐灰	SD9No2	
22	瓦質土器	鉢	(25.6)	[4.7]		5	②DH	C	褐灰	SD9	
23	須恵器	甕					①AII	A	暗灰	SD9 末野産	
24	須恵器	甕					②AFHI	A	灰	SD9 南北金産	
25	須恵器	甕				5	②AII	B	灰	SD9 末野産	
26	須恵器	甕					②ACHI	B	暗灰	SD9 末野産 内面自然釉付着	
27	須恵器	甕					②AHI	B	暗灰	SD9 末野産 内面自然釉付着	
28	須恵器	甕					③AII	B	灰白	SD9 末野産	
29	須恵器	甕					②AFHI	B	灰	SD9 南北金産	
30	須恵器	甕					②AGIJJ	B	灰白	SD9 末野産 自然釉付着	
31	須恵器	甕					②AIIJ	B	灰白	SD9 末野産	
32	須恵器	甕					②AGHI	B	灰黄褐	SD9 末野産	

き0.83~0.91mを測る。溝底標高は、北端付近2207m、中央付近2201m、南端付近2205mを計測する。走行方位は、N-175°-Wを指す。

遺物は、甕・播鉢、灰釉陶器の壺、須恵器長頸壺や石臼片が出土している。

第99図14は、石臼の縁部付近の破片である。現存長13.7cm・幅6.8cm・現存高8.1cmである。

E区第9・10号溝跡 (第95・96・97・101図)

E区第9・10号溝跡は、E区第4号溝跡を挟む同一の溝跡である。L30~33グリッドに位置し、検出長23.5mにおよぶ。幅0.43~1.36m、確認面からの深さ0.20~0.86mを測る。溝底標高は、西端付近2297m、中央付近2217m、東端付近2235mを計測する。走行方位はN-97°-Eを指す。

位置関係から、D区第19号溝跡とも同一の溝であると考えられる。またD区第19号溝跡は東端部が直角に屈曲する区画溝と推定されることから、一辺54m (30間)ほどの区画が形成される。残念ながら、E区第10号溝跡西端は立ち上がって溝が取束し、D区第19号溝跡のような屈曲はみられない。さらに、E区第9・10号溝跡と直交するように、平行するE区第4号溝跡とE区第8号溝跡が重複するが、関連性は明確にできない。

遺物は中世の鉢、須恵器蓋内類・壺・甕、土師器坏・甕、木製下駄が出土している。

第100図33は、別造りの台と歯を組み合わせた差歯下駄である。台部背面の2列の抉りに歯部を差し込み、台部の柄孔には歯部の二つの出柄が

E区第5号土壌

- 1 暗褐色土 黄褐色ブロック
- 2 暗褐色土 鉄分
- 3 暗褐色土 炭化物粒子少
- 4 暗褐色土 黄褐色ブロック多
- 5 暗褐色土 黄褐色ブロック多
- 6 暗褐色粘質土

E区第6号土壌

- 1 暗褐色土 黄褐色砂質土
- 2 暗褐色土 黄褐色砂質土
- 3 暗黄褐色土 やや粘質

E区第9号土壌

- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色土 黄褐色ブロック
- 3 暗褐色土 炭化物・焼土粒子・鉄分多
- 4 暗褐色粘質土 焼土・炭化物粒子
- 5 暗褐色土 炭化物・焼土粒子・鉄分多
- 6 暗褐色粘質土 焼土・炭化物粒子
- 7 暗褐色土 焼土・炭化物粒子
- 8 暗褐色土 鉄分
- 9 暗褐色土 粘質土

E区第10号土壌

- 1 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒子・鉄分・黄褐色ブロック
- 2 暗褐色土 炭化物粒子・焼土粒子少 鉄分・黄褐色ブロック
- 3 暗褐色土 黄褐色粘質土

E区第13号土壌

- 1 暗褐色土 炭化物・焼土多
- 2 暗褐色土 炭化物・焼土多量
- 3 暗褐色土 炭化物・焼土多 やや粘質
- 4 暗褐色土 粘質土 炭化物・焼土少
- 5 暗褐色土

E区第14号土壌

- 1 暗褐色土 鉄分多
- 2 暗褐色土 やや粘質

E区第15号土壌

- 1 暗褐色土 黄褐色ブロック多
- 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子
- 3 暗褐色土 焼土粒子 炭化物粒子多

E区第16号土壌

- 1 暗褐色土 焼土・炭化物粒子多
- 2 暗褐色土 やや粘質
- 3 暗褐色土 焼土多 炭化物粒子多量

E区第17号土壌

- 1 暗褐色土 黄褐色土 鉄分多
- 2 暗褐色土 やや粘質
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 黄褐色ブロック多

E区第9号溝跡

- 1 暗褐色土 鉄分多
- 2 灰褐色粘土 青灰色粘土ブロック
- 3 灰褐色粘土

M32Grid Pit1

- 1 灰褐色粘質土 黄褐色ブロック
- 2 黄褐色ブロック+灰褐色粘土

M32Grid Pit2

- 1 灰褐色粘質土 黄褐色ブロック
- 2 黄褐色ブロック+灰褐色粘土

M32Grid Pit3

- 3 灰褐色粘質土 黄褐色ブロック

M32Grid Pit4

- 4 灰褐色粘質土 黄褐色ブロック
- 5 黄褐色ブロック+灰褐色粘土

M32Grid Pit5

- 1 灰褐色粘質土 黄褐色ブロック
- 2 黄褐色ブロック+灰褐色粘土
- 3 灰褐色粘質土 黄褐色ブロック少

M32Grid Pit6

- 1 黄褐色ブロック
- 2 灰褐色粘質土 黄褐色ブロック
- 3 灰褐色粘質土 黄褐色ブロック多

差し込まれて固定される。台部の平面形は楕円形で、上面はほぼ平坦である。断面形の縦方向下面が弧を描き、横方向は上面より下面の幅が狭い台形である。歯部は前後に開かずに、平行である。歯部外形は下端が台部より広がる台形である。下面は使用痕が顕著で、磨り減り・潰れが目立つ。歯部柄は上部が広い形状で、断面方形である。歯高は80cmである。鼻緒を装着するための、前窓は前歯の前に、後窓は後歯の前に穿つ。前窓は左右に片寄らない中央に位置する。前窓は円形、後窓は方形である。台部が長さ207cm・幅100cm・厚さ29cm、歯部が推定全高104cm・推定幅145cm・厚さ13cmである。木取りは、いずれも証目である。

E区第5号土壌 (第101図)

L32グリッドに位置し、E区第12号溝跡と重複する。

平面形態は、楕円形である。長軸長1.24m、短軸長0.64m、確認面からの深さ0.29mを測る。長軸

方位は、N-11° -Eを指す。

遺物は微細な破片のため図示し得ない。

E区第6号土壌 (第101図)

L32グリッドに位置し、東端部は調査区外にある。

平面形態は、楕円形である。長軸長1.36m、短軸長0.78m以上、確認面からの深さ0.20mを測る。長軸方位は、N-4° -Eを指す。

遺物は、出土していない。

E区第9号土壌 (第101図)

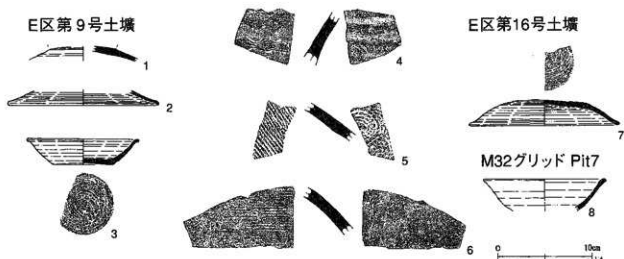
L32グリッドに位置する。

平面形態は、隅丸長方形である。長軸長1.81m、短軸長1.02m、確認面からの深さ0.43mを測る。長軸方位は、N-51° -Eを指す。

遺物は、須恵器蓋坏・甕等が出土している。

E区第10号土壌 (第101図)

L32グリッドに位置し、E区第9・12号溝跡と重複する。



第102図 E区土壌・溝跡③出土遺物

第24表 E区土壌・溝跡③出土遺物観察表 (第102図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存%	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	蓋		[1.5]		5	②FHI	A	灰	SK9 南北企産	49-3
2	須恵器	蓋	(15.8)	[1.6]		5	②AIIJ	B	灰	SK9 末野産	
3	須恵器	坏	(11.6)	2.7	6.4	60	③AEGJ	B	灰	SK9 末野産	
4	須恵器	蓋					②AHJ	A	灰	SK9 末野産	
5	須恵器	蓋					②AIIJ	B	灰	SK9 末野産	
6	須恵器	蓋					②AFHI	B	外面:灰白 内面:灰	SK9 南北企産 外面自然釉付着	
7	須恵器	蓋	(15.6)	2.6	(6.6)	20	②ACHI	B	灰	SK16 末野産	
8	須恵器	坏	(12.4)	[3.4]		5	②F	B	灰	M32G Pit7 南北企産	

平面形態は、楕円形である。長軸長1.37m、短軸長0.94m、確認面からの深さ0.32mを測る。長軸方位は、N-35° -Eを指す。

遺物は微細な破片のため図示し得ない。

E区第11号土壌 (第101図)

L33グリッドに位置し、調査区北東隅に所在する。平面形態は、円形と思われる。検出された南北長0.72m、確認面からの深さ0.11mを測る。

遺物は、出土していない。

E区第13号土壌 (第101図)

L32グリッドに位置し、南側の多くは調査区外にある。E区第9号溝跡と重複する。

平面形態は、明確ではない。東西長1.42m、確認面からの深さ0.43mを測る。

遺物は、出土していない。

E区第14号土壌 (第101図)

L32グリッドに位置する。

平面形態は、円形である。長軸長0.58m、短軸長0.56m、確認面からの深さ0.43mを測る。長軸方位は、N-56° -Eを指す。

遺物は、出土していない。

E区第15号土壌 (第101図)

L32グリッドに位置し、北半部は調査区外にある。

平面形態は、不整形である。東西長1.16m、確認面からの深さ0.31mを測る。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

E区第16号土壌 (第101図)

L32グリッドに位置し、E区第17号土壌と重複する。

平面形態は、不整形楕円形である。長軸長0.90m、短軸長0.58m、確認面からの深さ0.29mを測る。長軸方位は、N-60° -Wを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

E区第17号土壙 (第101図)

L32グリッドに位置し、E区第16号土壙・E区第8号溝跡と重複する。

平面形態は、楕円形である。長軸長1.00m以上、短軸長0.80m、確認面からの深さ0.33mを測る。長軸方位は、N-56° -Wを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

E区第12号溝跡 (第101図)

(3) その他の遺物

発見されたグリッドが明確ではあるが、その一方で、帰属する遺構が不明な遺物を、グリッド遺物として第103図に掲載した。

3～6は、L30グリッドから検出された。

3は、土製の白玉である。長さ1.4cm・径1.1cm・孔径0.3cm・重さ26gである。

4は、土玉である。長さ1.3cm・径1.6cm・孔径0.2cm・重さ26gである。

5は、球状の土製品で、用途は不明である。径2.7cm・重さ17.8gである。表面には指頭圧痕が明確に残る。

L32・33グリッドに位置する。北側は調査区外に至り、南側はE区第9号溝跡と交差する。E区第5・10号土壙と重複する。

検出長430m、幅0.50～1.16m、確認面からの深さ0.05～0.10mを測る。溝底標高は、北端付近22.96m、中央付近22.98m、南端付近22.88mを計測する。走行方位は、N-154° -Wを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

6は、板石塔婆である。現存高19.7cm・現存幅15.1cm・厚さ2.2cmである。刻字は不明瞭な部分が多いが、「□十日 □□」紀年銘と供養者名(?)が刻まれている。

19は、L32グリッド下層から検出された丸瓦である。現存長5.6cm・現存幅4.9cm・厚さ1.7cmである。胎土の状態は普通で、赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通で、色調は灰色である。

また、いずれにも属さない遺物は、表採遺物として第104図に掲載した。

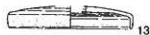
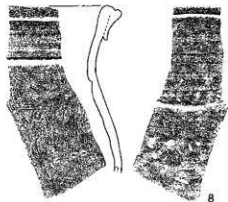
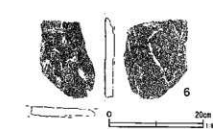
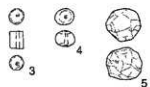
第25表 E区グリッド遺物観察表 (第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	高坏		[5.7]		20	②ACDG	B	橙	L30Gr№16 雲母多	
2	須恵器	甕					②ACHI	B	灰	L30Gr 末野産	
7	陶器	碗		[1.7]	5.0	20	②I	B	灰黄	L31Gr 瀬戸美濃(黄瀬戸?) 灰釉 17C中頃?	
8	陶器	羹					②ACGIII	A	暗灰	L31Gr 常滑	
9	須恵器	羹					②ACH	B	灰	L31Gr 末野産	
10	須恵器	長頸壺					①AHI	A	オリーブ灰	L31Gr 末野産 外面自然釉付着	
11	須恵器	甕					②AFHI	B	灰	L31Gr 南比企産	
12	土師器	高坏		[9.8]		35	①AGH	B	灰褐	L32Gr	
13	灰釉陶器	壺	(13.0)	[2.3]		10	②HI	A	灰	L32Gr 須磨産 蓋も焼き痕	
14	須恵器	坏		[1.9]	(8.6)	10	②AFHI	B	灰	L32Gr 南比企産	
15	須恵器	羹					②AHIJ	A	オリーブ黒	L32Gr-SD9 末野産 内面自然釉付着	
16	須恵器	羹					②AFH	A	暗灰	L32Gr 南比企産	
17	須恵器	甕					②AHLJ	B	灰	L32Gr 末野産	
18	須恵器	甕					②AFHJ	B	灰	L32Gr 南比企産	
20	土師器	高坏		[4.3]		20	②ADGHIJ	B	橙	M30Gr 門孔3	
21	須恵器	長頸壺		[4.6]		5	①HI	A	灰	M31Gr 末野産	

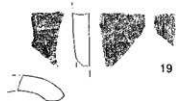
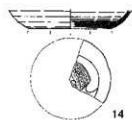
L30グリッド



L31グリッド



L32グリッド



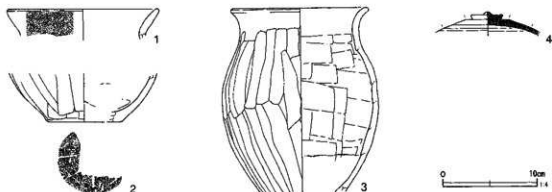
M30グリッド



M31グリッド



第103図 E区グリッド遺物



第104図 E区表採遺物

第26表 E区表採遺物観察表 (第104図)

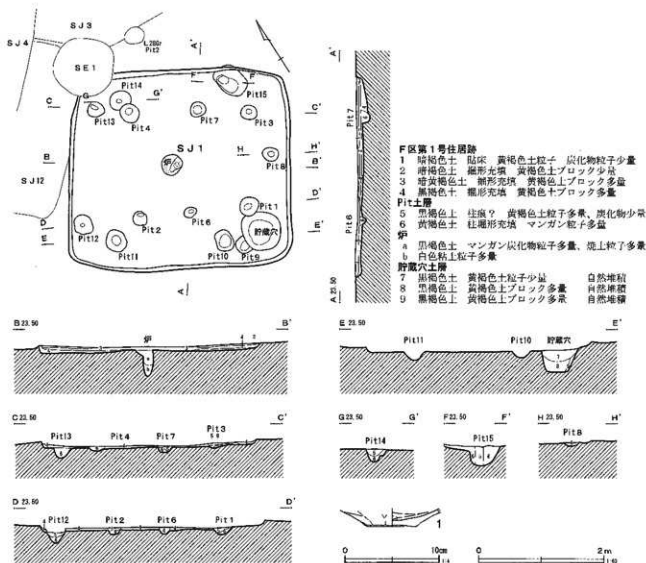
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	弥生	壺	(16.0)	[3.3]		5	②ABH	B	にぶい黄褐色	外面赤彩	
2	土師器	壺		[5.2]	(7.6)	10	②A	B	褐灰	木炭痕	
3	土師器	壺	(14.0)	[19.4]		60	②ACHT	B	にぶい橙		49-4
4	須恵器	壺		[2.6]		15	②BEHI	A	灰	末野産	

3. F区の遺構と遺物

F区は、L・M21～29グリッドの延長約90mに及ぶ範囲である。東側のE区、西側のG区との境界は基本的に無く、調査年度及び調査手順の関連から区分けを行った。発掘調査は、第1地点・第2地点に分割して実施した。F区第1地点からは、竪穴住居跡11軒・掘立柱建物跡2棟・溝跡2列・周溝墓2基・井戸跡3基・土壇14基・溝跡10条・

水田跡3区画・ピットが発見されている。一方、F区第2地点からは、調査区を南北に貫く河川跡が確認され、西岸部では護岸施設が検出されている。この護岸施設は、規則的に打ち込まれた杭と柱状・板状の木材によって築かれたものである。このなかから、榎部倉矧のための加工が施された板倉造り建物の壁板が出土している。

(1) 住居跡



第106図 F区第1号住居跡・出土遺物

F区第1号住居跡（第105図）

L28・M28グリッドに位置し、F区第12号住居跡・F区第1号井戸跡と重複する。

平面形態は、東西に長軸をもつ方形である。長軸長3.48m、短軸長3.02mを測り、長軸方位はN-54°-Wを指す。遺構確認時にほぼ床面付近まで露呈し、覆土最上層が貼床層となっている。その下部に掘形充填層が堆積する。確認面から掘形底面までの深さは、0.06~0.16mほどである。

主柱穴は、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4・Pit6・Pit7の6本である。

炉は地下炉で、住居の中央付近に位置する。長軸0.34m×短軸0.32mの円形範囲が焼土化する。炉の下にはピット状の掘り込みが認められ、上層には多量の焼土粒子が堆積する一方で、下層には多量の白色粘土粒子が検出されている。

貯蔵穴は南側コーナー部に付設されている。長軸0.34m×短軸0.60mの隅丸方形で、床面からの深さは0.33mを測る。底面は平坦である。

ピットは、Pit8・Pit9・Pit10・Pit11・Pit12・Pit13・Pit14・Pit15の8本である。南東壁中央の壁際に位置するPit8には、出入り口施設に伴う機能（梯子穴）が想定される。

遺物は、土師器壺が出土している。

F区第2号住居跡（第106図）

L28・L29グリッドに位置し、北側は調査区外にある。F区第3・4号住居跡と重複するが、出土遺物から新旧関係を明確にすることは難しい。覆土の堆積状況から、F区第4号住居跡が最も新しく、F区第2号住居跡→F区第3号住居跡の順に古くなる。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形である。東西長3.80m以上、幅3.04m、確認面から床面までの深さ0.10~0.12mを測る。主軸方位は、N-

12°-Eを指す。床面には貼床が施され、確認面から掘形底面までの深さは0.13m~0.19mほどである。

主柱穴はPit1・Pit2・Pit5の3本で、残る1本はF区第4号住居跡に削平されている。

炉は地床炉で、南東壁にやや寄った箇所に位置する。長軸0.48m×短軸0.46mの円形範囲が焼土化する。貼床面よりもやや窪み、焼土ブロックや炭化物が堆積する。

ピットはPit3・Pit4の2本が検出されているが、用途は不明である。

壁溝・貯蔵穴等の施設は、検出されない。

遺物は土師器台付甕、弥生壺形土器等が出土している。

F区第3号住居跡（第107図）

L28・L29グリッドに位置する。重複するF区第2・4号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況から最も古い。また、F区第1号井戸跡とも重複する。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形である。長軸長（東西）3.13m以上、短軸長（南北）2.41m、確認面から床面までの深さ0.06~0.10mを測る。長軸方位は、N-86°-Wを指す。床面には貼床が施され、掘形底面までの深さは0.10~0.13mほどである。

主柱穴は、Pit2・Pit3の2本である。

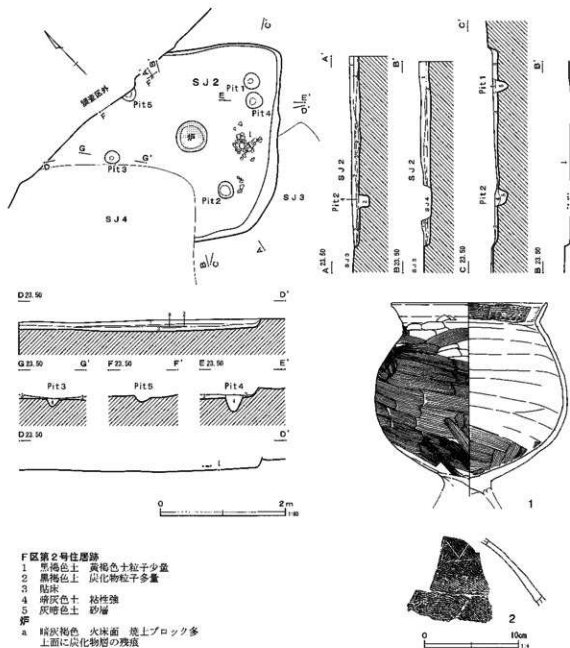
炉・壁溝・貯蔵穴等の施設は検出されない。

ピットは、Pit1・Pit4・Pit5・Pit6の4本が検出されている。このうち南壁中央の壁際に位置するPit6には、出入り口施設に伴う機能（梯子穴）が想定される。

遺物は、おもに住居跡東半部に分布する。土師器甕・器台、弥生壺形土器片や打製石斧が出土している。

第27表 F区第1号住居跡出土遺物観察表（第105図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	壺		1.9	3.2	10	②AGJ	B	にぶい橙		



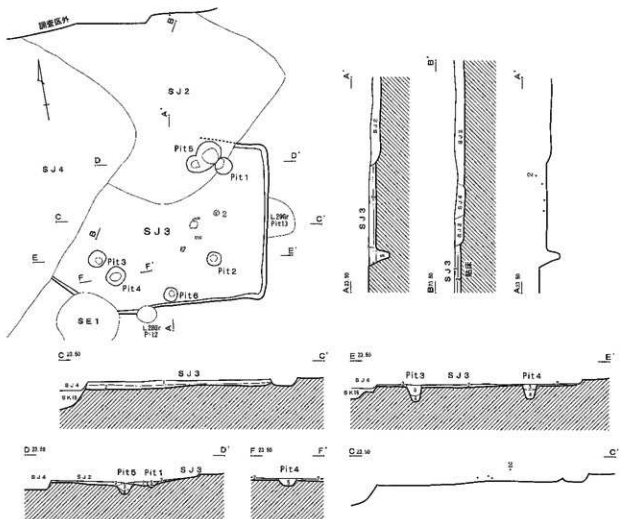
第106図 F区第2号住居跡・出土遺物

第28表 F区第2号住居跡出土遺物観察表 (第106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	台付壺	16.3	[20.3]		90	①ABEG	B	にぶい橙	No.1 外面煤付着	50-1
2	弥生	壺					②AGH	B	にぶい橙	縄文+刺面文+赤彩	

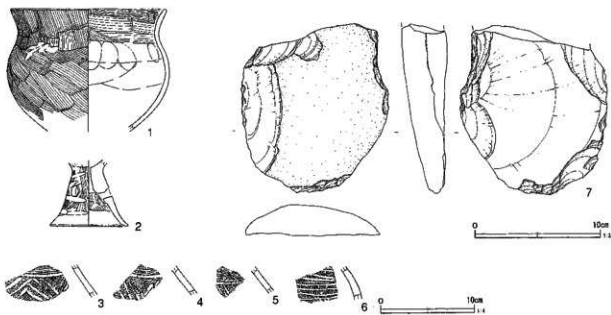
第29表 F区第3号住居跡出土遺物観察表 (第107図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	台付甕	(16.0)	[12.9]		25	①AGHI	B	暗赤褐	Pit5	50-2
2	土師器	鴨白		[6.9]	8.1	50	②ACGHJ	B	にぶい橙	No.1 円孔?	
3	弥生	壺					③ADGH	B	にぶい黄橙		
4	弥生	壺					④CDGHI	B	灰黄褐	床下	
5	弥生	壺					⑤CGH	B	にぶい黄橙?		
6	弥生	壺					⑥DHI	B	にぶい黄橙		



- F区第3号住居跡
- 1 暗黄褐色土 マンガン粒子多量
 - 2 粘土
 - 3 黒褐色土 柱抜取痕 黄褐色土ブロック少量 炭線
 - 4 暗褐色土 柱掘り充填 砂質 マンガン粒子多量
 - 5 黒褐色土 黄褐色土ブロック少量

0 2m
1:20



第107图 F区第3号住居跡・出土遺物

7は打製石斧で、刃部付近の1/2程度の残存品である。現存長13.3cm・幅11.7cm・厚さ3.7cmである。石材はホルンフェルスである。

F区第4号住居跡

F区第17・18・19・20号土壌 (第109図)

L28グリッドに位置し、北部は調査区外にある。1軒の住居跡と、その壁際に平行する4基の土壌群である。これらの土壌は、いずれも住居跡の貼床下から確認され、位置関係も加味すると、住居跡の掘形と判断される。

覆土の体積状況から、F区第2・3号住居跡よりも新しい。また、F区第11・12号住居跡、F区第1号方形周溝墓と重複するが、新旧関係は不明である。

F区第4号住居跡の平面形態は、方形である。主軸長(南北)4.85m、東西長3.0m以上、確認面から床面までの深さ0.17~0.18mを測る。主軸方位は、N-42°-Eを指す。床面には貼床が施され、北辺・東辺・南辺に沿って土壌状の掘形が認められる。確認面から掘形底面までの深さは0.22~0.25mほどである。

主柱穴は、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4の4本である。住居跡の四隅に寄って位置する。Pitは2基検出され(炉A・炉B)、いずれも地床炉である。炉Aが長軸0.68m×短軸0.51m、炉Bが長軸0.7m×0.6mの円形範囲に焼土化する。炉Bには床面からの深さ0.15mほどの掘形がみられる。炉Aと炉Bの新旧関係は明確ではないが、掘形をもつ炉Bのほう

が先行する可能性が高い。貯蔵穴・壁溝等の施設は、検出されていない。

掘形と判断した4基の土壌は、幅狭の溝状土壌3基(F区第18~20号土壌)と、重複する1基(F区第17号土壌)である。

F区第17号土壌は、F区第18号土壌と重複する。平面形態は不整形である。南北長1.65m、東西長1.35m以上、確認面からの深さ0.36m~0.47mを測る。南北軸方位はN-45°-Eを指す。

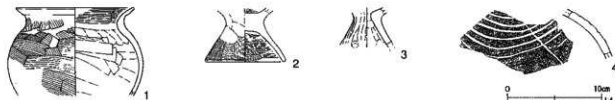
F区第18号土壌は、住居跡東辺と平行する。平面形態は、溝状の不整形である。長軸長2.15m、短軸長0.75m、確認面からの深さ0.31m~0.50mを測る。長軸長方位はN-37°-Eを指す。

F区第19号土壌は、住居跡南辺と平行する。平面形態は、溝状の楕円形である。長軸長2.10m、短軸長1.03m、確認面からの深さ0.25m~0.42mを測る。長軸長方位はN-36°-Wを指す。

F区第20号土壌は、住居跡北辺と平行する。平面形態は、長方形である。長軸長2.42m、短軸長0.59m、確認面からの深さ0.31m~0.38mを測る。長軸長方位はN-38°-Wを指す。

遺物は、住居跡北東コーナー付近のPit1周辺部と掘形のF区第19号土壌上面にまとまった分布がみられる。土師器甕・壺・高環等のほかに、砥石も出土している。

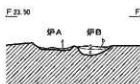
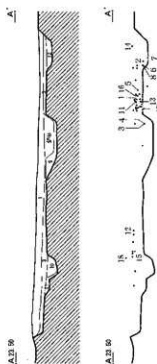
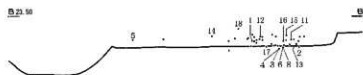
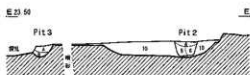
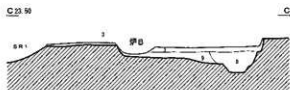
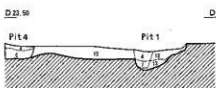
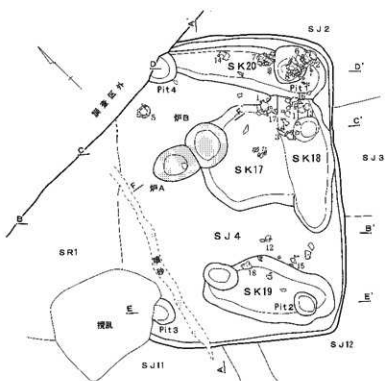
第110図23は、凝灰岩製の砥石である。現存長7.1cm・残存幅6.8cm・厚さ1.8cm・重さ151.4gである。



第108図 F区第2・3・4号住居跡出土遺物

第30表 F区第2・3・4号住居跡出土遺物観察表 (第108図)

番号	種別	器種	L径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	台付甕	(12.2)	[9.3]		10	②ABG	B	にぶい褐色		
2	土師器	台付甕		[5.2]	(8.6)	5	②AHJ	B	にぶい褐色	被熱による風化顯著	
3	土師器	器台		[4.2]		60	②ACGIII	B	にぶい褐色		
4	発生	壺					②ADH1	B	にぶい褐色		



F区第4号住居跡

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒多量
- 2 黒褐色土 黄褐色ブロック多量
- 3 黒褐色土 粘床 黄褐色土ブロックの突き止め
- 4 黒褐色土 柱取痕 黄褐色土粒多量
- 5 黒褐色土 柱取 黄褐色土粒子多量
- 6 暗黄褐色土 柱形充填 黄褐色土ブロック多量
- 7 暗黄褐色土 柱形充填 緑黄粘土ブロック多量

伊A

- a 黒灰色土 炭化物層 焼土ブロック少量

伊B

- h 暗褐色土 炭化物層 焼土ブロック多量
c 暗褐色土 炭化物粒子・黄褐色土粒子少量

第18号土層

- 8 黒褐色土 黄褐色土ブロック少量

第17号土層

- 9 黒褐色土 黄褐色土ブロック多量

第19号土層

- 10 黒褐色土 黄褐色土ブロック多量

第20号土層

- 11 黒褐色土 黄褐色土ブロック多量

第12号土層

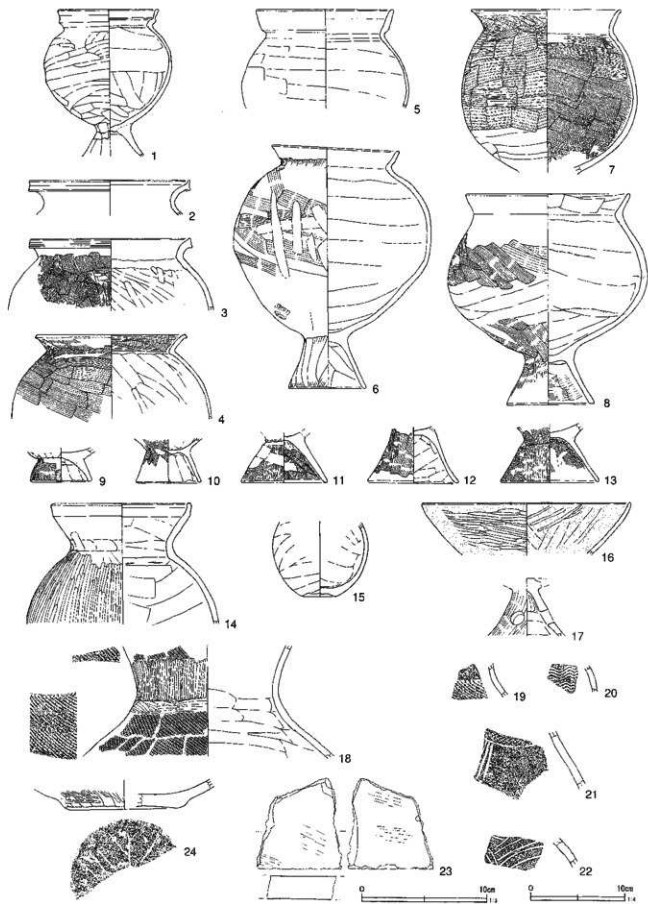
- 12 黒褐色土 黄褐色土ブロック多量

第13号土層

- 13 黒褐色土 黄褐色土ブロック多量



第109図 F区第4号住居跡 F区第17・18・19・20号土層



第110图 F区第4号住居跡出土遺物

第31表 F区第4号住居跡出土遺物観察表(第110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	台付甕	10.4	[15.5]		90	②ACDGHJ	B	にぶい黄橙	No2 塚付蓋	50-3
2	土師器	台付甕	(16.9)	[3.9]		5	②ACDGI	B	にぶい黄橙	No4-9	
3	土師器	台付甕	16.7	[7.6]		10	③AD	B	にぶい黄	No9	50-4
4	土師器	台付甕	(15.8)	[8.8]		10	②ACI	B	にぶい黄	No9	
5	土師器	台付甕	14.4	[10.5]		20	②AGIJ	B	にぶい黄橙	No2-4	50-5
6	土師器	台付甕	13.3	25.3	8.2	85	②ACG	B	にぶい黄	No4-5	50-6
7	土師器	台付甕	15.7	[17.3]		90	②AGHI	B	にぶい橙	No1-4	51-1
8	土師器	台付甕	17.4	22.1	9.1	90	②ACGH	B	にぶい橙	No5	51-2
9	土師器	台付甕		[3.6]	6.2	10	③ACDG	B	にぶい黄橙		
10	土師器	台付甕		[4.7]	6.9	10	②ADGH	B	にぶい赤橙		
11	土師器	台付甕		[5.2]	9.1		③ADH	B	灰門	No6	
12	土師器	台付甕		[5.9]	9.3	5	②ACGH	B	にぶい橙	No18	
13	土師器	台付甕		[6.2]	10.3	10	②AEGI	B	にぶい黄	No7	
14	土師器	壺	(14.5)	[12.7]		25	②ACDGI	B	にぶい橙	No3	51-3
15	土師器	小型壺		[7.8]	3.3	20	②ACDGIJ	B	にぶい橙	No16	51-4
16	土師器	高坏	(22.0)	[5.5]		5	②GH	B	赤	No8 内外面赤影	
17	土師器	高坏		[6.2]		40	②ACDGI	B	橙	No31	
18	弥生	甕		[12.0]		5	②ACHI	B	浅黄橙	No22-L28-19Gr	51-5
19	弥生	甕					②DGHI	B	橙		
20	弥生	甕					②DH	B	褐		
21	弥生	甕					②DGHI	B	にぶい黄橙		
22	弥生	甕					②ACDGI	B	浅黄橙		
24	土師器	甕		[3.0]	(11.4)	5	③ABGHI	B	にぶい橙	底部木炭痕	

F区第5号住居跡(第111図)

L27・L28グリッドに位置し、北部は調査区外にある。壁は南東隅～南西隅周辺部のみが検出されている。F区第11号住居跡と重複し、F区第1号周溝墓よりもあたらしい。

平面形態は、方形と推測される。東西長4.05m以上で、確認面からの深さ0.07～0.15mを測る。南北方向では3.15m以上確認されており、南北軸はN-12°-Eを指す。

ビットは、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4の4本が主柱穴である。Pit1に隣接してPit5が位置し、Pit3は2本ビットの集合体とみることができる。このほかに、南壁の中央壁際に位置するPit7・Pit8には、出入り口施設に伴う機能(梯子穴)が推定できる。これに対し、東壁側に寄った箇所にPit6が所在し、やはり出入り口施設に伴う機能を考えることもできる。主柱穴と出入り口ビットの二重性に注目すると、覆土の堆積状況には把握されていないが、住居跡の建て替えも想定できる。

炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は検出されない。

遺物は、南側出入口部周辺および、西側の2本の主柱穴の間に集中分布する。土師器壺・甕・高坏・器台が出土している。

第113図31は打製石斧で、混入品と思われる。長さ10.0cm・幅9.0cm・厚さ2.7cm、石材は頁岩である。

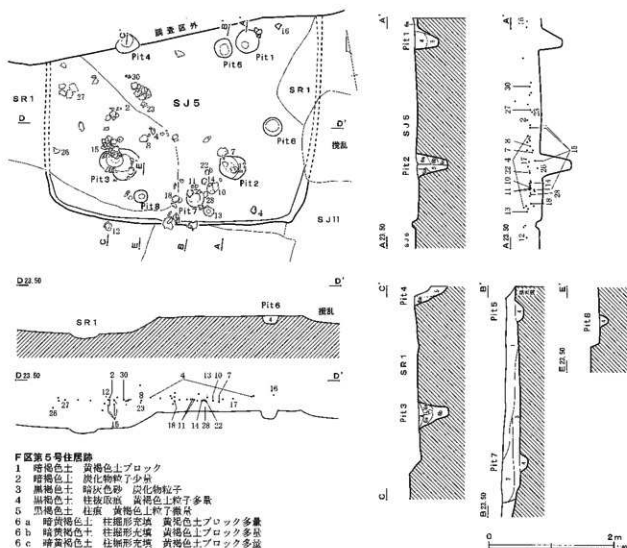
F区第6号住居跡(第114図)

L27・28、M28グリッドに位置し、北辺周辺部のみが検出された。F区第11号住居跡・F区第2号周溝墓と重複するが、遺構確認が困難であったため、新旧関係は不明である。

平面形態は方形で、東西長3.00m、確認面からの深さ0.24～0.27mを測る。北壁方位は、N-132°-Eを指す。主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は検出されない。

遺物は北東隅付近に集中する。古墳時代後期の須恵器壺、土師器甕・甕が出土し、古墳時代前期の壺・甕・器台等が混入する。

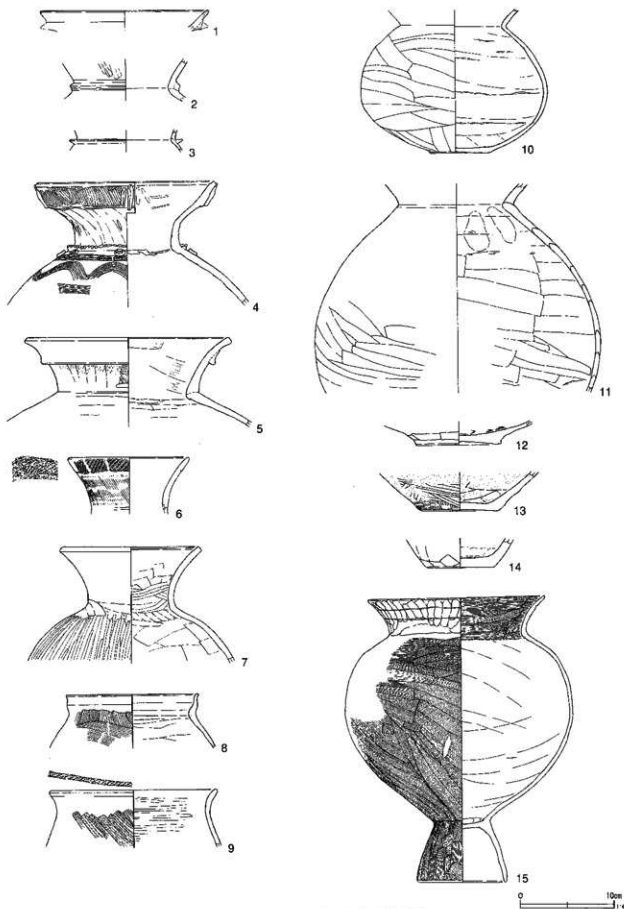
4は、凝灰岩製の砥石である。現存長5.8cm・幅3.1cm・厚さ2.0cm・重さ59.4gである。



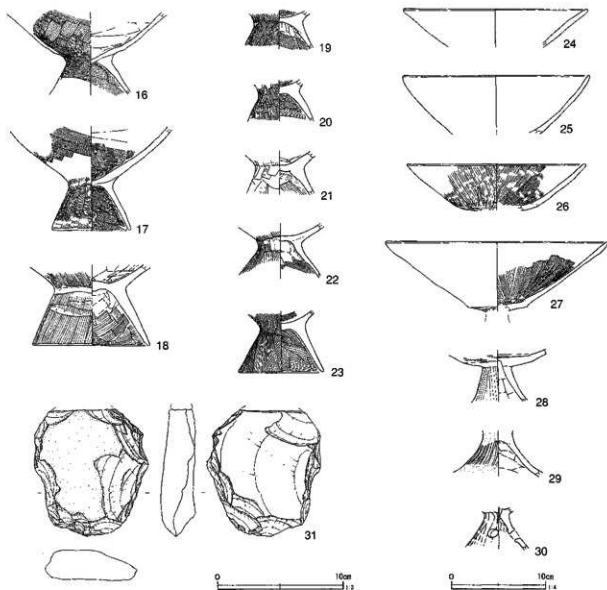
第111図 F区第5号住居跡

第32表 F区第5号住居跡出土遺物観察表 (第112・113図)

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	壺	[8.0]	[2.2]		5	②ACGI	B	明赤褐		
2	土師器	壺		[4.4]		5	②ACGH	B	橙	No35	
3	土師器	壺		[2.3]		20	②ACDG	B	にぶい黄橙		
4	土師器	壺	[18.6]	[13.1]		20	②ACGIJ	B	にぶい橙	No1-29	51-7
5	土師器	壺	[21.4]	[9.4]		25	②ADGHI	B	橙	L28-16Gr	
6	土師器	壺	[12.6]	[6.0]		10	②GI	B	にぶい黄橙	Pit3-5	51-6
7	土師器	壺	[14.2]	[12.2]		20	②ACGH	B	にぶい黄橙	No15-L28Gr	
8	土師器	甕	[14.0]	[5.7]		25	②ACGHI	B	にぶい黄橙	No28	
9	土師器	甕	[17.3]	[6.2]		5	②ACDEG	B	灰白		
10	土師器	壺		[15.2]	6.0	70	②AGHI	B	にぶい赤褐	L28GrNo12	52-1
11	土師器	壺		[22.0]	3.0	30	②AGH	B	浅黄橙	L28GrNo8-9-L28-16Gr	
12	土師器	壺		[2.4]	8.8	5	②ACGJ	B	浅黄	No18	
13	土師器	壺		[4.1]	8.0	15	②ADEHI	B	にぶい橙	No2 内外向赤影	
14	土師器	壺		[3.1]	7.2	5	②ACDGH	B	にぶい黄橙	No13	
15	土師器	台付甕	[18.7]	30.1	9.4	60	②ACGJ	B	にぶい赤褐	No11-20-25-36-37	52-2
16	土師器	台付壺		[8.8]		40	②ADHI	B	にぶい黄橙	No17-L28-12Gr	
17	土師器	台付甕		[10.9]	(8.3)	10	②ABC	B	外:褐灰 内:にぶい黄橙	No16-L28-16Gr	

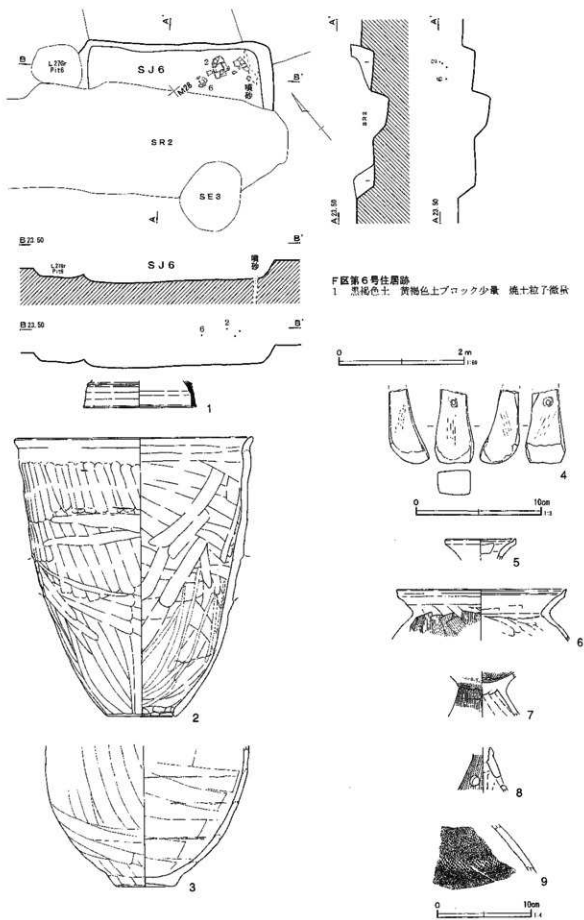


第112图 F区第5号住居跡出土文物(1)



第113图 F区第5号住居跡出土遺物(2)

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
18	土師器	台付甕	[8.5]	(12.3)		5	②ACEBGH	B	橙	No4 石美多	
19	土師器	台付甕	[4.3]			5	③AH	B	にぶい橙		
20	土師器	台付甕	[4.3]			5	②ACDHJ	B	明赤褐		
21	土師器	台付甕	[4.6]			5	②ACDG	B	にぶい橙		
22	土師器	台付甕	[5.9]			10	③ABDGJ	B	灰白	No14	
23	土師器	台付甕	[6.5]	(8.6)		5	②ACHIJ	B	にぶい黄橙	No31	
24	土師器	高坏	[4.0]	(19.2)		5	③ADIIJ	C	にぶい橙	風化顯著・調整痕不明瞭	
25	土師器	高坏	[6.2]	(19.7)		5	②ACHJ	C	浅黄橙	風化顯著・調整痕不明瞭	
26	土師器	高坏	[4.9]	(18.9)		5	②ACDGHIII	A	灰黄褐	No42	
27	土師器	高坏	[7.3]	(23.4)		20	②ABCDG	B	にぶい橙	No14-40	
28	土師器	高坏	[5.4]			30	②ACG	B	橙	L28GrNo11	
29	土師器	高坏	[4.8]			20	②ADGH	B	にぶい橙	外面赤彩 内面一部に赤彩塗料付着	
30	土師器	器台	[4.5]			15	②ADG	B	にぶい橙	No33 円孔3	



F区第6号住居跡
 1 黒褐色土 黄褐色土ブロック少量 焼土粒を散らす

第114図 F区第6号住居跡・出土遺物

第33表 F区第6号住居跡出土遺物観察表 (第114図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須臾器	壺	(12.0)	[2.8]		5	①AHI	A	灰	末野産? 自然軸付着	
2	土師器	瓶	25.0	29.3	7.0	90	②ABC GHI	B	橙	M28GrNo2 把手部欠損	52-5
3	土師器	蓋		[14.8]	(6.5)	40	③AGHJ	B	赤褐	SJ6-L27-24・25Gr 器面風化	52-4
5	土師器	壺	7.4	[2.2]		10	②BCDGH	B	にふい橙		
6	土師器	蓋	(18.0)	[5.5]		5	③ACDI	B	橙	M28GrNo1	
7	土師器	台付壺		[4.7]		20	②ACGJ	B	浅黄橙		
8	土師器	器台		[4.7]		10	③AG	B	にふい橙	円孔3	
9	弥生	壺					②ACE	B	にふい橙	無文部赤彩	

F区第8号住居跡 (第116図)

L27、M27グリッドに位置し、南側の一部が調査区外にある。F区第2号周溝墓と重複する。

平面形態は、長軸を南北にもつ長方形である。長軸長3.92m以上、短軸長3.58m、確認面からの深さ0.03~0.14mを測る。長軸方位はN-24°-Wを指す。

炉は3基検出され、いずれも地床炉である。重複する炉Aと炉Bは、住居跡のほぼ中央に位置する。覆土の堆積状況から、炉Aの方が新しい。炉Aは長軸0.69m×短軸0.52m、炉Bは長軸0.42m×短軸0.40mの範囲に焼土化し、いずれも浅い楕形

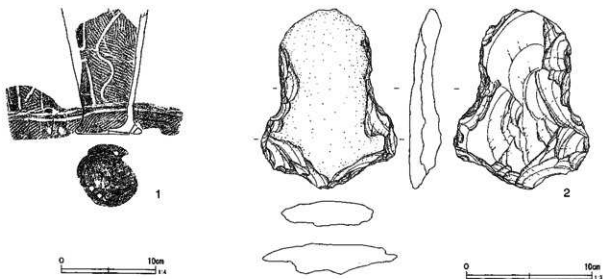
をもつ。炉Cは、住居跡の北側により、Pit1とPit2のほぼ中間付近に位置する。長軸0.91m×短軸0.34mの楕円形に焼土化し、浅い楕形をもつ。

主柱穴はPit1・Pit2・Pit3の3本である。残る1本が調査区外にある4本柱穴の住居跡である。

壁溝は北壁のみに巡る。幅0.24~0.33m、床面からの深さ0.05~0.06mほどである。

貯蔵穴は検出されない。

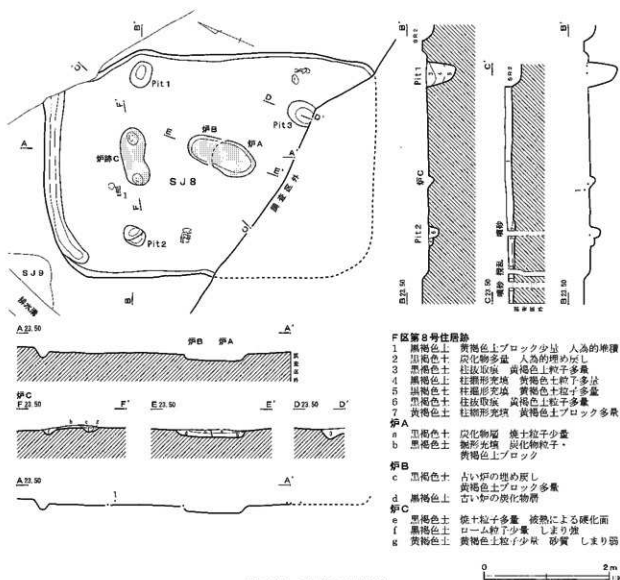
遺物は、中部高地系の弥生中期の甕形土器(第115図1)と、打製石器(第115図2)が出土している。2は長さ14.2cm・幅10.8cm・厚さ2.5cm・重さ365.3gで、石材はホルンフェルスである。



第115図 F区第8号住居跡出土遺物

第34表 F区第8号住居跡出土遺物観察表 (第115図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	弥生	甕		[13.2]	6.7	25	②ADGHI	B	にふい橙	No1 2孔1対	52-3



第116図 F区第8号住居跡

F区第9号住居跡 (第117図)

L26・27、M26・27グリッドに位置する。東壁から南壁の一部が確認され、北側・南西側は調査区外にある。F区第9号溝跡と重複し、攪乱も著しい。

平面形態は、方形であると推測される。南北長5.24m以上、東西長4.65m以上、確認面からの深さ0.05~0.20mを測る。主軸方位はN-20°-Eを指す。

炉は地床がで、住居南壁側に位置する。東西0.6m×南北0.5mの円形に焼土化する。

主柱穴は明確ではないが、Pit7・Pit4・Pit8の3

本に柱穴状の覆土の堆積状況を取査できる。

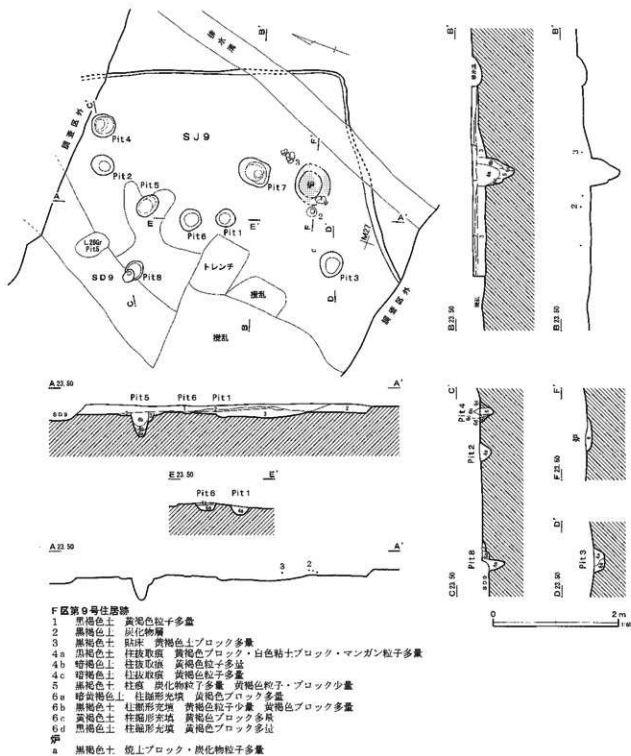
壕溝・貯蔵穴等の諸施設は検出されていない。ピットはPit1・Pit2・Pit3・Pit5・Pit6の5本で、Pit3には出入り口施設の機能が想定できるかもしれない。

遺物は、炉の南西部付近等から土師器壺・甕・碗が出土している。

F区第10号住居跡 (第119図)

L25・L26グリッドに位置する。北半部は調査区外にあり、攪乱や他の遺構との重複も著しく、南壁周辺部のみが検出された。

平面形態は方形で、確認面からの深さ0.05~



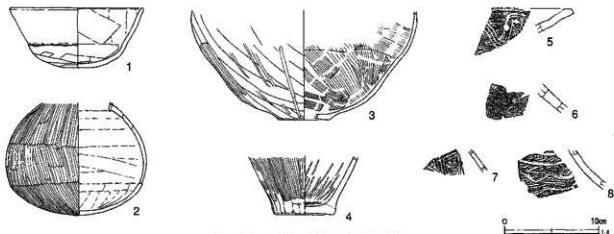
第117図 F区第9号住居跡

009mを測る。南壁は415mmほどが検出された。

主柱穴はPit1・Pit2で、ほかは北側の調査区外にある。炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は検出されない。主柱穴中間の南壁に接するPit3には出入り

口施設の機能が想定できるが、Pit4の用途は不明である。

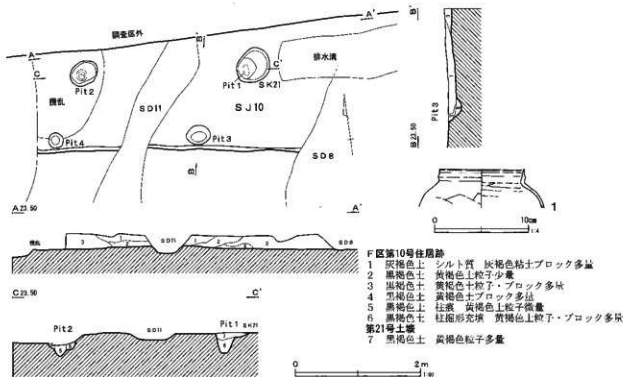
遺物は少なく、土師器小型甕が出土している。



第118図 F区第9号住居跡出土遺物

第35表 F区第9号住居跡出土遺物観察表 (第118図)

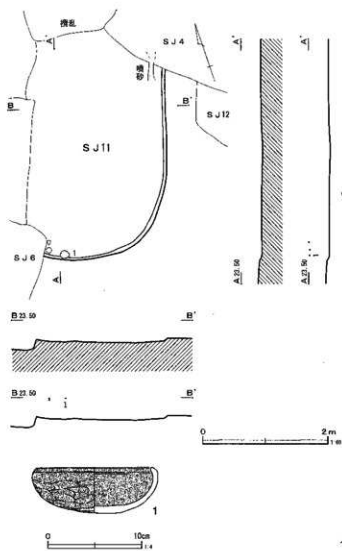
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	14.0	6.3		90	②CGH	B	黒		53-1
2	土師器	壺		[11.8]		80	②ADGHI	B	にぶい橙	Na1	53-2
3	土師器	壺		[11.6]	(5.2)	30	②AG	B	にぶい橙	Na4-5	52-6
4	弥生	壺		[6.2]	6.2	5	②CDI	B	灰黄褐		
5	弥生	器台?					②GI	B	褐		
6	弥生	壺					②DGI	B	にぶい橙	無文部赤彩	
7	弥生	壺					②DII	B	にぶい褐		
8	弥生	壺					②DGI	B	にぶい橙		



第119図 F区第10号住居跡・出土遺物

第36表 F区第10号住居跡出土遺物観察表 (第119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	小型壺	(8.9)	[4.0]		5	②ADH	B	にぶい橙	床下	



第120図 F区第11号住居跡・出土遺物

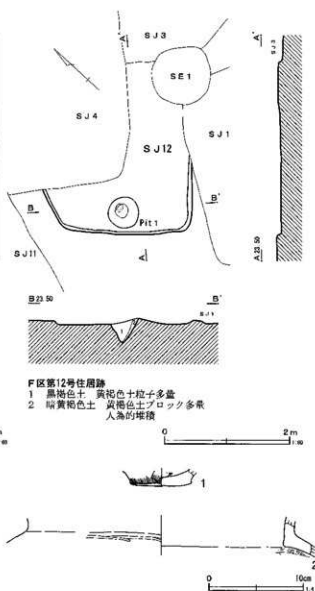
F区第11号住居跡（第120図）

L28・M28グリッドに位置する。重複するF区第4・5・6号住居跡と重複し、南東コーナー部分付近のみが確認されている。

平面形態は方形と推測され、南北長3.00m以上、東西長1.90m以上、確認面からの深さ0.05～0.06mを測る。南北軸方位は、N-19° -Eを指す。

主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は検出されない。

遺物は、土師器碗が出土している。



第121図 F区第12号住居跡・出土遺物

F区第12号住居跡（第121図）

L28・M28グリッドに位置し、F区第1・3・4号住居跡、F区第1号井戸跡と重複する。

平面形態は、方形である。長軸長2.75m以上、短軸長2.29m、確認面からの深さ0.05～0.06mを測る。主軸方位は、N-50° -Eを指す。

主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は検出されない。Pit1が西壁際中央付近に位置する。用途は出入り口機能もしくは貯蔵穴の可能性がある。

遺物は、土師器壺・甕が出土している。

第37表 F区第11号住居跡出土遺物観察表 (第120図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	12.2	4.8		100	②ABCGI	B	赤褐色	M28GrNo7 赤彩	53-3

第38表 F区第12号住居跡出土遺物観察表 (第121図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	壺		[1.9]	6.5	5	②DGIIJ	B	黄		
2	土師器	甕		[4.2]		5	②DGIII	B	にぶい黄		

(2) 掘立柱建物跡

F区第1号掘立柱建物跡 (第122図)

M29グリッドに位置する。東側の一部がE区に広がり、南半部は調査区外にある。F区第2号掘立柱建物跡とは軸をほぼ揃えて重複することから、両者は建て替えの関係にある。

桁行4間×梁行3間の竪柱建物跡と認定されるが、発掘調査時には土壌群として認識されていた遺構である。発見された柱穴は9本で、東辺の一部は所謂「溝もち」の柱穴となっている。北東隅の柱穴はF区第1号溝跡との重複と大地震に伴う噴砂痕の影響から、みつかっていない。それぞれの柱穴の調査時の名称は、Pit1・Pit2=F区第8・9・10号土壌、Pit3・Pit4=E区第8・7号土壌、Pit5=F区第4号土壌、Pit6=調査時遺構名なし、Pit7=F区第7号土壌、Pit8=F区第11号土壌、Pit9=F区第13号土壌である。またPit8は、F区第2号掘立柱建物跡Pit4と共有する。

桁行を東西に向け、南北軸(桁行方位)N-36°-Wをさす。規模は桁行6.60m×梁行5.70m・面積14.58㎡を測る。柱筋が通った対応する柱穴同士がきれいに並ぶが、柱間距離には桁行・梁行ともに統一性がない。桁行方向の北東隅・Pit5-1.20m-Pit1・Pit6-1.80m-Pit2・Pit7-1.50m-

Pit3・Pit8-2.10m-Pit4、梁行方向の北東隅・Pit1・Pit2・Pit3-2.10m-Pit5・Pit6・Pit7・Pit8-1.80m-Pit9-(1.80m)-北西隅である。

遺物は出土していない。

F区第2号掘立柱建物跡 (第122図)

M29グリッドに位置し、南半部は調査区外にある。建て替え関係にあると推定されるF区第1号掘立柱建物跡と軸を揃えて重複する。

桁行3間×梁行2間の竪柱建物跡と推定され、発見された柱穴は5本である。発掘調査時には土壌群として認識されていた遺構で、それぞれの柱穴の調査時の名称は、Pit1=F区第5号土壌、Pit2=F区第6号土壌、Pit3=F区第6号土壌、Pit4=F区第11号土壌、Pit5=F区第14号土壌である。Pit4はF区第1号掘立柱建物跡Pit8と共用する。

桁行を東西に向け、南北軸(桁行方向)はN-50°-Eを指す。規模は、桁行4.05m×梁行3.60m・面積14.58㎡である。柱間距離は、梁行が1.80mに統一されているのに対し、桁行はPit1-1.20m-Pit2-1.20m-Pit3-1.80m-Pit4と不均一な面をもつ。

遺物は、Pit1から土師器甕が出土している。

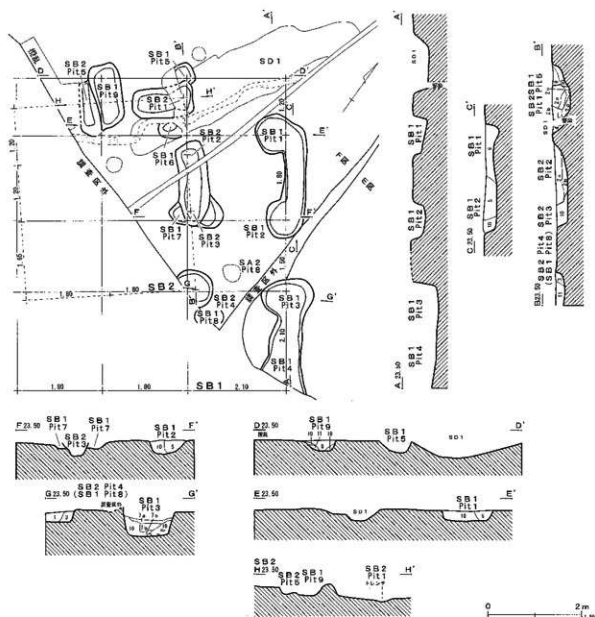
(3) 欄跡

F区第1号欄跡 (第123図)

M28・29、L29グリッドに位置し、F区第2号欄跡と平行する。

南北1列に並ぶ柱穴5本・柱間4間の欄列と認

定される。Pit4・Pit5は、発掘調査時にE区にかけて広がるF区第1号掘立柱建物跡と認識されていた。しかし、E区には対応するピットが存在しないこと、延長線上にピットが並んでいることか



F区獨立柱建物跡

第2号獨立柱建物跡

- 1 黒褐色土 柱抜取痕 黄褐色土ブロック・焼(φ5cm) 少量
- 2a 黒褐色土 柱掘形充填 炭化物粒子多量 焼上粒子少量
- 2b 黒褐色土 柱掘形充填 炭化物粒子・ブロック多量 焼上粒子少量
- 2c 黒褐色土 柱掘形充填 炭化物ブロック多量 焼上粒子少量
- 2d 黒褐色土 柱掘形充填 炭化物ブロック多量 焼上粒子少量
- 3 黒褐色土 柱掘形充填 黄褐色土ブロック多量

第1号獨立柱建物跡

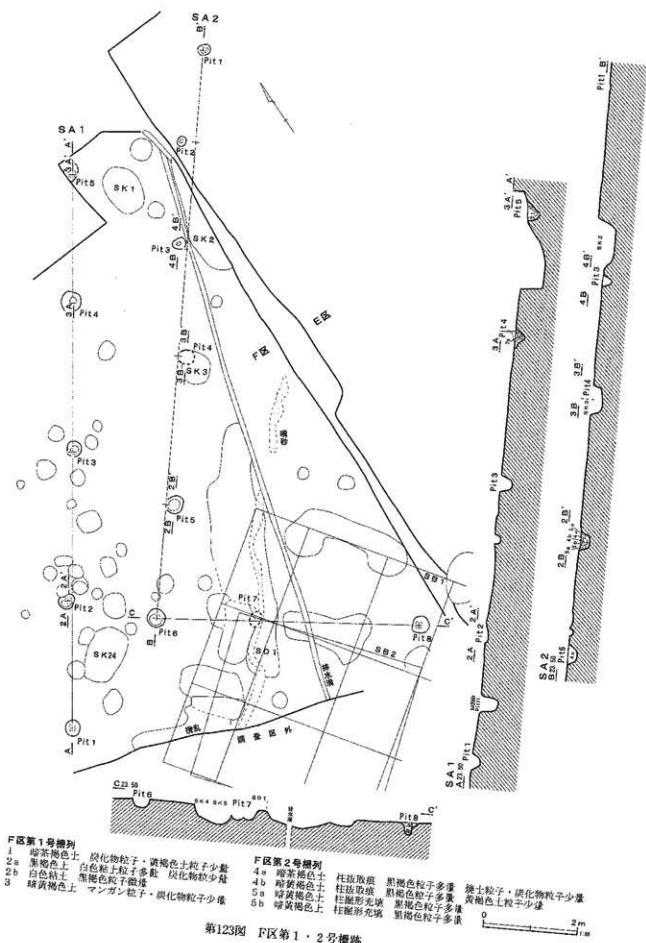
- 5 黒褐色土 柱穴遺跡・焼上土 黄褐色土粒子・炭化物多量 焼上粒子少量
- 6 黒褐色土 柱穴遺跡・焼上土 黄褐色土粒子・炭化物多量 焼上粒子少量
- 7a 暗褐色土 柱抜取痕 黄褐色土ブロック 焼上粒子
- 7b 暗褐色土 柱抜取痕 黄褐色土ブロック 炭化物粒子
- 7c 暗褐色土 柱抜取痕 黄褐色土ブロック 焼上粒子
- 8 黒褐色土 柱掘形充填 炭化物ブロック多量
- 9 黒褐色土 柱掘形充填 黄褐色土ブロック少量
- 10 黒褐色土 柱掘形充填 黄褐色土粒子・ブロック多量
- 11 黒褐色土 柱掘形充填 炭化物類 黄褐色土ブロック



第122図 F区第1・2号獨立柱建物跡・出土遺物

第39表 F区第2号獨立柱建物跡出土遺物観察表(第122図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	施成	色調	出土位置・備考	図版
1	土器	甕	(21.0)	[9.0]		5	②AGHJ	B	橙		



第123図 F区第1・2号横列

ら、構跡と断定した。各柱穴の調査時の名称は、Pit1・Pit2=M29GrPit、Pit3=L29GrPit、Pit4=F区第1号掘立柱建物跡Pit2、Pit5=F区第1号掘立柱建物跡Pit1である。

全長11.7mを測り、軸方位はN-34°-E指す。柱間距離はPit1-2.70m-Pit2-3.15m-Pit3-3.15m-Pit4-2.70m-Pit5を測る。

遺物は出土していない。

F区第2号構跡(第123図)

L29・30、M29グリッドに位置する。L字に屈曲する構跡で、F区第1号構跡と平行する。

南北方向5間(Pit1~Pit6)、東西方向2間(Pit6~Pit8)、柱穴8本の構跡と認定される。発掘調査時には、Pit3・Pit4・Pit5もE区にかけて広がるF区第2号掘立柱建物跡と認識されていた。しかし、

E区には対応するピットが存在しないこと、延長線上にピットが並んでいることから、構跡と断定した。それぞれの柱穴の調査時の名称は、Pit1=L29GrPit1、Pit2=L29GrPit2、Pit3=F区第2号掘立柱建物跡Pit-、Pit4=F区第2号掘立柱建物跡Pit2、Pit5=F区第2号掘立柱建物跡Pit-、Pit6=M29GrPit8、Pit7=M29GrPit-、Pit8=M29GrPit9である。

長さは南北長120m、東西長5.70mを測り、南北軸方位N-39°-Eを指す。柱間距離は南北方向Pit1-1.95m-Pit2-2.25m-Pit3-2.25m-Pit4-3.15m-Pit5-2.40m-Pit6、東西方向Pit6-2.10m-Pit7-3.60m-Pit8である。

遺物は出土していない。

(4) 周溝墓

F区第1号周溝墓(第124図)

L27・28グリッドに位置する。南東隅付近の一部が検出され、ほかは調査区外にある。F区第4・5・11号住居跡と重複する。

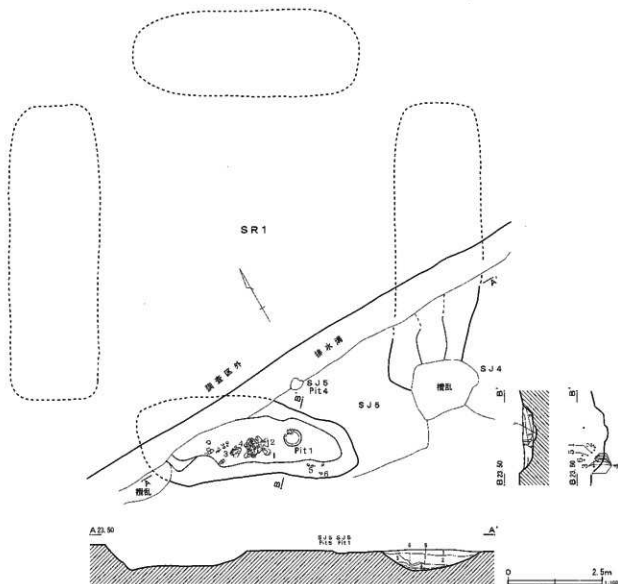
四隅切れタイプの方形周溝墓と推定される。規

模は明確ではないが、外法12.5m、内法8.0m程度と想定される。南北軸の方位はN-31°-Eを指す。埋葬施設は検出されていない。

南溝は最大幅1.9m×長さ4.6m、確認面からの深さ0.46mを測る。東溝は最大幅1.9m×長さ1.9m、

第40表 F区第1号周溝墓出土遺物観察表(第125・126図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	弥生	壺		[20.8]	6.7	80	③BCGI	B	にぶい橙	No.1	53-4
2	弥生	壺	19.1	51.4	9.1	90	②ABCEJ	B	橙	No.2 赤彩 焼成後の底部穿孔	53-5
3	弥生	甕	14.9	[14.3]		50	②ACHI	B	暗褐色	No.5-7	54-1
4	弥生	甕	(31.6)	48.4	9.1	60	③ACHI	C	にぶい橙	No.4-6-7-9-12-13-14	53-6
5	弥生	壺		[2.9]	6.5	5	②A	B	明赤褐	L27GrNo.19	
6	弥生	壺		[2.3]	(8.8)	5	②ADGHI	B	にぶい橙	L27GrNo.17 底部本業痕	
7	弥生	壺					②ACF	B	にぶい橙		
8	弥生	壺					②DGH	B	灰黄褐		
9	弥生	壺					②DGH	B	橙	No.7	
10	弥生	壺					②CDGH	B	黄褐		
11	弥生	壺					②DHI	B	褐灰		
12	弥生	壺					②DI	B	褐灰		
13	弥生	壺					②CDE	B	褐灰		
14	弥生	壺					②DGH	B	にぶい黄橙		
15	弥生	壺					②ABCDG	B	にぶい橙		
16	弥生	壺					②ADHI	B	にぶい黄橙		
17	弥生	甕					②ADGHI	B	黒褐		
18	弥生	壺					②ADGHI	B	灰黄褐		
19	弥生	壺					②DHI	B	褐灰	No.7	



- F区第1号周溝墓
- 1 黒褐色土 黄褐色土粒子多量
 - 2 黒褐色土 黄褐色土ブロック少量
 - 3 暗黄褐色土 盛土の崩落 黄褐色土ブロック多量
 - 4 黒褐色土 白色粘土ブロック・黄褐色土ブロック多量
 - 5 暗褐色土 白色粘土ブロック多量
 - 6 暗黄褐色土 白色粘土ブロック多量
 - 7 暗褐色土 黄褐色土粒子少量

第124回 F区第1号周溝墓

確認面からの深さ0.65mである。

遺物は、南溝底付近から弥生中期後半の甕・壺等がまとまって出土している。特に南関東系の大型壺(第125図2)には、焼成後の底部穿孔が施されている。

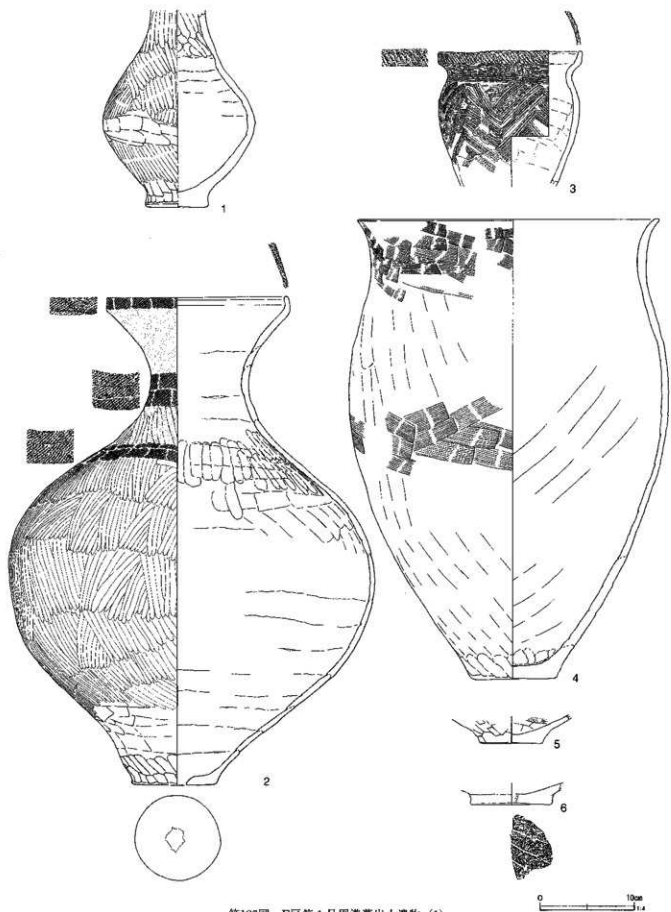
F区第2号周溝墓(第127図)

L27・M27・28グリッドに位置する。北溝と西溝北半部が検出され、ほかは調査区外にある。F

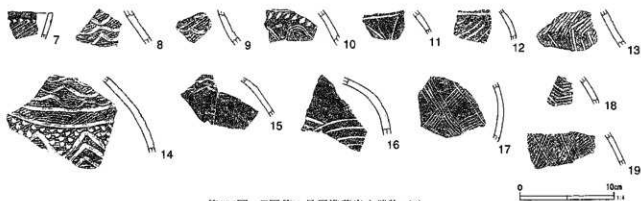
区第6・8・9号住居跡、F区第3号井戸跡、F区第12・15号土城、F区第10号溝跡と重複する。

北溝の両端部で溝が途切れるが、重複する遺構との新旧関係から、単純に四隅切れタイプの周溝墓と断定することは難しい。規模は外法14m、内法11m前後と想定される。南北軸方位はN-36°-Wを指す。

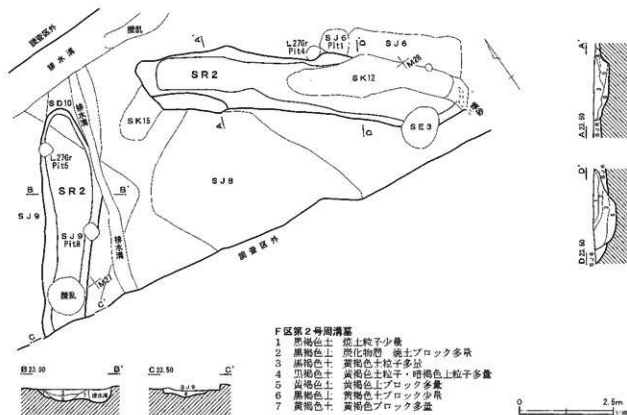
北溝は最大幅1.6m×長さ8.9m、確認面からの深



第125图 F区第1号周潯墓出土器物(1)



第126図 F区第1号周溝墓出土遺物 (2)



第127図 F区第2号周溝墓

さ0.25mを測る。西溝は、最大幅1.5m×長さ5.7m、
確認面からの深さ0.47mである。

遺物は出土していない。

(5) 井戸跡

F区第1号井戸跡 (第128図)

L28グリッドに位置し、F区第1・3・12号住居跡と重複する。

平面形態は不整形形で、長径0.97m、短径0.93m、長軸方位N-83°-Wを測る。危険防止のため、調査は底面部分まで至っていない。覆上の堆積状況

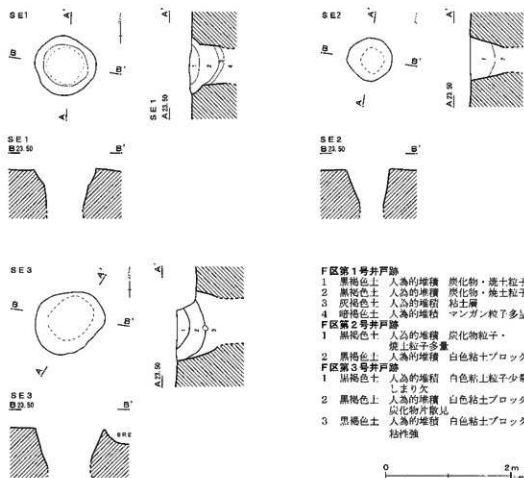
の観察から、人為的に埋め戻されている。

遺物は、在産産の鉢が出土している。

F区第2号井戸跡 (第128図)

L29グリッドに位置する。

平面形態は不整形形で、長径0.7m、短径0.65m、長軸方位N-87°-Wを測る。危険防止のため、



第128図 F区井戸跡

F区第1号井戸跡

- 1 黒褐色土 人為的堆積 炭化物・焼土粒子多量
- 2 黒褐色土 人為的堆積 炭化物・焼土粒子多量
- 3 灰褐色土 人為的堆積 粘土層
- 4 暗褐色土 人為的堆積 マンガン粒多量

F区第2号井戸跡

- 1 黒褐色土 人為的堆積 炭化物粒子・

- 2 黒褐色土 人為的堆積 白色粘土ブロック多量

F区第3号井戸跡

- 1 黒褐色土 人為的堆積 白色粘土粒子少量
しまり欠
- 2 黒褐色土 人為的堆積 白色粘土ブロック少量
炭化物片散見
- 3 黒褐色土 人為的堆積 白色粘土ブロック多量
粘性強



第41表 F区井戸跡出土遺物観察表 (第129図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	瓦質土器	鉢	(28.3)	[10.3]	(11.0)	20	②AGJ	B	灰白	SE1 在地産? こね鉢or片口	
2	瓦質土器	焙烙	(36.0)	[5.9]	(34.0)	10	③DH	B	褐灰	SE2 二次的被熱 炭付着	
3	かわらけ	皿	7.4	1.8	4.6	75	④CGHI	B	にぶい豊	SE3	54-2
4	かわらけ	皿	11.2	2.7	6.0	95	②ADGH	B	灰白	SE2-3 灯明皿 油煙付着 二次的穿孔2	54-3

調査は底面部まで至っていない。覆土の堆積状況の観察から、人為的に埋め戻されている。

遺物は、焙烙が出土している。

F区第3号井戸跡 (第128図)

M27グリッドに位置し、F区第2号周溝墓と重複する。

(6) 土壌・溝跡

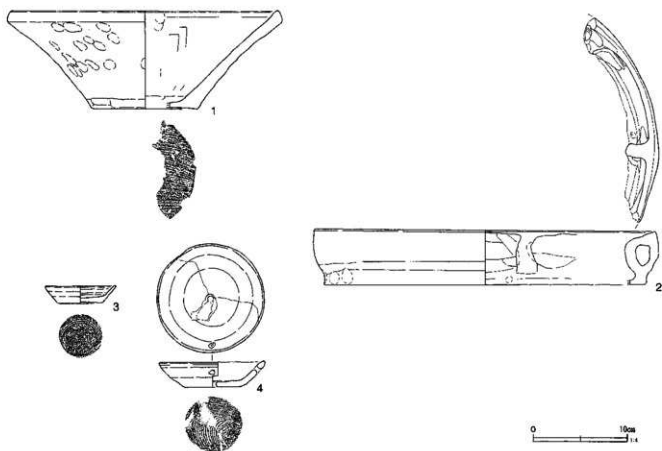
F区第16号土壌 (第130図)

L26グリッドに位置し、F区第5・6号溝跡と重複する。

平面形態は不整形円形で、長径1.13m、短径0.95m、長軸方位N-68° -Eを測る。調査は底面部まで至っていない。覆土の堆積状況の観察から、人為的に埋め戻されている。

遺物はかわらけが出土している。

平面形態は、円形である。長軸長0.91m、短軸長0.78m、確認面からの深さ0.73mを測る。長軸方位はN-67° -Eを指す。



第129図 F区井戸跡出土遺物

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

F区第21号土壌（第130図）

L26グリッドに位置し、F区第10号住居跡と重複する。

平面形態は、円形である。長軸長0.62m、短軸長0.50m、確認面からの深さ0.21mを測る。長軸方位はN-44° -Eを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

F区第22号土壌（第130図）

L26グリッドに位置し、F区第10号住居跡と重複する。

平面形態は、円形である。長軸長0.78m、短軸長0.70m、確認面からの深さ0.21mを測る。長軸方位はN-45° -Wを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

F区第3・4号溝跡（第130図）

L26グリッドに位置し、平行する7条の溝跡のう

ちの1条である。東にF区第9号溝跡、西にF区第5号溝跡が位置する。

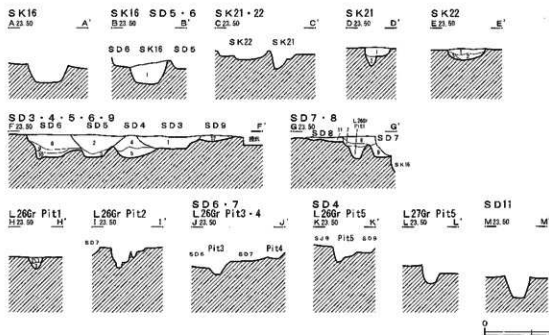
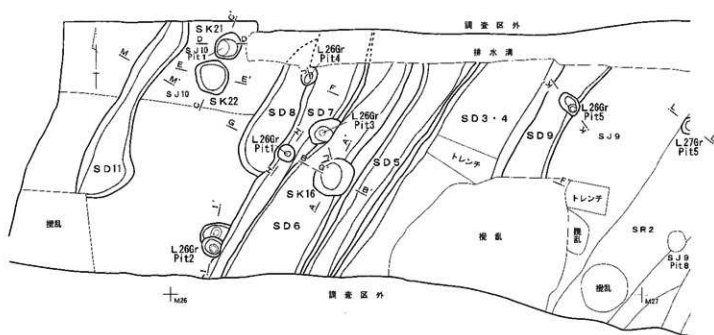
覆土の断面観察から2条の溝跡にできたもので、掘形を明確に二分することができない。検出長2.10m、幅1.55~1.62m、確認面からの深さ0.48~0.56mを測る。溝底標高は、北端付近22.54m、中央付近22.67m、南端付近22.80mを計測する。走行方位は、N-34° -Eを指す。

遺物は、土師器壺が出土している。

F区第5号溝跡（第130図）

L26グリッドに位置し、平行する7条の溝跡のうち1条である。東にF区第3・4号溝跡、西にF区第6号溝跡が位置する。

検出長5.20m、幅0.64~0.88m、確認面からの深さ0.30~0.88mを測る。溝底標高は、北端付近22.65m、中央付近22.67m、南端付近22.76mを計測する。走行方位は、N-33° -Eを指す。



第130図 F区七坑・溝跡①

F区第16号土坑

1 黒灰色粘土 マンガン粒・灰白色粘土粒少量 人為的堆積

F区第21号土坑

1 黒褐色土 白色砂質土ブロック多量

2 栗褐色土 黄褐色土粒子多量

F区第22号土坑

1 黒褐色土 マンガン粒子多量

2 黄褐色土 黄褐色土ブロック多量

3 黄褐色土 黄褐色土ブロック多量

L266r Pit1

1 灰白色土 柱礎? 砂多量

2 灰褐色粘土 柱礎形穴痕 白色粘土ブロック多量

3 黒褐色粘土 柱礎形穴痕 白色粘土・黒色粘土多量

F区第3・4・5・6・7・8・9号溝跡

1 灰褐色土 SD3 黄褐色土ブロック少量

2 灰褐色粘土 SD5 黄褐色土ブロック多量

3 灰褐色粘土 SD5 黄褐色土ブロック多量 (地山起内)

4 黒褐色土 SD4 黄褐色土ブロック多量

5 暗灰褐色土 SD4 青灰色砂質土ブロック多量

6 灰褐色粘土 SD7 マンガン粒子多量

7 灰褐色粘土 SD7 黄褐色土ブロック多量

8 灰褐色粘土 SD6 マンガン粒子少量 栗褐色土ブロック多量

9 灰褐色粘土 SD6 黄褐色土ブロック多量

10 灰褐色粘土 SD6 黄褐色土ブロック多量

11 暗褐色土 SD8 黄褐色土ブロック多量

12 黒褐色土 SD9 黄褐色土ブロック多量 人為的堆積

遺物は、土師器甕が出土している。

F区第6号溝跡 (第130図)

L26グリッドに位置し、平行する7条の溝跡のうち1条である。東にF区第5号溝跡、西にF区第7号溝が位置する。F区第16号土壌と重複する。

検出長5.14m、幅0.72~1.40m、確認面からの深さ0.27~0.47mを測る。溝底標高は、北端付近22.65m、中央付近22.66m、南端付近22.72mを計測する。走行方位はN-31°-Eを指す。

遺物は、土師器台付甕・杯が出土している。

F区第7号溝跡 (第130図)

L26グリッドに位置し、平行する7条の溝跡のうち1条である。東にF区第6号溝跡、西にF区第8号溝跡が位置する。

検出長5.14m、幅0.72~1.40m、確認面からの深さ0.27~0.47mを測る。溝底標高は、北端付近22.65m、中央付近22.66m、南端付近22.72mを計測する。走行方位はN-31°-Eを指す。

遺物は、土師器台付甕が出土している。

F区第8号溝跡 (第130図)

L26グリッドに位置し、平行する7条の溝跡のなかで最西端に所在する。F区第10号住居跡と重複する。

検出長2.26m、幅0.60~0.82m以上、確認面からの深さ0.10~0.16mを測る。溝底標高は、北端付近22.96m、中央付近22.95m、南端付近22.97mを計測する。走行方位はN-33°-Eを指す。

遺物は、土師器壺が出土している。

F区第9号溝跡 (第130図)

L26グリッドに位置し、平行する7条の溝跡のなかで最東端に所在する。F区第9号住居跡と重複する。7条の溝跡の新旧関係は、F区第3・5号溝跡が最も新しく、F区第4・6・9号溝跡→F区第7号溝跡の順に古くなり、F区第8号溝跡が最も先行する。

検出長2.80m、幅0.64~0.84m以上、確認面から

の深さ0.06~0.13mを測る。溝底標高は、北端付近23.1m、中央付近22.97m、南端付近23.03mを計測する。走行方位はN-147°-Wを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

F区第11号溝跡 (第130図)

L25・26グリッドに位置し、F区第10号住居跡と重複する。

検出長4.2m、幅0.42~1.12m以上、確認面からの深さ0.11~0.38mを測る。溝底標高は、北端付近22.83m、中央付近22.94m、南端付近22.94mを計測する。走行方位はN-30°-Eを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

F区第12号土壌 (第131図)

L27グリッドに位置する。F区第2号周溝墓北溝中央付近から、古墳時代後期の土師器甕・椀が出土した。遺構形状は把握できなかったが、出土遺物の時期がF区第2号周溝墓の時期とは異なること、周溝墓の溝幅よりもはみ出すような平面規模をもつ遺構ではないことから、土壌の存在が予想され、F区第12号土壌として報告する。

遺物は、土師器甕・椀等が出土している。

F区第15号土壌 (第131図)

L27グリッドに位置し、F区第2号周溝墓と重複する。

平面形態は、長方形である。長軸長1.28m以上、短軸長0.84m、確認面からの深さ0.04mを測る。長軸方位はN-67°-Eを指す。

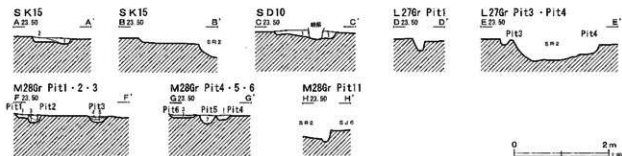
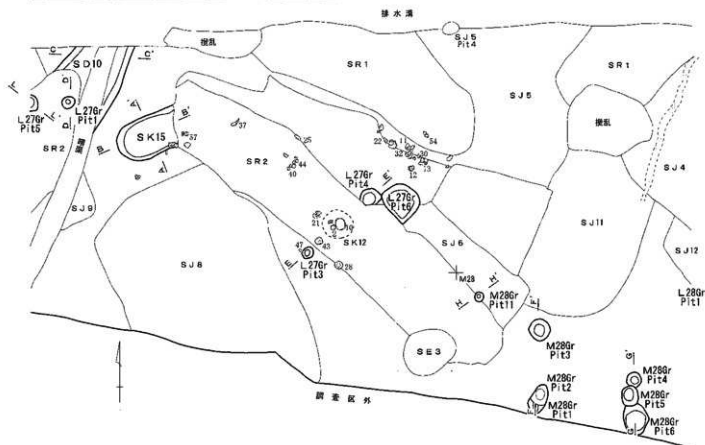
遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

F区第10号溝跡 (第131図)

L27グリッドに位置し、F区第2号周溝墓と重複する。

検出長0.75m、幅1.22~1.32m、確認面からの深さ0.04~0.06mを測る。溝底標高は、北端付近23.16m、南端付近23.14mを計測する。走行方位はN-142°-Wを指す。

遺物は出土していない。



第131図 F区土壌・溝跡②

F区第15号土壌

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量 人為的堆積
- 2 黒褐色土 ロームブロック多量 人為的堆積

F区第10号溝跡

- 1 黒褐色土 黄褐色ブロック多量
- M28Gr Pit1 暗茶褐色土 黄褐色粒子・マンガン粒子少量
- M28Gr Pit2 暗茶褐色土 黄褐色粒子・マンガン粒子少量
- M28Gr Pit3 暗茶褐色土 黄褐色粒子・マンガン粒子少量

M28Gr Pit3

- 4 暗茶褐色土 黄褐色粒子・マンガン粒子少量
- 5 暗茶褐色土 黄褐色粒子・マンガン粒子少量

F区M28Gr Pit4

- 1 暗褐色土 マンガン粒子少量
- F区M28Gr Pit5 黒褐色土 炭化物粒子多量
- F区M28Gr Pit6 暗褐色土 砂質土

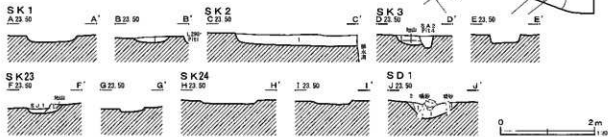
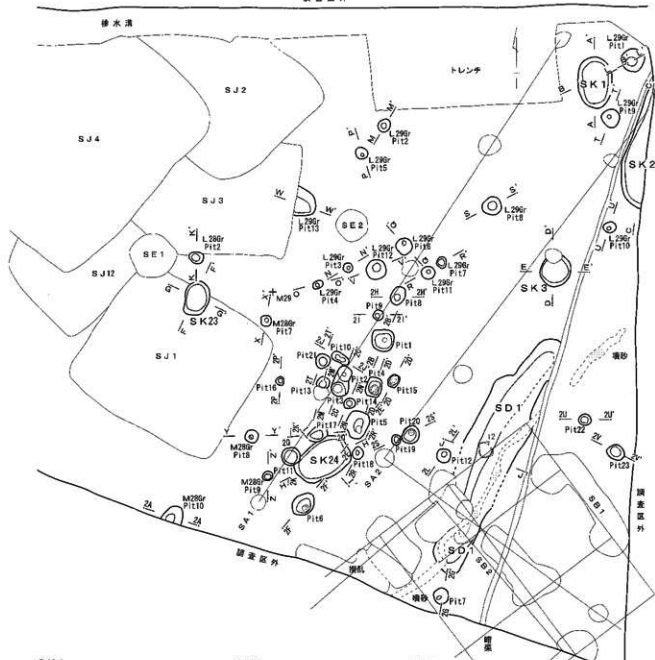
F区第1号土壌 (第132図)

L29グリッドに位置する。

平面形態は、楕円形である。軸長1.05m、短

軸長0.70m、確認面からの深さ0.12mを測る。長軸
方位はN-6° - Wを指す。

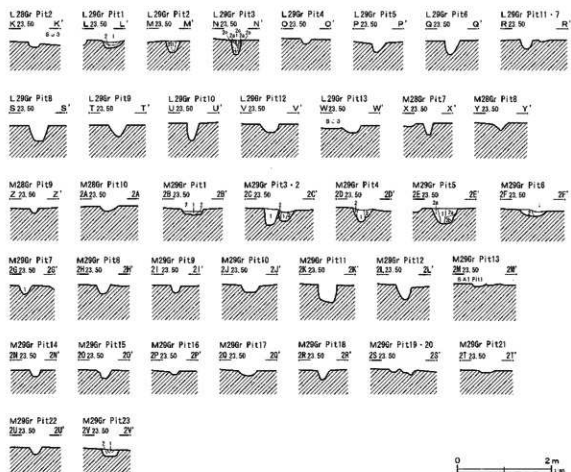
遺物は古墳時代後期の須恵器杯が出土している。



- F区第1号土壤**
 1 黄褐色土 マンガン粒子多量
- F区第2号土壤**
 1 黒褐色土 マンガン粒子・黄褐色土ブロック少量
- F区第3号土壤**
 1 黒褐色土 炭化物粒子多量

- F区第23号土壤**
 1 黄褐色土 焼土粒子微量 黄褐色土ブロック少量
- F区第1号溝跡**
 1 黒褐色土 マンガン粒子多量 黄褐色土粒子多量
 2 暗黄褐色土 黄褐色土粒子多量

第132図 F区土壤・溝跡③ (1)



第133図 F区土壌・溝跡③ (2)

L29Grid Pit1

- 1 黒褐色土 炭化物粒子少量
- 2 黒褐色土 マンガン粒子多量

L29Grid Pit2

- 1 黒褐色土 柱痕 黄褐色ブロック少量
- 2 灰褐色土 柱痕形充填 黄褐色粒子少量 マンガン粒子多量

L29Grid Pit3

- 1 黒褐色土 柱痕 黄褐色粒子少量
- 2a 黒褐色土 柱痕形充填 黄褐色粒子少量
- 2b 灰褐色土 柱痕形充填 白色粒子ブロック
- 2c 灰褐色土 柱痕形充填 白色粒子ブロック

M29Grid Pit1

- 1 黒褐色土 柱痕取崩 黄褐色土粒子少量
- 2 黒褐色土 柱痕形充填 黄褐色土粒子少量

M29Grid Pit2

- 1 黒褐色土 柱痕 黄褐色土粒子少量
- 2 黒褐色土 柱痕形充填 黄褐色土粒子少量

M29Grid Pit3

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒子少量

M29Grid Pit4

- 1 黒褐色土 柱痕 黄褐色土粒子少量
- 2 黒褐色土 柱痕形充填 黄褐色土粒子少量

M29Grid Pit5

- 1 黒褐色土 柱痕 黄褐色土粒子少量
- 2a 黒褐色土 柱痕形充填 黄褐色土粒子少量
- 2b 黒褐色土 柱痕形充填 黄褐色土粒子少量

M29Grid Pit6

- 1 黒褐色土 柱痕取崩 黄褐色土粒子少量
- 2 黒褐色土 柱痕形充填 黄褐色土粒子少量

M29Grid Pit7

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒子少量

M29Grid Pit12

- 1 暗赤褐色土 黒褐色土粒子多量
- 2 暗赤褐色土 黒褐色土粒子多量

F区第2号土壌 (第132図)

L29グリッドに位置する。F区調査区の最東端にあるが、E区では検出されていない。平面形態・規模は、不明である。確認面からの深さ0.18mを測る。

遺物は出土していない。

F区第3号土壌 (第132図)

L29グリッドに位置し、F区第2号欄列跡Pit4と重複する。

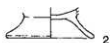
平面形態は、円形である。長軸長0.68m、短軸長0.62m、確認面からの深さ0.17mを測る。長軸方位はN-44° -Eを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

F区第3・4号溝跡



F区第5号溝跡



F区第6号溝跡



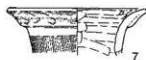
F区第5・6号溝跡



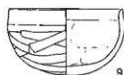
F区第7号溝跡



F区第8号溝跡



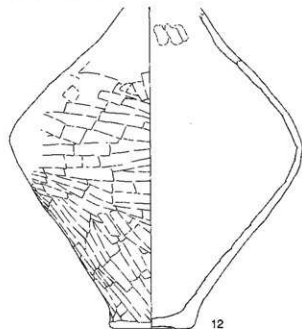
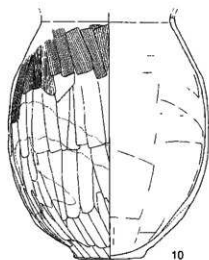
F区第12号土塙



F区第1号土塙



F区第1号溝跡



第134図 F区土塙・溝跡①②③出土遺物

F区第23号土塙 (第132図)

L28・M28グリッドに位置し、F区第1号住居跡と重複する。

平面形態は、長方形である。長軸長0.72m、短軸長0.48m、確認面からの深さ0.21mを測る。長軸方位はN-31°-Eを指す。

遺物は出土していない。

F区第24号土塙 (第132図)

L29グリッドに位置し、周囲には多数のグリッドビットが存在する。

平面形態は、長方形である。長軸長1.21m、短軸長0.78m、確認面からの深さ0.07mを測る。長軸

第42表 F区土城・溝跡出土遺物観察表 (第134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	壺	(18.0)	[2.6]		5	②ADGH	B	にぶい橙	SD3-4	
2	土師器	壺		[3.2]	(9.0)	5	②DGHI	B	にぶい赤褐	SD5-SK5-SK13	
3	土師器	坏	(14.5)	[4.5]		40	②CGH	B	橙	SD6	
4	土師器	台付壺		[4.6]		5	②ADJ	B	にぶい橙	SD6	
5	土師器	坏	(14.1)	[3.9]		5	②CDG	B	橙	SD5-6	
6	土師器	台付壺		[4.1]		5	②ADH	B	にぶい橙	SD7	
7	土師器	壺	(14.5)	[5.0]		5	②DHJ	B	にぶい橙	SD8	
8	土師器	壺?		[2.3]	6.3	5	②ACHJ	B	にぶい橙	SD8	
9	土師器	瓶	11.9	7.0		95	③ADGJ	B	橙	SK12No2	
10	土師器	壺		[25.8]	7.2	30	②ACGH	B	浅黄橙	SK12No1	
11	須恵器	坏	(11.4)	[4.4]		10	①HI	A	灰	SK1 末野産?	
12	弥生	壺		[33.7]	9.0		③AGJ	C	にぶい橙	SD1No1-M29-8Gr	

方位はN-62° - Eを指す。

遺物は出土していない。

F区第1号溝跡 (第132図)

M29グリッドに位置し、F区第1・2号掘立柱建物跡と重複する。

検出長5.40m、幅0.62～1.12m、確認面からの深

さ0.10～0.35mを測る。溝底標高は、中央付近22.92m、南端付近23.17mを計測する。走行方位はN-26° - Eを指す。

遺物は、溝底から浮いた状態で、弥生中期の大型の壺形土器が出土している。

(7) 水田跡

F区第1・2・3号水田跡 (第135図)

F区第1地点西端部のL23・24・25グリッドから、1108年(天仁元)の浅間山噴火に伴う浅間B火山灰堆積層の広がりが認められた。この区域は、住居跡や集落が営まれた東半部に比べて僅かに低い。

堆積した浅間B火山灰層を除去すると、下層からは畦畔状の高まりと、方形に区画され、方向をN-18～22° - Eに揃えた複数の平坦面が検出された。このような状況から、浅間B火山灰に埋もれた平安時代の水田跡と判断された。

F区第1号水田跡は、L25グリッドに南北に走る畦畔状の高まり以東の区域である。東端部は不明であるが、最大でもF区第11号溝跡までは達し

ない。

F区第2号水田跡は、L24・25グリッドにおよぶ最も広い範囲が検出されている。東西11.7m、南北5.0mの範囲が確認されているが、ほかは調査区外にある。L24グリッドとL25グリッドの境付近には、半島状に突き出た高まりがある。

F区第3号水田跡は、L23・24グリッドにおよんでいるが、北西隅付近のみの検出である。東西6.0m、南北1.0mほどである。

遺物は、いずれからも出土していない。

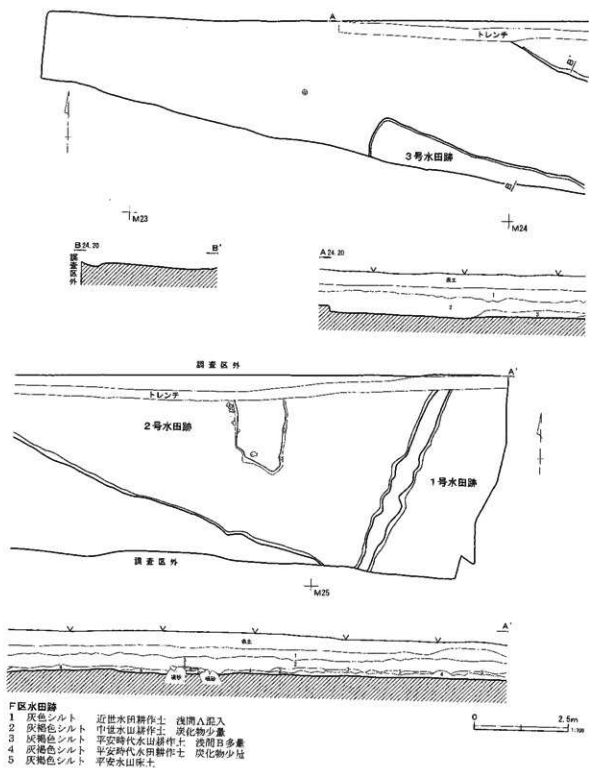
F区第1・2・3号水田跡の方向性は、F区第3～11号溝跡と一致する。道路幅の発掘調査のため把握しにくい面が多いが、ここには立地地形の方向性が色濃く反映されている。

(8) 河川跡

F区河川跡 (第136図)

F区第2地点としたL21・22グリッドからは、住居跡や土城などの集落遺構は一切発見されてい

ない。地形的には谷地形となり、F区の集落跡とG区の集落跡を分割している。この谷地形に堆積した土壌の中には多量の土器片が包蔵されていた



第135図 F区第1・2・3号水田跡

ことから、調査を開始した。

調査箇所は、調査区域内を斜めに横切る通学路に面した区域で、調査区の幅が最も狭くなる箇所

である。また、谷地形を掘削したため、著しい湧水に襲われ、安全確保のため、十分な調査を行うことができなかった。そのため、地形把握のため

の平面や標高測量なども実施できなかった。辛うじて、遺物出土状況図と一部の土層堆積図の作成が間に合った。

調査の進行に伴って多量の七器片が出土したが、特別に埋置・埋設されたような形跡は把握されていない。土師器台付甕・壺・高坏・器台という、日常雑器が大半を占めている（第137～141図）。一部に手捏土器や特殊な二重坏高坏、緑色凝灰岩製の管玉が含まれているが、これらを以って積極的に祭祀的な様相として捉えることはできない。特筆できるのは、これらの土器群の時期が古墳時代前期に限定されることである。

第141図158は、緑泥片岩製の砥石である。現存長9.9cm・幅5.2cm・厚さ1.8cm・重さ77.7gである。

第141図159は、緑色凝灰岩製の管玉である。長さ3.9cm・径0.9cm・孔径0.35cm・重さ4.4gである。孔は、二方向から穿たれている。

さらに調査を進めると、底面付近から多量の木製品が発見された。これらの木製品は柱状・板状の木製遺物が多く、長軸方向を同一方向に揃え、もしくは直交させて配されていた。また、これらの柱状・板状の木製遺物の下からは、規則的に打ち込まれた杭列も発見された。杭列は少なくとも6列が方向を揃えて並び（N-33°-38°-E）、上面の柱状・板状の木製遺物の長軸方向とも一致する。そして、その方向は、谷地形の傾斜を表す等高線の方向と一致する。

このような木製遺物の出土状況から、数列の杭を打ち込み、その杭と杭を繋ぐように長尺の柱状・板状の木材を並べた護岸施設が復元される。よって、検出された谷地形は、護岸施設を必要とする地形＝「河川」と断定される。

護岸施設に用いられた杭や柱状・板状の護岸材は、建物の廃材や破損した木製農具などに二次的な加工も施しながら転用している。また、共存する土器群が古墳時代前期に限定されることから、木製品も同時期に特定できる。よって、時期特定

が可能な、きわめて良好な一括資料として位置づけられる。

出土した木製遺物には、多くの建築材も含まれている。大半が柱材や横架材、梯子材などである。そのなかで注目されるのは、板倉造り建物の壁板である。「樋部倉期」という、板と板を接ぎ合わせるための加工が施されている（第148図190）。

第142図160～第143図167は、鎌である。

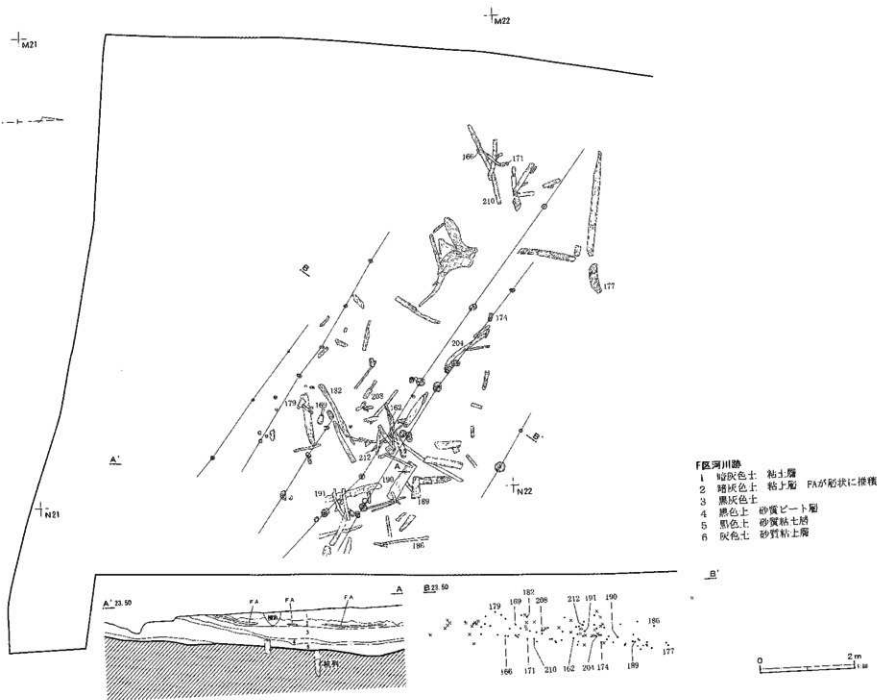
第142図160は小型の鎌で、外形は刃先側が広がる台形である。長さ10.9cm・推定幅8.8cm・厚さ3.1cmである。着柄隆起は、隆起と刃部の境が明瞭なA型隆起である。推定孔径2.8cm、着柄角度117°の鈍角である。前面に擦痕がみられる。木取りは柃目である。

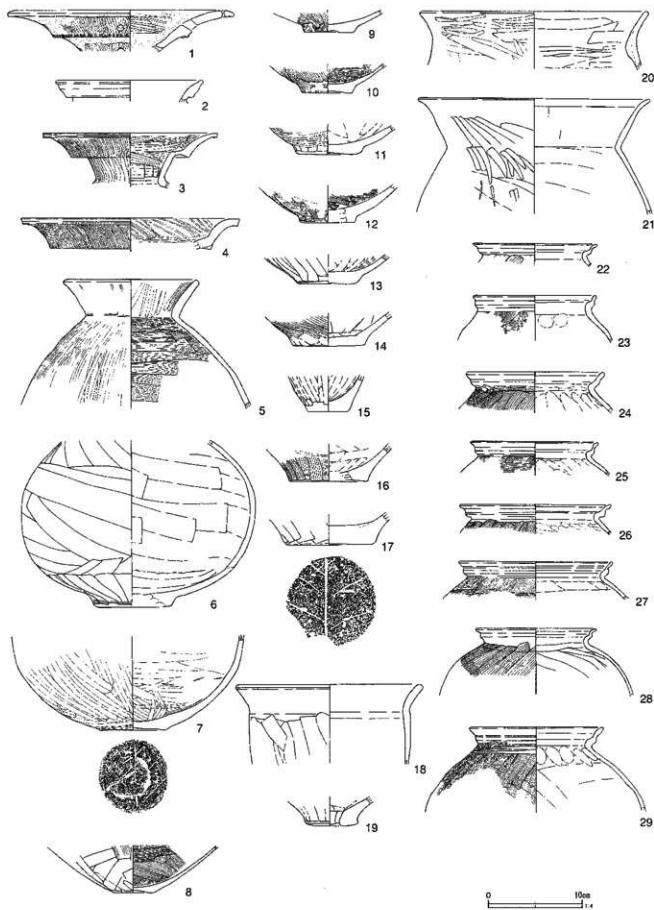
161は、横鎌である。着柄隆起の一部と刃部の大半を欠損する。外形は長方形で、刃部側縁が外側に膨らみ、上辺が直線的である。刃部の左右端はわずかに反り上がる。現存長10.6cm・現存幅2.1cm・刃部厚0.8cmである。着柄隆起は逆三角形で、厚さ2.9cmである。隆起上部は急傾斜、下部は緩やかな傾斜をもつ。着柄隆起と刃部の境は明瞭である。柄穴は円形で、中央より縁側に穿った位置に穿つ。推定孔径2.6cm、着柄角度60°である。木取りは板目である。

162は、二又鎌の身である。片刃と輪部の一部を欠損する。輪部は直線的で、断面が半円形、上部に柄と結合する切りはみられない。幅が広く、2.4cmと厚みがある。刃部は外形が直線的である。刃部幅は片刃6.0cmで、やや狭い。刃先がやや浮きあがる。前面・後面に浅い擦痕がみられる。大きさは長さ5.1cm・刃部厚さ0.8cm・木取りは柃目である。

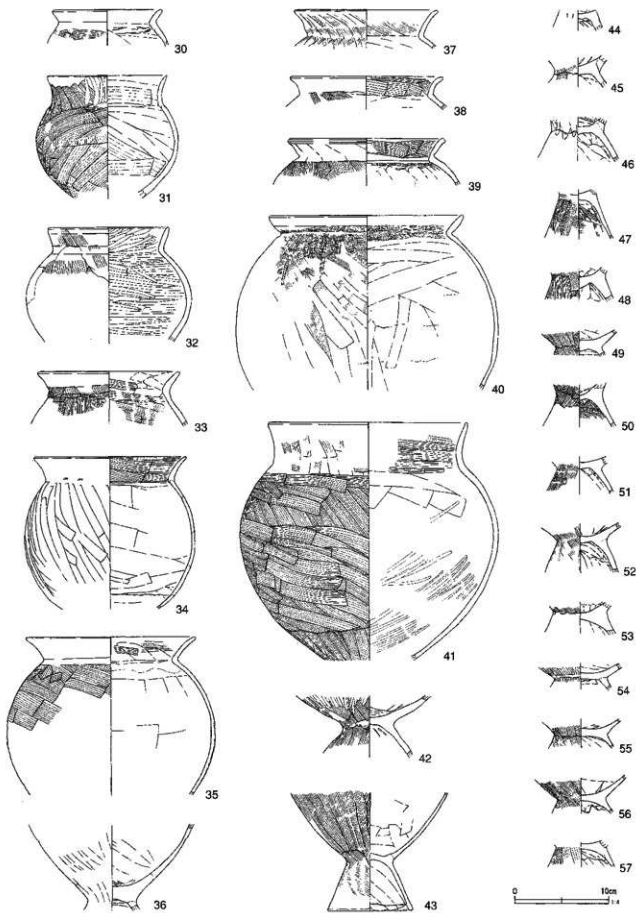
163は、二又鎌の身である。輪部・刃部下方を欠損する。刃先がやや浮き上がる。刃部は外形が直線的で、側面を平坦に作る。刃幅4.5cmと細長く、刃厚1.1cmである。前面・後面には、浅い擦痕がみられる。現存長19.0cm・幅10.1cm・厚さ1.7cmで、木

第136図 F区河川跡

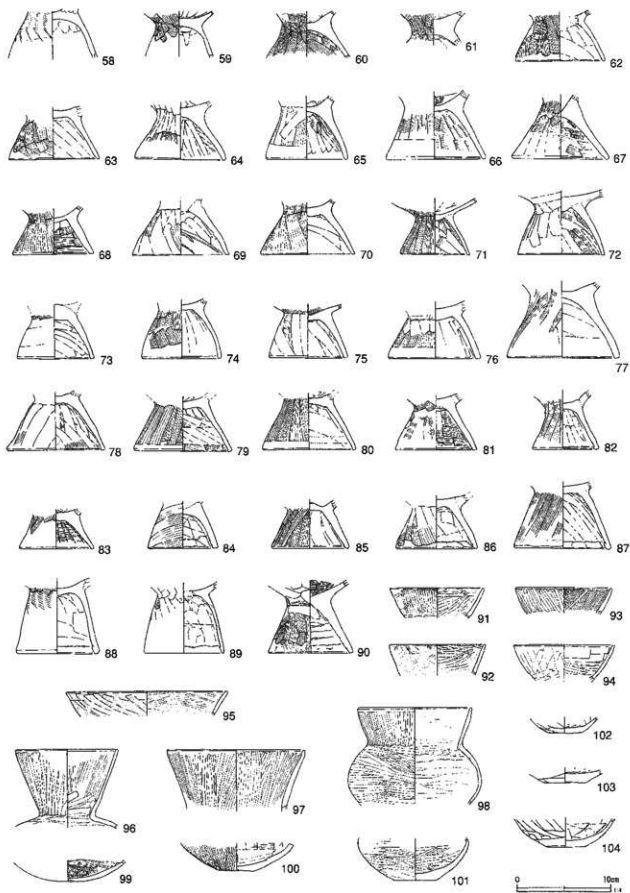




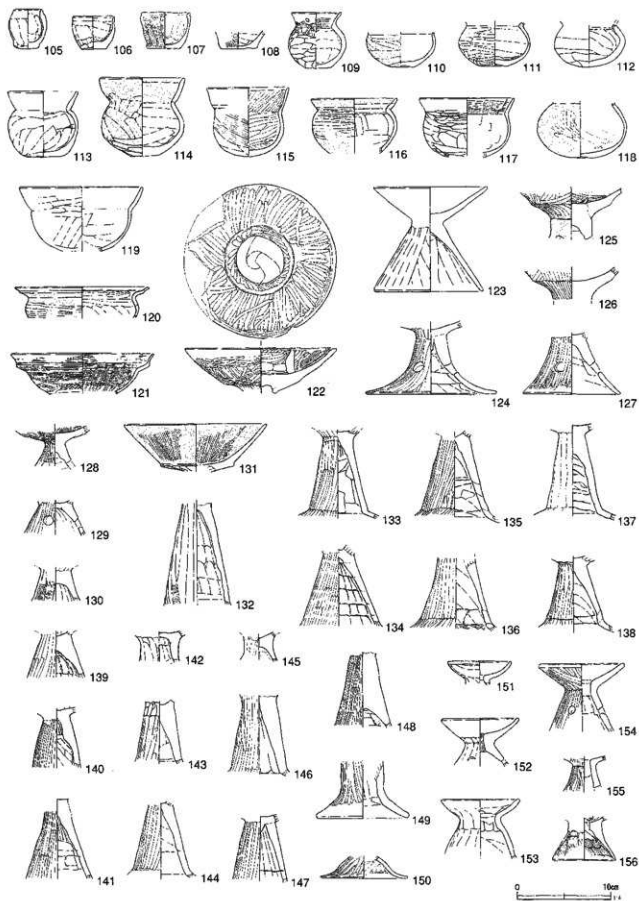
第137图 F区河川跡出土遺物 (1)



第138图 F区河川跡出土遺物 (2)



第139图 F区河川跡出土遺物 (3)



第140图 F区河川跡出土遺物(4)



157

0 10cm



158

0 10cm

⑤

⑤

159

第141図 F区河川跡出土遺物 (5)

第43表 F区河川跡出土遺物観察表 (第137~141図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	壺	(24.0)	[4.3]		5	②DG	B	橙褐	円孔3か縦列 内外面赤彩	
2	土師器	壺	(15.4)	[2.3]		破片	②DHJ	B	灰褐	有段口縁	
3	土師器	壺	(18.4)	[5.7]		30	②ACG	B	にぶい黄橙	有段口縁	54-7
4	土師器	壺	(23.2)	[3.3]		5	②ACG	B	にぶい黄橙	有段口縁	
5	土師器	壺	13.6	[13.6]		40	②DGI	B	にぶい橙	単口縁	55-4
6	土師器	壺		[17.6]	(7.8)	70	②ADGHI	B	にぶい橙		55-5
7	土師器	壺		[9.9]	7.0	20	②ADHI	B	にぶい橙	底部木炭痕	
8	土師器	壺		[5.0]	4.1	10	②ACGH	B	灰黄褐	外面底部付近に煤付着	
9	土師器	壺		[2.3]	5.2	5	②ADH	B	灰褐	内面煤付着	54-4
10	土師器	壺		[3.1]	5.3	10	②CGI	B	灰黄褐		54-5
11	土師器	壺		[3.2]	6.7	10	②ACDGH	B	にぶい赤褐		54-6
12	土師器	壺		[4.0]	(5.3)	5	②ACG	B	黒褐	炭化物付着	55-1
13	土師器	壺		[3.1]	6.2	10	②ADF	B	褐灰		
14	土師器	壺		[3.6]	7.7	10	②ABCG	B	黒	外面煤付着	
15	土師器	壺		[3.9]	4.2	5	②DHI	B	褐灰		
16	土師器	壺		[3.9]	(8.2)	5	②ACHI	B	にぶい黄橙		
17	土師器	壺		[3.3]	9.0	5	③AGH	C	灰黄褐	底部木炭痕	
18	土師器	瓶	(18.7)	[8.3]		5	③ACGH	C	橙		
19	土師器	瓶		[3.1]	5.5	10	②AHJ	B	にぶい赤褐	単孔	
20	土師器	甕	(23.6)	[6.2]		5	③AGH	B	黄灰		
21	土師器	甕	(24.2)	[12.1]		5	③DGI	B	にぶい黄橙		
22	土師器	台付甕	(13.0)	[2.4]		5	②ADHI	B	にぶい橙	S字口縁 外面煤付着	
23	土師器	台付甕	(12.8)	[4.8]		15	②DH	B	にぶい黄橙	S字口縁	
24	土師器	台付甕	(14.4)	[4.3]		5	③CDGH	B	橙	S字口縁	
25	土師器	台付甕	(13.4)	[3.6]		5	②ADH	B	黒褐	S字口縁 外面煤付着	
26	土師器	台付甕	(16.0)	[3.1]		5	③CDH	B	黒褐	S字口縁 外面煤付着	
27	土師器	台付甕	(16.0)	[4.0]		10	②ACDGH	B	黒褐	S字口縁	
28	土師器	台付甕	(12.5)	[7.1]		15	②AGH	B	灰褐	S字口縁	55-2
29	土師器	台付甕	14.0	[9.0]		20	③ADGH	B	黒褐	S字口縁 外面煤付着	55-3
30	土師器	台付甕	(11.4)	[3.9]		5	③ABCDH	B	灰黄褐		
31	土師器	台付甕	12.6	[12.9]		30	③ADGHI	B	橙		55-6
32	土師器	台付甕	(12.6)	[12.0]		15	③ACGHI	B	灰黄褐	外面煤付着	
33	土師器	台付甕	(14.7)	[5.7]		5	③ABCDG	B	灰褐		
34	土師器	台付甕	(16.0)	[16.0]		20	②AB	B	黒褐	煤付着	
35	土師器	台付甕	(17.8)	[16.8]		20	③DGH	B	暗灰	煤付着	
36	土師器	台付甕		[9.0]		10	②AHI	B	灰黄褐	外面煤付着	56-1
37	土師器	台付甕	14.9	[4.0]		10	③ADG	B	褐灰		
38	土師器	台付甕	(16.0)	[3.4]		5	③DH	B	灰褐	煤付着	
39	土師器	台付甕	(16.0)	[4.9]		5	③ADGHI	B	にぶい黄橙	煤付着	
40	土師器	台付甕	(20.4)	[18.4]		15	③ABJ	A	黒		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
41	土師器	台付甕	(20.9)	(25.0)		30	②ADGHI	B	褐		56-6
42	土師器	台付甕		[6.5]		10	②ACDI	B	にぶい黄橙		
43	土師器	台付甕		[12.5]	8.9	10	②AH	B	褐灰	胴部下位煤付着	
44	土師器	台付甕		[2.2]		5	②AH	B	黒褐		
45	土師器	台付甕		[3.3]		5	②ABC	B	にぶい橙		
46	土師器	台付甕		[4.6]		5	②AH	B	にぶい黄橙		
47	土師器	台付甕		[5.2]		5	②ACG	B	にぶい黄橙		
48	土師器	台付甕		[3.5]		5	②ADG	B	灰褐		
49	土師器	台付甕		[2.7]		5	②H	B	灰		
50	土師器	台付甕		[4.5]		5	②ABH	B	にぶい橙		
51	土師器	台付甕		[3.7]		5	②DH	B	にぶい橙		
52	土師器	台付甕		[5.3]		5	②DGH	B	灰黄		
53	土師器	台付甕		[3.4]		5	②ADGH	B	褐灰		
54	土師器	台付甕		[2.9]		5	②ACH	B	褐灰		
55	土師器	台付甕		[3.1]		5	②	B	灰	煤付着	
56	土師器	台付甕		[3.9]		10	②AD	B	にぶい褐	煤付着	
57	土師器	台付甕		[2.7]		5	②CDHI	B	にぶい褐	台部内面に砂粒付着	
58	土師器	台付甕		[5.1]		5	②DGH	B	灰黄褐	台部内面に砂粒付着	
59	土師器	台付甕		[4.9]		5	②ABDH	B	褐灰		
60	土師器	台付甕		[4.9]		5	②ABCH	B	褐灰	煤付着	
61	土師器	台付甕		[3.7]		5	②DHI	B	灰黄褐		
62	土師器	台付甕		[5.2]	(9.5)	5	②AGHI	B	にぶい橙		
63	土師器	台付甕		[5.5]	9.5	5	②ADGHI	B	灰白		
64	土師器	台付甕		[6.2]	(9.3)	5	②ABC	B	にぶい橙	煤付着	
65	土師器	台付甕		[6.7]	(8.4)	5	②AHI	B	にぶい褐		
66	土師器	台付甕		[7.2]	(10.2)	5	②AHI	B	褐灰		
67	土師器	台付甕		[6.8]	(10.0)	5	②ADGI	B	褐灰		
68	土師器	台付甕		[5.0]	8.5	10	②ADGH	B	橙		
69	土師器	台付甕		[6.0]	(10.2)	10	②ADH	B	黒褐		
70	土師器	台付甕		[5.5]	(9.8)	5	②ADGHI	B	褐灰		
71	土師器	台付甕		[5.9]	7.2	20	②DH	B	にぶい褐		
72	土師器	台付甕		[6.9]	9.1	10	②DH	B	灰褐	煤付着	
73	土師器	台付甕		[5.3]	8.0	5	②ADHI	B	にぶい赤褐		
74	土師器	台付甕		[6.2]	(8.3)	5	②ACDHI	B	灰褐		
75	土師器	台付甕		[5.7]	8.1	5	②ADGIII	B	褐灰	接合部分に煤付着	
76	土師器	台付甕		[6.0]	9.7	20	②ACDI	B	灰褐		
77	土師器	台付甕		[7.9]	11.6	5	②AHJ	B	灰褐	煤付着	
78	土師器	台付甕		[6.2]	10.2	10	②ACD	B	灰黄褐		
79	土師器	台付甕		[5.7]	10.2	10	②ADH	B	灰黄褐		
80	土師器	台付甕		[5.9]	(9.5)	5	②AG	B	褐灰		
81	土師器	台付甕		[5.9]	8.5	10	②ADGH	B	灰黄褐		
82	土師器	台付甕		[6.2]	6.7	5	②AGH	B	灰褐		
83	土師器	台付甕		[4.2]	(7.7)	10	②DGH	B	暗赤灰		
84	土師器	台付甕		[4.9]	7.1	10	②ABC	B	にぶい褐		
85	土師器	台付甕		[5.0]		10	②DHIJ	B	褐灰		
86	土師器	台付甕		[5.6]	(8.7)	10	②DGH	B	灰褐		
87	土師器	台付甕		[7.1]	9.7	5	②AD	B	灰褐		
88	土師器	台付甕		[7.9]	(8.4)	10	②DH	B	灰黄		
89	土師器	台付甕		[7.5]	(8.4)	5	②ACDG	B	明褐灰		
90	土師器	台付甕		[7.6]	8.8	10	②BG	B	にぶい褐		
91	土師器	小型壺	(9.8)	[3.2]		10	②DHI	B	にぶい橙	赤彩	
92	土師器	小型壺	(10.1)	[3.3]		15	②AH	B	にぶい赤褐	赤彩	
93	土師器	小型壺	(10.0)	[2.8]		5	②AGHI	B	にぶい黄橙		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存%	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
94	土師器	小型壺	(10.5)	[3.9]		20	②AH	B	にぶい橙		
95	土師器	小型壺	(17.0)	[2.6]		10	②ACGHI	B	にぶい赤褐	赤彩	
96	土師器	小型壺	(10.9)	[8.3]		10	②CDI	B	褐		
97	土師器	小型壺	(14.4)	[6.4]		10	②ABGH	B	橙		
98	土師器	小型壺	(12.0)	[10.3]		10	②ADGI	B	にぶい黄橙		
99	土師器	小型壺		[2.3]	1.9	15	②AGH	B	灰黄褐		
100	土師器	小型壺		[2.9]	(3.6)	5	①G	B	にぶい黄橙	赤彩	
101	土師器	小型壺		[4.5]	4.3	10	②AH	B	灰黄褐		
102	土師器	小型壺		[1.7]	3.4	10	②ACDFGH	A	灰黄褐		
103	土師器	小型壺		[1.4]		10	②ADI	B	黒褐		
104	土師器	小型壺		[3.0]	4.0	5	②CDI	B	灰		
105	土師器	ミニチュア	2.6	4.3	2.6	100	②DHI	B	灰褐		56-2
106	土師器	ミニチュア	4.4	3.4	2.7	90	②AIIH	B	黒褐		56-3
107	土師器	ミニチュア	(5.0)	3.8	3.3	60	②CGH	B	にぶい黄橙		56-4
108	土師器	ミニチュア		[1.8]	3.8	30	②CGI	B	にぶい黄橙		
109	土師器	ミニチュア	5.2	5.9	2.5	100	②DH	A	灰黄褐		56-6
110	土師器	ミニチュア	(6.7)	3.8	2.0	50	②ADH	B	にぶい橙	赤彩	
111	土師器	ミニチュア		[4.7]	2.8	80	②BCI	B	灰黄褐		56-7
112	土師器	ミニチュア		[4.6]		90	②CGH	B	にぶい橙		56-8
113	土師器	ミニチュア	(7.2)	[6.9]	3.4	50	②DGH	B	灰黄褐		57-1
114	土師器	ミニチュア	8.8	8.3	2.9	100	②ABD	B	にぶい黄橙	赤彩	57-2
115	土師器	ミニチュア	(8.5)	7.4		30	③ABCG	B	浅黄褐		57-3
116	土師器	ミニチュア	(9.0)	[5.7]		20	②CDH	B	にぶい褐	赤彩	57-4
117	土師器	ミニチュア	(10.0)	[6.3]		20	②ACGHI	B	褐灰		
118	土師器	ミニチュア		[5.9]	2.0	35	②AG	B	灰赤	外面赤彩	
119	土師器	椀	(12.9)	[6.8]		10	①DH	B	灰黄褐		
120	土師器	椀	(14.0)	[3.4]		10	②AH	B	橙	赤彩痕	
121	土師器	椀	(15.0)	[4.3]		20	②CGI	A	褐	暗文 赤彩?	
122	土師器	二重耳高坏	16.0	[4.7]		45	②AGH	A	灰黄褐		
123	土師器	高坏	11.8	11.0	(11.4)	75	②ACH	B	にぶい橙		
124	土師器	高坏		[7.7]	(13.8)	20	②ADGH	B	灰褐	円孔3	57-5
125	土師器	高坏		[5.4]		40	②AD	B	灰黄	赤彩 円孔3	57-6
126	土師器	高坏		[3.4]		20	②DGI	B	にぶい黄橙		
127	土師器	高坏		[6.5]	9.9	40	②DGH	B	にぶい褐	円孔3	
128	土師器	高坏		[4.6]		50	②ABD	B	にぶい橙	赤彩 円孔3	
129	土師器	高坏		[3.6]		20	②ACGI	B	灰黄褐	円孔3	
130	土師器	高坏		[3.5]		10	②ACDGH	B	にぶい黄橙		
131	土師器	高坏	14.9	[5.1]		40	②BDG	B	赤	赤彩	
132	土師器	高坏		[11.1]		35	②ACGH	B	にぶい黄橙		
133	土師器	高坏		[9.1]		30	②ACGHI	B	にぶい赤褐		
134	土師器	高坏		[8.1]		30	②ACGH	B	灰黄褐		
135	土師器	高坏		[9.6]		40	②BGH	B	橙		
136	土師器	高坏		[7.6]		20	②AIIH	B	灰黄褐		
137	土師器	高坏		[10.0]		40	②BGH	B	橙		
138	土師器	高坏		[8.0]		15	②ACGHJ	B	灰黄褐		
139	土師器	高坏		[4.9]		10	②CDGHI	B	灰白		
140	土師器	高坏		[6.5]		20	②ACDH	B	灰褐		
141	土師器	高坏		[8.4]		15	②ADH	B	暗灰黄		
142	土師器	高坏		[3.2]		5	②ACDGJ	B	橙		
143	土師器	高坏		[6.5]		35	②ACDHI	B	灰黄		
144	土師器	高坏		[7.9]		20	②ACHJ	B	暗灰灰		
145	土師器	高坏		[3.0]		10	②ACDGH	B	橙		
146	土師器	高坏		[8.4]		20	②ACDGI	B	褐灰		

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
147	土師器	高坏		[7.0]		10	②ACHI	B	にぶい橙		
148	土師器	高坏		[7.8]		15	②ADGH	B	にぶい橙		
149	土師器	高坏		[6.0]	(9.5)	5	②ACGH	B	にぶい黄橙		
150	土師器	高坏		[2.3]	(8.8)	20	②ACD	B	にぶい橙	異形脚	
151	土師器	器台		[2.6]		40	②AG	B	にぶい赤褐	外面・受部内面赤彩?	
152	土師器	器台		[5.0]		70	②DI	B	褐灰	円孔3	
153	土師器	器台	(6.6)	[6.4]		40	②AGH	B	灰黄褐	中央孔広い	57-7
154	土師器	器台	(8.0)	[7.2]		80	②AGJ	B	橙	円孔3	157-8
155	土師器	器台	8.0	[3.8]		15	②CDH	B	灰黄褐	円孔3	
156	土師器	器台	9.0	[4.6]	(6.8)	50	②AGHII	B	灰黄褐	短脚異形	
157	須恵器	壺	(23.6)	[7.9]		5	②AFJ	B	灰白	南北企産	

取りは柘目である。

164は、鋏の身の軸部である。軸部下端と右側面を欠損する。上部には紐かけの袂がある。外形は下に向かってやや幅広になり、欠損しているが断面は半円形である。現存長14.3cm・現存幅2.7cm・厚さ2.0cm、木取りは柘目である。

第143図165は、鋏の身である。軸部と刃部の大半を欠損する。前面には削り込みがみられ、側面は丸味をもたない平坦に作る。前面・後面には、浅い擦痕がみられる。現存長11.3cm・現存幅4.2cm・厚さ2.2cm、木取りは柘目である。

166は、二又鋏の身の片刃である。軸部・刃先を欠損する。前面には削りが施され、刃先側が浮いている。前面・後面には浅い擦痕がみられる。現存長28.5cm・現存幅6.8cm・厚さ2.2cm、木取りは柘目である。

167は、鋏の曲柄である。台のみが残存する。加工痕は装着面のみに残存し、断面は半円形である。装着面長15.9cm・幅3.4cm・厚さ3.1cm、木取りは柘目である。

第143図168～170は、横槌である。

168は、敲打部上端と掘部を欠損する。敲打部は円錐形状で、断面は楕円形である。ほぼ全面に擦痕がみられる。現存長13.0cm・幅7.3cm・厚さ6.0cm、木取りは柘目である。

169は、敲打部と掘部の境に明確な段をもつ。敲打部中心と掘部中心は一致せず、敲打部が使用

面側に片寄る。敲打部は上端がやや盛り上がる形状で、先端径が大きく握部径が小さい。断面は円形である。握部は直線的な外形で、断面は円形である。全面に加工痕が残る粗い造りである。使用面は加工痕が磨滅している。上端面にも加工痕のつぶれがみられることから、上端面の使用も考えられる。使用面の裏側には、直線的な刃物痕が多数残存し、大きく削れている。作業台として使用された可能性も考えられる。握部の一部は炭化している。長さ32.8cm・敲打部幅9.5cm・厚さ7.8cm、掘部幅3.6cm・厚さ3.3cm、芯持材である。

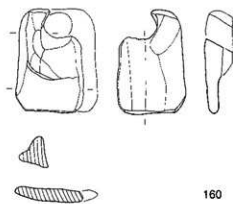
170は、握部を欠損する。敲打部は円錐形状で、断面は歪な円形である。使用痕は不明である。上部・下部が炭化している。現存長17.1cm・幅8.9cm・厚さ8.8cm、分割材である。

第144図171～175は木錘である。いずれも芯持材の丸木を加工したものである。

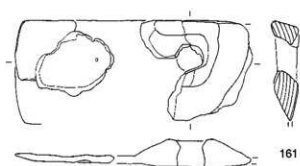
171は、上下の端部を尖らせ、中央部にくびれを成形する。上端には不規則な加工痕がみられ、中央部には鑿状工具と思われる横方向の加工痕が残る。一部に樹皮が残存する。ほぼ全面に、加工後の被熱がみられる。長さ20.7cm・幅6.5cm・厚さ6.0cmである。

172は、上下の端部を加工し、凸面を成形する。長さ16.3cm・幅6.1cm・厚さ5.4cmである。

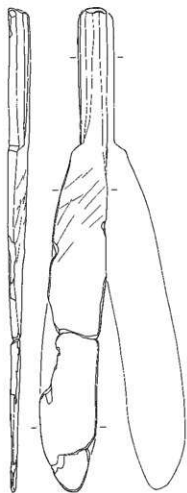
173も、上下の端部を加工し、凸面を成形する。長さ17.0cm・幅6.2cm・厚さ5.8cmである。



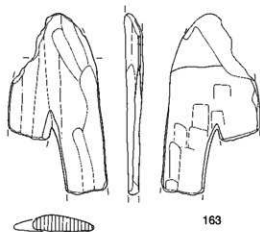
160



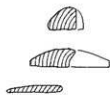
161



162



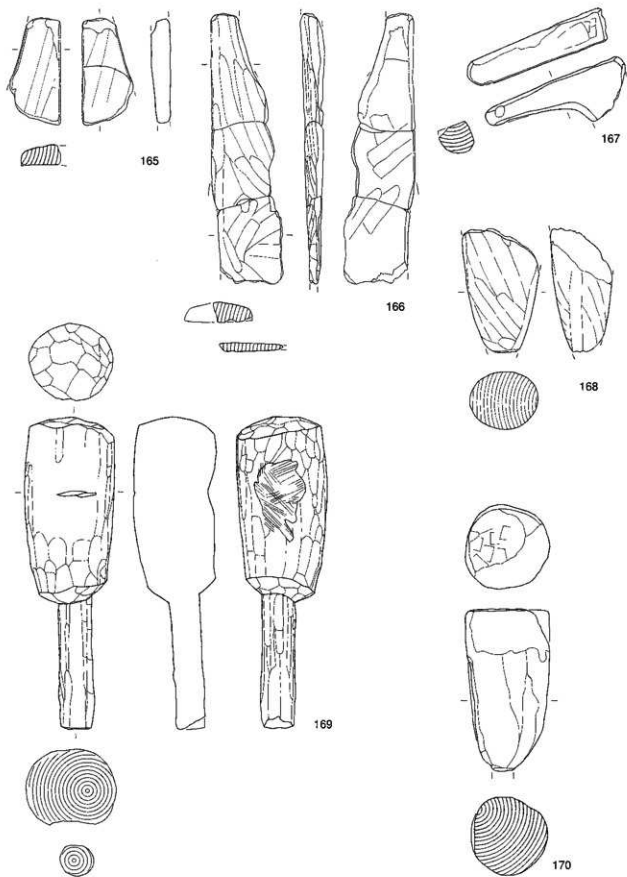
163



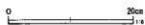
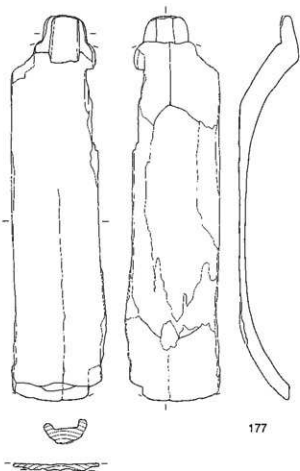
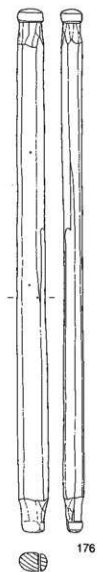
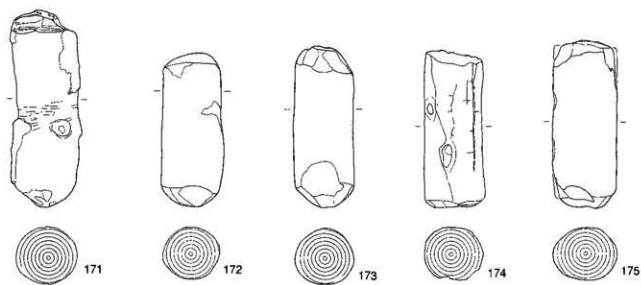
164



第142图 F区河川跡出土遺物 (6)



第143图 F区河川跡出土遺物(7)



第144图 F区河川跡出土遺物(8)

174も、上下の端部にのみ加工痕が残る。ほぼ全面に被熱がみられる。長さ165cm・幅6.2cm・厚さ5.4cmである。

175は、上端面を平坦に、下端面を凸面に成形する。長さ178cm・幅6.7cm・厚さ5.5cmである。

第144図176は、布巻具である。両端にケズリを施し、括れを作り出す。軸部は非常に直線的で、歪みがない。断面は楕円形である。図の上端から約1/4程のところ1箇所、中央付近に2箇所の計3箇の貫通孔がある。これは、巻く布の幅に対応した細工と想定される。長さ55.3cm・幅3.0cm・厚さ19.5cmである。木取りは、柾目である。

第144図177は、片口の槽である。両側の体部を欠損しているが、楕円形の槽と考えられる。底面は平坦で、楕円形である。底部と体部の境は明瞭で、外面では稜をもつ。片口の横断面は、外面が半円形、内面が方形に成形されている。長さ60.3cm・現存幅13.7cm・厚さ2.5cmである。横木取りである。

第144図178は、曲物の底板の転用品と考えられるが、用途は不明である。上端は直線的で、木目方向に対し斜めに加工される。縁に沿って、円孔を4箇所に穿つ。下端は曲線的で、円孔が1箇所にみられる。現存長14.1cm・現存幅5.8cm・厚さ0.6cm、木取りは柾目である。

第145図179は、腰掛の脚板である。上端の出柄で座板と結合し、座板に対して外側に「ハ」の字に開くように斜めに組み合わせる。脚板の外形は台形である。厚さは、下端部に向かって薄くなる。外面側下端には断面L字形になるような段が作り出されていたが、剝離・欠損する。現状では下端辺が斜めであるが、用途から本来は水平である。出柄の両側面には、脚を材板に固定する円孔を1箇所ずつ穿つ。長さ18.4cm・幅12.4cm・厚さ1.5cm、木取りは柾目である。

第145図180は、鉤形の形代と思われる。刃部と茎を模った形態で、括れ部には加工時の段差が残

る。鉤の表現はない。断面は側面が丸みをもつ長方形で、左右の厚さにややバラつきがみられる。長さ22.5cm・幅4.8cm・厚さ0.7cm、木取りは柾目である。

第145図181は、台状の製品であるが、器種は不明である。半裁材の樹皮側にケズリを施し、楕円形の窪みをつける。背面は割りはがしたままの状態で、平滑にするための加工は施されていない。左右の端面はほぼ垂直である。正面を中心に、ほぼ全面が炭化している。長さ33.6cm・幅14.1cm・高さ4.8cm、木取りは板目である。

第146図182～第148図188は建築材である。

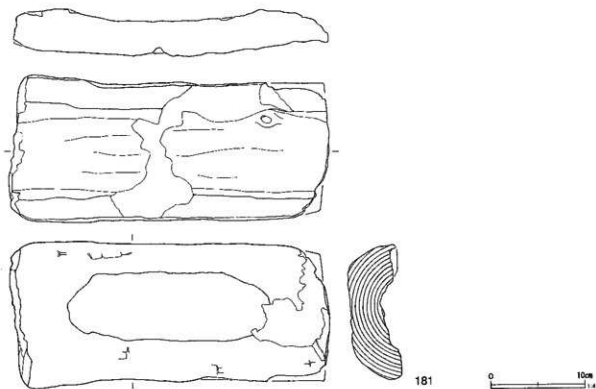
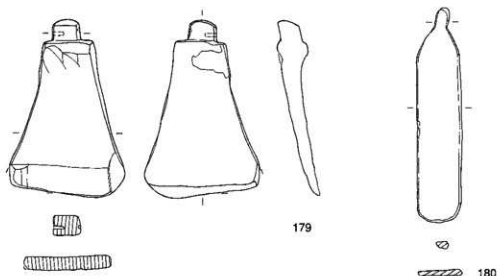
第146図182は、柱材と考えられる。本来は、上端が二又に分かれたY字材で、その一方が切り落とされ、棚状の段が形成されている。建物の建築材としての一次加工か、転用時の二次加工かは不明である。下端は丸く削っている。側面は、縦方向のケズリを施し、面を作る。現存長147.9cm・幅9.5cm・厚さ11.1cm、芯持材である。樹種はイヌガヤである。

183は、仕口部に柎孔を穿ち、垂直方向と水平方向の二材を結合する材である。全面にケズリ加工を施して、断面長方形に成形する。形状から、横架材と推定される。現存長102.2cm・幅14.1cm・厚さ5.4cm、木取りは板目である。樹種はモミ属である。

第147図184は、上下端に向かって幅狭になる。下端には出柄の痕跡がみられ、中央付近には留め柄を1箇所穿つ。下端には二次加工が施され、杭材に転用されている。現存長91.0cm・幅9.9cm・厚さ9.6cmである。分割角材で、樹種はコナラ属コナラ亜属クスギ節である。

185は、上部に仕口をもつ。仕口部以外には加工がみられず、割れ裂いたままである。長さ81.6cm・幅4.9cm・厚さ5.7cmである。分割材で、樹種はモミ属である。

186は、端部に仕口をもつ。加工痕は仕口部の



第145図 下区河川跡出土遺物 (9)

みでみられ、ほかは分割したままで加工を施さない。断面形は歪な方形である。現存長102.8cm・幅32cm・厚さ4.4cm、木取りは板目である。

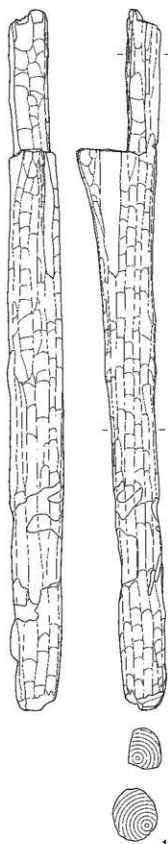
187は、両端に仕口をもつ。外形は直線的で、各面とも丁寧なつくりである。右側面には圧痕がみられる。現存長132.1cm・幅6.8cm・厚さ4.0cm、木

取りは柾目である。

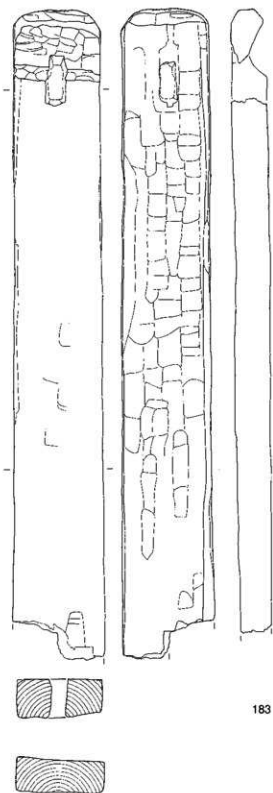
第148図188は、端部に仕口が残る。下端を欠損する。断面は半円形である。長さ36.3cm・幅4.7cm・厚さ3.5cm、木取りは柾目である。

第148図189・190は建築板材である。

189は、欠損した板材である。端部から幅約13

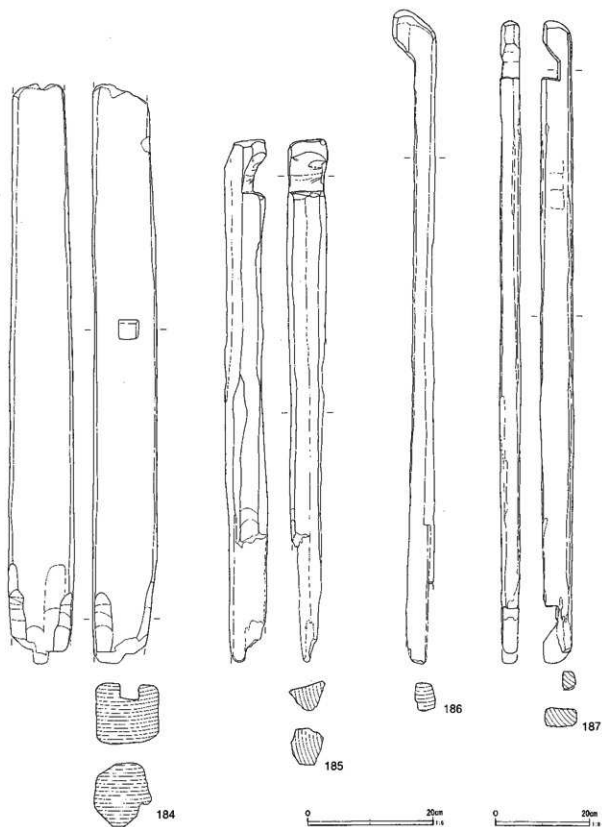


182

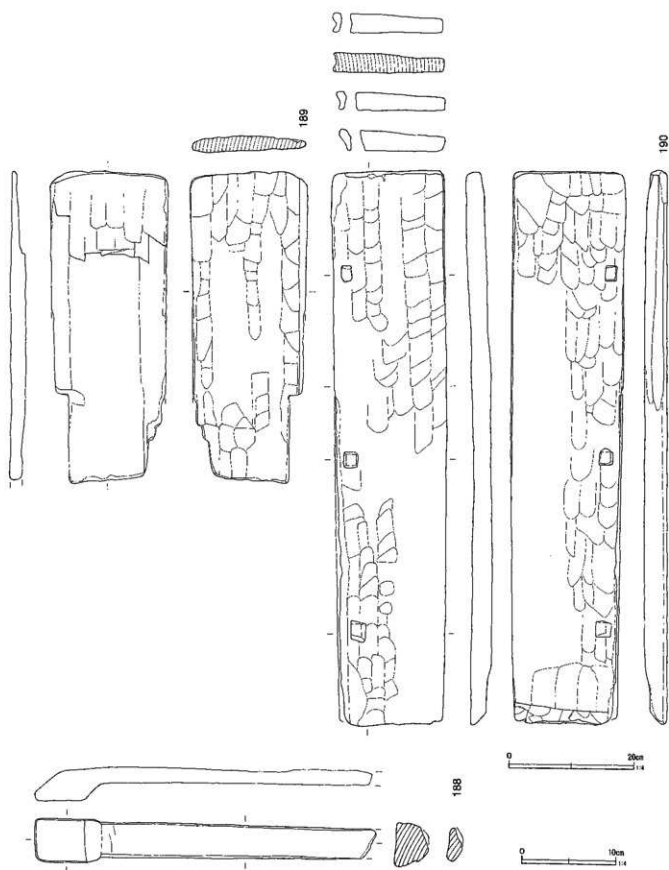


183

第146图 F区河川跡出土遺物 (10)



第147図 F区河川跡出土遺物(11)



第148図 F区河川跡出土遺物 (12)

cmほどの範囲を、片面のみ削られて厚さが薄く調整されている。ほぼ全面に、ケズリ加工が施されている。断面はごく緩やかな弧を描く。用途は、屋根板材の可能性がある。現存長48.5cm・幅17.9cm・厚さ2.4cm、木取りは柾目である。樹種はモミ属である。

190は、板倉造り建物の壁板である。板倉造りとは、それぞれの柱の側面に溝を彫り、この溝の中に柱と柱にわたる横長の壁板を落とし込む構法である。柱に落とし込む左右の端部の片面側みの右端4.0cm・左端7.6cmの範囲にケズリが施され、厚さが調整されている。背面は平坦である。上端面が平坦であるのに対し、下端面はV字谷形に加工されている。これは、V字谷形の板側面とV字山形の板側面を突き合わせる「榫部削削」という方法に用いられる壁板材として加工されたものである。下端面のV字谷形は、下の壁板と突き合わせるための加工である。本来ならば、上端面はV字山形に加工されているべきであるが、190は平坦である。この形状は、梁桁材直下の壁板最上段の壁板であったことを示唆する。厚さは、上端から下端へと厚くなる。枘孔は左から2.4cm×2.4cm、2.0cm×2.0cm、1.8cm×2.4cmの方形で、材に対してやや斜め上方向に穿つ。孔と孔の間隔は、24.7cmと27.1cmで均等ではない。孔の位置は、左から右へわずかに下がる。正面・背面ともに、明瞭な加工痕が多数みられる。幅86.8cm・高さ17.5cm・厚さ3.1cm、木取りは追柾目、樹種はヒノキである。

第149図191～193は建築材の梯子である。

191は、芯持材の丸木を用いた一木の梯子である。上部を欠損するが、上端部に近い部分まで遺存する。段間幅は、下から第1段が38.7cm、第2段が27.7cm、第3段が31.7cm、第4段が22.8cmである。足掛部の高さは、下から4.5cm・4.3cm・5.7cmである。足掛部の縦断面は、三箇所とも上面がやや上向きに立ち上がり、平坦な側面に繋がり、下面は緩やかに下る。横断面の形状は、足掛部直上付近

が長方形、足掛部が円形で、削られた段部が半円形である。現存長121.3cm・幅10.5cm・厚さ8.5cm、樹種はヤマガワである。

192は、割材を用いた一木の梯子である。上部・下部とも欠損し、足掛部1箇所とその上段が残存するに過ぎない。背面は炭化し、大部分が剥落する。段間幅は62.1cm以上と長い。足掛部の高さは2.2cmである。断面は、足掛部が楕円形、段間が歪な方形である。現存長70.3cm・幅12.4cm・厚さ6.3cmである。半截木で、樹種はヤマガワである。

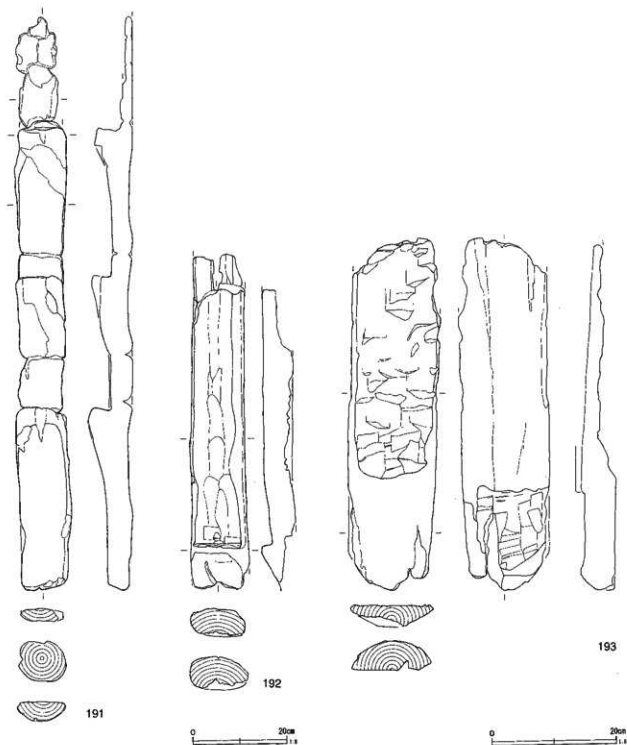
193は、芯持ちの半截材を加工した梯子である。上部・下部とも欠損し、足掛部上端部からその上段部が残存する。正面と背面下部には粗く削った痕跡がはっきりとみられ、全体的にやや薄手に仕上げられている。特に、背面下部を削って薄くしている。下端は丸く突出する。足掛部上面は、下方にむかって立ち上がる。現存長54.6cm・幅12.3cm・厚さ4.5cmである。

第150図194～第152図208は、杭である。

第150図194は、建築材（柱材）を転用した杭である。本来は、上端部に出枘が培えられ、下端部は平坦に仕上げられている。側面は全面に縦方向のケズリを施して面を作り、その加工痕は明瞭に残る。杭先端（下端）には二次加工を施して尖らせているが、杭先に平坦面が残るため鋭くはない。杭先加工は長さ27.7cmで、全長に対して短い。長さ25.4cm・幅14.6cm・厚さ14.8cmである。分割丸材で、樹種はヒノキである。

195も、建築材（柱材）を転用した杭である。上部を折損するが、本来の建造物廃棄段階の折損か、二次加工によるものかは不明である。側面部にはほぼ全面に縦方向のケズリを施し、平滑に仕上げられている。杭先加工は長さ22.9cmほどで、ケズリ単位は7面に分割される。現存長182.5cm・幅11.4cm・厚さ10.7cm、分割材である。

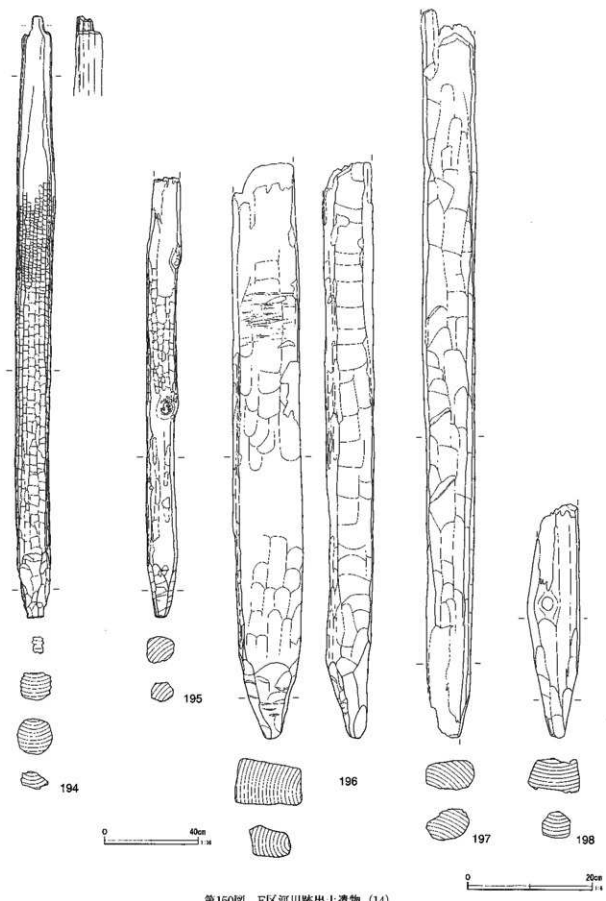
196は、建築材を転用した杭である。折損した角材で、その一端を加工して杭先に変容している。



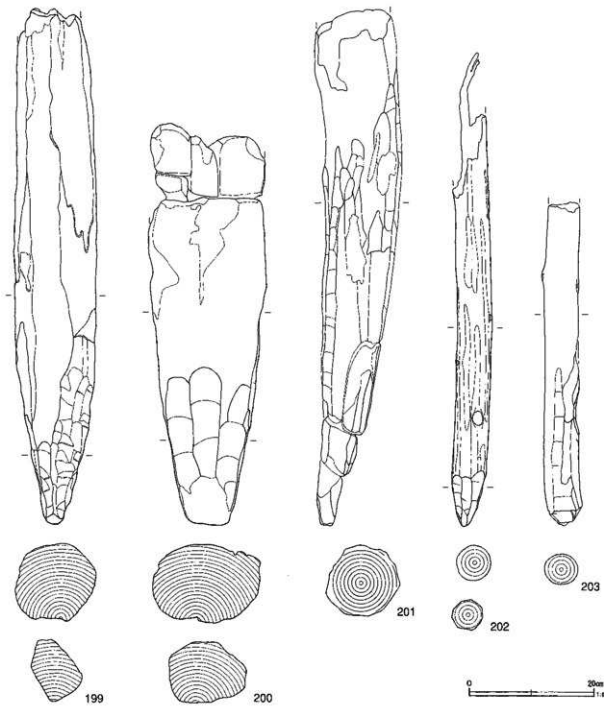
第149図 F区河川跡出土遺物 (13)

杭先加工の長さは13.0cmほどで、ケズリ単位は6面に分割される。ほぼ全面にケズリ加工が施され、正面の一部には直線的な切り傷痕が残存する。現存長90.5cm・幅10.6cm・厚さ7.0cmである。分割角材で、樹種はヤマグワである。

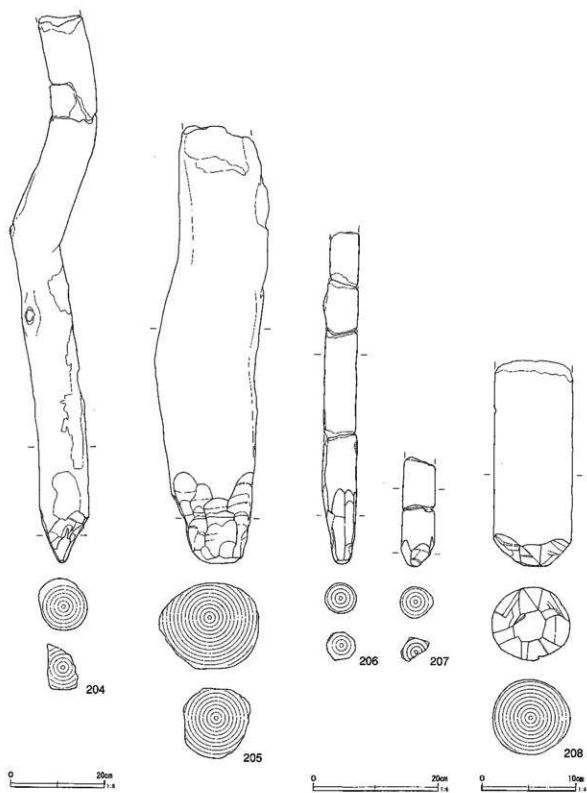
197は、建築材を転用した杭である。断面が長方形の角を面取りした六角形の長尺材である。上下両端ともに折損する。ほぼ全面に、縦方向の単位の長いケズリ加工の痕跡がみられる。外形は直線的で、下端に向かって幅狭になる。杭先加工の



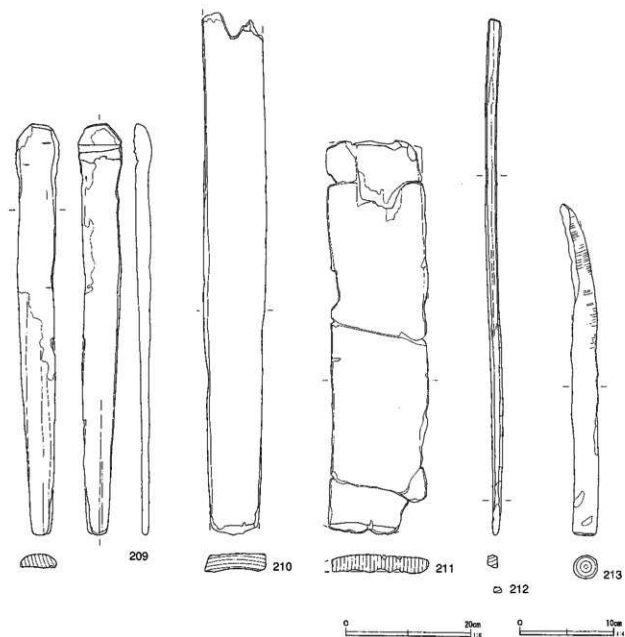
第150图 F区河川跡出土遺物 (14)



第151图 F区河川跡出土遺物 (15)



第152图 F区河川跡出土遺物(16)



第153図 F区河川跡出土遺物 (17)

長さは17.9cmほどであるが、ケズリ加工は限定的に施されている。現存長112.6cm・幅7.6cm・厚さ4.9cm、木取りは柾目である。

198は杭先付近のみが残存し、その上部は欠損する。分割材の先端にケズリ加工を施して尖らせた杭である。杭先加工の長さは9.3cmほどで、ケズリ単位は6面に分割される。加工痕は杭先のみ認められる。現存長37.3cm・幅8.4cm・厚さ5.5cm、木取りは板目である。

第151図199は、分割材を用いた杭である。表面は割り裂いたままの状態、平滑ではない。杭先にはのみ加工痕がみられる。杭先加工の長さは33.7cmと長く、幅の広い面を作る。ケズリ単位は5面に分割される。現存長81.0cm・幅12.3cm・厚さ12.1cmである。

200は、分割材を用いた杭である。杭先にはのみ加工痕がみられる。杭先は、断面が扁平な材の側面を削って尖形を作り出し、正面・背面には形を

整える程度の浅いケズリを施している。杭先加工の長さ37.0cmで、ケズリ単位は8面に分割される。現存長59.9cm・幅17.0cm・厚さ12.3cmである。

201は、芯持材の丸木を用いた杭で、材は湾曲する。杭側面部と杭先との境は不明瞭で、側面から杭先に角度をもたずに移行する。現存長81.4cm・幅11.7cm・厚さ11.1cmである。

202は、芯持材の丸木を用いた杭である。ほぼ全面に縦長のケズリ加工を施し、木肌を削る。端部に長さ9.4cmの杭先加工を行い、ケズリ面は8面に分割される。現存長74.1cm・幅5.4cm・厚さ5.4cmである。

203も、芯持材の丸木を利用した杭である。先端に長さ2.2cmの杭先加工を施し、ケズリ単位は5面に分割される。杭先付近の正面・背面にもケズリ加工を施し、面を作る。現存長33.8cm・幅3.6cm・厚さ3.2cmである。

第152図204も、芯持材の丸木の先端を加工した杭である。本来が大きく捻じ曲がった材で、上部を欠損する。加工は杭先にのみみられ、長さ10.9cm、ケズリ単位は4面に分割される。現存長11.47cm・幅10.3cm・厚さ10.9cmである。

205も、芯持材の振れのある丸木を用いた杭である。杭先にのみ加工が施される。他の杭に比べて太い丸木を加工したもので、縦方向に段が形成されるような深いケズリが施されている。杭先加工の長さは20.0cm、ケズリ単位は6面に分割される。現存長68.2cm・幅15.8cm・厚さ13.5cmである。

206も、芯持材の丸木を用いた杭である。杭先にもケズリ加工が施され、加工長12.2cm、ケズリ単位7面に分割される。現存長52.0cm・幅4.9cm・厚さ4.6cmである。

207も、芯持材の丸木の先端を加工した杭であ

る。杭先以外に加工はみられない。杭先加工の長さ6.8cm、ケズリ単位4面に分割される。現存長17.1cm・幅5.2cm・厚さ4.9cmである。

208は、芯持材の丸木の先端のみにケズリ加工を施した杭である。杭先端がつぶれ、杭先長は4.4cmと短い。ケズリ単位6面に分割される。現存長21.7cm・幅8.4cm・厚さ7.9cmである。

第153図209～211は板材である。

209は、割材を加工した板材である。上から下に向かって細く、薄くなる。上端は角が取れて丸く、上部には括れを作る。大部分に被熱痕がみられる。断面は半円形である。現存長64.1cm・幅5.6cm・厚さ2.1cm、木取りは柃目である。

210は、上端から下端に向かって幅狭になる板材である。上下ともに欠損する。正面が平坦であるのに対し、背面は凹面が形成されている。現存長81.2cm・幅9.6cm・厚さ2.8cm、木取りは板目である。

211は、長方形の板材と考えられるが、用途は不明である。背面はほぼ全面が炭化し、一部に剥落がある。長さ60.9cm・幅15.4cm・厚さ2.9cm、木取りは柃目である。

第153図212・213は、棒状製品である。

212は、割材をさらに角柱に分割したものである。外形は直線的で、先端の一面のみを削り、尖らせている。長さ81.5cm・幅1.6cm・厚さ2.0cm、木取りは板目である。

213は、上部に紐状のものを巻き付けた5mm長のこまかな圧痕が多数みられる。加工は、側面の一部と下端面のみに施されている。上部は炭化により欠損する。現存長35.0cm・幅2.5cm・厚さ2.4cm、芯持材である。

(9) その他の遺物

発見されたグリッドが明確ではあるが、その一方で、帰属する遺構が不明な遺物を、グリッド遺物として第154～157図に掲載した。また、いずれにも属さない遺物は、表探遺物として第158図に掲載した。

第157図93は、土鍾である（L29グリッド）。長さ38cm・径10cm・孔径0.6cm・重さ27gである。

第157図94は、棒状の土製品で（L29グリッド）、土鍾と形状が類似するが、孔はあいていない。現存長24cm・径1.6cm・重さ41gである。

第157図99は、土玉である（M28グリッド）。長さ21cm・径1.5cm・重さ32gである。

第157図100は、凝灰岩製の砥石である（M28グリッド）。現存長9.9cm・現存幅6.6cm・厚さ2.2cm・重さ142.1gである。

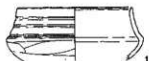
第157図108は、寛永通寶である（M29グリッド）。径2.2cm・重さ2.3gである。

第157図109は、土玉である（M29グリッド）。長さ21cm・径2.6cm・孔径0.4cm・重さ11.9gである。

第44表 F区グリッド遺物観察表（第154～157図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	新土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	[5.6]		10	①ABCI	B	にぶい橙	L23-25Gr タール状付着物	
2	土師器	甗	(11.8)	[5.4]		10	③ACHI	B	にぶい赤褐	L25-15Gr	
3	陶器	不明	(17.8)	[6.5]		5	①II	A	灰白	L25-24Gr 外:黒内:オリーブ灰	
4	瓦質土器	焙烙	(37.4)	[5.4]	(33.8)	5	②DGH	B	灰白	L25-25Gr 全面係付着	
5	土師器	坏	(14.6)	5.2		70	②ACDGHJ	B	橙	L26-25Gr M26-5Gr	62-5
6	須恵器	甗				5	②AFII	B	灰	L26-14Gr 南北企産	
7	陶器	灯明受皿	9.1	1.8	5.3	96	①H	A	にぶい黄橙	L26-15Gr 瀬戸美濃 鉄釉? 油漬半月形 19C	
8	陶器	徳利		[4.5]	(7.5)	20	①H	A	浅黄	L26-25Gr 瀬戸美濃 灰釉 削出高 19C前半	
9	土師器	小型壺	(7.0)	[5.7]		40	②ACDHI	B	橙	L27-23Gr	
10	土師器	小型壺	(7.0)	[7.3]		40	②AGI	B	橙	L27Gr№25	62-1
11	土師器	小型壺		[4.9]		40	②ADFGI	B	にぶい赤褐	L27Gr№12	
12	土師器	小型壺	(9.6)	11.0	2.4	85	②ABCGI	B	橙	L27Gr№9	62-2
13	土師器	罎	14.0	[12.7]		70	②ABCGI	B	にぶい橙	L27-20Gr L27Gr№7 口縁部内面のみ赤彩残	62-3
14	土師器	壺	(15.9)	[5.6]		5	②AGHI	B	にぶい橙	L27-24Gr 赤彩	
15	土師器	小型壺	12.8	13.8	5.1	85	③AGHI	B	にぶい橙	L27Gr	62-4
16	弥生	壺	[2.7]	(7.3)		5	②ABGI	B	にぶい橙	L27-15Gr 内面赤彩痕	
17	土師器	甗	[2.3]	7.8	5	5	②AGI	B	にぶい橙	L27-19Gr	
18	土師器	甗	[1.9]	7.8	5		③BD	B	にぶい黄橙	L27-19Gr 木葉痕	
19	土師器	壺	[2.1]	(6.6)		5	③ADGHJ	B	にぶい橙	L27-23Gr 底部:木葉痕	
20	土師器	壺	[2.1]	(7.4)		5	②ACDGH	B	にぶい黄橙	L27-25Gr	
21	土師器	甗	3.0	5.8	5	5	③ACDGH	B	にぶい赤褐	L27Gr№4	
22	弥生	壺	[4.6]	(7.0)	30		③ACDGHJ	D	浅黄橙	L27Gr№14	
23	土師器	壺	2.5	8.3	10		②ACGHJ	B	橙	L27-20Gr	
24	土師器	壺	3.6	(6.8)	5		②ABCHI	B	にぶい橙	L27-25Gr	
25	土師器	壺	[6.0]	(6.2)	5		②ACDGH	B	赤	L27Gr№23	
26	土師器	壺	[1.4]	(8.0)	5		③GI	B	にぶい橙	L27-24Gr 赤彩	
27	土師器	壺	[2.5]	8.7	5		③ACDGHJ	B	橙	L27-14Gr	
28	土師器	壺	[5.3]	8.7	10		③ACDGHJ	B	橙	L27Gr№1	
29	土師器	甗	(22.0)	[5.5]		5	②ACDGJ	B	にぶい橙	L27-22Gr	
30	土師器	甗	(14.5)	[4.2]		5	②ABGH	B	橙	L27Gr№8	
31	土師器	甗	(15.4)	[4.2]		5	③ACDGHJ	B	灰褐	L27-25Gr	
32	土師器	壺	(17.9)	[7.0]		10	②ADGH	B	にぶい橙	L27-20Gr L27Gr№12-13	63-3
33	土師器	甗	(18.8)	[8.1]		5	③ADEGH	B	にぶい黄	L27Gr	
34	土師器	台付甗	[10.5]	8.0	10		②ACGHJ	B	にぶい橙	L27-25Gr	
35	土師器	台付甗	[5.0]	(8.7)	5		③ACDGHJ	B	にぶい黄橙	L27-20Gr	
36	土師器	台付甗	[3.4]	5.5	5		③ACDHI	B	黒褐	L27-16Gr	

L23グリッド



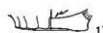
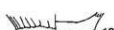
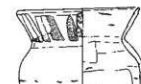
L25グリッド



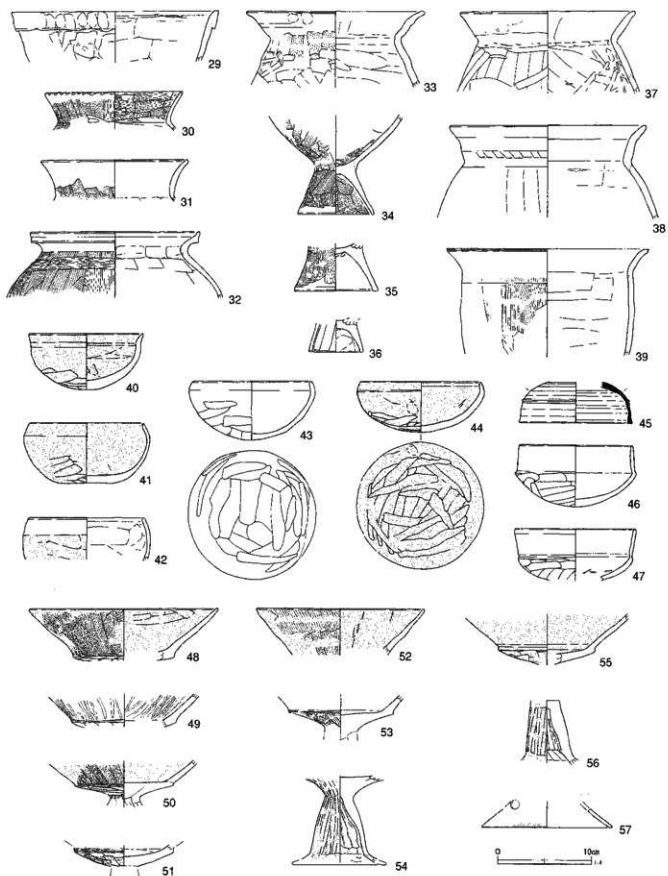
L26グリッド



L27グリッド

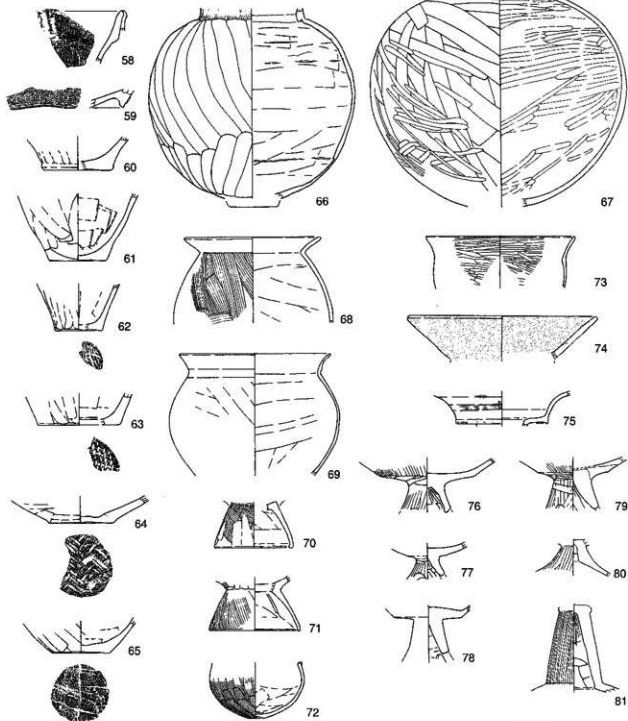


第154図 F区グリッド遺物 (1)

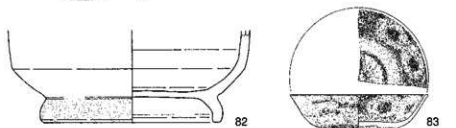


第155図 F区グリッド遺物 (2)

L28グリッド

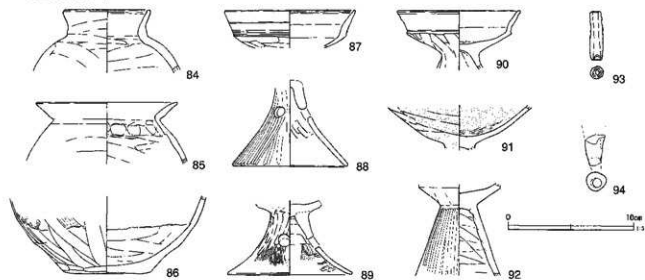


M25グリッド

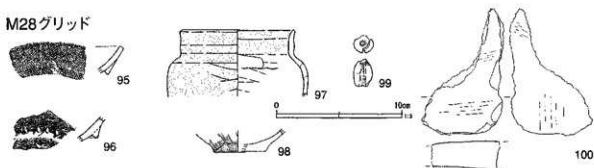


第156図 F区グリッド遺物 (3)

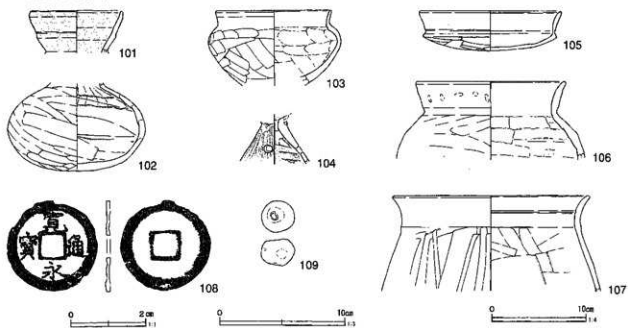
L29グリッド



M28グリッド



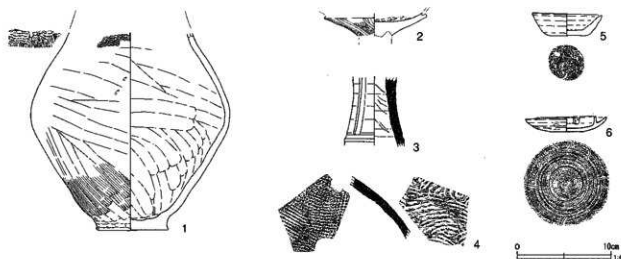
M29グリッド



第157図 F区グリッド遺物 (4)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
37	土師器	甕	(18.3)	[8.8]		10	②ADGH	B	にぶい橙	L27Gr№2	
38	土師器	甕	(20.4)	[9.7]		10	②ACGHI	B	にぶい橙	L27-23Gr	
39	土師器	甕	(21.4)	[11.4]		5	②ACDGIJ	B	にぶい黄橙	L27-24Gr	
40	土師器	輪	12.0	5.9		60	②AGH	B	赤	L27Gr№21・L27-19Gr 赤彩	62-6
41	土師器	輪	(12.2)	6.3	5.7	45	②ACGI	B	にぶい橙	L27-25Gr 赤彩	
42	土師器	輪	(12.0)	[4.4]			②ACDGH	B	にぶい赤褐	L27-18Gr 赤彩	
43	土師器	輪	12.6	6.2		90	②AEGI	B	橙	L27Gr№2	62-7
44	土師器	輪	12.7	5.3		95	②ADGI	B	赤褐	L27Gr№21 赤彩	62-8
45	須恵器	蓋	(11.9)	[4.3]		25	①ACH	A	灰	L27-25Gr 木野産? 外面自然釉付着	63-1
46	土師器	坏	(12.0)	6.5		70	②AGHI	B	にぶい橙	L27-23Gr	62-9
47	土師器	坏	(12.8)	[5.4]		30	②ABCGI	B	橙	L27Gr№3	
48	土師器	高坏	(20.0)	[5.4]		10	②AGIJ	B	にぶい橙	L27-24Gr 赤彩	
49	土師器	高坏		[3.6]		5	②ACDGIJ	B	橙	L27-20Gr	
50	土師器	高坏		[5.0]		10	②AEG	B	橙	L27-25Gr 赤彩	
51	土師器	高坏		[2.3]		5	②ACDGH	B	にぶい赤褐	L27-24Gr	
52	土師器	高坏	(17.8)	[4.9]			②AGH	B	にぶい橙	L27-24Gr 赤彩	
53	土師器	高坏		[4.8]		10	②ADGIJ	B	橙	L27-18Gr	
54	土師器	高坏		[9.2]		30	②ACGHI	B	橙	L27Gr№16 赤彩	
55	土師器	高坏		[5.4]		15	②ADGHI	B	赤	L27-22Gr 赤彩	
56	土師器	高坏		[6.7]		40	②ACGHI	B	にぶい黄橙	L27-23Gr 赤彩	
57	土師器	器台?		[2.9]	(14.0)	20	②ACDGI	B	浅黄橙	L27Gr№25	
58	弥生	壺					③ADG	B	にぶい橙	L28-24Gr 棒状浮文貼付	
59	弥生	壺					②ACDG	B	橙	L28-24Gr 円形浮文貼付	
60	弥生	壺	[3.6]	(6.9)		5	②CDHI	B	にぶい黄橙	L28-23Gr	
61	弥生	壺	[7.3]	6.0		10	②BDGI	B	橙	L28-16Gr	
62	弥生	壺	[5.0]	(4.9)		5	②AC	B	灰褐	L28-19Gr 割代痕	
63	弥生	壺	[3.4]	(8.5)		5	②ADGH	B	橙	L28-22Gr 割代痕	
64	弥生?	壺	[2.9]	6.7		5	②ADGI	B	灰褐	L28-22Gr 割代痕	
65	土師器	壺	[3.3]	(5.9)			②AG	B	にぶい橙	L28-14-15Gr 木葉痕	
66	土師器	壺		[20.2]			②AGHI	B	灰黄褐	L28-14Gr	
67	土師器	壺	15.6	24.8		50	②ABDGI	B	にぶい橙	L28-14Gr	63-4
68	土師器	甕	(14.3)	[9.1]		10	②ACG	B	橙	L28-14Gr	
69	土師器	甕	(16.0)	[12.8]		20	②ACDHI	B	にぶい赤褐	L28-21Gr	
70	土師器	台付甕		[4.9]	(8.2)	5	②AGH	B	にぶい橙	L28-19Gr	
71	土師器	台付甕		[5.7]	(9.5)	5	②ADGH	B	橙	L28-21Gr	
72	土師器	小壺		[6.0]	1.6	55	②ADIJ	A	灰黄褐	L28-20Gr	
73	土師器	鉢	(15.8)	[4.6]		5	②AGH	B	にぶい橙	L28-14Gr	63-2
74	土師器	高坏	(20.0)	[4.5]		5	②ABG	B	にぶい黄橙	L28-14Gr 赤彩痕	
75	土師器	壺		[3.7]		5	②AG	B	橙	L28-20Gr 有段口縁	
76	土師器	高坏		[5.8]		30	②ACGI	B	橙	L28-16Gr 円孔	
77	土師器	高坏		[3.8]		10	③ACDI	B	にぶい橙	L28-18Gr 円孔3	
78	土師器	高坏		[6.1]		40	②AGI	B	浅黄橙	L28-17Gr 円孔2孔1対 赤彩痕?	
79	土師器	高坏		[5.7]		30	②ADGH	B	橙	L28-19Gr 円孔3	
80	土師器	高坏		[3.8]		30	③ADG	B	橙	L28-21Gr	
81	土師器	高坏?		[8.7]		25	②ACH	B	橙	L28-15Gr	
82	陶器	火鉢?		[9.8]	18.7	30	②ADGHI	A	黒	M25Gr 19C?	
83	磁器	皿	(14.6)	[3.7]	(8.0)	25	①I	B	灰白	M25Gr 肥前産染付 蛇ノ口四形高台 18C中頃	
84	土師器	壺	(9.0)	[6.7]		10	②ADGIJ	B	にぶい橙	L29-13Gr・L29-24Gr	
85	土師器	甕	(15.0)	[6.6]		5	②ACDGI	B	橙	L29-16Gr	
86	土師器	壺		[8.2]	9.4	20	②ACDEGI	B	橙	L29-16Gr	
87	土師器	坏	(13.9)	[4.0]		20	②CDGI	B	橙	L29-21Gr	
88	土師器	高坏		[9.1]	12.1	25	②ACGI	B	淡橙	L29-16Gr 円孔3	
89	土師器	高坏		[7.9]	(13.2)	30	②ACDGIJ	B	橙	L29-16Gr 円孔3	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
90	土師器	高杯	(13.0)	[6.3]		30	①ADIII	A	にぶい赤褐	L29-4Gr-M29-9Gr	63-7
91	土師器	高杯		[4.8]		20	②AGBJ	B	にぶい橙	L29Gr 赤彩	
92	土師器	高杯		[9.7]		20	③ACGHI	B	灰白	L29-11Gr	
95	弥生	壺					②	B	橙	M28-4Gr 内外面赤彩	63-5
96	弥生	壺					②ADG	B	浅黄橙	M28-5Gr 内外面赤彩	
97	土師器	高杯	(11.9)	[7.0]		5	③CDG	B	赤	M28-7Gr 赤彩	
98	土師器	甕		[2.3]	(6.0)	5	②GH	B	にぶい橙	M28-10Gr	
101	土師器	壺	(9.7)	[4.5]		5	②ADHJ	B	赤	M29GrNo7 赤彩	
102	土師器	甕		[9.3]		20	③ACGH	B	にぶい橙	M29GrNo10	
103	土師器	高杯	12.2	[8.0]		60	③AGHI	B	にぶい橙	M29-11Gr	
104	土師器	甕台		[5.1]		20	②ADGH	B	橙	M29GrNo6 円孔3 赤彩	
105	土師器	杯	(15.0)	[4.2]		25	③Dghi	B	橙	M29GrNo1-2	
106	土師器	甕	(15.8)	[8.3]		10	②ABCgHIJ	A	にぶい黄橙	M29GrNo9 粘土継積上夜明瞭	
107	土師器	甕	(20.8)	[10.1]		5	③CDGJ	B	にぶい橙	M29GrNo4	



第158図 F区表採遺物

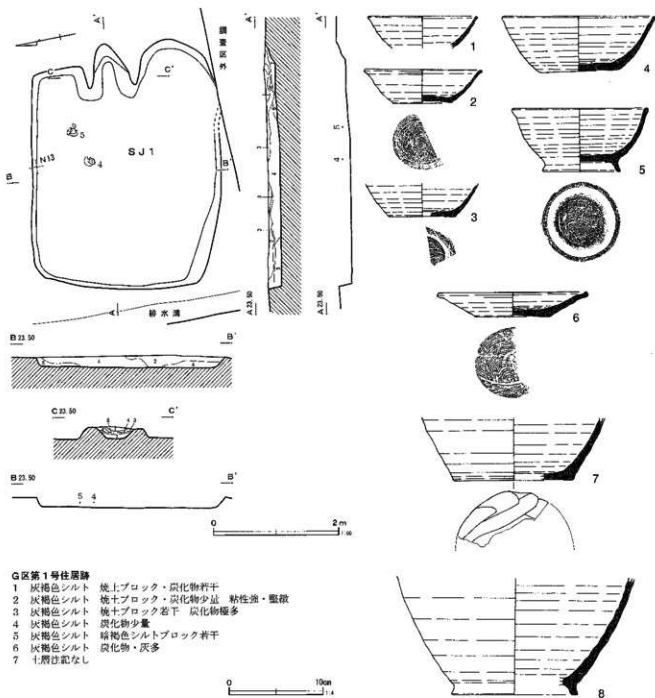
第45表 F区表採遺物観察表 (第158図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	弥生	甕		[20.7]	8.0	20	②ADGH	B	にぶい赤橙	櫛波状文	63-8
2	土師器	高杯		[2.3]		20	③CDGH	B	明赤褐	B層	
3	須恵器	高杯		[7.2]		5	②H	B	灰	未野産	
4	須恵器	甕					②GHI	B	灰	未野産	
5	かわらけ	皿	7.2	2.2	3.9	95	②BDGI	B	にぶい黄橙		63-6
6	陶器	灯明受皿	8.5	1.4	3.7	100	①HI	A	にぶい黄橙	瀬戸美濃 鉄輪 油漬切立 19C前半	

4. G区の遺構と遺物

G区は、M・N11～L・M・N21グリッドの延長約95mに及ぶ範囲である。東側はF区第2地点の河川跡によって、F区で発見された集落跡とは分離される。西側は遺構・遺物の検出されていない区域となり、G区で発見されている遺構群の限界となる。

発掘調査は、調査手順の問題から便宜的に、第1地点・第2地点に分割して実施した。M・N16グリッドとM・N17グリッド付近を境として、東側を第1地点、西側を第2地点とした。最終的には全面的調査を実施しており、図面上には地点の境界は表されていない。



G区第1号住居跡

- | | |
|----------|---------------------|
| 1 灰褐色シルト | 焼土ブロック・炭化物若干 |
| 2 灰褐色シルト | 焼土ブロック・炭化物少量 粘性強・堅緻 |
| 3 灰褐色シルト | 焼土ブロック若干 炭化物極多 |
| 4 灰褐色シルト | 炭化物少量 |
| 5 灰褐色シルト | 暗褐色シルトブロック若干 |
| 6 灰褐色シルト | 炭化物・灰多 |
| 7 1層は記なし | |

第159図 G区第1号住居跡・出土遺物

発見された遺構は、竪穴住居跡20軒・掘立柱建物跡1棟・周溝墓1基・住居跡の可能性のある性

格不明遺構5基・土城26基・溝跡18条・ピットである。

(1) 住居跡

G区第1号住居跡（第159図）

M12・13、N12・13グリッドに位置し、南東隅は調査区外にある。

平面形態は方形で、カマドを東壁の中央付近に付設する。主軸長3.45～3.90m、幅3.00m、確認面からの深さ0.10～0.20mを測る。主軸方位は、N-82°-Eを指す。

カマドは、地山掘り残しの袖が左右に付く。住居跡の掘形は、右側が大きく張り出す。主軸長0.88m、焚口付近の幅は0.63mである。

主柱穴・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は検出されていない。

遺物は、中央から北壁にやや寄った付近にまとまった分布がみられる。平安時代の須恵器坏類・壺類が出土している。

G区第2号住居跡（第160図）

L15、M14・15グリッドに位置する。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形である。カマドを長辺北壁の北東隅付近に付設する。周囲を巡る溝状の掘形と、カマドの残欠が検出された住居跡である。主軸長3.04m、幅4.85m、確認面からの深さ0.02～0.05mを測る。主軸方位は、N-6°-Eを指す。

カマドは、煙道部のみが検出され、主軸長1.40m、住居壁に接する箇所幅0.50m、深さ0.05～0.07mと浅い。覆土には焼土ブロック・炭化物が多く含まれる。住居跡壁際にはピット状の浅い掘込みもみられる。

溝状の掘形は、トレンチで削平された北西部を除いて検出されている。幅0.42～0.70m、深さ0.04～0.10mほどである。

主柱穴・貯蔵穴等は検出されていない。

遺物は、カマドから底部全面に回転ヘラケズリが施された須恵器碗が出土している。

G区第3号住居跡（第161図）

M16・17、N16・17グリッドに位置する。G区第4号溝跡よりも新しく、G区第8号溝跡と重複する。

平面形態は東西に長軸をもつ長方形で、カマドを2基付設する。主軸長3.82m、幅4.75m、確認面からの深さ0.12～0.18mを測る。主軸方位は、N-11°-Eを指す。

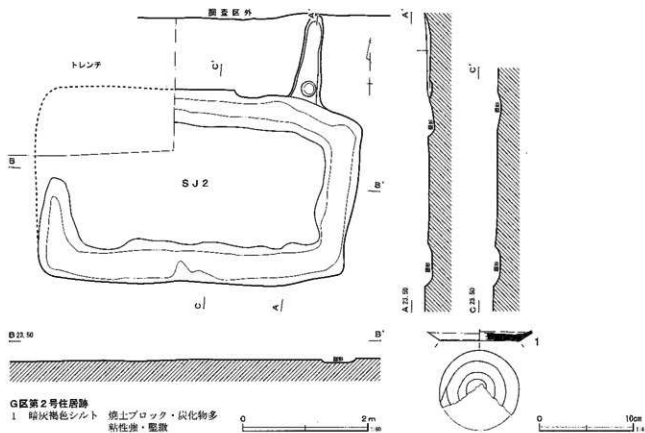
カマドAは、北壁中央付近に位置する。覆土の堆積状況から、造り替えられたカマドと判断される。袖が無く、燃焼部が住居壁の外側に飛び出るタイプである。主軸長1.08m、焚口付近の幅0.73m

第46表 G区第1号住居跡出土遺物観察表（第159図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	坏	(11.2)	[3.2]			②ABFHJK	A	灰	南北企産	
2	須恵器	坏	(11.8)	3.5	(6.0)	30	②ABFHJK	B	灰	南北企産	
3	須恵器	坏	[3.3]	(6.6)	10		③ABCHJK	B	灰	木野産	
4	須恵器	碗	15.4	5.6	8.2	95	①ABGHJK	C	灰褐	No.2 木野産 器面風化顕著	65-1
5	須恵器	高台付碗	13.8	6.3	7.7	90	②ABCHJK	B	灰	No.1 木野産	65-2
6	須恵器	皿	(15.0)	2.5	(7.6)	20	③ABHI	B	灰	木野産	65-3
7	須恵器	長頸壺	[6.3]	[12.2]		10	③ABCHK	C	灰白	木野産?	
8	須恵器	長頸壺	[12.1]	[13.0]		10	③ABHIK	B	灰	木野産	

第47表 G区第2号住居跡出土遺物観察表（第160図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	碗	[12]	8.4		30	③ABDFHIK	B	灰	カマド掘形 南北企産	



160図 G区第2号住居跡・出土遺物

である。覆土には、焼土ブロックや炭化物が多く含まれている。

カマドBは、東壁の南東隅付近に位置する。壁から延びた煙道部のみが確認され、カマドAが造られた段階で廃棄されたものと推定される。主軸長1.65m、東壁付け根付近の幅0.85mである。

主柱穴・貯蔵穴は、検出されていない。壁溝は南壁西半部に限定的にみられる。幅0.14m・床面からの深さ0.05～0.08mである。北壁中央のカマドA前面部から東壁・南壁に沿った断続的な浅い掘り込みは、住居跡の掘形である。また、西壁から垂直に張り出す溝跡は、間仕切り溝の可能性が考えられる。幅0.36m・床面からの深さ0.19～0.21mである。さらに、カマドAと相対する位置にあるピットには、出入り口施設（梯子穴）の機能が想定される。

遺物は、カマドAとカマドBの双方にまとまった分布がみられる。底部周辺部に回転ヘラケズリ

が施された須恵器杯や甕と、土錘11点（第162図6～16）が出土している。

6は、長さ5.8cm・径1.2cm・孔径0.4cm・重さ72gである。

7は、現存長5.0cm・径1.2cm・孔径0.5cm・重さ60gで、赤彩が施されている。

8は、長さ4.3cm・径1.3cm・孔径0.5cm・重さ63gである。

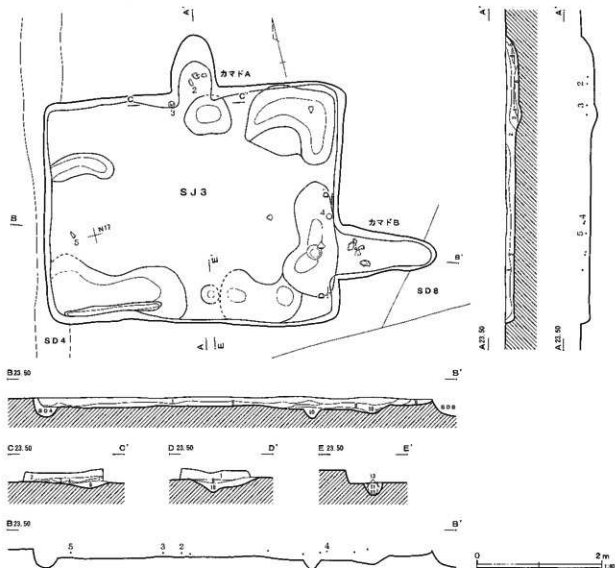
9は、長さ4.2cm・径1.2cm・孔径0.4cm・重さ63gである。鉄分が孔内に流入し、現状では貫通していない。

10は、長さ4.1cm・径0.9cm・孔径0.3cm・重さ30gである。

11は、長さ3.6cm・径0.8cm・孔径0.3cm・重さ1.6gである。

12は、現存長5.1cm・径1.2cm・孔径0.4cm・重さ5.3gである。

13は、現存長4.4cm・径1.1cm・孔径0.3cm・重さ



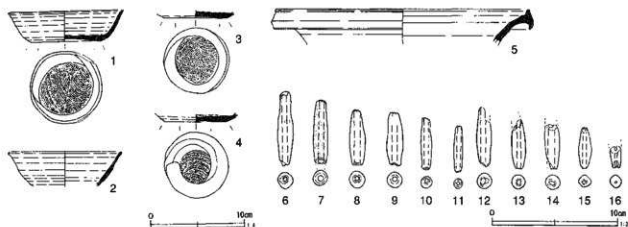
第161図 G区第3号住居跡

G区第3号住居跡

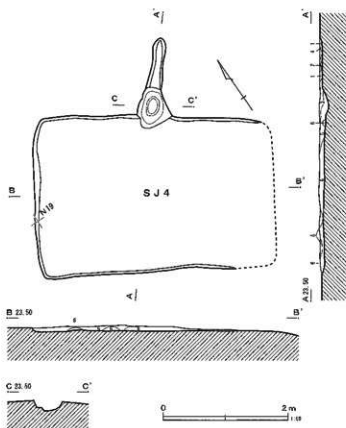
- 1 灰褐色シルト 灰色砂質シルト(地山)ブロック・焼土ブロック・炭化物少量 粘性強・しまり良好
 2 暗灰褐色シルト 灰色砂質シルトブロック多 炭化物若干 粘性強・しまり良好
 カマダA
 3 暗灰褐色シルト 焼土ブロックやや多 炭化物少量 灰若干 粘性強・しまり良好
 4 暗灰褐色シルト 炭化物極多 粘性強
 5 暗灰褐色シルト 焼土ブロック・炭化物粒子少量 灰若干 粘性強・しまり良好
 6 暗灰褐色シルト 灰色砂質シルトブロック若干 焼土ブロックやや多 炭化物少量 粘性強・しまり良好
 7 暗灰褐色シルト 灰色砂質シルトブロックやや多 粘性強・しまり良好
 カマダB
 8 暗灰褐色シルト 焼土ブロック若干 炭化物・灰多 粘性強・しまり良好
 9 暗灰褐色シルト 焼土ブロック・炭化物少量 粘性強・しまり良好
 10 暗灰褐色シルト 燃焼部 炭化物・灰極多 粘性強・しまり良好
 出入りロビット
 11 暗灰褐色シルト 焼土ブロック・炭化物少量 粘性強・しまり良好
 12 灰褐色シルト 暗褐色シルトとの互層
 13 灰褐色シルト 暗褐色シルトブロック若干 焼土ブロック・炭化物極少量

第48表 G区第3号住居跡出土遺物観察表(第162図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存%	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	坏	(120)	3.2	7.4	60	②ABFHIK	B	灰	南比企産 火だすき痕	65-4
2	須恵器	坏	(118)	[3.6]		10	②ABCDFGJK	C	灰	No3 南比企産	
3	須恵器	坏		[0.7]	6.8	40	②ABCDFHI	C	灰	No2 南比企産	
4	須恵器	坏		[0.9]	6.6	40	②ABCDFHIJK	A	灰	No7 南比企産	
5	須恵器	甕	(268)	[3.8]		5	②ABFHIK	B	灰褐色	No1 南比企産 自然輪付着	



第162図 G区第3号住居跡出土遺物



第163図 G区第4号住居跡

G区第4号住居跡

- | | | |
|-----------|----------------|---------------------------|
| 1 暗灰褐色シルト | 焼土粒子・炭化物若干 | 粘性強・しまり良好 |
| 2 暗灰褐色シルト | 炭化物粒子多 | 粘性強・しまり良好 |
| 3 暗灰褐色シルト | 炭化物粒子多 | 焼土ブロックやや多
粘性強
しまり良好 |
| 4 暗灰褐色シルト | 炭化物粒子少量 | 粘性強・しまり良好 |
| 5 暗灰褐色シルト | 地山暗褐色シルトブロック少量 | 焼土ブロック少量 |

37gである。

14は、現存長3.5cm・径1.1cm・孔径0.5cm・重さ39gである。

15は、長さ3.3cm・径0.9cm・孔径0.3cm・重さ2.4gである。

16は、現存長1.7cm・径1.0cm・孔径0.2cm・重さ1.0gである。

G区第4号住居跡 (第163図)

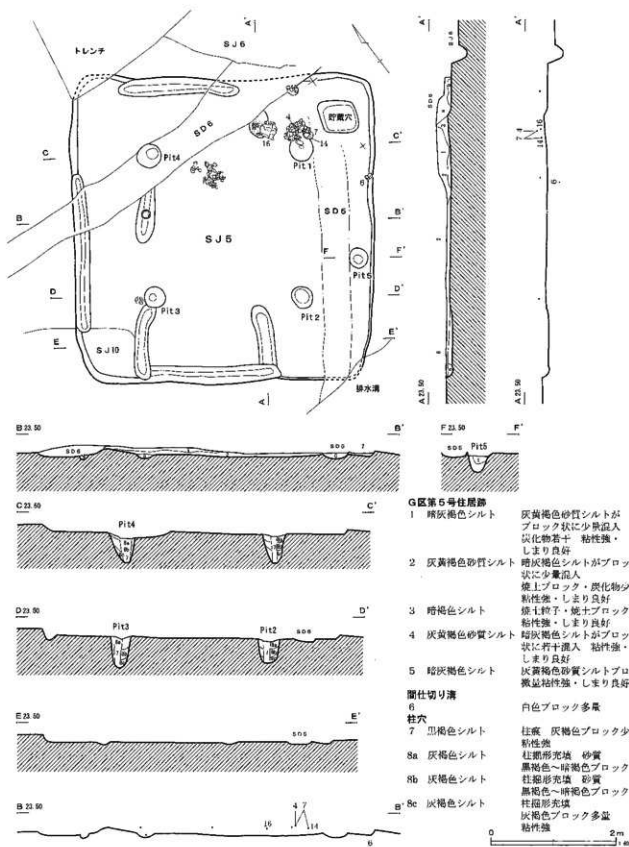
M18・19、N18・19グリッドに位置する。重複するG区第10号住居跡・G区第1号掘立柱建物跡・G区第1号周溝墓よりも新しい。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形で、カマドを北東壁中央付近に付設する。主軸長2.54m、確認面からの深さ0.02～0.18mを測る。主軸方位は、N-41°-Eを指す。

カマドは袖が無く、燃焼部が住居壁の外側に張り出すタイプである。燃焼部と煙道部が明瞭に分割される。主軸長1.42m、燃焼部長0.65m×幅0.55m、煙道部長0.77m×幅0.17～0.26mである。覆土には炭化物が多く含まれる。

主柱穴・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は検出されていない。

遺物は出土していない。



第164図 G区第5号住居跡

G区第5号住居跡 (第164・165図)

M19・20、N19・20グリッドに位置し、G区第8・10・11号住居跡、G区第1号掘立柱建物跡、G区第5・6号溝跡と重複する。

平面形態は方形で、炉が北東壁に寄った箇所に位置する。主軸長4.83m、幅4.75m、確認面からの深さ0.03~0.12mを測る。主軸方位は、N-38° - Wを指す。

主柱穴は、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4の4本柱で、きれいな方形に並ぶ。覆土の堆積状況には、柱痕と柱掘形の充填状況を明瞭に観察できる。

炉は、地床炉である。主柱穴Pit1とPit4を結ぶラインよりも外側に位置する。一部をG区第6号溝跡に削平されている。長径0.42m以上×短径0.32mの楕円形に焼土化する。

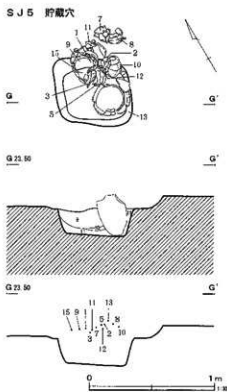
壁溝は、北東壁北半部、南西壁中央付近、北西壁中央付近にみられる。幅0.15~0.29m、床面からの深さ0.02~0.07mほどである。

貯蔵穴は、東コーナー部に付設される。長径0.60m×短径0.52mの平面方形で、床面からの深さ0.19mを測る (第165図)。

南西壁から垂直に延びる間仕切り溝が検出されている。幅0.21~0.30m、床面からの深さ0.08mほどである。

ピットは、南東壁中央付近の壁際から、出入り口施設 (梯子穴) のPit5が検出されている。

遺物は、炉・貯蔵穴・Pit1に囲まれた住居跡東



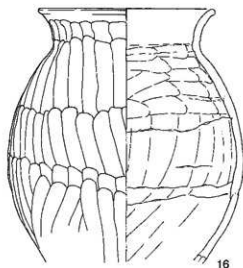
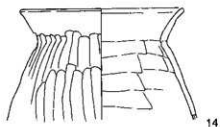
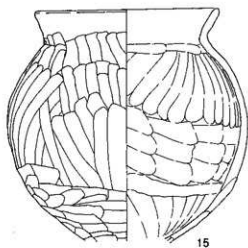
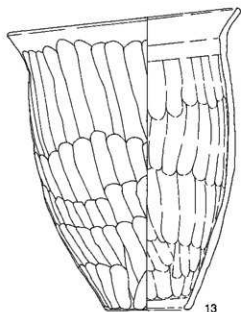
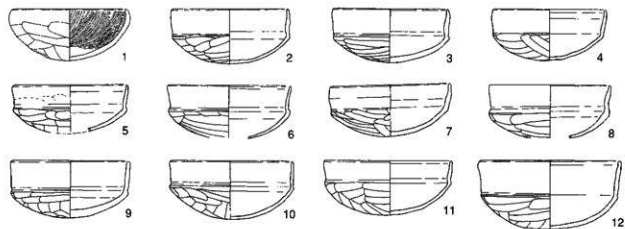
第165図 G区第5号住居跡貯蔵穴

貯蔵穴

- 9 暗灰褐色シルト 焼土粒が少量 炭化物若干
粘性強・しまり良好
- 10 暗灰褐色シルト 炭化物多 粘性強・しまり良好
- 11 灰褐色シルト 暗褐色シルトブロック若干
粘性強・しまり良好

第49表 G区第5号住居跡出土遺物観察表 (第166図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土地置・備考	図版
1	土師器	碗	12.0	4.5		95	②ABCGH	B	橙	No7 放射状暗文	65-5
2	土師器	坏	12.2	5.8		80	②ABCGH	B	橙	No5	65-6
3	土師器	坏	12.0	5.6		95	②ABCGH	B	橙	No17	65-3
4	土師器	坏	11.8	5.4		95	②ABCGH	B	淡い橙	No13	65-4
5	土師器	坏	12.0	[4.9]		95	②ABCGH	B	橙	No2	65-5
6	土師器	坏 (12.8)	[5.6]			30	②ABCGH	B	橙	No19	65-5
7	土師器	坏 (12.6)	5.4			50	②ABCGH	B	橙	No10・13・14	65-7
8	土師器	坏 (12.6)	[5.5]			35	②ABCGH	B	橙	No9	65-7
9	土師器	坏	12.6	6		95	②ABCGH	B	橙	No6	65-1
10	土師器	坏 (12.8)	6.1			60	②ABCGH	B	橙	No4 二次的被熱顯著	65-2
11	土師器	坏	13.4	5.8		95	②ABCGH	B	橙	No8	65-5
12	土師器	坏	14.7	7.2		95	②ABCGH	B	橙	No3	65-6
13	土師器	瓶	24.4	31.8	8.8	95	②ABCGH	B	にぶい橙	No1 単孔式	65-3
14	土師器	类	17.0	[11.6]		20	②ABCGH	B	橙	No14	65-4
15	土師器	壺	(19.2)	[24.3]		40	②ABCGH	B	赤褐	No11	65-7
16	土師器	类	(18.4)	[26.6]		30	②ABCGH	B	にぶい橙	No15	65-8



第166図 G区第5号住居跡出土遺物

隅付近を中心とした、まとまった分布がみられる。特に、貯蔵穴には土師器甕と甔の組み合わせと坏がまとまって出土している。

G区第6号住居跡 (第167図)

M19・20グリッドに位置する。南側コーナー部付近のみが確認され、ほかは遺構確認トレンチに

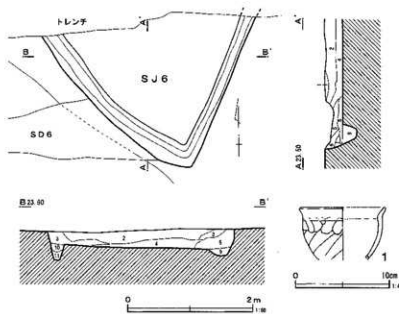
よって削平されてしまった。G区第8号住居跡・G区第6号溝跡と重複する。

平面形態は方形と推測される。南北長2.10m以上、確認面からの深さ0.09～0.24mを測る。東壁の方位N-24°-Eを指す。

壁溝は検出部で全周する。幅0.18～0.38m、床面からの深さ0.08～0.21mほどである。

主柱穴・炉・貯蔵穴等の諸施設は、検出されていない。

遺物は、土師器碗が出土している。



G区第6号住居跡

- 1 暗褐色 シルト質 焼土ブロック若干 粘性強・堅緻
- 2 暗灰褐色 シルト質 灰色砂質シルトブロックやや多
粘性強・堅緻
- 3 暗褐色 シルト質 炭化物少量 粘性強・堅緻
- 4 暗褐色 シルト質 焼土ブロック・炭化物やや多
粘性強・堅緻
- 5 暗褐色 シルト質 焼土ブロック若干 灰色砂質シルト
ブロック少量 粘性強・堅緻
- 6 暗灰褐色 シルト質 灰色砂質シルトブロック多量
粘性強・堅緻
- 7 暗褐色 シルト質 灰色砂質シルトブロック少量
粘性強・堅緻
- 8 暗灰褐色 シルト質 灰色砂質シルトブロックやや多
炭化物少量 粘性強・堅緻
- 9 暗灰褐色 シルト質 灰色砂質シルトブロック多
粘性強・堅緻
- 10 暗褐色 シルト質 灰色砂質シルトブロック若干
粘性強・堅緻
- 11 暗灰褐色 砂質シルト質 灰色砂質シルトブロック多量
粘性強・堅緻

第167図 G区第6号住居跡・出土遺物

第50表 G区6号住居跡出土遺物観察表(第167図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	碗	(9.0)	[5.7]		10	②ABCGHI	B	橙		

G区第7号住居跡(第168・169図)

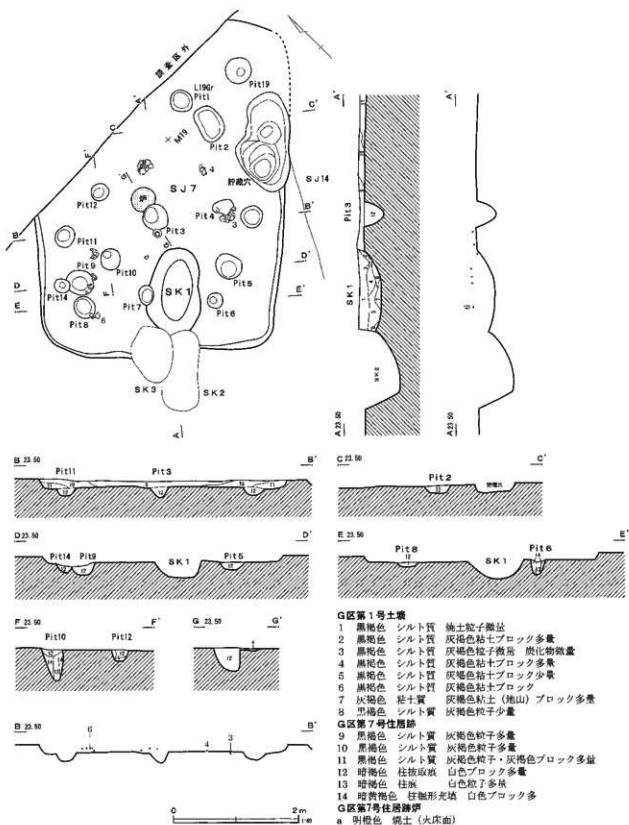
L18・19、M18・19グリッドに位置し、北側隅付近は調査区外にある。G区第14号住居跡、G区第1・2・3・12号土塊と重複する。

平面形態は、長方形である。長軸長5.18m、短軸長3.94m、確認面からの深さ0.09～0.15mを測る。長軸方位は、N-48°-Eを指す。

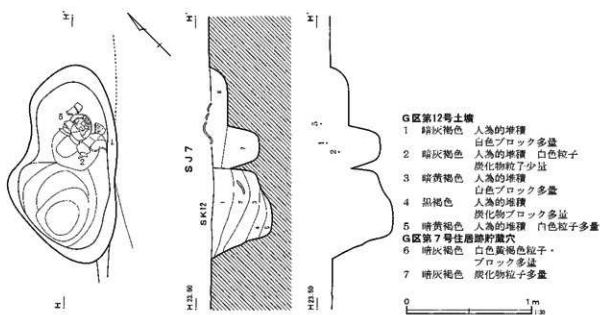
主柱穴はPit2・Pit5・Pit10の3本で、残る1本は北半部の調査区外にある。

炉は、地床炉である。住居中央付近のやや西寄りに位置する。径0.37mほどのほぼ円形に焼土化

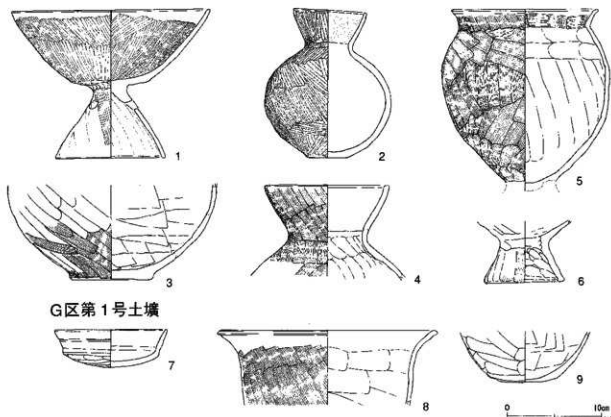
貯蔵穴は、南東壁中央から東に寄った位置に付設される。長径0.80m×短径0.70mの貯蔵穴と、長径0.84m×短径0.75mのG区第12号土塊と重複する。これらは別の遺構として捉えるよりも、一括して貯蔵穴と取り扱った方が妥当と思われる。長径1.55mの平面楕円形の貯蔵穴となり、床面からの



第168図 G区第7号住居跡・G区第1号土壇



第169図 G区第7号住居跡貯蔵穴・G区第12号土壌



第170図 G区第7号住居跡・G区第1号土壌出土遺物

深さ0.12~0.48mを測る。土師器壺・台付甕・高坏が、まとめて出土している（第169図）。

ピットは、Pit1・Pit3・Pit4・Pit6・Pit7・Pit8・

Pit9・Pit11・Pit12・Pit14・Pit19の11本が検出されている。

壁溝は、検出されていない。

遺物は、貯蔵穴のほかに炉の周辺部からまとまって出土している。時期は古墳時代前期のものである。

G区第1号土壌 (第168図)

G区第7号住居跡内に位置する土壌で、住居跡よりも新しい。

平面形態は、楕円形である。長軸長135m、短軸長0.87m、確認面からの深さ0.30mを測る。長軸方位は、N-53° -Eを指す。

遺物は、古墳時代後期の土師器の環・甕・甌が出土している。

G区第8号住居跡 (第171図)

M20グリッドに位置し、G区第6・9・15号住居跡よりも先行する。G区第5号住居跡・G区第6号溝跡と重複する。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形である。長軸長5.10m、幅3.84m、確認面からの深さ0.14~0.32mを測る。長軸方位は、N-64° -Wを指す。

主柱穴は、Pit5・Pit7・Pit8の3本である。これに対応する主柱穴は、G区第9号住居跡によって攪乱されている。また、住居中央に位置するPit2は、しっかりとした掘形と柱痕・柱掘形充填の状況が明確に観察でき、大黒柱的な役割も考えられる。

壁溝は、北東壁中央付近で途切れるほかは、全周する。幅0.17~0.26m、床面からの深さ0.03~0.10mほどである。

炉・貯蔵穴等の諸施設は、検出されていない。

ピットは、Pit1・Pit3・Pit4・Pit6が検出されている。このうち、Pit1は壁溝が途切れる北東壁中央際に位置し、出入り口施設(梯子穴)の機能が想定される。また、Pit3・Pit4・Pit6は主柱穴付近に位置することから、他の状況証拠は検出されていないが、住居が建て替えられた可能性を示唆する。

遺物は少なく、土師器高坏が出土している。

G区第9号住居跡 (第172・173図)

M20・N20グリッドに位置し、南側が調査区外にかかる。重複するG区第8号住居跡よりも新しい。

カマドは、西壁の中央よりやや北に寄って位置するカマドAと、東壁の中央付近に位置するカマドBの2基が付設される。

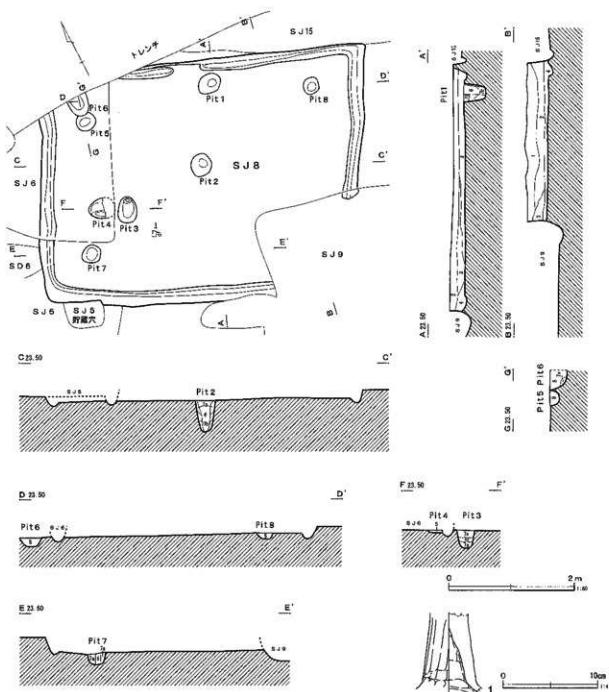
カマドAは、片袖式のカマドで、袖のある南側は壁溝外のテラス状施設となっている。燃焼部と煙道部が検出され、煙道部先端の底面は階段状に上がる。主軸長1.54m、焚口付近の幅0.58mである。

カマドBには、袖が検出されていない。また、燃焼部は残欠のみで、住居跡壁が形成されている。東壁の南より付近に付設され、主軸長1.42m、焚口付近の幅0.58mである。このような状況から、カマドBが住居建設当初のもので、これを廃棄後、カマドAを造り替えたものと判断される。この段階にカマドA南側のテラス状の張り出しを付け足したものと想定される(第173図)。

平面形態は、南北に長軸をもつ長方形である。主軸長3.25~3.47m、南北幅4.40m、確認面からの

第51表 G区第7号住居跡・G区第1号土壌出土遺物観察表(第170図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	高坏	20.8	15.6	(11.6)	85	②ABCGHJ	B	橙	貯蔵穴№2	67-1
2	土師器	壺	(7.6)	15.7	3.8	95	②ABCHJ	B	にぶい橙	貯蔵穴№3 赤彩	67-2
3	土師器	壺	[9.9]	8.0		20	②ABCJG	B	橙	№3	
4	土師器	壺	13.0	[9.6]			②ABCJG	B	白橙	№2	67-4
5	土師器	台付甕	15.4	[19.1]		70	②ABCGHJ	B	橙	貯蔵穴№1	67-3
6	土師器	台付甕	[6.9]	8.4		5	②ABCGHI	B	橙	№8	
7	土師器	环	12.0	4.0		50	②ABCGHI	C	暗褐色	SK1 (SJ7Pit7)	67-5
8	土師器	甌	(21.6)	[7.9]		10	②ABGHI	B	暗灰	SK1	
9	土師器	甕	[5.3]	(7.2)			③ABCGHI	B	にぶい橙	SK1	



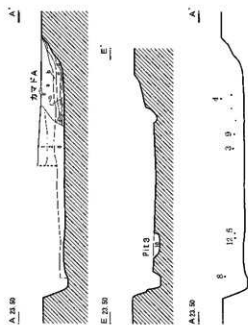
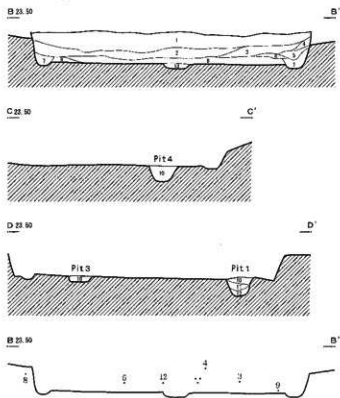
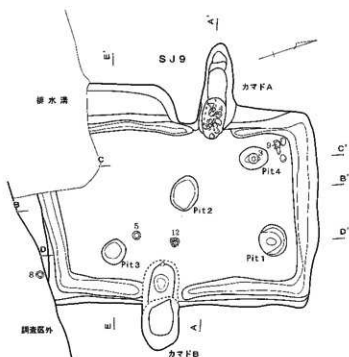
G区第8号住居跡

- | | | | | |
|-----------|---------------------------|---------|-------|-------------|
| 1 暗灰褐色 | 灰褐色粒子多量 | 5 暗褐色 | 柱状版痕 | 白色粒子多量 |
| 2 黒灰褐色 | 炭化物粒子多量 灰褐色ブロック多量 | 6 暗褐色 | 柱状 | 白色粒子多量 |
| 3 暗灰褐色 | シルト質 灰褐色シルトブロック多 | 7 a 灰褐色 | 柱断面充填 | 白色シルトブロック多量 |
| | 灰褐色粒子少量 炭化物多 | 7 b 灰褐色 | 柱断面充填 | 白色シルト主体 |
| 4 灰黄褐色シルト | 灰褐色シルト粒子・ブロックやや多
炭化物若干 | 8 灰褐色 | | 白色シルトブロック多量 |

第171回 G区第8号住居跡・出土遺物

第52表 G区第8号住居跡出土遺物観察表 (第171回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土陶器	高坏		[11]	[8.5]	10	②ABCdGH	B	橙	No1	



G区第9号住居跡

- 1 暗灰褐色 灰褐色粒子多量
- 2 暗灰褐色 灰褐色ブロック・炭化物粒子多量
- 3 暗灰褐色 灰褐色ブロック・炭化物粒子多量
- 4 暗灰褐色 灰褐色ブロック多量
- 5 黒灰色 灰層 焼土粒多量
- 6 灰褐色 灰褐色ブロック多量
- 7 暗灰褐色 灰褐色ブロック
- 8 灰褐色 灰褐色ブロック・炭化物粒子多量
- 9 暗灰褐色 灰褐色ブロック
- 10 暗茶褐色 黄褐色粒多量
- 11 暗茶褐色 黄褐色ブロック多量
- 12 暗茶褐色 黄褐色ブロック少量
- 13 暗褐色 灰多量

カマD

- a 灰褐色 シルト質 灰色シルトブロック・炭化物少量
粘性強・しまり良好
- b 灰褐色 シルト質 焼土ブロック・炭化物多
粘性強・しまり良好
- c 暗灰褐色 シルト質 灰色シルトブロックやや多
炭化物若干 粘性強・しまり良好
- d 灰褐色 シルト質 焼土ブロック若干 炭化物多
粘性強・しまり良好
- e 暗灰褐色 シルト質 炭化物やや多 焼土ブロック若干
灰色シルトブロック若干
粘性強・しまり良好
- f 灰褐色 砂質シルト質 灰色砂質シルトブロック様多
焼土・炭化物少量 粘性強



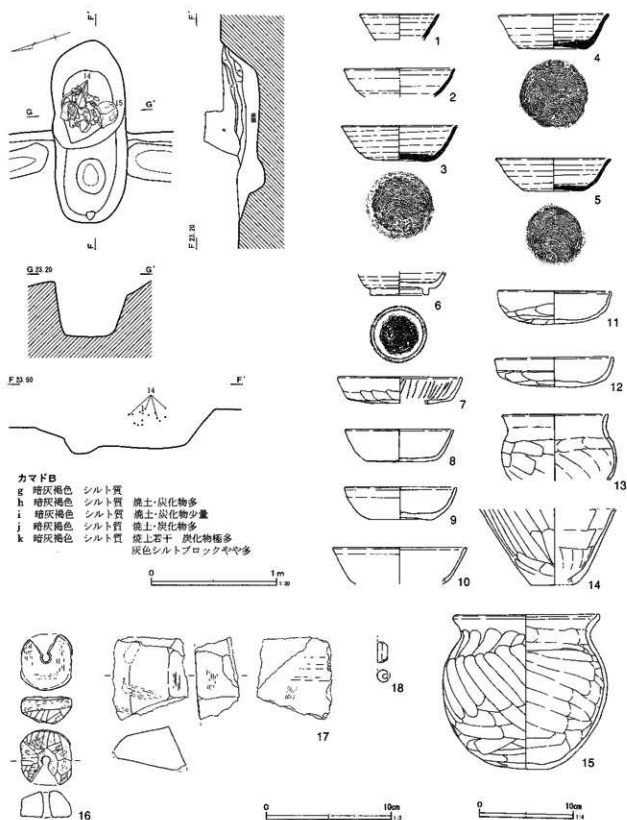
第172図 G区第9号住居跡

深さ0.28~0.38mを測る。主軸方位は、N-67° - Wを指す。

主柱穴は、Pit1・Pit3・Pit4の3本である。これに対応する主柱穴は、発見されていない。住居中

央部には、浅いPit2も検出されているが、用途は不明である。

壁溝は、検出部で全周する。幅0.27~0.47m、床面からの深さ0.04~0.10mほどである。



第173図 G区第9号住居跡カマドB・出土遺物

貯蔵穴は検出されていない。カマドB燃烧部の
残欠部分にビット状の掘込みがみられ、位置を重

視すると、カマドA段階の住居の出入り口施設
(梯子穴)と推定される。

遺物は、北西隅からカマドA付近にまとまった分布がみられる。底面糸切離しの須恵器杯、土師器杯・甕等が出土している。

16は、凝灰岩製の紡錘車である。径40cm・高さ2.1cm・孔径0.6cm・重さ38.3gである。

17は、凝灰岩製の砥石である。長さ80cm・幅61cm・厚さ3.4cm・重さ126.9gである。

18は、土錘である。現存長14cm・径1.0cm・孔径0.3cm・重さ1.2gである。貼床層から出土した。

G区第10号住居跡(第174・175図)

M18・19、N18・19グリッドに位置する。G区第4号住居跡・G区第7号土壌に先行し、G区第1号周溝墓・G区第14号土壌よりも新しい。G区第5・11・12・13・20号住居跡、G区第1号掘立柱建物跡と重複する。

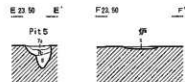
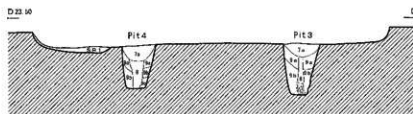
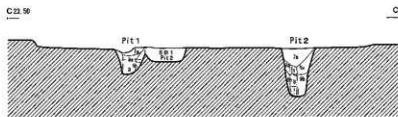
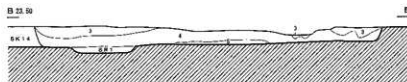
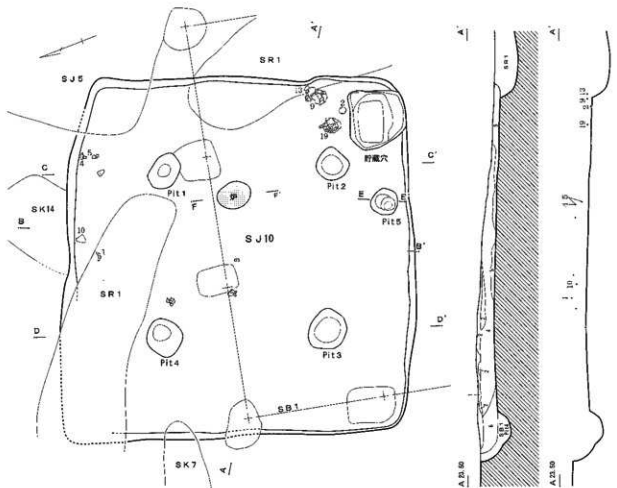
平面形態は方形で、炉が中央から東に寄って位置する。主軸長5.72m、南北幅5.50m、確認面からの深さ0.06～0.10mを測る。主軸方位は、N-

第53表 G区第9号住居跡出土遺物観察表(第173図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存率(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	壺	(8.4)	[2.8]		5	①ABCFHI	A	灰	貼床 南北企産	
2	須恵器	環	(11.8)	[3.0]		5	①ABFHI	B	灰	貼床 南北企産	
3	須恵器	環	12.2	3.3	5.8	100	②ABCFHI	B	灰	No5 南北企産	67-6
4	須恵器	環	11.8	3.8	6.8	95	②ABCFHI	B	灰	No1 未野産?	67-7
5	須恵器	環	12.0	3.5	6.0	100	②ABCFHI	B	灰	No6 南北企産 墨書「木」	67-8
6	ろくろ上師	高台付環		[2.5]	6.0	30	③ABCGI	B	にぶい橙	No20	
7	土師器	環	(13.0)	[2.8]		5	②ABCGHI	B	にぶい橙		
8	土師器	環	11.4	3.4	9.5	95	②ABGHI	C	橙	No17	68-1
9	土師器	環	11.8	3.5	6.3	90	②ABGI	B	橙	No4	68-2
10	土師器	環	(14.2)	[3.9]		10	②ABGHI	B	橙	カマド	
11	土師器	環	11.6	3.6	6.0	60	②ABGHI	B	にぶい橙	No18	68-3
12	土師器	環	12.4	3.1	9.0	90	②ABCGI	B	にぶい橙	No16	68-4
13	土師器	小型甕	11.2	[7.0]		20	②ABCHI	B	にぶい橙		68-5
14	土師器	甕	[8.0]		(4.4)	10	②ABCGHI	B	にぶい橙	カマドBNo4・7・9・15	
15	土師器	小型甕	15.2	16.3	6.2	95	②ABCGI	B	暗褐色	カマドBNo1	68-6

第54表 G区第10号住居跡出土遺物観察表(第176・177図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存率(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	壺	(17.0)	[5.6]			②ABCHI	B	橙	No1	
2	土師器	甕	9.7	4.5	2.9	95	②ABGI	B	にぶい橙	No11	68-7
3	土師器	高環	11.9	[8.6]		80	②ABGHJ	B	橙	No21	68-9
4	土師器	高環		[7.3]		20	②ABGHJ	B	橙	No5	
5	土師器	高環		[8.1]		10	②ABGHI	B	にぶい赤橙	No4・5	
6	土師器	器台	9.4	9.7	11.7	100	③ABCHI	B	橙	No19	69-1
7	土師器	器台	9.6	8.9	13.5	95	③ABCGHI	B	にぶい橙	No24 二次的被熱	69-2
8	土師器	器台	8.4	8.5	12.1	100	②ABCGHI	B	橙	No15-18	69-3
9	土師器	高環	25.7	[7.4]		35	②ABCGHI	B	にぶい橙	No10 赤彩痕	68-8
10	土師器	高環		[11.7]		20	②ABGI	B	にぶい橙	No2	
12	土師器	小型甕	(10.8)	[6.0]		5	②ABGI	B	にぶい赤橙	S字口縁	
13	土師器	台付甕		[15.8]	6.7	50	②ABGI	B	にぶい赤橙	No9 二次的被熱 内面煤付着	69-4
14	土師器	甕	18.4	[7.2]		20	②ADGI	B	暗褐色	No20・25	70-1
15	土師器	甕	(16.8)	[8.8]		20	②ABGH	B	にぶい赤橙	No15	70-2
16	土師器	台付甕		[22.6]	8.7	60	②ABCHI	B	にぶい黄橙	貯蔵穴No16・20・23・25・26	69-5
17	土師器	台付甕		[18.3]	(9.3)	30	③ABGI	B	にぶい赤橙	No15-17	
18	土師器	台付甕	17.2	26.7	9.2	95	②ABCGJ	B	暗褐色	No16 下半の二次的被熱痕顕著	70-3
19	土師器	台付甕	(17.0)	[21.0]		50	③ABGI	B	にぶい黄橙	No12	69-6
20	土師器	台付甕		[13.1]			②ABCGHI	B	にぶい橙	No13	
21	土師器	台付甕		[8.8]	8.4	20	③ABGI	B	暗褐色	No14・15 二次的被熱顕著	



G区第10号住居跡

- 1 暗灰褐色 シルト質 地山暗褐色シルトブロック・焼土ブロック少量 粘性強 しまり良好
- 2 暗褐色 シルト質 地山暗褐色シルト多量 粘性強 しまり良好
- 3 暗褐色 シルト質 地山暗褐色シルトブロック少量 粘性強 しまり良好
- 4 暗灰褐色 シルト質 地山暗褐色シルトブロック多量 粘性強 しまり良好
- 5 暗褐色 シルト質 焼土・炭化物少量粘性強
- 6 暗褐色 シルト質 黄褐色ブロック多量
- 7a 暗灰褐色 柱状取壊の埋設 白色ブロック多量
- 7b 暗灰褐色 柱状取壊の埋設 白色ブロック少量
- 8 黒褐色 柱状取壊の埋設 白色ブロック微量 炭化物多量
- 9a 暗黄褐色 柱状取壊の充て 黄褐色ブロック多量
- 9b 暗黄褐色 柱状取壊の充て 黄褐色ブロック多量
- 9c 暗灰褐色 柱状取壊の充て 暗灰褐色ブロック多量

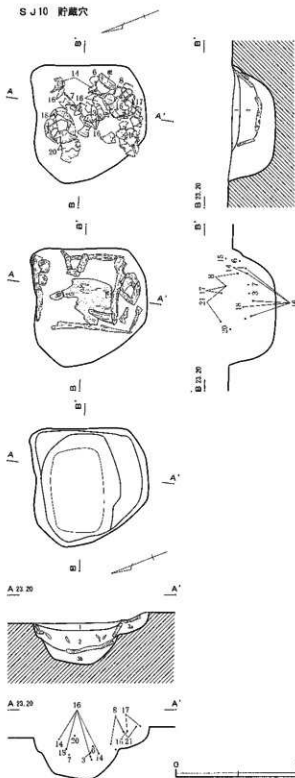
G区第10号住居跡

- a 灰褐色 焼土ブロック・炭化物多量

G区第10号住居跡貯蔵穴

- 1 黒褐色 白色粒子・炭化物粒子多量
- 2 暗灰褐色 白色粒子・炭化物粒子多量
- 3a 暗灰褐色 無形充填 白色ブロック多量
- 3b 暗灰褐色 無形充填 白色ブロック多量

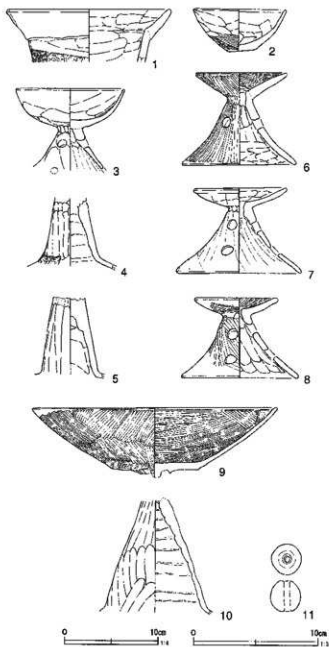
第174図 G区第10号住居跡



G区第10号住居跡貯蔵穴

- 1 黒褐色 白色粒子・炭化物粒子多量
 2 暗灰褐色 白色粒子・炭化物粒子多量
 3a 暗灰褐色 陥形充填
 3b 暗灰褐色 白色ブロック多量
 白色ブロック多量

第175図 G区第10号住居跡貯蔵穴



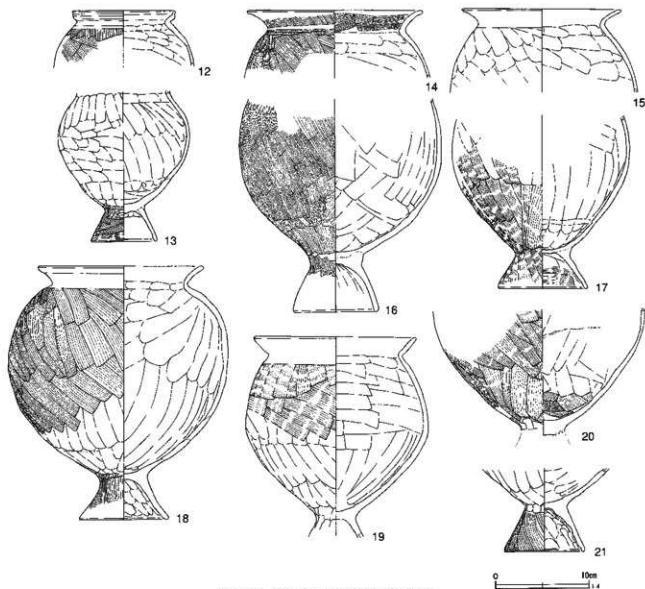
第176図 G区第10号住居跡出土遺物 (1)

III° - Eを指す。

主柱穴は、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4の4本である。住居と相似する方形に並ぶ。

炉は、地床炉である。長径0.55m×短径0.42mの楕円形に焼土化する。僅かな窪みには、焼土ブロック・炭化物が多量に含まれる。

貯蔵穴は、南東隅に付設される。平面が不整形方で、二段に掘り込まれたものである。上段は長径0.94m×短径0.89m×床面からの深さ0.12m、下



第177図 G区第10号住居跡出土遺物(2)

段は長径0.82m×短径0.64m×床面からの深さ0.33mである。上段層からは多量の遺物が出土し、遺物下からは、炭化物が検出された。炭化物は、棒状の炭化材が方形に組まれ、その中に筵状の平面的な炭化物がみつまっている。これは貯蔵穴の蓋もしくは上段部と下段部を分割する棚板と考えられるが、覆土の堆積状況や遺物の出土状況から、前者の蓋であると思われる(第175図)。

ピットは、南壁際からPit5が検出されている。出土遺物の時期や貯蔵穴の位置も加味すると、出入口施設(梯子穴)であったと推定される。壁溝は、検出されていない。

遺物は、貯蔵穴内とその北側と北壁際の2箇所

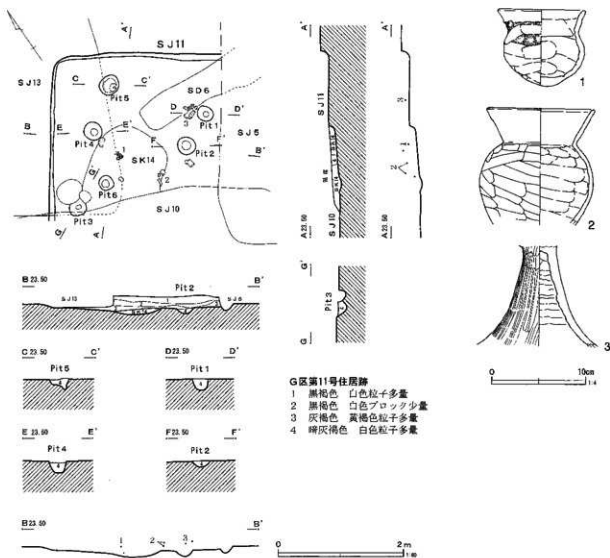
にまとまった分布がみられる。土師器碗・高坏・器台・壺・甕等が出土している。また、G区第20号住居跡・G区第7号土壌と重複する付近の壁際から、11点の編物石が検出された(図版23-1)。編物石は長さ14~24cm、幅4.5~8cm程の大きさで、長細い河原石である。

第176図11は、大型の土玉である。径24cm・孔径0.5cm・重さ127gである。

G区第11号住居跡(第178図)

M19グリッドに位置する。G区第5・10・13号住居跡よりも先行し、G区第14号土壌よりも新しい。G区第6号溝跡と重複する。

平面形態は、一辺240m以上の方形である。確



第178図 G区第11号住居跡・出土遺物

第55表 G区第11号住居跡出土遺物観察表 (第178図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	納土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	小型壺	(9.0)	8.1		75	②ABGHI	B	にぶい黄褐色	No5	70-4
2	土師器	小型壺	11.2	[12.3]		60	②ABHI	B	にぶい黄褐色	No3-4	70-5
3	土師器	高坏		[10.6]		30	①ABGH	B	橙	No1	

認面からの深さ0.12~0.14mを測り、北西壁の方位はN-36°-Eを指す。

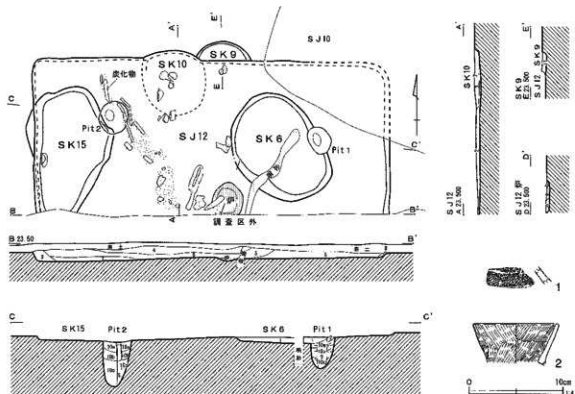
ピットはPit1・Pit2・Pit3・Pit4・Pit5・Pit6が検出されているが、いずれも主柱穴とは認定できない。灰・壁溝・貯蔵穴等の諸施設も検出されていない。

遺物は比較的少ない。

G区第12号住居跡 (第179図)

N18・19グリッドに位置し、南半部が調査区外にある。G区第20号住居跡、G区第6・9・15号土壇よりも新しく、G区第10号土壇よりも先行する。G区第10号住居跡・G区第1号掘立柱建物跡と重複する。

西半部から多量の炭化材が検出されたことから、焼失住居と思われる。平面形態は、方形である。



G区第6号土壌
1 黒褐色 白色ブロック少量 粘性強

G区第10号土壌

2 黒褐色 炭化物ブロック少量

3 黒褐色 炭化物粒子少量

G区第12号住居跡

4 黒褐色 白色粒子多量

5 黒褐色 炭化物ブロック多量 (建材の残骸?)

6 黒褐色 マンガン粒子多量

7 黒褐色 白色粒子多量

8 黒褐色 炭化物粒子少量 マンガン粒子多量

9 黒褐色 柱眼 白色粒子多量

10a 黒褐色 柱眼形充填 灰褐色粒・黄褐色粒多量

10b 黒褐色 柱眼形充填 灰褐色粒・灰褐色ブロック多量

10c 黒褐色 柱眼形充填 灰褐色ブロック多量

G区第9号土壌

11 黒褐色 白色粒子多量

G区第12号住居跡

a 明褐色 燃焼部 焼土

b 黒褐色 炭化物粒子多量

8 黒褐色 炭化物粒子少量 マンガン粒子多量

9 黒褐色 柱眼 白色粒子多量

10a 黒褐色 柱眼形充填 灰褐色粒・黄褐色粒多量

10b 黒褐色 柱眼形充填 灰褐色粒・灰褐色ブロック多量

10c 黒褐色 柱眼形充填 灰褐色ブロック多量

G区第9号土壌

11 黒褐色 白色粒子多量

G区第12号住居跡

a 明褐色 燃焼部 焼土

b 黒褐色 炭化物粒子多量

0 2m

第179図 G区第12号住居跡・出土遺物 G区第6・9・10・15号土壌

第56表 G区第12号住居跡・G区第9号土壌出土遺物観察表 (第179図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存 (%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	弥生	甕					②ACGI	B	緑	Pit	
2	土師器	甕	8.8	[4.2]		5	②ABGHI	B	ぶい・緑	SK9	

東西長5.60m、南北長2.40m以上、確認面からの深さ0.02~0.14mを測る。東西軸方位は、N-88° - Eを指す。

炉は地床炉で、中央付近に位置する。長径0.49m以上×短径0.48mの円形に焼土化する。掘形は浅く、多量の焼土と炭化物粒子が含まれている。

ピットはPit1・Pit2の2本が検出されているが、支柱穴と断定できない。壁溝・貯蔵穴はみつからない。

遺物は少ない。

G区第6号土壌 (第179図)

N18・19グリッドに位置する。重複するG区第12号住居跡の床面下より検出されたが、住居に伴う床下土壌等の施設であるかは不明である。

平面形態は、楕円形である。長軸長1.78m、短軸長1.34m、G区第12号住居跡床面からの深さ0.16mを測る。長軸方位は、N-34° - Wを指す。

G区第9号土壌 (第179図)

N18グリッドに位置し、大半がG区第12号住居跡によって削平される。平面円形、東西長0.84m

以上である。

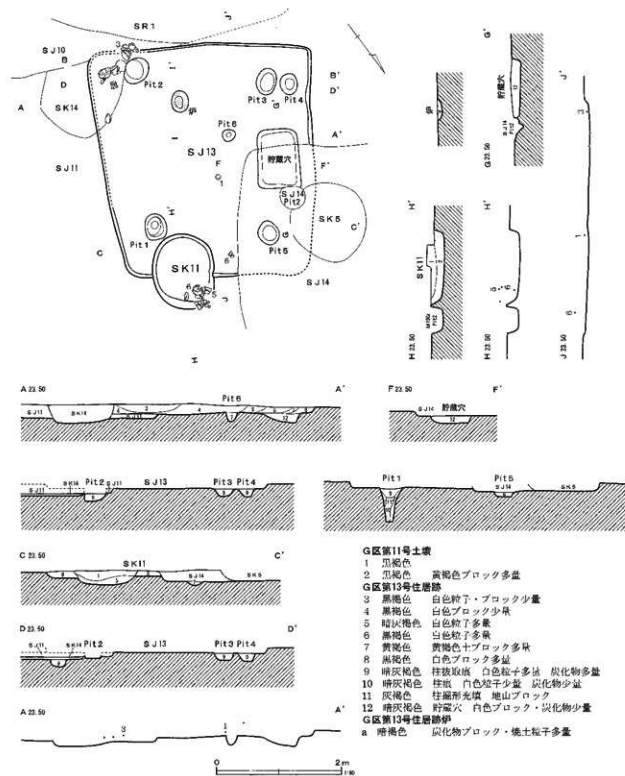
G区第10号土壌 (第179図)

N18グリッドに位置し、重複するG区第12号住居跡よりも新しい。平面形態・規模は明確ではな

いが、断面図から南北長0.96mと復元される。

G区第15号土壌 (第179図)

N18グリッドに位置する。重複するG区第12号住居跡の床面下より検出され、住居の掘形・床下



第180図 G区第13号住居跡・G区第11号土壌

土城等と考えられるが、詳細は不明である。

平面形態は溝状の楕円形で、南端部は調査区外にある。長軸長1.96m以上、短軸長1.36m、G区第12号住居跡床面からの深さ0.19~0.23mを測る。長軸方位は、N-171°-Wを指す。

G区第13号住居跡（第180図）

M19グリッドに位置する。

G区第14号住居跡、G区第5・11・14号土城よりも先行し、G区第11号住居跡よりも新しい。G区第10号住居跡・G区第1号周溝墓と重複する。

平面形態は南壁が長く、北壁が短い台形である。炉が、住居の中央から南に寄って位置する。主軸長3.65m、東西幅約2.50~3.50m、確認面からの深さ0.03~0.11mを測る。主軸方位は、N-143°-Wを指す。

主柱穴は、Pit1・Pit2・Pit3・Pit5の4本である。住居形態と相似する台形に並ぶ。

炉は、地床炉である。長径0.34m×短径0.26mの

円形に焼土化する。掘形には多量の炭化物ブロックと焼土粒子が堆積する。

貯蔵穴は、西壁中央付近の壁際に付設される。長径0.92m×短径0.67mの平面長方形で、床面からの深さ0.92mを測る。

ピットは、中央付近のPit6と南西隅付近のPit4が検出されている。いずれも用途は不明である。

壁溝は、検出されていない。

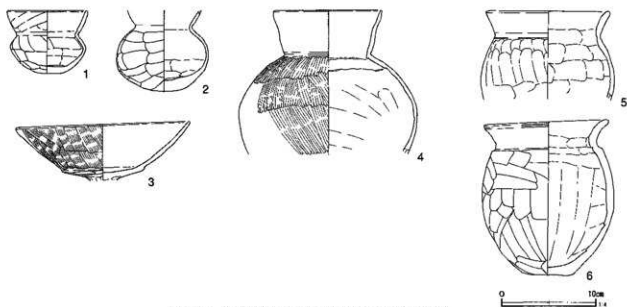
遺物は、南東隅付近にまとまった分布がみられる。土師器小型壺と高坏が出土している。

G区第11号土城（第180図）

M19グリッドに位置し、重複するG区第13号住居跡よりも新しい。

平面形態は、円形である。長軸長1.18m、短軸長0.96m、確認面からの深さ0.14mを測る。長軸方位は、N-143°-Wを指す。

遺物は、土師器の小型甕が出土している。



第181図 G区第13号住居跡・G区第11号土城出土遺物

第57表 G区第13号住居跡・G区第11号土城出土遺物観察表（第181図）

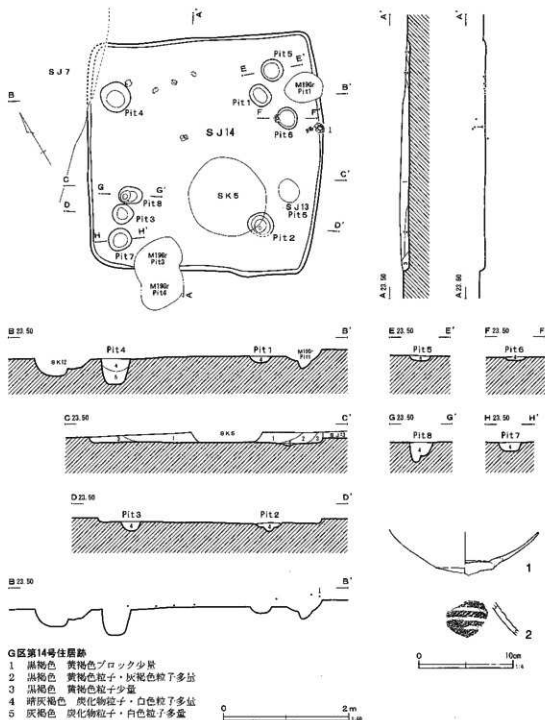
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	小型壺	8.4	6.6		95	②ABCGI	B	橙	No2 器面風化顕著	70-6
2	土師器	小型壺			[8.6]	90	②ABCGIJ	B	におい橙		70-2
3	土師器	高坏	18.2	[6.0]		60	③ABCGHI	B	橙	No5 二次的焼熟	71-3
4	土師器	壺	(11.4)	[15.1]		20	②ABGH	B	暗褐色		
5	土師器	小型甕 (12.8)		[9.4]		10	②ABCGIII	B	におい橙	SK11No1-11	
6	土師器	小型甕 (12.8)		[9.4]	5.3	80	②ABCGHJ	B	橙	SK11No3 SJ13	71-5

G区第14号住居跡 (第182図)

M19グリッドに位置し、G区第7号住居跡と重複する。G区第13号住居跡よりも新しく、G区第

5号土壇より先行する。

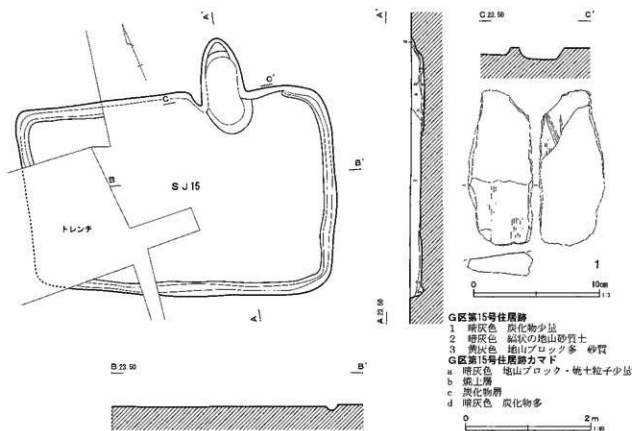
平面形態は、台形である。南北長3.55~3.82m、東西長3.72m、確認面からの深さ0.03~0.06mを測



第182図 G区第14号住居跡・出土遺物

第58表 G区第14号住居跡出土遺物観察表 (第182図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	高坏	[44]			30	①ABCGHI	B	粒	No7	
2	弥生	壺					②BCGHI	B	にぶい・粒	Pit	



第183図 G区第15号住居跡・出土遺物

る。南北軸方位は、 $N-31^{\circ}-E$ を指す。

ピットは、8本検出されている。このうち、Pit1・Pit2・Pit3・Pit4の4本が主柱穴である。ほかのPit5・Pit6・Pit7・Pit8は、用途は不明である。

炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は、検出されていない。

遺物は北半部に散見される程度で、図化し得るものは極めて少ない。

G区第15号住居跡（第183図）

M20グリッドに位置する。G区第8号住居跡・G区第7号溝跡よりも新しく、G区第17号住居跡と重複する。

平面形態は東西に長軸をもつ長方形で、北壁にカマドが付設される。主軸長3.28m、幅4.90m、確認面からの深さ0.01～0.24mを測る。主軸方位は、 $N-13^{\circ}-E$ を指す。

カマドは、北壁の東よりに位置する。地山が掘

り残された僅かな片袖のみが検出されている。燃焼部の中心が壁の外側に張り出すタイプのカマドである。燃焼部は長さ1.31m×幅0.70mで、階段状に長さ0.19mの煙道部に繋がる。

壁溝は、カマドの西側の一部を除いて、検出部では全周する。幅0.16～0.23m、床面からの深さ0.03～0.07mほどである。

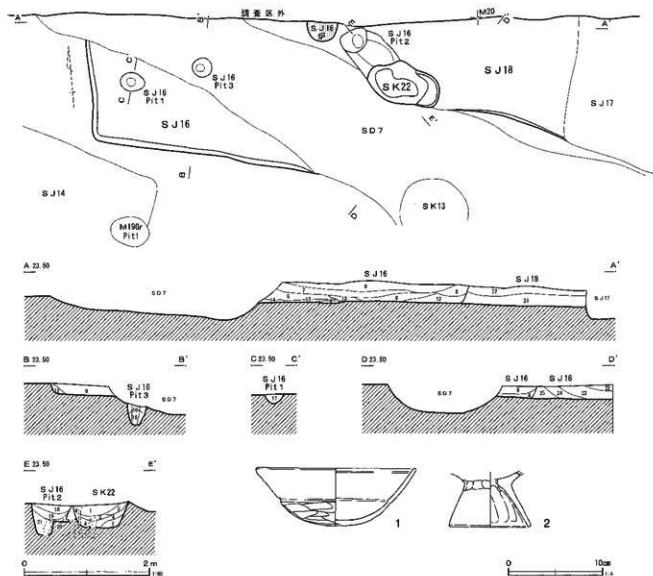
主柱穴・炉・貯蔵穴等の諸施設は、検出されていない。

遺物は、頁岩製の砥石が1点出土している。長さ12.3cm・幅5.2cm・厚さ1.8cm・重さ94.7gである。

G区第16・18号住居跡（第184図）

M19・20グリッドに位置する。北半部は調査区外にあり、またG区第7号溝跡調査後に確認された遺構であり、詳細は不明である。断面観察から、2軒の住居跡の重複と確認された。

G区第16号住居跡はG区第18号住居跡よりも新



第184図 G区第16・18号住居跡・出土遺物 G区第22号土塼

- G区第22号土塼**
- 1 暗褐色 灰褐色土ブロック少量
 - 2 暗褐色 灰褐色土粒子多量
 - 3 暗褐色 灰褐色土粒子
 - 4 暗褐色 炭化物・黄褐色土ブロック少量
 - 5 暗黄褐色 黄褐色土ブロック多量
- G区第16号住居跡**
- 6 灰褐色 白色粒子多量
 - 7 暗灰褐色 白色粒子多量
 - 8 暗灰褐色 炭化物少量 白色粒子・マンガン粒少量
 - 9 暗灰褐色 黄褐色土ブロック少量
 - 10 暗灰褐色 黄褐色土ブロック多量
 - 11 暗灰褐色 白色ブロック少量
 - 12 暗灰褐色 白色粒子・黄褐色土ブロック多量
 - 13 暗灰褐色 炭化物ブロック多量
 - 14 暗灰褐色 白色ブロック・黄褐色土ブロック多量
 - 15 黒褐色 柱痕 炭化物粒子 粘性強
 - 16 黒褐色 柱痕形充填 白色ブロック多量
 - 17 黒褐色 白色粒子多量
 - 18 暗褐色 炭化物少量
 - 19 暗褐色 白色ブロック多量
 - 20 暗褐色 白色ブロック多量
 - 21 暗褐色 白色粒子少量 粘性強
- G区第16号住居跡炉**
- a 赤褐色 焼土ブロック多量
- G区第18号住居跡**
- 22 暗灰褐色 白色粒子多量
 - 23 暗灰褐色 炭化物・白色粒子多量
 - 24 灰褐色 灰褐色土粒子多量
 - 25 暗褐色 灰褐色土粒子少量

第59表 G区第16号住居跡出土遺物観察表 (第184図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎上	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	鉢	16.7	6.1		80	③ABCGIJ	B	橙	No.1	71-2
2	土師器	台付壺		[3.7]	(8.2)	5	②ABGHJ	B	にがい腹	No.2	

しい。また、G区第17号住居跡がG区第18号住居跡を攪乱し、G区第22号土壌が重複する。

G区第16号住居跡は東西長5.9m前後の平面方形の住居跡と推定される。確認面からの深さ0.13~0.20mを測る。東西軸の方位は、N-103°-Eを指す。炉は地床炉で、住居の中央より東に寄って位置する。長径0.30m以上×短径0.50mの円形に焼土化する。ピットは3本検出されている。主柱穴の判断は難しいが、Pit3からは明瞭な柱痕が認められる。壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。遺物は、土師器鉢・台付甕が出土している。

G区第18号住居跡は、平面形態・規模等の詳細が不明である。また、主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設も検出されていない。また出土遺物もない。

G区第22号土壌 (第184図)

M19グリッドに位置し、G区第16・18号住居跡、G区第7号溝跡と重複する。G区第16号住居跡Pit2と重複する箇所は、大地震に伴う噴砂痕によって、新旧関係は把握できなかった。

平面形態は、不整形である。長軸長1.16m、短軸長0.65m、確認面からの深さ0.21mを測る。長軸方位は、N-66°-Wを指す。

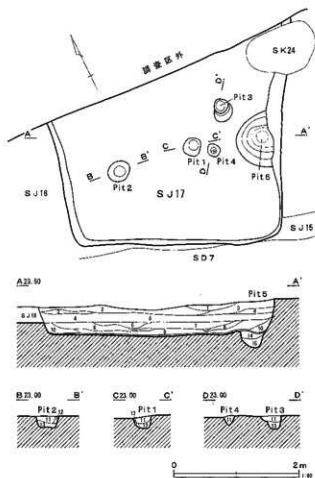
G区第17号住居跡 (第185図)

M20グリッドに位置する。G区第18号住居跡よりも新しく、G区第24号土壌よりも古い。G区第15号住居跡・G区第7号溝跡と重複する。

平面形態は、南北長3.65m以上、東西長3.70mの方形で、確認面からの深さ0.07~0.19mを測る。南北軸の方位は、N-28°-Eを指す。

主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は、検出されていない。Pit1・Pit2・Pit3・Pit4の4本のピットは、用途が不明である。東壁際の床下に位置するPit5は、他のピットとは規模が異なり、貯蔵穴の可能性も考えられる。

遺物は微細な破片のため図示し得ない。



第185図 G区第17号住居跡

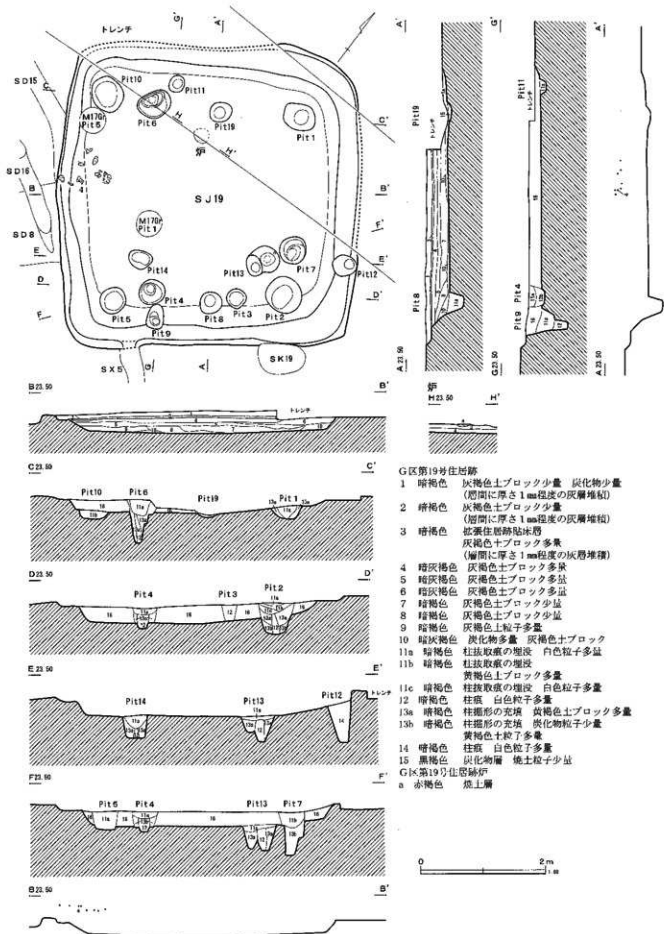
G区第17号住居跡

- | | |
|---------|-------------------------|
| 1 暗灰褐色 | 白色・黄褐色土ブロック少量 |
| 2 暗灰褐色 | 白色粒子多量 |
| 3 暗灰褐色 | 黒褐色土粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 白色粒子多量 黒褐色土粒子少量 |
| 5 暗灰褐色 | 白色ブロック多量 |
| 6 暗褐色 | 白色粒子多量 |
| 7 灰褐色 | 白色ブロック |
| 8 暗褐色 | 炭化物少量 灰褐色七粒子・灰褐色土ブロック多量 |
| 9 暗褐色 | 炭化物ブロック多量 |
| 10 灰褐色 | 炭化物ブロック多量 灰褐色十粒子多量 |
| 11 暗灰褐色 | 炭化物少量 黄褐色土粒子多量 |
| 12 暗灰褐色 | 黄褐色土粒子多量 |
| 13 暗黄褐色 | 暗黄褐色セブロック |
| 14 暗黄褐色 | 灰層 |
| 15 暗黄褐色 | 灰褐色土粒子少量 |

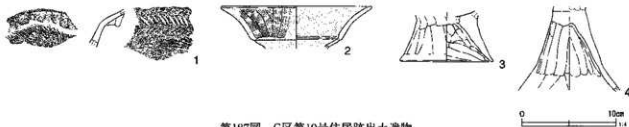
G区第19号住居跡 (第186図)

M17・18、N17グリッドに位置する。G区第4・5号性格不明遺構、G区第19号土壌、G区第8・15・16号溝跡と重複する。

建て替えと拡張が行われた住居である。建て替え時に全方向に拡張を行い、構築当初の住居部分は埋戻して地床を施す。



第186図 G区第19号住居跡



第187図 G区第19号住居跡出土遺物

第60表 G区第19号住居跡出土遺物観察表(第187図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	壺					①ABCGIJ	B	にがい橙	ハレス産	
2	土師器	壺	(15.8)	[4.5]		5	②ABCGI	B	にがい橙	赤彩	
3	土師器	台付甕		[5.3]	(9.8)	5	②ABCHI	B	にがい橙		
4	土師器	高杯		[8.8]		10	②ABGI	B	にがい橙	No.3	

平面形態は、建て替え前後ともに方形である。

建て替え後の住居は平面形態が方形で、炉が中央から北西壁に寄って位置する。規模は、主軸長4.85m、幅4.85m、確認面からの深さ0.07~0.10mを測る。主軸方位は、N-37° -Wを指す。主柱穴は、Pit1・Pit2・Pit4・Pit6の4本柱である。炉は地床炉で、径0.24m以上の円形に焼土化するが、大半が遺構所在確認調査時のトレンチによって削平されている。ピットは、Pit3・Pit5・Pit7・Pit9・Pit12が検出されている。用途は不明であるが、多くは壁際に分布する。壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。

建て替え前の住居は、平面形態がやや台形である。規模は、主軸長3.91~4.31m、幅4.26m、確認面からの深さ0.29~0.36mを測る。主柱穴はPit13・Pit14の2本と、建て替え後のPit1・Pit6を共有する。このほかに、Pit8・Pit10・Pit11・Pit19の4本が、壁際から検出されている。炉・壁溝・貯蔵穴はみつかっていない。

遺物は、南西壁中央付近にまとまった分布がみられるが、出土量は少ない。

G区第20号住居跡(第188図)

M18・N18グリッドに位置する。G区第12号住居跡よりも先行し、G区第21号土壌よりも新しい。G区第10号住居跡、G区第6・9・10・15号土壌、G区第1号掘立柱建物跡、G区第1号周溝基、G区第4号性格不明遺構と重複する。

平面形態は方形で、炉が北西壁に寄って位置する。主軸長約5.5m、幅5.50m、確認面からの深さ0.06~0.11mを測る。主軸方位は、N-62° -Wを指す。

主柱穴は、Pit11・Pit12・Pit20の3本と、G区第12号住居跡Pit2を共有する4本である。

炉は、地床炉である。長径0.69m×短径0.53m×床面からの深さ0.08mの楕円形の浅い窪みには、焼土化した底面と直上に堆積した灰層が検出されている。

壁溝は、南東壁北半から東隅付近を除き全周する。幅0.18~0.28m、床面からの深さ0.04~0.09mほどである。

ピットは、Pit1・Pit2・Pit4~Pit10・Pit13~Pit19・Pit21~Pit24の20本が検出されている。このうち、Pit15・Pit17は南西壁溝内に位置し、特筆される。

貯蔵穴は、検出されていない。

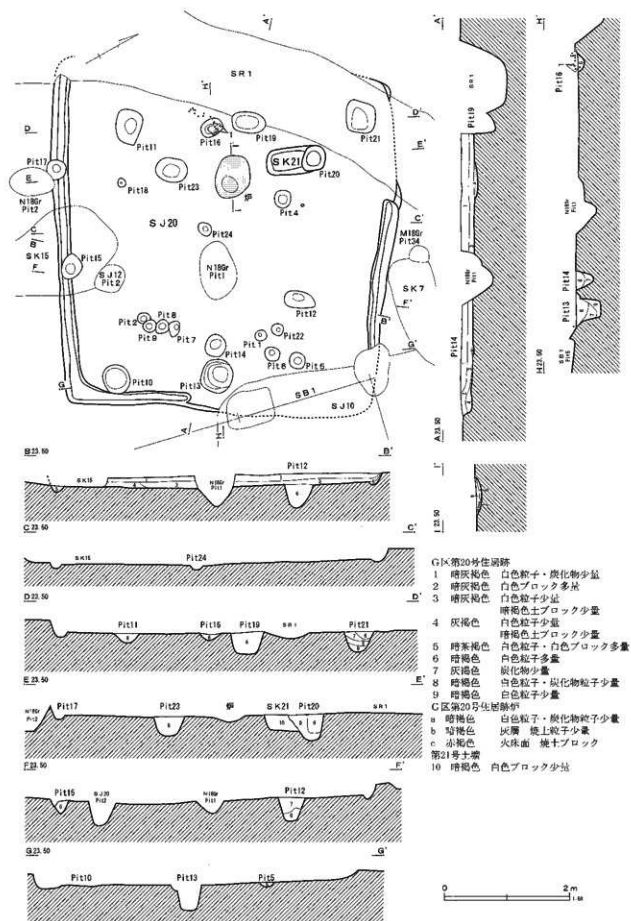
遺物は、Pit16にまとまった分布がみられるが、出土量は少ない。

G区第21号土壌(第188図)

G区第20号住居跡主柱穴Pit20に削平される。

平面状態は長方形で、長軸長0.93m、短軸長0.44m、確認面からの深さ0.62mを測る。長軸方位は、N-22° -Eを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。



第188図 G区第20号住居跡・G区第21号土壌



第189図 G区第20号住居跡出土遺物

第61表 G区第20号住居跡出土遺物観察表 (第189図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存 (%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	台付甕		[12.1]		20	②ABCGI	B	暗褐色	No2-3-4 Pit16No1	
2	弥生	甕					②ABCGI	B	にぶい橙		
3	弥生	甕					②ACGHI	C	にぶい橙		
4	弥生	甕					②ABCGI	B	暗褐色	Pit13	

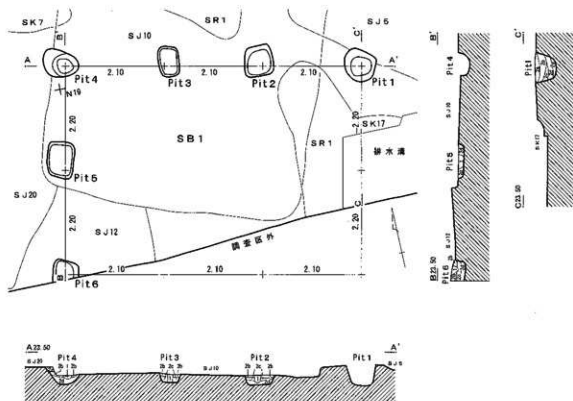
(2) 掘立柱建物跡

G区第1号掘立柱建物跡 (第190図)

M18・19、N18・19グリッドに位置する。G区

第4・5・10・12号住居跡、G区第6・17号土壌

と重複する。覆土の堆積状況から、G区第4号住



G区第1号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色 柱底 炭化物粒が多量
- 2a 黒褐色 柱断面充填 黄褐色土粒子・白色ブロック多量
- 2b 黒褐色 柱断面充填 白色粒子・黒色粒子多量
- 2c 黒褐色 柱断面充填 黄褐色土粒子・白色ブロック少量
- 2d 黄褐色 柱断面充填 黄褐色土粒子 白色ブロック少量
- 2e 黒褐色 柱断面充填 白色ブロック多量

第190図 G区第1号掘立柱建物跡

居跡よりも古い。

桁行3間×梁行2間の側柱建物跡と推定される。発見された柱穴は6本で、このほかは調査区外にある。

桁行を南北に向け、南北軸（桁行方位）はN-

13°-Eを指す。規模は、桁行6.30m×梁行4.40m・面積27.72m²を測る。柱間は、桁行2.10m、梁行2.20mに統一されている。柱断面は方形を基本とし、隅柱は深い。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

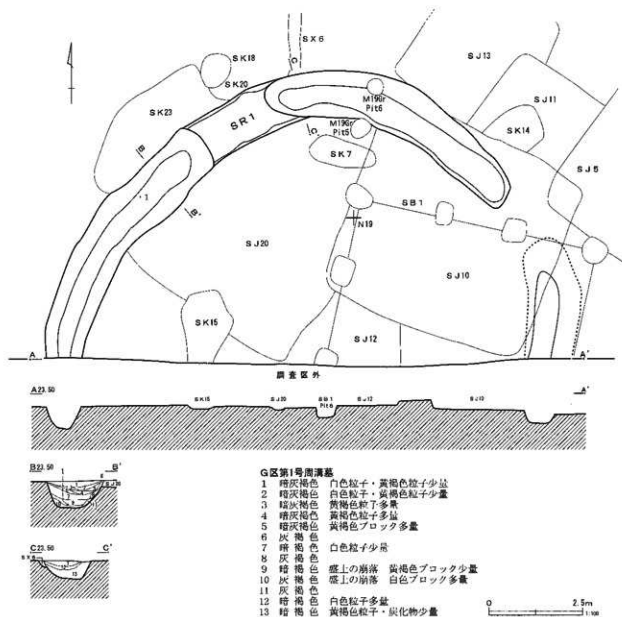
(3) 周溝墓

G区第1号周溝墓（第191図）

M18・19、N18・19グリッドに位置し、南半部は調査区外にある。G区第4・10・11・13・20号

住居跡、G区第23号土塼、G区第6号性格不明遺構と重複する。

外周・方台部の平面形態は、角が極めて不明瞭



第191図 G区第1号周溝墓



第192図 G区第1号周溝墓・出土遺物

第62表 G区第1号周溝墓出土遺物観察表 (第192図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存 (%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	椀	12.5	5.9	5.4	80	②ABCGHI	B	にぶい橙	N1 本彩	71-3
2	土師器	壺		[5.6]		60	②ABCI	C	にぶい橙	西溝	
3	土師器	甕					②ABCGI	B	にぶい橙	東溝	
4	土師器	甕					②ABCGI	B	にぶい橙	東溝	

な隅丸方形を呈する。北東溝の中央部が途切れ、ブリッジ幅は1.3mほどである。ブリッジの方向は、N-47°-Eを指す。規模は、調査区際で、外法14.0m・内法11.8mを計測する。

周溝の規模は、ブリッジ南側が推定幅1.40m・確認面からの深さ0.27mである。ブリッジ直北部は幅0.85m・確認面からの深さ0.11m、隅丸の北東

隅付近が幅1.40m・確認面からの深さ0.14m、北東隅直南付近は幅1.20m・確認面からの深さ0.10m、断面B-B'付近は幅1.40m・確認面からの深さ0.44m、西側の調査区際は幅1.10m・確認面からの深さ0.64mほどである。北西辺の南半部が深く掘り込まれている。

(4) 性格不明遺構

G区第1号性格不明遺構 (第193図)

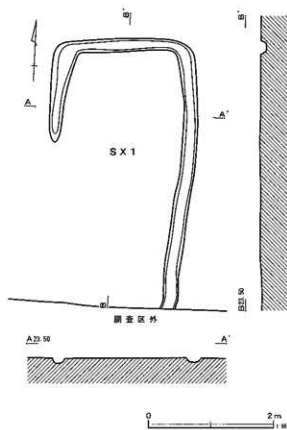
M13・N13グリッドに位置し、南端は調査区外にある。溝幅0.17~0.38m・確認面からの深さ0.05~0.11mを測る溝状遺構で、「ク」字状に屈曲する。西辺長1.55m・北辺長2.25m・東辺長4.15m以上が検出されている。北辺長が短いことから断定はできないが、長方形の住居跡の掘形もしくは壁溝の残痕の可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

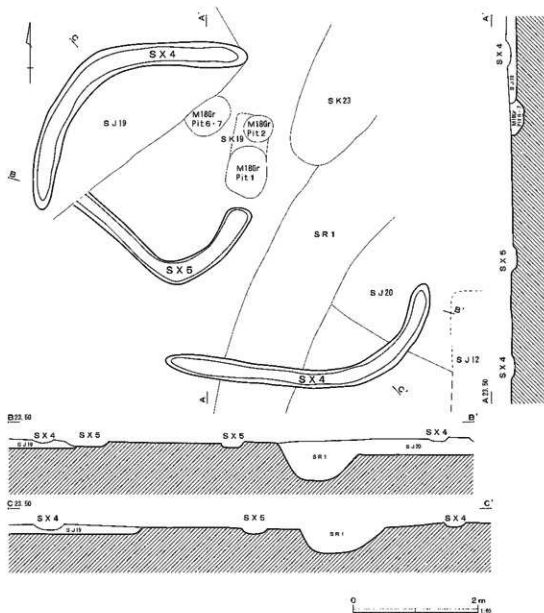
G区第4・5号性格不明遺構 (第194図)

M17・18、N17・18グリッドに位置し、G区第19・20号住居跡および、G区第1号周溝墓と重複する。

G区第4号性格不明遺構は、L字形に屈曲する2条の溝状遺構が相対し、南北5.4m×東西6.4mの方形の区画を形成する。北西溝は幅0.36~0.45m・確認面からの深さ0.01~0.07m、南東溝は幅0.28~0.35m・確認面からの深さ0.03~0.07mを測る。周



第193図 G区第1号性格不明遺構



第194図 G区第4・5号性格不明遺構

図に位置する住居跡と方向性を違えるが、方形区画の規模から、住居跡の掘形もしくは壁溝の残痕の可能性が高い。

G区第5号性格不明遺構は、溝幅0.23～0.39m・確認面からの深さ0.08～0.09mを測る溝状遺構で、

L字形に屈曲する。南東辺1.60m・南西辺2.20mである。周囲に位置する住居跡との方向性の一致から、住居跡の掘形もしくは壁溝の残痕の可能性も考えられる。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

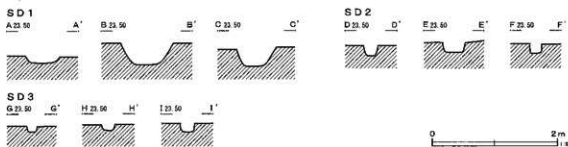
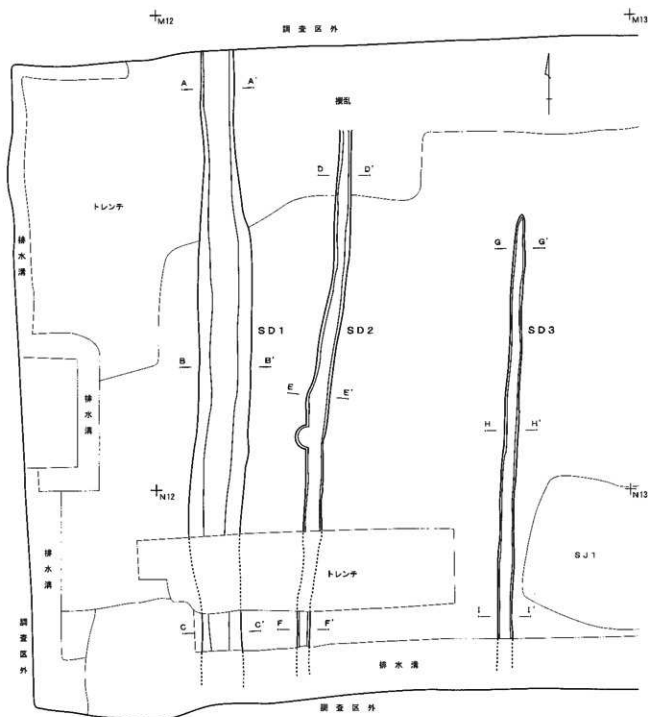
(5) 土壌・溝跡

G区第1号溝跡 (第195図)

M12・N12グリッドに位置し、南北とも調査区外に至る。

検出長12.60m、幅0.65～1.15m、確認面からの深

さ0.15～0.49mを測る。断面は逆台形を呈する。溝底標高は、北端付近22.90m、中央付近22.80m、南端付近22.76mを計測する。走行方位は、N-180°-Eを指す。



第195図 G区土壌・溝跡①

遺物は出土していない。

G区第2号溝跡 (第195図)

M12、N12グリッドに位置し、南北とも調査区外に至る。

検出長11.00m、幅0.30～0.58m、確認面からの深さ0.20～0.25mを測る。断面は箱形を呈する。溝底標高は、北端付近22.98m、中央付近23.03m、南端付近23.02mを計測する。走行方位は、 $N-5^{\circ}-E$ を指す。

遺物は出土していない。

G区第3号溝跡 (第195図)

M12・N12グリッドに位置し、南北とも調査区外に至る。

検出長9.00m、幅0.18～0.33m、確認面からの深さ0.08～0.18mを測る。断面は箱形を呈する。溝底標高は、北端付近23.15m、中央付近23.10m、南端付近23.09mを計測する。走行方位は、 $N-180^{\circ}-E$ を指す。

遺物は出土していない。

G区第2号性格不明遺構 (第196図)

M14グリッドに位置する。

一部に途切れた箇所がみられるが、L字形に屈曲する溝状遺構である。

東辺は検出長0.60m、幅0.14～0.30m、確認面からの深さ0.04～0.09m、南辺は検出長3.38m、幅0.20～0.32m、確認面からの深さ0.01～0.03mを測る。L字形内側の東西1.3m×南北0.4mの範囲に貼床状の痕跡が確認されている。加えて、遺構規模・形状も加味すると、住居の残痕の可能性が高い。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

G区第3号性格不明遺構 (第196図)

M14グリッドに位置する。

検出長4.2m、幅0.26～0.40m、確認面からの深さ0.01～0.04mの溝状遺構である。溝の南側から、東西1.6m×南北1.6mの範囲に貼床状の痕跡が確認されている。さらにG区第2号性格不明遺構と方向性を一致させていることも加味すると、住居の残

痕の可能性が高い。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

G区第25号土壌 (第196図)

N13グリッドに位置する。

平面形態は、不整長方形である。長軸長1.45m、短軸長0.56m、確認面からの深さ0.04mを測る。長軸方位は、 $N-85^{\circ}-W$ を指す。

遺物は出土していない。

G区第26号土壌 (第196図)

M14グリッドに位置する。

平面形態は、楕円形である。長軸長1.35m、短軸長0.77m、確認面からの深さ0.04mを測る。長軸方位は、 $N-72^{\circ}-W$ を指す。

遺物は出土していない。

G区第27号土壌 (第196図)

N15グリッドに位置する。

平面形態は、楕円形である。長軸長0.62m、短軸長0.37m、確認面からの深さ0.08mを測る。長軸方位は、 $N-77^{\circ}-E$ を指す。

遺物は出土していない。

G区第30号土壌 (第196・197図)

M15・N15グリッドに位置する。

平面形態は、不正方形である。長軸長1.95m、短軸長1.33m、確認面からの深さ0.02mを測る。長軸方位は、 $N-15^{\circ}-W$ を指す。

遺物は出土していない。

G区第9号溝跡 (第196図)

M13グリッドに位置する。

検出長1.25m、幅0.20～0.25m、確認面からの深さ0.03～0.06mを測る。断面は逆台形である。溝底標高は、東端付近23.17m、中央付近23.19m、西端付近23.20mを計測する。走行方位は、 $N-100^{\circ}-E$ を指す。

遺物は出土していない。

G区第10号溝跡 (第196・197図)

M14・15、N15グリッドに位置する。西端がL字形に屈曲し、途切れながら延長7.3mに及ぶ溝跡

である。

幅0.15～0.32m、確認面からの深さ0.01～0.07mを測る。断面は逆台形である。溝底標高は、東端付近23.22m、中央付近23.17m、西端付近23.19mを計測する。走行方位は、N-88° -W→N-20° -Wを指す。

遺物は出土していない。

G区第28号土壌 (第197図)

N15グリッドに位置する。

平面形態は、楕円形である。長軸長0.82m、短軸長0.33m、確認面からの深さ0.05mを測る。長軸方位は、N-76° -Eを指す。

遺物は出土していない。

G区第29号土壌 (第197図)

M15・N15グリッドに位置する。

平面形態は、方形である。長軸長2.25m、短軸長1.48m、確認面からの深さ0.10mを測る。長軸方位は、N-90° を指す。

遺物は出土していない。

G区第11号溝跡 (第197図)

M15グリッドに位置する。

検出長1.42m、幅0.01～0.15m、確認面からの深さ0.02～0.05mを測る。断面は半円形である。溝底標高は、北西端付近23.20m、中央付近23.19m、南東端付近23.20mを計測する。走行方位は、N-69° -Wを指す。

遺物は出土していない。

G区第12号溝跡 (第197図)

M15グリッドに位置する。

検出長3.40m、幅0.25～0.58m、確認面からの深さ0.05～0.06mを測る。断面は逆台形である。溝底標高は、北西端付近23.21m、中央付近23.18m、南東端付近23.20mを計測する。走行方位は、N-107° -Eを指す。

遺物は出土していない。

G区第13号溝跡 (第197図)

M15グリッドに位置し、G区第29号土壌と重複

する。

検出長0.80m、幅0.20～0.40m、確認面からの深さ0.05～0.06mを測る。溝底標高は、中央付近23.21mを計測する。走行方位は、N-66° -Wを指す。

遺物は出土していない。

G区第14号溝跡 (第197図)

M15・16グリッドに位置する。

検出長3.40m、幅0.35～0.50m、確認面からの深さ0.02～0.10mを測る。断面は逆台形である。溝底標高は、東端付近23.07m、中央付近23.04m、西端付近23.03mを計測する。走行方位は、N-90° -Eを指す。

遺物は出土していない。

G区第16号土壌 (第198図)

M17グリッドに位置する。

平面形態は、楕円形である。長軸長1.34m、短軸長0.76m、確認面からの深さ0.23mを測る。長軸方位は、N-11° -Eを指す。

遺物は出土していない。

G区第4号溝跡 (第198図)

M16・17、N16グリッドに位置し、G区第3号住居跡と重複する。南北ともに調査区外に至る。

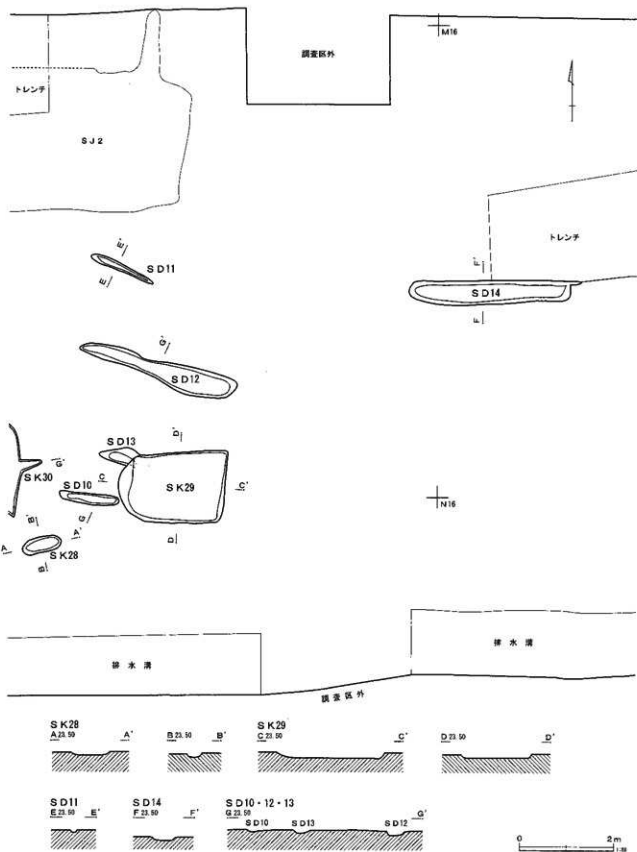
検出長13.80m、幅0.38～0.65m、確認面からの深さ0.25～0.38mを測る。断面はU字形である。溝底標高は、北端付近22.85m、中央付近22.85m、南端付近22.93mを計測する。走行方位は、N-18° -Eを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

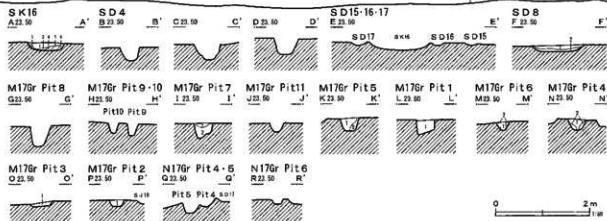
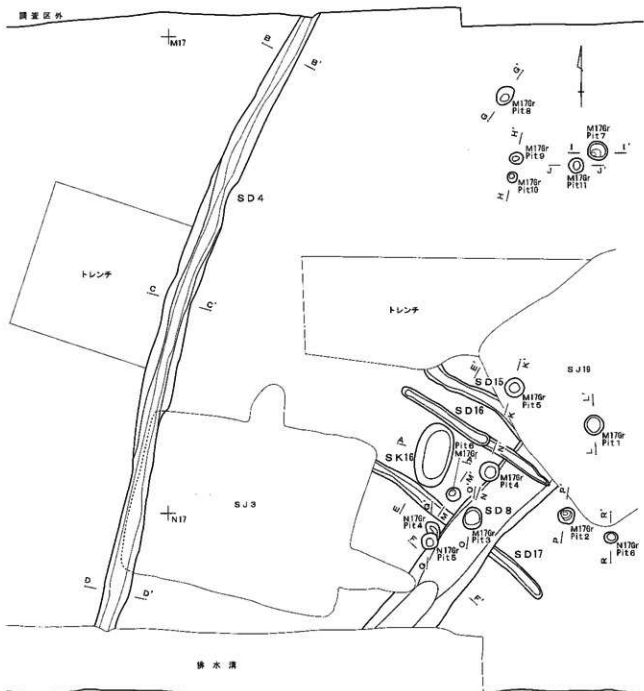
G区第8号溝跡 (第198図)

M17・N17グリッドに位置する。G区第3・19号住居跡と重複し、G区第16・17号溝跡と交差する。南側は調査区外にある。

検出長5.20m、幅1.06～1.24m、確認面からの深さ0.10～0.21mを測る。断面は逆台形である。溝底標高は、北東端付近23.09m、中央付近23.07m、南西端付近22.92mを計測する。走行方位は、N-



第197図 G区土城・溝跡③



第198図 G区土壌・溝跡④

141° -Wを指す。

遺物は、土師器小型甕が出土している。

G区第15号溝跡 (第198図)

M17グリッドに位置し、G区第19号住居跡と重複する。

検出長2.55m、幅0.25～0.38m、確認面からの深さ0.10～0.12mを測る。断面は半円形である。溝底標高は、北西端付近23.12m、中央付近23.12m、南東端付近23.11mを計測する。走行方位は、N-113° -Eを指す。

遺物は出土していない。

G区第16号溝跡 (第198図)

M17グリッドに位置し、G区第8号溝跡と重複する。

検出長3.70m、幅0.20～0.28m、確認面からの深さ0.12～0.13mを測る。断面は半円形である。溝底標高は、北西端付近23.12m、中央付近23.12m、南東端付近23.06mを計測する。走行方位は、N-122° -Eを指す。

遺物は出土していない。

G区第17号溝跡 (第198図)

M17・N17グリッドに位置する。G区第3号住居跡・G区第8号溝跡と重複する。

検出長4.50m、幅0.21～0.32m、確認面からの深さ0.13～0.16mを測る。断面は半円形である。溝底標高は、東端付近23.15m、中央付近23.12m、西端

付近23.11mを計測する。走行方位は、N-53° -Wを指す。

遺物は出土していない。

G区第6号性格不明遺構 (第199・200図)

M18グリッドに位置し、G区第1号周溝墓と重複する。

溝状の遺構で、幅0.19～0.38m、確認面からの深さ0.03～0.11mを測る。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

G区第2号土壌 (第199・200図)

M18グリッドに位置する。G区第7号住居跡・G区第3号土壌と重複する。

平面形態は、長方形である。長軸長1.25m、短軸長0.60m、確認面からの深さ0.54mを測る。長軸方位は、N-51° -Eを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

G区第3号土壌 (第199・200図)

M18グリッドに位置する。G区第7号住居跡・G区第2号土壌と重複する。

平面形態は、円形である。長軸長0.92m、短軸長0.65m、確認面からの深さ0.29mを測る。長軸方位は、N-33° -Eを指す。

遺物は出土していない。

G区第7号土壌 (第199・200図)

M18・19グリッドに位置し、G区第10号住居跡と重複する。

G区第16号土壌

- 1 暗褐色 白色ブロック微量
- 2 暗褐色 白色ブロック多量
- 3 暗褐色 白色ブロック多量
- 4 暗褐色 白色粒子多量
- 5 暗黄褐色 白色ブロック塊
- 6 暗黄褐色 白色粒子少量

第8号溝跡 (E-E')

- 1 黒灰色土 炭上粒子若干
- 2 暗黄灰色土 地山砂質土と黒灰色粘質土の交互堆積

M17Grid Pit 2 (O-O')

- 1 黒色土 灰色砂質土 (地山) ブロック少量

M17Grid Pit 1 (K-K')

- 1 黒灰色土 炭化物粒子少量
- 2 暗灰色土 灰色砂質土 (地山) ブロック多

M17Grid Pit 3 (N-N')

- 1 黒灰色土 炭化物粒子少量
- 2 暗灰色土 灰色砂質土 (地山) ブロック多

M17Grid Pit 4 (M-M')

- 1 黒灰色土 炭化物粒子少量
- 2 暗灰色土 灰色砂質土 (地山) ブロック多

M17Grid Pit 5 (J-J')

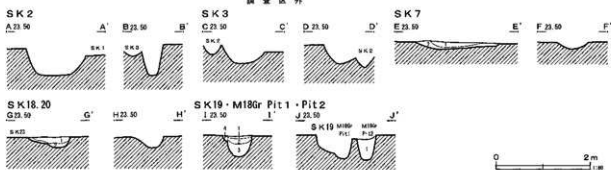
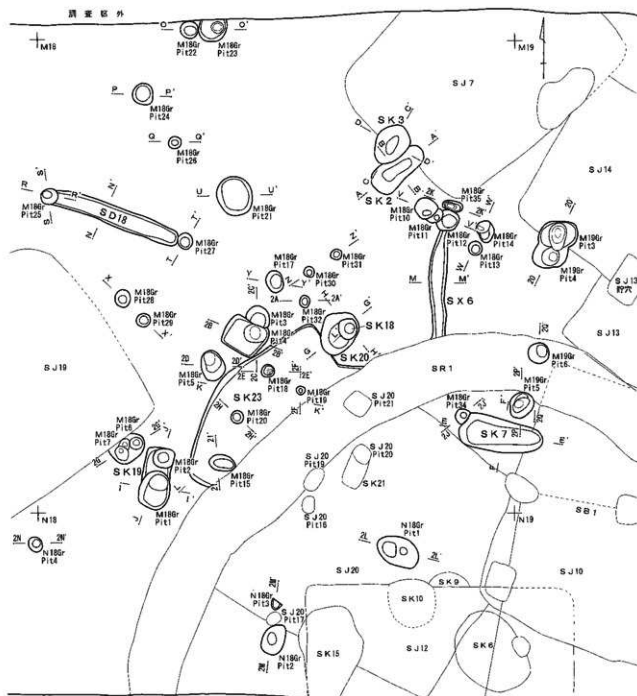
- 1 黒灰色土 炭化物粒子少量
- 2 暗灰色土 灰色砂質土 (地山) ブロック多

M17Grid Pit 6 (I-I')

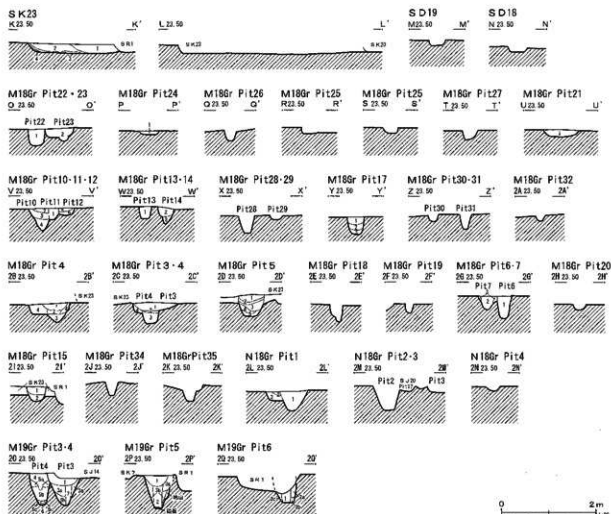
- 1 黒灰色土 炭化物粒子少量
- 2 暗灰色土 灰色砂質土 (地山) ブロック多

M17Grid Pit 7 (H-H')

- 1 黒灰色土 炭化物粒子少量
- 2 暗灰色土 灰色砂質土 (地山) ブロック多



第199図 G区上横・溝跡⑤(1)



第200図 G区土壌・溝跡⑤ (2)

平面形態は、長方形である。長軸長1.75m、短軸長0.68m、確認面からの深さ0.02mを測る。長軸方位は、 $N-95^{\circ}-E$ を指す。

遺物は、土師器高坏が出土している。

G区第18・20号土壌 (第199・200図)

M18グリッドに位置し、G区第23号土壌と重複する。2基の土壌として調査されたが、明確に分離することはできない。

平面形態は、円形である。長軸長0.95m、短軸長0.73m、確認面からの深さ0.16~0.22mを測る。長軸方位は、 $N-37^{\circ}-E$ を指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

G区第19号土壌 (第199・200図)

M18グリッドに位置し、M18グリッドPit1・Pit2

と重複する。

平面形態は、方形である。長軸長0.8m以上、短軸長0.58m、確認面からの深さ0.44mを測る。長軸方位は、 $N-5^{\circ}-E$ を指す。

遺物は出土していない。

G区第23号土壌 (第199・200図)

M18グリッドに位置し、G区第18・20号土壌、G区第1号周溝墓と重複する。

平面形態は、不整形長方形である。長軸長4.10m、短軸長1.50m以上、確認面からの深さ0.11mを測る。長軸方位は、 $N-33^{\circ}-E$ を指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

G区第18号溝跡 (第199・200図)

M18グリッドに位置する。

G区第7号土壌

- 1 黒褐色 白色ブロック多量 炭化物粒子少量
- 2 黒褐色 白色ブロック多量

G区第15号土壌

- 1 暗灰褐色 炭化物粒子多量 黄褐色粒子多量
- 2 暗灰褐色 黄褐色・白色ブロック多量 しまり不良

M18Grid Pit 1 (I-I')

- 1 暗褐色土 白色粒子多量
- 2 暗褐色土 白色ブロック(地山)多量
- 3 暗褐色土 白色ブロック少量 白色粒子多量
- 4 暗褐色土 白色粒子少量

M18Grid Pit 2 (J-J')

- 1 暗褐色土 白色ブロック若干

G区第23号土壌

- 1 暗褐色 黄褐色土粒が多量
- 2 暗褐色 黄褐色土粒が多量
- 3 暗黄褐色 黄褐色ブロック多量
- 4 暗黄褐色 黄褐色ブロック多量

M18Grid Pit 22 (C-C')

- 1 暗褐色土 白色粒子多量

M18Grid Pit 23 (C-C')

- 2 暗褐色土 白色ブロック多量

M18Grid Pit 24 (D-D')

- 1 暗褐色土 白色ブロック多量

M18Grid Pit 21 (I-I')

- 1 暗褐色土 白色ブロック多量

M18Grid Pit 11 (J-J')

- 1 暗褐色土 柱状または柱状取戻 白色粒子

M18Grid Pit 10 (J-J')

- 1 暗褐色土 白色粒子多量
- 2 暗褐色土 白色ブロック多量
- 3 暗褐色土 柱状取戻 灰褐色ブロック少量

M18Grid Pit 12 (J-J')

- 5 暗褐色土 白色粒が多量

6 暗黄褐色土 灰褐色ブロック**M18Grid Pit 13 (K-K')**

- 1 暗褐色土 柱状または柱状取戻 白色粒子多量 炭化物粒子少量

M18Grid Pit 14 (K-K')

- 2 暗褐色土 柱状または柱状取戻 白色粒が多量 炭化物粒子少量

3 暗褐色土 白色粒子多量**M18Grid Pit 17 (M-M')**

- 1 暗褐色土 白色粒子少量
- 2 暗褐色土 柱状形充填 白色ブロック多量
- 3 暗褐色土 柱状形充填 白色ブロック多量

M18Grid Pit 3 (P-P' 0-0')

- 1 暗灰褐色土 灰褐色・黄褐色ブロック少量

M18Grid Pit 4 (P-P' 0-0')

- 2 暗褐色土 柱状取戻 灰褐色・黄褐色ブロック少量
- 3 暗褐色土 柱状取戻 塊上粒を散置 灰褐色ブロック少量
- 4 黄褐色土 柱状形充填 黄褐色ブロック多量

M18Grid Pit 5 (R-R')

- 1 暗褐色土 黄褐色ブロック多量
- 2 暗褐色土 黄褐色粒を少量
- 3 暗褐色土 黄褐色ブロック多量
- 4 暗褐色土 黄褐色ブロック少量
- 5 暗褐色土 黄褐色ブロック多量

M18Grid Pit 6 (U-U')

- 1 暗褐色土 白色ブロック少量

M18Grid Pit 7 (U-U')

- 2 暗褐色土 白色ブロック多量

- 3 暗褐色土 白色ブロック多量

M18Grid Pit 8 (W-W')

- 1 暗褐色土 柱状取戻 白色粒を散置
- 2a 暗褐色土 柱状形充填 白色ブロック多量
- 2b 暗褐色土 柱状形充填 白色ブロック多量
- 2c 暗褐色土 柱状形充填 白色ブロック多量

M18Grid Pit 15 (Z-Z')

- 1 暗褐色土 白色ブロック多量
- 2 暗褐色土 白色粒子少量

M18Grid Pit 16 (2A-2A')

- 1 暗褐色土 白色ブロック少量

N18Grid Pit 1 (2F-2F')

- 1 暗褐色土 柱状取戻 白色ブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色土 柱状形充填 白色ブロック少量
- 3 暗褐色土 柱状形充填 白色ブロック多量

M19Grid Pit 3 (2I-2I')

- 1 暗褐色土 柱状取戻 白色粒が多
- 2 暗褐色土 柱状 白色ブロック・炭化物少
- 3a 暗褐色土 柱状形充填 白色粒子多
- 3b 暗褐色土 柱状形充填 白色粒子多

M19Grid Pit 4 (2I-2I')

- 4 暗褐色土 柱状取戻 白色粒子多
- 5a 暗褐色土 柱状形充填 白色ブロック多
- 5b 暗褐色土 柱状形充填 白色ブロック多量
- 5c 暗褐色土 柱状形充填 白色ブロック多量
- 6 暗褐色土 柱状 木片多量(柱材の残欠)

M19Grid Pit 6 (2J-2J')

- 1 暗茶褐色土 柱状取戻 黄褐色・白色粒子多量
- 2 黒褐色土 柱状 黄褐色・白色粒子少量 底面に硬板
- 3a 黄褐色土 柱状形充填 黄褐色シルトブロック多量
- 3b 黒褐色土 柱状形充填 黄褐色粒子多量

検出長2.70m、幅0.36~0.40m、確認面からの深さ0.04~0.12mを測る。断面は逆台形である。溝底標高は、東端付近23.03m、中央付近23.03m、西端付近23.05mを計測する。走行方位は、N-109°-Eを指す。

遺物は出土していない。

G区第13号土壌 (第201・202図)

M19グリッドに位置し、G区第7号溝跡と重複する。

平面形態は、円形である。長軸長1.11m、短軸長1.05m、確認面からの深さ0.95mを測る。長軸方位は、N-54°-Wを指す。

遺物は出土していない。

G区第24号土壌 (第201・202図)

M20グリッドに位置する。

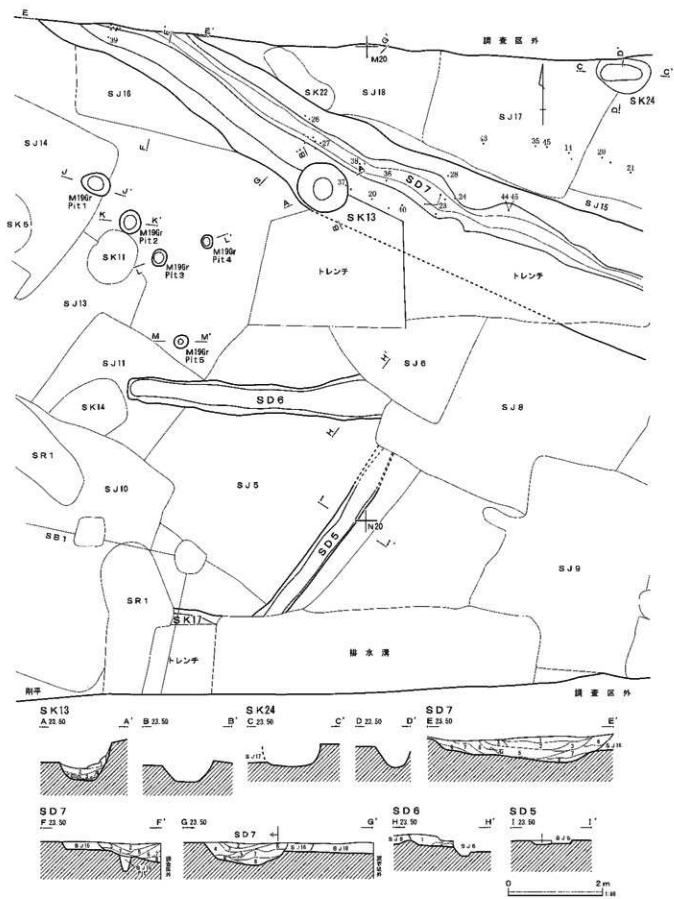
平面形態は、楕円形である。長軸長1.10m、短軸長0.74m、確認面からの深さ0.08mを測る。長軸方位は、N-90°-Eを指す。

遺物は出土していない。

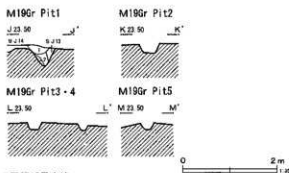
G区第5号溝跡 (第201・202図)

M19・N19グリッドに位置し、G区第5・8号住居跡と重複する。南側は調査区外に至る。

検出長3.60m、幅0.41~0.50m、確認面からの深さ0.02~0.06mを測る。断面は逆台形である。溝底標高は、北東端付近23.19m、中央付近23.16m、南西端付近23.16mを計測する。走行方位は、N-



第201図 G区土坑・溝跡①(1)



G区第13号土壌

- 1 暗灰褐色 灰褐色ブロック縞状に堆積
- 2 灰褐色 灰褐色ブロック主体
- 3 暗灰褐色 灰褐色ブロック多量
- 4 灰褐色 灰褐色ブロック縞状に堆積
- 5 暗灰褐色 灰褐色ブロック微量
- 6 灰褐色 灰褐色ブロック主体

第7号溝跡 (A-A'・B-B'・C-C')

- 1 暗褐色土 焼土粒子少量 人為的堆積
- 2 暗褐色土 焼土粒子多量 炭化物粒子多量
白色粒子多量 人為的堆積
- 3 暗褐色土 白色粒子多量 人為的堆積
- 4 灰褐色土 白色粒子・ブロック多量 人為的堆積
- 5 暗灰褐色土 炭化物粒子・ブロック多量 焼土粒子多量
白色ブロック少量 人為的堆積
- 6 暗褐色土 炭化物粒子多量 白色粒子多量 人為的堆積
- 7 暗褐色土 炭化物多量 焼土粒子多量 白色粒子多量
人為的堆積
- 8 暗褐色土 白色ブロック多量 黄褐色ブロック多量
人為的堆積

9 暗褐色土

- 白色ブロック多量 人為的堆積

第6号溝跡 (D-D')

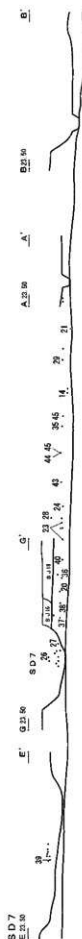
- 1 暗灰褐色シルト 焼土ブロック微量
- 2 暗灰褐色シルト 焼土ブロック若干 灰色砂質シルトやや多

第5号溝跡 (E-E')

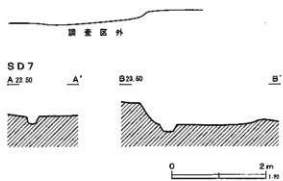
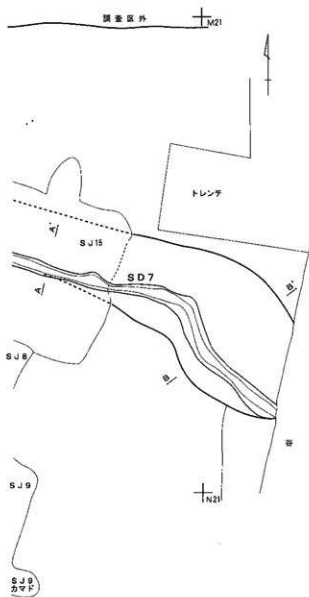
- 1 暗灰褐色シルト 炭化物少量

M19Grid Pit1 (F-F')

- 1 黒褐色土 柱状取痕 白色粒子多量
- 2 黒褐色土 柱痕 白色粒子多量
- 3 黒褐色土 柱断面充填 白色ブロック多量



第202図 G区土城・溝跡⑥ (2)



第203図 G区土壌・溝跡⑦

143° -Wを指す。

遺物は、土師器環が出土している。

G区第6号溝跡 (第201・202図)

M19・20グリッドに位置し、G区第5・6・8・11号住居跡と重複する。

検出長5.60m、幅0.40～0.90m、確認面からの深さ0.01～0.07mを測る。溝底標高は、東端付近23.14m、中央付近23.12m、西端付近23.12mを計測する。走行方位は、N-87° -Wを指す。

遺物は、微細な破片のため図示し得ない。

G区第7号溝跡 (第201・202・203図)

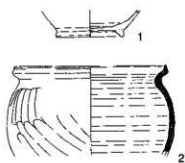
M19・20・21グリッドに位置し、北西側は調査区外にある。G区第15・16・17・18号住居跡、G区第13・22号土壌と重複する。

検出長19.00m、幅1.25～2.55m、確認面からの深さ0.05～0.63mを測る。溝底標高は、北西端付近22.81m、中央付近22.70m、南東端付近22.50mを計測する。走行方位は、N-115° -Eを指す。全体的に蛇行が著しく、東端部では大きく東に振れる。

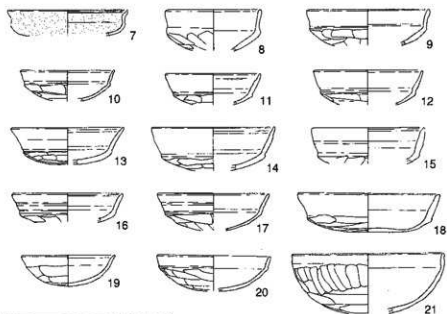
遺物は、土師器椀・坏・鉢・壺・甕・飯、須恵器環・甕等が多数出土しているが、重複する遺構からの流れ込みもあり、時期は多岐にわたる。

第204図34は、棒状土製品である。現存長4.3cm・径1.0cm・重さ3.0gである。穿孔等はなく、用途は不明である。

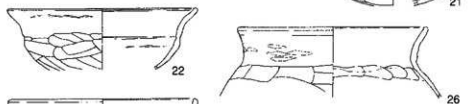
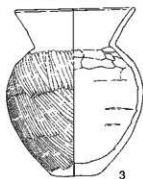
G区第3号性格不明遺構



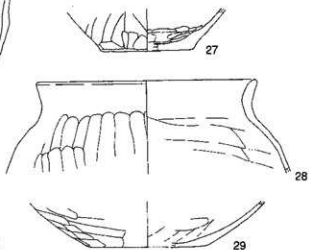
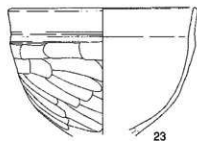
G区第7号溝跡



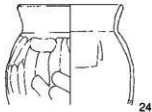
G区第8号溝跡



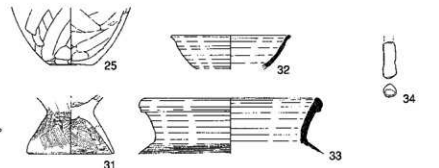
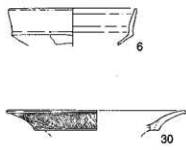
G区第7号土塼



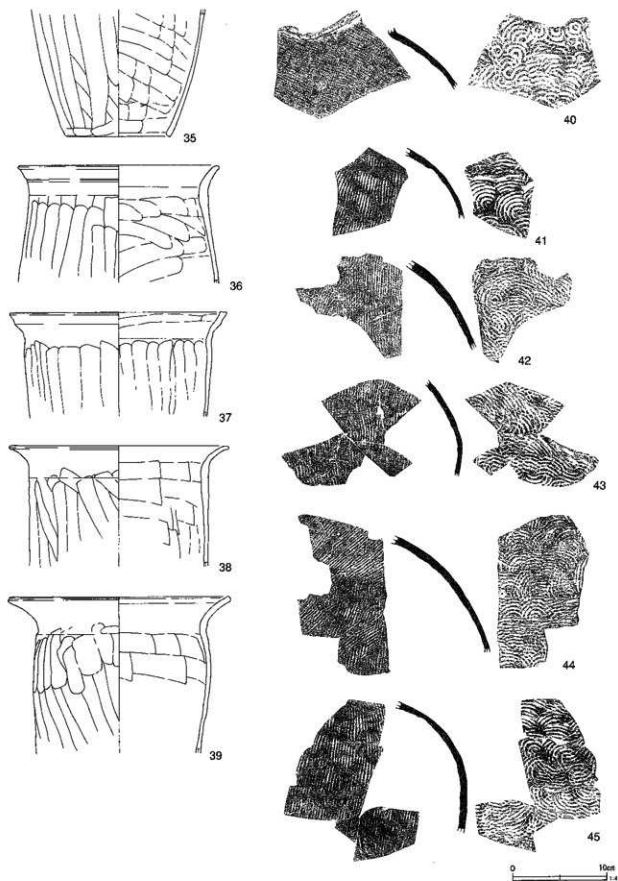
G区第17号土塼



G区第5号溝跡



第204图 G区土塼・溝跡出土遺物 (1)



第205图 G区土坑·溝跡出土遺物(2)

第63表 G区土旗・溝跡出土遺物観察表(第204・205図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存(%)	粘土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	ろくろ土師	高台付坏		[2.8]	7.1	30	①ABCDEFGHIJ	UC	にふい橙	SX3№1 底部調整不明瞭	
2	須恵器	壺	(15.8)	[9.5]		5	②ABFGHI	B	橙	SX3 南北企業 土師質	
3	土師器	小型壺	(12.4)	17.6	4.6	50	②ABCGLJ	B	にふい橙	SD8№1	71-6
4	土師器	高坏		[5.8]		30	③ABCGHJ	B	橙	SK7 器面風化顕著	
5	土師器	瓶	(20.2)	9.8	5.0	30	③ABGHI	B	にふい橙	SK17 単孔式	71-7
6	土師器	坏	(13.2)	[3.9]		5	②ABCGLI	B	橙	SD5	
7	土師器	坏	(12.8)	[2.7]		5	①ABCFGHI	B	赤褐色	SD7 比企型 赤彩	
8	土師器	坏	(9.8)	[4.3]		25	②ABCGLI	B	にふい橙	SD7	
9	土師器	坏	(12.8)	[2.8]		10	②ABCGLI	B	にふい赤橙	SD7	
10	土師器	坏	(9.8)	[3.2]		5	②ABCGLI	B	にふい橙	SD7	
11	土師器	坏	(9.9)	[3.3]		10	③ABCGLI	C	にふい橙	SD7	
12	土師器	坏	(11.6)	[3.7]		10	③ABCGLI	C	にふい橙	SD7	
13	土師器	坏	(11.8)	[3.9]		15	②ACGLI	B	橙	SD7	
14	土師器	坏	(12.9)	[4.6]		10	②ABGHI	B	橙	SD7№37	
15	土師器	坏	(11.8)	[3.8]		5	②ACGLI	B	にふい赤褐	SD7	
16	土師器	坏	(11.6)	[3.1]		5	③ABCGLI	B	褐色	SD7	
17	土師器	坏	(11.8)	[3.9]		10	②ABCGLI	B	橙	SD7	
18	土師器	坏	14.8	4.3		60	②ABCGLI	B	橙	SD7	71-4
19	土師器	坏	(9.8)	3.2		30	②ABHI	B	橙	SD7	
20	土師器	坏	(11.9)	[3.8]		10	②ABHI	B	橙	SD7№21	
21	土師器	碗	(15.8)	[6.4]		15	②ABGI	B	橙	SD7№41	
22	土師器	鉢	(19.8)	[6.4]		10	②ABGI	B	にふい黄橙	SD7	
23	土師器	鉢	(19.4)	[13.5]		20	②ABGI	B	にふい橙	SD7№26・28	
24	土師器	小型壺	(11.0)	[10.6]		20	②ABHI	B	淡黄褐	SD7№29	
25	土師器	小型壺		[6.1]	(4.4)	5	②ABCGLI	B	にふい黄橙	SD7	
26	土師器	壺	19.6	[7.4]		10	②ABGLI	B	にふい橙	SD7№17	
27	土師器	壺		[4.3]	(9.6)	5	②ABCGLI	B	にふい黄橙	SD7№15	
28	土師器	壺	(22.8)	[9.6]		5	③ABCGLI	B	にふい橙	SD7№25	
29	土師器	壺		[4.8]	(13.0)	10	②ABGHI	B	にふい橙	SD7№39	
30	土師器	壺	(18.6)	[2.2]		5	②ACGLI	B	橙	SD7	
31	土師器	台付甕		[6.1]	9.1		③ACGLI	B	にふい橙	SD7	
32	須恵器	坏	(12.4)	[3.6]		5	②ACHI	B	灰	SD7 末野産	
33	須恵器	壺	(18.3)	[5.9]		5	②ACHI	C	橙	SD7 末野産	
35	土師器	瓶		[13.4]	(10.8)	10	②ABCGLI	B	にふい黄橙	SD7№35 単孔式	
36	土師器	壺	(20.8)	[12.4]		10	②ABCGLI	B	にふい黄橙	SD7№24	
37	土師器	壺	(21.8)	[11.0]		10	②ABGI	B	にふい黄橙	SD7№19	
38	土師器	壺	(23.0)	[12.6]		10	②ABCHI	B	赤褐色	SD7№18	
39	土師器	壺	23.0	[16.5]		20	②ABGHI	B	にふい黄橙	SD7№1	
40	須恵器	甕					②ABCGLI	A	灰褐色	SD7№23	
41	須恵器	甕					②ABCHI	B	にふい橙	SD7 末野産 41~45は同一個体	
42	須恵器	甕					②ABCHI	B	にふい橙	SD7 末野産 41~45は同一個体	
43	須恵器	甕					②ABCGLI	B	にふい橙	SD7№34 末野産 41~45は同一個体	
44	須恵器	甕					②ABCHI	B	にふい橙	SD7№30 末野産 41~45は同一個体	
45	須恵器	甕					②ABCHI	B	にふい橙	SD7№30・36 末野産 41~45は同一個体	

(6) その他の遺物

発見されたグリッドが明確ではあるが、その一方で、帰属する遺構が不明な遺物を、グリッド遺物として第206図に掲載した。

3は、土玉の欠損品である (L18グリッド)。長さ19cm・推定径12cm・推定孔径0.9cm・重さ43gである。

4は、土錘である (M16グリッド)。長さ3.1cm・径0.9cm・孔径0.3cm・重さ29gである。

また、いずれにも属さない遺物は、表採遺物として第206図に掲載した。

6は、土錘である。長さ3.9cm・径1.1cm・孔径0.4cm・重さ46gである。

7は、打製石斧である。長さ14.8cm・幅11.5cm・厚さ3.1cm・重さ382.2gで、石材はホルンフェルスである。

M14グリッド



N12グリッド



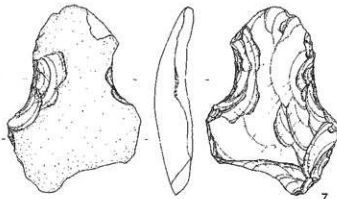
表採



L18グリッド



M16グリッド



第206図 G区グリッド遺物・表採遺物

第64表 G区グリッド・表採遺物観察表 (第206図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存 (%)	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	長頸壺	(11.6)	[4.5]		5	①DABCHI	A	灰	M14-17Gr 産地要検討	
2	須恵器	坏	(11.8)	3.4	(6.2)	30	②ABCPHI	B	灰	N12Gr 南北比産	
5	土師器	坏	(12.8)	[3.7]		20	②ABGHI	C	赤橙	表採	

V 分析・保存処理

諏訪木遺跡では、数多くの木製品や漆器が出土している。

木製品は、井戸跡・溝跡・柱穴等からも検出されているが、F区第2地点の河川跡からきわめて多量に発見された。河川跡の木製品は、規則的に打ち込まれた杭列と多量の柱状・板状の木製遺物によって形成された護岸施設として用いられたもので、これらのなかには多くの建築材も含まれていた。これらは共存した土器の特徴から、古墳時代前期に時期が限定されるきわめて良好な一括資料である。このなかには、榑部倉削加工が施された掘立柱建物の壁板材も含まれている。

そこで、河川跡から発見された建築材を対象に、

建築材の用途と樹種選択の関連性の検討するため樹種同定を実施した。また、その結果をもとに、諏訪木遺跡周辺の植生等から各樹種の供給地の推定を試みる。さらに、諏訪木遺跡の考古学的成果や、近接する熊谷市小敷田遺跡・熊谷市北島遺跡をはじめとする周辺遺跡の樹種選定傾向や自然科学分析の結果等とも比較検討し、遺構や遺跡の性格を把握することを目的として実施した。

一方、漆器は中世の溝跡や井戸跡から、遺存度の高いものが発見されている。出土後、水につけた状態で保管していたが、漆膜の剥落を始めとする腐朽が進行していた。これを防ぐために、保存処理作業を施した。

1. 諏訪木遺跡から出土した建築材の樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

諏訪木遺跡は、埼玉県熊谷市に所在し、荒川が形成した荒川新扇状地（熊谷扇状地）扇端付近、星川と忍川に挟まれた沖積地に立地している。本地域には蛇行流路をなす旧河川跡や微高地がみられ（籠瀬1990・久保2004）、これまでの発掘調査成果などによれば、人間活動の痕跡を示す遺跡は縄文時代後期以降より沖積地へ展開することが示唆されている（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業所2003など）。

本報告では、諏訪木遺跡から出土した古墳時代前期の建築材を対象に樹種同定を実施し、木製品の樹種および木材利用について検討する。

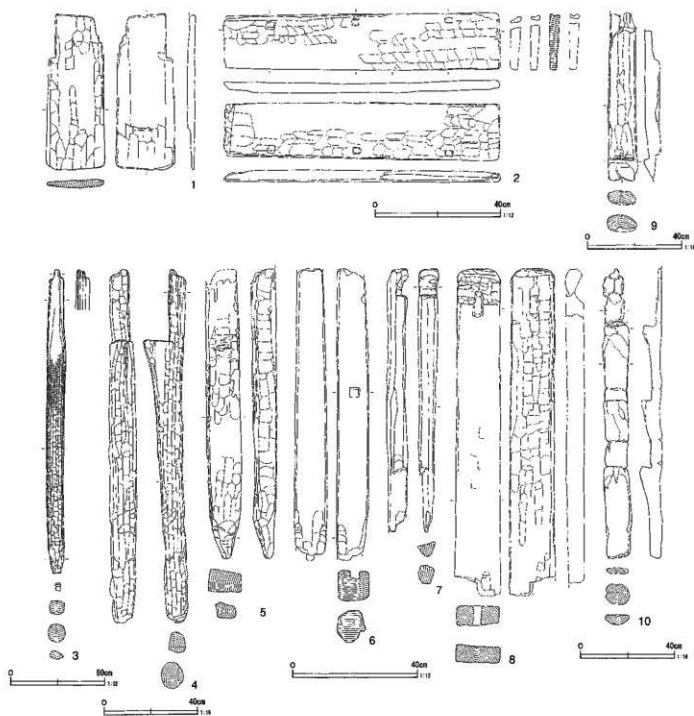
1. 試料

試料は、F区第2地点の河川跡から出土した古墳時代前期の建築材（杭に転用された建築材を含む）10点（試料番号1～10）である。

2. 分析方法

各試料の木取を観察した後、破損部等の目立たない場所から木片を採取する。剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレバートを作製する。作製したプレバートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。試料が広葉樹の場合には、独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを活用して同定を実施する。

同定根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林（1991）、伊東（1995・1996・1997・1998・1999）を参考にする。



第207図 樹種同定試料

3. 結果

結果を第65表に示す。

建築材は、針葉樹3種類（モミ属・ヒノキ・イヌガヤ）と広葉樹2種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・ヤマグワ）に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじょうず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に

第65表 樹種同定結果

試料番号	採回番号	植 類	木 取	通 橋	時 期	樹 種
1	第148回189	建築板材	柱目	F区河川跡	古墳時代前期	モミ属
2	第148回190	壁板材(側部合類)	追鉦	F区河川跡	古墳時代前期	ヒノキ
3	第150回194	杭(柱材転用)	分割丸材	F区河川跡	古墳時代前期	ヒノキ
4	第146回182	柱材	忌持丸木	F区河川跡	古墳時代前期	イヌガヤ
5	第150回196	杭(柱材転用)	分割角材	F区河川跡	古墳時代前期	ヤマグワ
6	第147回184	柱材	分割角材	F区河川跡	古墳時代前期	コナラ属コナラ亜属クスギ節
7	第147回185	建築材	分割材	F区河川跡	古墳時代前期	モミ属
8	第146回183	建築材	板目	F区河川跡	古墳時代前期	モミ属
9	第149回192	梯子	平截木	F区河川跡	古墳時代前期	ヤマグワ
10	第149回191	梯子	忌持丸木	F区河川跡	古墳時代前期	ヤマグワ

1~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか〜やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型〜トウヒ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch f.) イヌガヤ科イヌガヤ属

採取した木片が小片のため、年輪界が入らなかった。軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。樹脂細胞は年輪全体に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クスギ節 (*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poirlet) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は1~5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または2~4個が塊

状あるいは接線方向に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6細胞幅、1~40細胞高で、しばしば結晶を含む。

4. 考察

分析対象とされた建築材は、壁板材、柱(杭に転用された資料を含む)、梯子、用途不明の建築材からなり、針葉樹のモミ属やヒノキ、イヌガヤ、広葉樹のクスギ節やヤマグワの5種類の樹種が確認された。これらの木材の材質の特徴は、モミ属とヒノキは、いずれも木理が通直で割裂性が高く、加工が容易であるが、ヒノキは耐水性が高く、モミ属は保存性が低い。また、イヌガヤは針葉樹としては緻密で重硬な材質を有し、耐水性が高い種類である。広葉樹のクスギ節とヤマグワは重硬で高い強度を有する種類であり、さらに、ヤマグワは耐朽性も高い。

建築材の器種別の樹種構成では、柱材には針葉樹のヒノキ、イヌガヤ、広葉樹のクスギ節、ヤマグワが認められた。種類構成は雑多であるが、強度や耐水性の高い木材を選択する傾向がある。壁板材には、モミ属とヒノキが認められ、いずれも割裂性の高い木材が利用される。梯子は2点ともヤマグワが認められ、強度・耐朽性の高い木材が利用される。建築材は用途不明であるが、いずれも分割加工されており、割裂性の高いモミ属の利

用が認められる。

本遺跡周辺では、北島遺跡や小敷田遺跡で古墳時代の建築部材の分析調査が実施されている（鈴木・能城1989・1991a・1991b、バリノ・サーヴェイ株式会社1998・2005、高橋2005）。このうち、北島遺跡では古墳時代前期の柱材や垂木、梯子を対象に分析調査が実施され、梯子にキハダ、ヤマグワ、エノキ属、柱にムクノキ、垂木にムクロジが確認されている。梯子にヤマグワが認められている点は本分析結果と調和的であり、この他にエノキ属やキハダも利用されていたことが窺われる。柱材には、本遺跡では確認されなかったムクノキが利用されているが、強度の高い木材を利用する傾向は本分析結果と共通する。ムクノキも河畔林を構成する種類であり、周囲に生育していた樹木を利用したことが推定される。北島遺跡におけるこの他の調査事例は、多くは古代に比定される資料であり、柱材にクリ、梁にエノキ属、扉にモミ属が認められている。北島遺跡第19地点からは、建築部材とされる資料中に本遺跡の壁板材と同形態の資料も確認されるが、未調査であり樹種は不明である。

一方、小敷田遺跡では古墳時代前期の建築材53点の分析調査が実施されている。梯子では、ヤマグワの他にモミ属、イスシデ節、クスギ節、ケヤキ、カエデ属、トチノキ、クマノミズキ類が確認されている。柱材では、本遺跡で認められたイソガヤ、ヤマグワ、クスギ節が確認されているほか、針葉樹のモミ属やスギ、アスナロ、広葉樹のオニグルミ、コナラ節、エノキ属、ニレ属、ケヤキ、カツラ、カエデ属、ムクロジ、トチノキ、トネリコ属等の多くの種類が確認されている。諏訪木遺跡の柱材では、耐水性や強度の高い木材が選択される傾向にあるのに対し、小敷田遺跡では保存性の低いモミ属やトチノキなども利用されると、遺跡周辺で入手可能な木材を材質に関係なく

利用していた可能性がある。モミ属、アスナロ等は、後述するように遺跡周辺での入手は容易でない木材と推定され、これらの木材が混じる点は、本分析結果と共通する。

北島遺跡や小敷田遺跡では、花粉分析や種実遺体分析から当時の古植生についても検討されている（橋屋1991・南木1991・バリノ・サーヴェイ株式会社1998）。花粉分析結果によれば、モミ属やツガ属、スギ属等の針葉樹が比較的多く産出し、広葉樹ではアカガシ亜属やコナラ亜属が比較的多い。ただし、花粉化石群集における草本花粉の占める割合が高いことや、木本類の種実は種類・点数が共に少ない傾向にあることから、林分は比較的少なかった可能性がある。

諏訪木遺跡の建築部材に認められた種類では、クスギ節は関東地方ではクスギ1種のみが分布し、ヤマグワと共に過湿地を好む河畔林等を構成する種類である。また、北島遺跡の弥生時代中期後半とされる堰の構築材には、ヤマグワが多く確認されているほか、カツラ、スルデ、カエデ属、ハリギリ、ムクロジ、クリ、ヤナギ属が認められている（バリノ・サーヴェイ株式会社2003）。これらは、いずれも河畔林を構成する種類であることから、古墳時代前期の段階でもこのような種類とともにクスギ節やヤマグワが生育していたと推定される。針葉樹のイソガヤは、現在の熊谷市には分布しないが、河畔林等にも生育する種類であることから、同様に分布していた可能性がある。

一方、モミ属は崖堆積物や不安定な土地によく生育する種類であり、ヒノキは尾根上などの比較的乾いた土地を好む種類である。小敷田遺跡で確認されたアスナロもヒノキと同様に尾根上に生育する種類である。これらは現在の熊谷市域には分布しておらず、モミ属については、深谷市の段丘崖（御挽台地）や対岸の旧江南町から滑川町にかけての台地（江南台地）縁辺や丘陵（北企丘陵）内に分布が認められている（伊藤1998）。ヒノキ

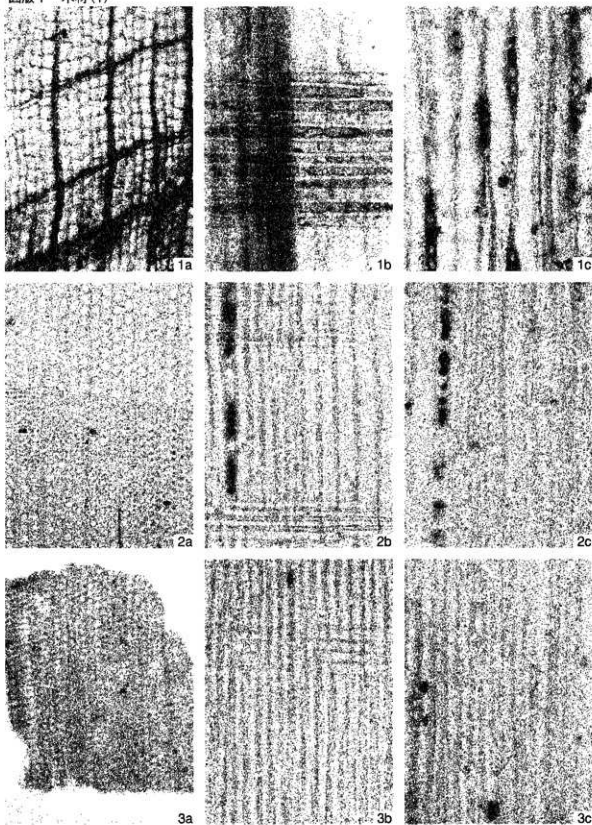
は、植林等の影響により本来の自生地は不明であるが、本来の生態性を考慮すると、モミ属と同様に台地上や丘陵地内等に分布していたことが推定される。また、北島遺跡での花粉分析結果では、低地部よりも自然堤防上でモミ属やツガ属の花粉化石が多く産出する傾向が認められているが、モミ属の花粉化石は広域に飛散し、腐食にも強いため、その他の花粉化石よりも強調されている可能

性がある。また、小敷田遺跡の自然木の調査においても、針葉樹の占める割合が低く、針葉樹製品が多くが持ち込みと考えられている（能城・鈴木 1991a）。以上の結果および現在の植生・生態を考慮すると、当該期においても遺跡周辺ではモミ属やヒノキの木材の入手は容易ではなく、付近の段丘や扇状地上、丘陵地などから入手していた可能性がある。

引用文献

- 橋屋光孝 1991 『小敷田遺跡の花粉化石群集』『小敷田遺跡（河川遺物編・第Ⅱ分冊）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集 335～342p.
- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 伊藤洋編 1998 『1998年版 埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会 833p.
- 伊東隆夫 1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ』『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 81～181p.
- 伊東隆夫 1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ』『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 66～176p.
- 伊東隆夫 1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ』『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 83～201p.
- 伊東隆夫 1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ』『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 30～166p.
- 伊東隆夫 1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ』『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 47～216p.
- 龍瀬良明 1990 『自然堤防の諸類型—河岸平野と水害—』古今書院 202p.
- 久保純子 2004 『荒川扇状地とその周辺の丘陵・台地』『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』198～200p.
- 南木勉彦 1991 『小敷田遺跡の大型植物化石』『小敷田遺跡（河川遺物編・第Ⅱ分冊）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集 319～334p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1998 『北島遺跡の古環境変遷』『北島遺跡Ⅳ（第14～16地点）（第2分冊）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集 485～503p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2003 『北島遺跡から出土した木材の樹種同定分析について』『北島遺跡Ⅵ（第2分冊）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集 521～524p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2005 『北島遺跡第19地点出土木製品の樹種同定』『北島遺跡Ⅶ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第305集 222～234p.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. 編 2006 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）』海青社 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 高地謙・伊東隆夫 1982 『国産木材組織』地球社 176p.
- 鈴木三男・能城修一 1989 『掘立柱建物検出柱材の樹種』『北島遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第88集 148～149p.
- 鈴木三男・能城修一 1991a 『小敷田遺跡の木材化石群集』『小敷田遺跡（河川遺物編・第Ⅱ分冊）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集 268～318p.

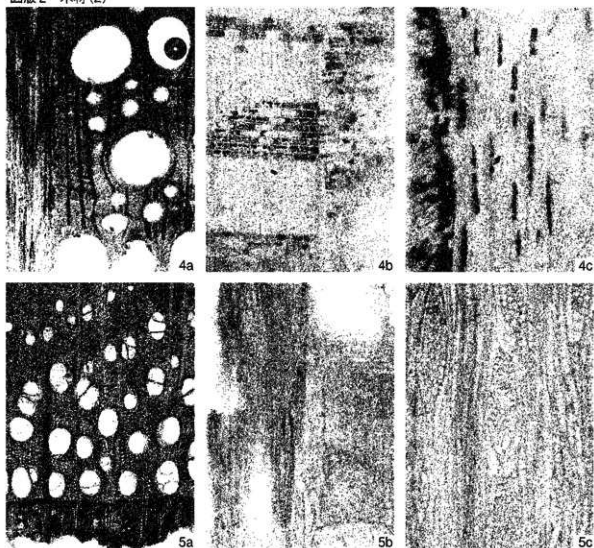
図版1 木材(1)



1. モミ属 (試料番号1)
 2. ヒノキ (試料番号2)
 3. イヌガヤ (試料番号4)
 a: 木口, b: 径目, c: 板目

200 μm: a
 100 μm: b, c

図版2 木材(2)



4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (試料番号6)

5. ヤマグワ (試料番号5)

a: 木口, b: 径目, c: 板目

300 μm: a
200 μm: b, c

鈴木三男・能城修一 1991b 「第12・13地点から出土した木材の樹種」『北島遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集 100~103p.

高橋 敦 2005 「建築材及び戸枠材」『北島遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第293集 460~464p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P. E. 編 1998 「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩 (日本語版監修)」海青社 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2003 「北島遺跡Ⅵ (第1分冊)」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集 343p.

2. 諏訪木遺跡から出土した漆器の高級アルコール法による保存処理

株式会社 吉田生物研究所

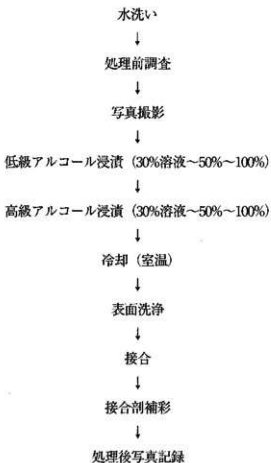
1. 処理方法

高級アルコール法 (特許取得済)

2. 対象試料

- 1 D区第14号溝跡 漆器碗 (第50図1)
- 2 D区第10号溝跡 漆器碗 (第58図39)
- 3 D区第11号溝跡 漆器碗 (第60図69)

3. 保存処理工程



水洗い



含浸事前処理 (水→低級アルコール)



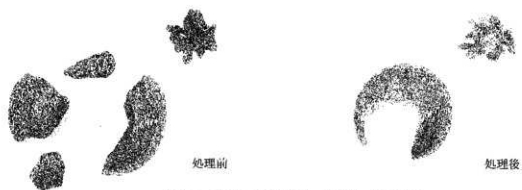
含浸処理 (低級アルコール→高級アルコール)

4. 使用材料

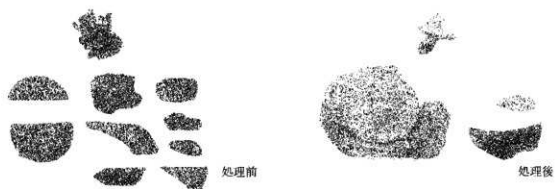
- 低級アルコール (メチルアルコール)
- 高級アルコール (オクタデカノール)
- 接着剤 (アルタインMH/アクリル系)
- 着色料 (アクリラ/ホルベイン)



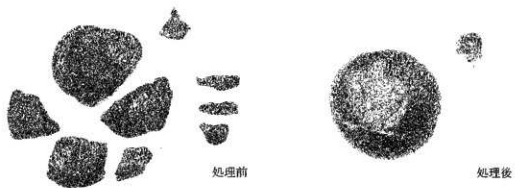
接合



试料 1 D区第14号溝跡山上 漆器碗 (第50图1)



试料 2 D区第10号溝跡山上 漆器碗 (第58图39)



试料 3 D区第11号溝跡出土 漆器碗 (第60图69)

VI 調査のまとめ

1. 諏訪木遺跡の変遷過程

諏訪木遺跡の立地環境

諏訪木遺跡は、熊谷市の中央部の東端に位置する。熊谷市は、利根川と荒川が最も接近する地域にあたる。市城西側の荒川左岸一帯には寄居町木野付近を扇頂とする荒川扇状地の撓挽台地、南側の荒川右岸には江南台地、北半部には妻沼低地、東部には熊谷市三ヶ尻付近を扇頂とする新荒川扇状地（熊谷扇状地）が広がる。

諏訪木遺跡は、沖積世に形成された新荒川扇状地の扇端部に立地する。扇状地扇端地形特有の湧水や伏流水に由来する小河川によって、扇状地の開析がみられる。また、北側に広がる妻沼低地では、利根川・荒川やその支流による自然堤防の形成や氾濫が、繰り返されてきた。遺跡の周辺では、微高地と窪地・低地が複雑に入り組んだ地形が形成されている。このような地形環境は、肥沃な耕地による生産性の高さや水害の恐怖という長所・短所の二面性をもち、遺跡（集落）形成に多大な影響を及ぼしている。

これまでの諏訪木遺跡の発掘成果

諏訪木遺跡は、南北約750m、東西約1km以上の範囲を有する広大な遺跡である。これまでに、工業団地建設、土地区画整理事業、本報告もかかる県道熊谷羽生線建設に先立って、断続的に発掘調査が行われてきた。

工業団地建設に先立つ発掘調査では、縄文時代後・晩期から中・近世の遺構・遺物が発見された。なかでも、溝に画された空間に四面庇付大型掘立柱建物跡と掘立柱建物跡が軸を揃えて展開する平安時代の様相や、古墳時代後期の「ムラの祭祀」から平安時代の「律令体制下の祭祀」への形態変化が確認された河川祭祀跡は全国的にも注目されている（吉野2001）。

土地区画整理事業に伴う発掘調査では、平安時

代から中・近世に至る集落遺構や、遺跡内に所在する上之古墳群第2号墳も発掘された（松田2007）。

県道熊谷羽生線建設に先立つ発掘調査は、対象区を7区に分割して実施した。A・B・C区を平成13年度に、D・E・F・G区を平成14・15年度に調査した。

諏訪木遺跡A・B・C区からは、縄文時代後期の包含層・古墳時代後期の水田跡・中世の区画堀等が発見された（黒坂2002）。

諏訪木遺跡D・E・F・G区では、上下二面の文化層がみつかった。下面の文化層からは、縄文時代後晩期の集落跡と遺物包含層が検出された。遺構は、16軒もの竪穴住居跡をはじめとして、土壇29基・炊跡3基・配石遺構1基・土器埋設遺構1基が発見された。遺物は、該期の土器・石器のほかに土偶・耳飾等の土製品、石棒・岩偶等の石製品も出土している。諏訪木遺跡の近辺には同時期の遺跡の発見例が無く、独立性の高い集落跡と推定されている（渡辺2007）。

諏訪木遺跡D・E・F・G区上面調査の概観

本報告が対象とする上面の文化層からは、弥生時代中期～中・近世の遺構と遺物が発見された。

検出された遺構は、竪穴住居跡31軒・竪穴状遺構1基・掘立柱建物跡13棟・欄跡8列・周溝墓3基・土壇墓2基・井戸跡24基・土壇96基・溝跡110条・水田跡3箇所・はたけ跡2箇所・河川跡1箇所・ピットである。時期の特定が困難な遺構が多く、これらは形状・規模・方向性等から類推した。

これらの遺構の分布には、種類・時期の両面で偏りが目立ち、延長約320mに及ぶ調査範囲全体を一括した遺構群と捉えることができない。遺構・遺物の様相の違いから、概ね5区画に分割される。偶然ではあるが、この区画が路線区内に存

在する生活道路や水路によって区分した調査区とはほぼ合致し、自然地形を上手く活用した先人の土木知識を垣間みることができる。

弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構には、堅穴住居跡1軒・周溝墓3基・土壇1基・溝跡3条があげられ、D区西端からG区東半部に分布する。

F区第8号住居跡からは、中期後半の中部高地系の壺形土器と打製石斧が出土した(第115・116図)。

F区第1号周溝墓は、四隅切れタイプの方形周溝墓である(第124図)。在地系の大型壺形土器と小型壺形土器、中部高地の栗林系統の小型壺形土器、南関東系の大型壺形土器の一括出土は、特筆される(第125図)。F区第2号周溝墓(第127図)・G区第1号周溝墓(第191図)は、時期を確定する要素に欠ける。

溝底から3点の壺形土器がまとめて出土したD区第75号溝跡と、これと直角に位置するD区第22号溝跡によって、同時期の方形周溝墓となる可能性がある(第31・33図)。D区第75号溝跡の調査時にも方形周溝墓の可能性を念頭に置いていたが、発掘調査が分断されて実施されたことや周溝墓とした場合に多くの部分が調査区外にあることも影響し、確証は得られなかった。

長さ54m・幅1m前後のF区第1号溝跡からは、底面から浮いた状態で大型壺形土器が出土した(第132・134図)。遺構規模から周溝墓の一端とも想起されたが、これに対応する溝状遺構は見されていない。また、調査時の所見では再葬墓の可能性が指摘されていたが、土器の開口部を閉塞していたような痕跡はみつからない。

諏訪木遺跡周辺には、隣接する前中西遺跡・池上遺跡をはじめ、平戸遺跡・北島遺跡・小敷田遺跡等が同時期の遺跡例としてあげられる。これらの遺跡は、弥生文化の波及の初期段階から本格的な集落が形成され、従来の弥生時代観に大きな変

更を迫るものであり、再度、これらの遺跡との比較・検討を要する。

古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、堅穴住居跡24軒・土壇24基・溝跡12条で、前期の河川跡1箇所も含まれる。いずれも、F区・G区に分布する。

古墳時代前期の遺構は、F区の住居跡8軒・土壇12基・溝跡7条、G区の住居跡13軒・土壇10基が該当する。また、性格不明遺構としたG区の溝状遺構5基のうち、住居の貼床状の硬化面をもつ第2・3号(第196図)、「7」字形に屈曲する第1号(第193図)、くの字形の溝が相対する第4号(第194図)の計4基は、住居跡の残痕と考えられる。これらの遺構の周辺にはカマドの痕跡は無く、古墳時代前期の住居跡であった可能性が高い。

古墳前期集落を概観した場合、F区とG区の中間のF区第2地点を南北に流れていた河川跡が注目される。この河川跡は、遺跡が立地する地形環境を象徴するものである。全体像は把握されていないが、川幅は20mを超えるものと予想される。そこで、F区とG区の古墳前期集落は、F区第2地点の河川の両岸に営まれた別々のムラと捉えることができる。

F区とG区の古墳前期集落は、いずれも遺構の分布密度が薄く、遺物の出土量も少ない。また、特筆するような事象も見られないことから、両者とも大規模な集落と考えることはできない。河川を臨んで営まれた、小規模な集落と位置づけられる。諏訪木遺跡には、このような小規模集落(遺構群)が点在していたことを予想させる。つまり、諏訪木遺跡を小規模集落(遺構群)の集合体として捉えることが妥当な解釈で、遺跡の特徴の一つでもある。

F区第2地点の河川跡は、調査着手当初には谷地形に形成された遺物包含層として捉えられていた。古墳時代前期に限定される多量の土器片が出土し、器種は台付甕・壺・高坏・器台といった日

常雑器が大半を占めている。出土状況には、特別に埋置・埋設されたような形跡は把握されていない。数点の手掘り土器や二重坏高坏・緑色凝灰岩製管玉が含まれるが、これらを以って祭祀的な様相として積極的に捉えることはできない。

谷地形の底面付近からは、多量の本製品が発見された。等高線に沿って、6列以上もの杭列が確認され、これらと平行・直交するように長尺の柱状・板状の木製遺物が配されていた(第136図)。このような人為的な木製遺物の配置状況から、護岸施設と推定された。そして、谷地形を護岸施設を必要とする地形=河川と断定した。但し、護岸施設の詳しい構造を復元することはできない。

護岸施設に用いられていた木材は、建物の廃材や破損した木製農具等を転用したものである。必要に応じて、二次的な加工が施されている。時期は、古墳時代前期に限定される土器群との共伴から、木製品も同時期に特定できる。種類・量・時期において、良好な一括資料である。また、一時期のみに限定されることから、河川自体が一過性のもので、比較的短時間に埋没してしまったことを想像させる。

出土した木製品には、建築材も多く含まれる。このなかの一つに、板倉造り建物の壁板と断定できるものがある。この壁板には、板と板とを接ぎ合わせるために「ヒノキノヒタ榑倉矧」と呼ばれる技法が採用されたもので、そのための特殊な加工が施されている。詳細は後述するが、東日本最古段階の貴重な発見例である。

続く、古墳時代後期の遺構には、住居跡3軒(F区第6・11号住居跡、G区第5号住居跡)、土壘2基(F区第1・12号土壘)、溝跡4条(F区第4・5号溝跡、G区第5・7号溝跡)がある。遺構数が少なく、点的な分布を示すことから、古墳後期集落縁辺部の様相とみられる。

奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構として、堅穴住居跡6

軒・掘立柱建物跡8棟・井戸跡4基・土壘33基・溝跡43条・水田跡3箇所があげられる。

水田跡はF区第1地点最西端に位置し、古墳時代前期の河川跡が埋没した窪地を開墾したものと推定される。上面には、1108年(天仁元)の浅間山噴火に伴う火山灰層が堆積していた(第135図)。この水田を境にして、奈良・平安時代の集落も二分される。

水田の東側のD区第3・6地点～F区第1地点の東端付近には、掘立柱建物跡7棟・井戸跡4基・土壘17基・溝跡27条が分布する。一方、西側には、G区の住居跡6軒・掘立柱建物跡1棟・土壘16基・溝跡16条が該当する。両者の遺構構成は対照的で、水田の東側には「掘立柱建物のムラ」、西側には「堅穴住居のムラ」という、異なる景観が復元される。そして、西側の集落は、古墳前期集落と同様に、諏訪木遺跡を構成する小規模な集落の一つである。

これに対し、東側の「掘立柱建物のムラ」では、溝によって区画された空間の中に、二面庇付建物を中心とした5棟の掘立柱建物が軸を揃えて密集する(D区第3・6地点、D区第6～10号掘立柱建物跡、第10～14図)。特に、二面庇付建物のD区第6号掘立柱建物跡から出土した遺物量は、同時期の掘立柱建物跡と比較すると多い。また、黒書土器3点も含むなど、単なる一般家屋ではないことを示唆している。さらに、D区第6号掘立柱建物跡の南側のM37グリッドには、3点以上の須恵器大甕が一括出土した(第73～82図)。これらの人甕を直接伴う遺構はない。出土状況にも、これらの大甕が意図的に配置されたような様子は認められない。おそらくは、饗宴の酒樽として用いられた後、一括して破碎・投棄されものと予想される。

このような一般集落とは異なる遺構・遺物のあり方は、南方約200mに位置する工業団地調査区の成果との共通点がある。

工業団地調査区では、当初は8世紀末～9世紀初頭段階に竪穴住居のムラが出現する。しかし、9世紀前半からは突如として溝で区画された区域に掘立柱建物が建ち並び、10世紀後半まで継続する。3棟の四面庇建物を中心とした合計31棟もの掘立柱建物が、中央に広場的な空間を形成しながら計画的に配されている。また、集落の南端部を流れる河川では、「古墳時代のムラのマツリ」から「律令体制下の祭祀」まで、継続的に祭祀儀礼が繰り返され、その形態的な変化も把握されている。このような状況から、一般的な集落とは異なる特別な区域であったことは明白で、官衙遺構の存在を彷彿させる遺構群である。

D区第3・6地点の様相は、工業団地調査区とは規模・質ともに異なる。しかし、「同時代に存在していた」という動かすことのできない事実があり、「特別な区域に付随した施設」であった可能性を提示したい。そして、水田西側の竪穴住居のムラを、このような特別な区域を支えていた集落の一つと数えることができる。

中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構として、竪穴状遺構1基・掘立柱建物跡5棟・欄跡8列・井戸跡20基・土壇墓2基・土壇38基・溝跡52条・はたけ跡2箇所があげられる。これらの遺構の分布は、調査区東半部のD区・E区に偏っている。さらに、D区路線内を横断する現存する水路を境として、東西二つに細分される。

水路の東側のD区第1・2・4・5地点には、B区から広がる2枚のはたけ跡が検出された(第69・70図)。これと重複して、掘立柱建物跡5棟・欄跡6列・土壇墓2基・井戸跡5基も発見された。D区第10号井戸跡では底抜けの桶が井戸枠に転用され(第22図)、D区第1号井戸跡には欠損した板碑2点が投げ込まれていた(第17図)。

2枚のはたけ跡を分割するD区第10号溝跡では、かわらけや板石塔婆・漆碗・木製下駄等が出土し、

溝底からはウマの頭蓋骨(第59図46)が正位の状態で発見された(第55図)。

発見されたウマの頭蓋骨は、眉間部(前頭部)が故意に打ち砕かれたもので、屠殺(撲殺)の痕跡と捉えられる。ウマの頭蓋骨は、工業団地調査区の河川祭祀跡からも出土し、下顎骨の欠損・前頭部の破碎という共通点をもつ。工業団地調査区では、古墳時代後期の土師器・須恵器・石製模造品や木製壺鐘やウマの前足の中手骨、後足の左脛骨・中足骨等と共伴している。また熊谷市一本木前遺跡でも、入り江に面した祭祀跡から、古墳時代後期の土器・石製模造品とともに発見されている。D区第10号溝跡例の場合は、発見状況から白骨化した(?)ウマの頭蓋骨のみが人為的に溝底に安置されたものと断定される。「日本書紀」・「古語拾遺」・「類聚三代格」等の記述から、古来より馬の首を神に捧げる雨乞い等の儀礼が行われているようである(松井2000)。本例がこれらの儀礼に合致するものかは検討を要するが、ウマの頭蓋骨に他の用途を考えることは難しく、さらに人為的に安置された出土状況も加味すると、祭祀儀礼のほかには想像できない。

水路の西側のD区第3・6地点とE区は、この水路を東辺とする変則的な方形区画と認識されていた。調査着手前の標高が水路の東側よりも約1mほど高く、また、「秋葉」と称される地名と「新編武蔵風土記稿」の記述から、成田太郎助廣の五男、成田四郎助綱の弟、秋葉七郎の居宅跡の存在が予想されていた。そのため、表土除去の段階から慎重に調査を進めたが、残念ながら、調査着手前の区画や文献の記述を裏付ける成果を発見することはできなかった。

東西方向に走行するE区第9号溝跡(第97・101図)とD区第19号溝跡(第31・33図)は、同一の溝跡と推定される。そして、D区第19号溝跡東端部が直角に屈曲することによって、南側調査区外に展開する方形の区画が形成されている。D

区第19号溝跡の屈曲部からは、14枚の北宋銭が一括して出土した(第36図19~32)。ここが方形区画の北東の鬼門の方向にあたることから、北宋銭が地鎮に用いられたことが推定できる。区画内部には、E区第1号井戸跡が位置する。井戸枠として、胴部下半部の半分ほどを欠損した常滑の大甕が転用されていた(第89図)。これは13世紀中頃の産物で、口縁部から底部までの遺存度は全国屈指のものである(第90図)。

また、方形区画外からは、蔵骨器が埋設された土壇(E区第1号土壇)・竪穴状遺構1基・井戸跡8基が検出されている。蔵骨器は、特別な加工が施されていない片岩製の蓋石2枚と16世紀前半代の常滑甕の組み合わせで(第92・94図)、被葬者は不明である。E区第1号竪穴状遺構は、弘仁9年(818)もしくは元慶2年(878)に推定されている大地震に伴う噴砂痕を掘削して形成され、地震発生時期を類推する資料の一つとなる(第88図)。石組みのD区第11号井戸跡は、拳大~人頭

大の円礫が組み上げられていた(第22図)。

諏訪木遺跡の定義

以上、諏訪木遺跡D・E・F・G区判官面文化層の発掘調査の成果を年代別に並べかえ、遺跡の変遷過程を概観した。

県道熊谷羽生線建設に先立つ発掘調査(A~G区)は、南北約750m、東西約1km以上の広大な範囲を有する諏訪木遺跡全体に対して、東西方向に貫くトレンチ調査を行ったような形となっている。その結果、集落域・生産域・墓域(上之古墳群・周溝墓群)や古代官衙を彷彿させる遺構群など、多数の小規模遺構群の集合体であることが明らかとなった。また、発見された遺構・遺物には、縄文時代から中・近世までの多岐にわたる時代が含まれ、各年代ごとにも複数の小規模な遺構群が併存している。

つまり、諏訪木遺跡は扇状地末端の起伏に富んだ立地地形を背景にし、空間的・時間的にも多様な文字通りの「複合遺跡」として解釈できる。

2. 縦じ合わせ構造をもつ樋部倉矧の壁板

F区第2地点の古墳時代前期の河川跡に形成されていた護岸施設には、等高線に沿った6列以上の杭列と、この杭と杭を繋ぐように長尺の柱状・板状の木材が杭列に平行・直交するように配されていた。用いられた木材は、建物の腐材や破損した木製農具等が転用されたもので、必要に応じて二次的な加工も加えられている。

壁板の発見

F区第2地点の河川跡から出土した木製品のなかには、建築板材が含まれていた(第148図190・第213図1)。

この板材は、長辺86.8cm×短辺17.5cm×厚さ3.1cmほどの大きさで、木取りは追柂目、樹種はヒノキである。長軸方向両端部(短辺付近)の片面には、表面整形とは異なるケズリ加工が施され、板の厚さが調節されている。実測図の左側では7.6cmほどの範囲にケズリ加工が施され、薄く仕上げられている。一方、右側には端部から40cmほどの狭い範囲にケズリ加工が行われている程度で、板の厚さは左側に比べて厚い。

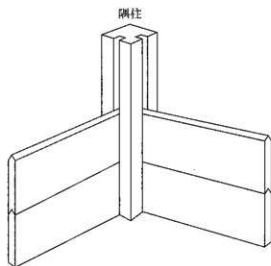
ここで、「発見された板材は、どの部位に相当する建築材なのか?」、「何故、板の厚さを調節す

る必要があるのか?」、「長軸方向両端部の厚さを調節する必要がある建物には、どのような構造があるか?」という疑問が生じる。これらに答える建築構造が、「板倉造り」である。板材の両端にみられる板の厚さを調節するケズリ加工は、柱の溝幅に合わせて壁板の厚さを調節した痕跡と考えると合点がいく。

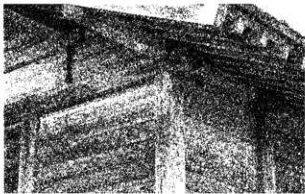
板倉造りとは

板倉造りとは、柱や土台、梁などの軸組に溝を彫り、その溝に厚さ3cm・幅15cmほどの壁板材を落とし込む建築構法(落とし板構法)である(第208図)。よって、横羽目の板壁となる(註1)。

板倉造りには、木材の伸縮性が最大限活用されているので、通気性がよく、高い調湿機能をもつ。そのため、穀物や書物・経典の保管庫として最も適した構造であり、これらの保管を必要とする神社・仏閣に多く採用されてきた。遺存する代表例として、春日大社宝庫(重文・1380年)・旧春日大社板倉(円窓)(重文・春日大社西ノ屋経蔵・鎌倉後期)や法隆寺綱封蔵・伊勢神宮中宮社殿や出雲大社等があげられる。また古代の正倉にも広く採用され、武蔵国榛沢郡正倉跡である深谷市



第208図 板倉造り建物復元図



第209図 埼玉県深谷市(旧岡部町) 中宿古代倉庫群跡 2号建物(復元)

(旧岡部町)中宿遺跡2号棟が、板倉造り建物として復元されている(第209図、駒宮・鳥羽1997)。

壁板材両端のケズリ加工

柱溝に落とし込む長軸方向両端部に施された板厚調節のための加工によって、通常ならば、厚さは整えられて然るべきである。しかし、左右の厚さは極端に異なり、意図的なものを感じる。おそらくは、左右の柱に彫り込まれていた溝の幅が異なっていたことを示唆しているのであろう。そして、柱の溝の幅の違いは柱の太さに反映され、当然のことながら、幅の広い溝は太い柱に彫り込まれたものである。太い柱は建物の「隅柱」と予想され、出土した壁板は、厚く仕上げられた側が隅柱に落とし込まれたものと推定される。

次に、壁板の長軸方向両端部付近の板厚調節加工は、左右とも同じ面に限定されている。板厚の調節が目的ならば、片面に執着する必要性はない。利き腕の関係から、両面の左右に加工を施すことは、製作者にとっては作業がし難い。現実には、抉るような深いケズリ加工を施すなどの負の作用が認められる。よって、ここにも何らかの意図があったものと想像できる。建物の壁板には、風雨の侵入を防ぐ高い密閉性が要求される。そこで、両端のケズリ加工のない平滑面を建物の外側に向け、要求を満たしていたものと推定される。

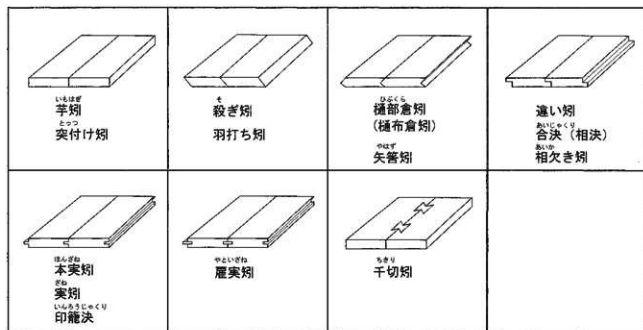
樋部倉矧のためのV字形加工

出土した壁板の一方の長辺側面には、U字形

～V字形に抉られたような加工が施されている。この反対側は、コの字形に成形されている。

このような板側面部のV字形の加工は、板の面積を増やすために板と板とを接合する際に、接着部に施される工夫の一つで、「樋部倉矧」もしくは「欠管矧」と呼ばれる技法に対応する形状である。樋部倉矧技法とは、建築部材を組み合わせる工法の継手技法の一つである。継手とは部材と部材を同一軸方向に継いでいく接合技法で、一般には、柱状(棒状)の長尺な部材を長手方向につないで更に長い部材を作り出す方法として知られている。板材の場合には、「接ぎ継ぎ」と呼ばれる技法を用いて、より広い面積の部材を求めることができる。現在の一般家屋では、フローリングとよばれる床板が身近な例としてあげられる。木材の組み合わせ技法には、仕口と呼ばれる方法もある。これは2つ以上の材をL形・T形・X形等ある角度で接合する方法である。材同士を欠きあって組み合わせる組み手や、柱材等には横架材を差し込む差し口等がある。諏訪木遺跡の河川跡から出土した建築材にも、仕口技法の痕跡が残るものが多く含まれている。

板材の接ぎ継ぎ方法には、芋矧(突付け矧・註2)・殺矧(羽打ち矧・註3)・遠矧(合決・相決・註4)・本貫矧(実矧・印籠決・註5)・雇実矧(註6)・千切矧(註7)等もある。樋部倉矧も含めて、基本的には、接合部の板側面部の



第210図 板材の接ぎ継ぎ方法

加工形状が異なっている(第210図)。この形状の違いは、畑ぎ合わされた板の強度に反映され、床・壁・天井などの用途によって使い分けられている。

樋部倉畑は、板材の側面の一方をV字山形、他方をV字谷形に加工し、「<+>」形に畑ぎ合わせる方法である。板側面が平滑なコの字形同士を畑ぎ合わせる芋畑(コ+コ)と比較すると、畑ぎ合わせる接合面積が増大し、機密性も高まる。しかし、床材としては十分な強度が保てないことから、通常は壁板材・天井板材に用いられている。

出土した樋部倉畑の壁板は、板側面の一方がV字谷形に加工されているのに対し、その対面はコの字形である。これでは、「<+>」形の接合状態となり、工法上はきわめて不都合である。そこで、板側面の形状がV字谷形とコの字形の組み合わせとなる理由付けが必要となってくる。

樋部倉畑の壁板の側面形状がコの字形である必要が生じる部位は、組み上げられた壁板の最上段か最下段のいずれかと考えられる。最上段の場合には、上方にコの字形側面に向けた桁梁材直下と

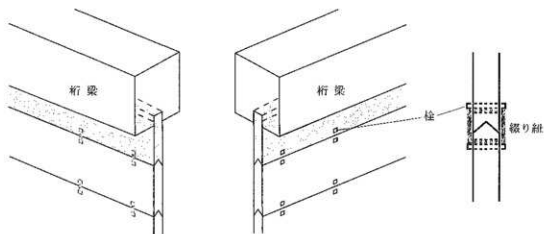
なる。一方、最下段の場合には、コの字形側面を下方に向け台輪などの床材直上となる。

次に、壁板の上下方向を考えなければならない。壁板には、建物内部と外界の遮断、風雨の浸入を防ぐ等の機能が求められる。仮に、V字谷形が上を向いている場合、壁を伝った雨水が接合面の谷部に溜まり、建物内部にも浸入する可能性が生じる。そこで、コの字形を上方に、V字谷形を下方に向けた桁梁材直下の壁板とするのが、合理的な解釈と思われる。

縦じ合わせ構造

出土した壁板には、もう一つ特筆すべき点がある。それは、V字谷形に整形された長辺縁辺部に、ほぼ等間隔に穿たれた、3孔の枘穴である。穿孔された位置から、畑ぎ合せた板と板の接合と、接合箇所を強化するという用途を予想させる。

最も簡易な方法として、枘穴に縦じ紐を通して板と板を縛り付けて固定する方法が考えられる。しかし、板と板を緊縛する用途に足りる縦じ紐を通すには、枘穴の規模が大きすぎる。何重にも縦じ紐を通すにしても、枘穴を埋めきるには相



第211図 諏訪木遺跡の継ぎあわせ構造をもつ樋部合切壁板の模式図

当の回数が必要とし、不合理である。このままでは、常に穴のあいた状態の壁板となり、樋部倉削加工を施して機密性の向上を図った意義を損ねてしまう。

そこで、枅穴を埋めるための方法の一案として、緊縛する継ぎ紐を通した後に、枅穴に栓を打ち込んで塞いだ可能性が考えられる。枅穴の大きさのみに着目するすならば、継ぎ紐の太さに応じた穴を開ければ十分で、わざわざ栓をしなればいけないほどの大きな枅穴を穿つ必要性はない。しかし、継ぎ紐には桜の樹皮などが予想され、これでは「結ぶ」という行為ができない。そのため、枅穴に栓を埋め込んで固定したとすると、合理的に理解できる（註8）。

以上のように、諏訪木遺跡から出土した板材は、板倉造り建物の壁板と判明した。長軸方向両端部付近には、柱溝に落とし込むための板厚調節の痕跡が認められる。また、長辺側面部には、「樋部倉削」という接ぎ継ぎ技法のためのV字形の整形加工が施されている。さらに、接合部分を強化するために、枅穴を穿って継ぎ紐によって緊縛する継ぎ合わせ構造が付加されていることも推定された。**壁板の樹種と供給元**

出土した壁板の樹種は、針葉樹の「ヒノキ」という同定の結果が得られた（V-1参照）。ヒノ

キは尾根上などの比較的乾いた土地を好む種類で、現在の熊谷市域には分布していない。商品価値の高さから植林されている影響が大きく、本来の自生地は不明である。本来の生態性から、モミ属と同様の分布が推定される。モミ属は、深谷市の荒川左岸の櫛挽台地の段丘崖や対岸の旧江南町から滑川町にかけての江南台地縁辺や比企丘陵内に分布が認められている。よって、ヒノキは諏訪木遺跡の近郊の段丘や扇状地上、丘陵地などから入手していた可能性が考えられる。そして、その背景には、周辺を流れる中小河川の水運力があったことが予想される。

北島遺跡から出土した壁板

諏訪木遺跡の北方約15kmに位置する埼玉県熊谷市北島遺跡から、酷似した板材が出土している。北島遺跡は、南北約1200m・東西約1650mの広大な範囲に及び、弥生時代中期～近世の長期間にわたり地域の拠点となった遺跡である。

板材が出土した第19地点第423号溝跡は、弥生時代以来の河川跡である。堆積土層と遺物出土状況の詳細な記録から、堆積層と時期が対比できる良好な調査例である。古墳時代前期には、集落の南端を画する機能をもつ。この集落は、方形環濠に圍繞された住居群をはじめ、総数146軒以上もの住居跡と27基の方形周溝墓群から構成される拠



第212図 埼玉県熊谷市北島遺跡から出土した樋部倉矧の壁板

点的な集落である。また、南岸にも同時期の集落が展開するようである。さらに、並走する3条の溝跡には、出土遺物から「水辺の祭祀」的な様相も窺われている(山本2005)。

第19地点第423号溝跡の古墳時代前期の堆積土層から、手捏土器・小型丸底土器や高坏・鉢・壺・台付甕等とともに、鋤・鍬・横槌・竖杵等の農耕具、鏝等の漁撈具、梯子・垂木等の建築材や弓・舟等の多種多様な木製品が出土した。この中の一つが、諏訪木遺跡から出土した樋部倉矧壁板と酷似した板材である(磯崎2005)。

大きさは、長辺90.6cm・短辺26.8cmである。両側の長軸方向両端部付近には、板厚を調節したケズリ加工が認められるが、諏訪木遺跡ほど露骨には行われていない。長辺側面部の形状は、一方がV字山形、他方はコの字形に整形されている。また、V字山形側の長辺に沿って、方形の枘穴3孔が1列に並ぶ(第212図・第213図2)。

柱溝落込部の板厚調節加工、長辺側面部のV字形整形、縦じ合わせ構造と認定される長辺に沿って並ぶ枘穴という共通点があげられる。また、V字山形の板側面部の対面がコの字形であることから、壁板の最下段(床材直上)の壁板材であると予想される。

壁板の大きさに着目すると、北島遺跡の壁板は諏訪木遺跡の壁板よりもひとまわり大きい。この事実は、北島遺跡の建物が諏訪木遺跡よりも柱間が長く、規模の大きな建物であったことを意味す

る。建物規模の違いには集落の規模が反映されていることが予想され、集落規模に比例して大型の建物(倉)も必要だったのであろう。さらに大規模集落の建物は、より緻密な設計と高度な技術によって建設されたことが予想され、僅かにすぎない柱溝落込部の板厚調節に垣間見ることができる。いずれにしても、出土した壁板に対応する建物遺構や他の建築材が両遺跡ともに発見されておらず、推定の域はでない。

富山県中小泉遺跡から出土した板材

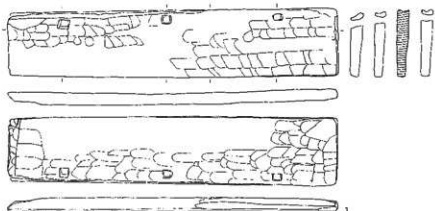
富山県上市町中小泉遺跡では、SD27から多量の木製品が出土している。

「穴を持つ」板として提示された第213図3は、一方の短辺付近を欠損する板材である。現存長辺101.4cm・短辺13.6cmを測る。長辺側面部の形状は、一方がV字山形、他方がコの字形である。V字山形に整形された長辺に沿って、3孔の方形枘穴が並ぶ。また、先端部では、コの字形側にも楕円形枘穴1孔が穿たれている。諏訪木遺跡・北島遺跡でみられた、長軸方向両端部付近の板厚調節加工は施されていない(狩野他1984)。

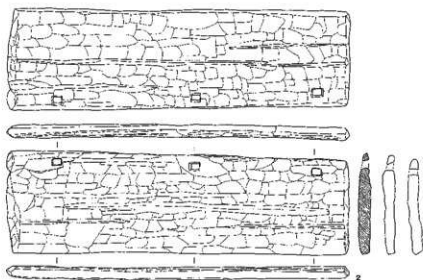
長辺側面部をV字山形に整形した形状と、これに沿って並ぶ3孔の枘穴から、縦じ合わせ構造をもつ樋部倉矧の板材と思われる。時期は弥生時代後期～末頃と推定され、縦じ合わせ構造をもつ樋部倉矧の板材としては日本最古のものである。

ここで、いくつか問題点があげられる。

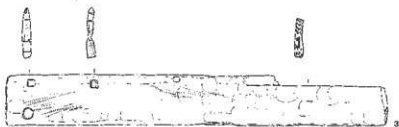
一つは、断面形状からコの字形側の中央部が、



埼玉県熊谷市 諏訪木遺跡



埼玉県熊谷市 北島遺跡 (坂崎 2005より転載)



富山県上市町 中小泉遺跡 (野野地 1984より転載)



第213図 櫓部倉期壁板の参考資料 (1)

溝状に僅かに窪む可能性がみられることである。これが人工的な加工ならば、弥生時代後期から「 $<+<$ 」形に矧ぎ合わせる方法が確立していたことになる。これに対し、「 $\square+<$ 」形に矧ぎ合わされた圧痕と捉えるならば、榑部倉矧の概念から外れてしまう可能性も浮上する。

次は、長軸方向先端部にV字山形とコの字形の両側に枘穴が穿たれていることで、諏訪木遺跡・北島遺跡例にはみられなかった現象である。断面コの字形の面が台輪などの床材の直上に位置する壁板と仮定し、床材が柱材に固定するための痕跡と解釈することも不可能ではない。一方で、「 $\square+<$ 」形の矧ぎ合わせが成立するならば、縦じ合せ構造のための枘穴ともいえるが、対面とは数があわない。

最後は、大きさである。側面形状V字山形側の欠損部分に枘穴状の痕跡が窺われ、6孔の枘穴が穿たれていたものと類推できる。この仮定から、長辺およそ120cm弱（現101.4cm）に対し、短辺136cmという壁板材に復元できる。諏訪木遺跡・北島遺跡の壁板と比較すると、長辺が約30cmも長くなる一方、短辺が短くなる。諏訪木遺跡とは39cm、北島遺跡とは約半分の13.2cmもの差があり、形状的には違和感を感じる。

これらの問題点から、諏訪木遺跡・北島遺跡と同様に、板倉造り建物の壁板と断定することに躊躇を覚える。弥生時代と古墳時代という社会的時代差や、関東と北陸という地域差が反映された結果とすることもできるが、それでもなお、断定は避けたい。建築用の板材であると仮定し、「部位を特定できない縦じ合せ構造をもつ榑部倉矧の板材」と広義の意味で捉えたい。

三重県六次A遺跡から発見された壁板材

三重県津市六次A遺跡は、大溝（SD1）と旧河道（SR2）から多数の木製品が出土したことで、全国的に知られている遺跡である。出土した木製品は合理的に整理され、建築用の板材も、大き

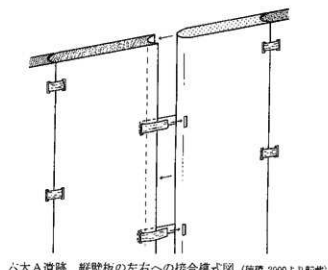
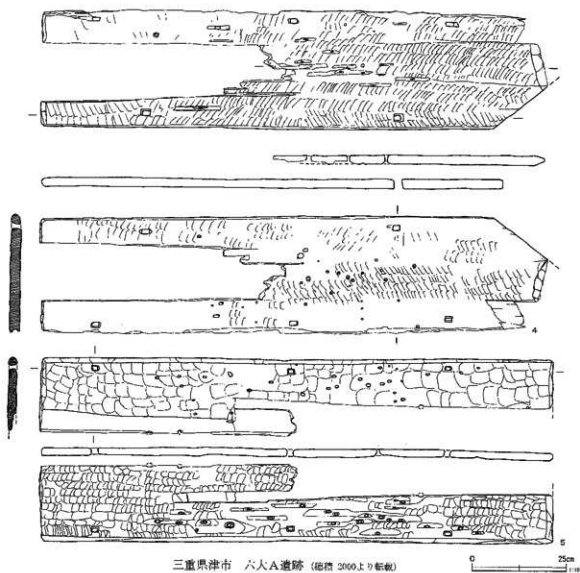
さ・厚さ・加工や調整方法・細工等から、扉板・床板・壁板等に分類されている（穂積2000）。

壁板材は、梁より上部の妻壁板と桁・梁より下部の横壁板に類別されている。「接ぎ継ぎ」技法には芋矧・殺ぎ矧・榑部倉矧が認められる。芋矧・殺ぎ矧の壁板のなかにも、諏訪木遺跡と同様に長軸方向両端部付近の板厚調節が施されたものが多数みられる。同一集落内の同じ板倉造り構造の建物でも技法は統一されず、様々な建築技法が用いられた建物が混在しているようである。

第214図4・5は、長辺の側面部の一方がV字山形、他方がV字谷形となる榑部倉矧本来の形状をもつ。いずれもSD1Ⅲb層（弥生時代後期～古墳時代前期中心）から出土し、堅羽目の妻壁板と推定されている。

4は、屋根の勾配（54°）に合わせて、短辺の一方が斜めに切断されている。現存高135.3cm（推定高160cm）、幅30.9cm、厚さ2.7cmである。堅羽目の妻壁板と仮定すると、梁材から屋根の棟までの高さが、最低でも1.6mとなる。さらに壁板が1枚増えるごとに、2.0m、2.4mと比例して高くなる。梁材からの高さをこれほどまでに有する建物を感じるのは容認し難い。報文でも記されている通り、屋根勾配36°の横羽目の妻壁板とする方が妥当と思われる。柱溝落込部の板厚調節の加工はみられない。両方の長辺に沿って、千鳥に配置された方形枘穴が穿たれる。縦じ合せ構造と位置づけられるが、枘穴は隣の板と緊縛するための縦じ紐によって塞がる程度の大きさで、栓留めまで想定しなくとも良さそうである。

5は、長方形の板材で、高さ137.2cm、現存幅19.8cm×厚さ2.1cmである。柱溝落込部の板厚調節加工はみられない。V字山形側の長辺に沿って並ぶ枘穴の位置が、4のV字谷形側の枘穴の位置とはほぼ一致する。ここから、同一建物の連続する板材の可能性がもたれ、接合模式図も提示されている（第214図）。



第214図 樋部倉副壁板の参考資料 (2)

弥生時代末～古墳時代前期の板断面矢羽形の樋部倉刻本来の形状は、六大A遺跡のみで確認されている。妻壁板という用途の違いや、畿内に近い地理的条件をも含めた技術差などが背景にある可能性が考えられる。

六大A遺跡からは、長辺の側面部の形状がV字山形とコの字形の組み合わせも出土している。第215図6・7が相当し、いずれも横羽目の壁板材と捉えられている。6は、SD1Ⅲ層から出土した長方形の板材で、現存幅174.8cm、高さ17.7cm、厚さ2.8cmである。一方の長軸方向端部付近には、柱溝落込部の板厚調節加工が施されている。7は、SD1Ⅲa層から出土した長方形の板の欠損材で、現存幅108.0cm、高さ21.0cm、厚さ3.5cmである。大型の枘穴が、V字山形側の長辺に沿って1～2孔穿たれているが、諏訪木遺跡・北島遺跡例の縦じ合わせ構造とは様相が異なる。

桜町遺跡と上小紋遺跡の樋部倉刻技法

諏訪木遺跡から出土した樋部倉刻の壁板材の類例を列挙したが、ほとんどが弥生時代末から古墳時代前期の限定された時期に位置づけられることは注目される。

ところが宮本長二郎氏は、富山県小矢部市桜町遺跡（縄文時代中期末）と高根県松江市上小紋遺跡（第215図8、弥生時代後期）を例にあげ、より遡る時期から樋部倉刻技法が存在していたとする（桜町遺跡発掘調査閉編2001、宮本1987・1996）。上小紋遺跡では、伴出した建築材をもとに高床建築の構造復元も試みられている（第215図）。

最新の研究においては、桜町遺跡例は「明瞭な樋部倉刻加工とは認めにくい」という方向性が示されている（大野他2005）。山田昌久氏からも、「同例が樋部倉刻のための加工ではない」という御教示をいただいた。また、上小紋遺跡例は、板断面形状が矢印状の鋭形二等辺三角形で、底辺部にV字谷状の凹みがある。しかし、縦じ合わせ構造の枘穴が無く、諏訪木遺跡・北島遺跡・六大

A遺跡例とは様相が異なる。

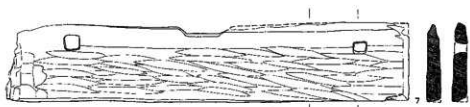
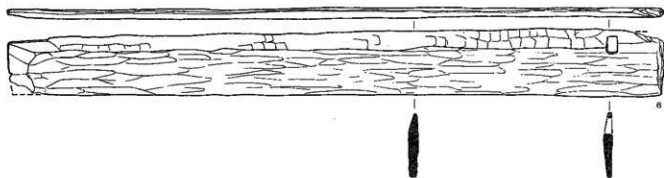
このほかに、静岡県浜松市角江遺跡（弥生時代後期、佐野・中川1996）・三島市西大久保遺跡（弥生時代後期～古墳時代前期、池谷・芦川1996）・愛知県清洲町朝日遺跡（弥生時代中期、樋上2005）等から、樋部倉刻風の断面をもつ板材が出土している。二次的な転用加工が施され、本来の形状が不明なものが多い。また、いずれの資料も縦じ合わせ構造は有していない。

諏訪木遺跡出土壁板の意義と今後の課題

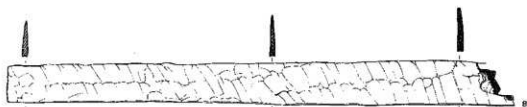
以上、諏訪木遺跡から出土した縦じ合わせ構造をもつ樋部倉刻の壁板について概説した。「ヒブクラハギ」という聞き慣れない読み方から、特殊な構造が想起させられてしまう。しかし木質は、接合面部に一工夫加えられただけの、建築部材を組み合わせる継手技法の一つにすぎない。諏訪木遺跡の壁板の場合、長辺に沿って穿たれた3孔の枘穴に縦じ紐を通して板と板とを緊縛し、接合部を強化する縦じ合わせ構造が付加されている。

諏訪木遺跡から出土した壁板は、河川の護岸施設に再利用されていた。しかし、二次的な加工からは免れ、本来の形状が保たれていたため、情報量が多い。一つは、長軸方向両端部付近の板厚調節加工の存在から、板倉造り建物の横羽目の壁板であることが判明した。次に、V字谷形の板側面部の形状から、樋部倉刻技法の存在が明らかになった。また、対面のコの字形の側面形状から、桁梁材直下の壁板の最上段にあたる壁板材と推定された。さらに、伴出した土器群が「古墳時代前期」という時期に限定されていた。このように、用途と詳細な部位、年代が特定できるきわめて良好な木製建築材の資料といえる。

諏訪木遺跡のような縦じ合わせ構造をもつ樋部倉刻の壁板は、中小泉遺跡・六大A遺跡に類例がみられ、諏訪木遺跡から約15km離れた北島遺跡からも出土している。これらは、弥生時代末～古墳時代前期に位置づけられる資料で、この時期に縦

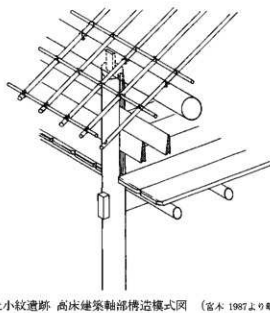


三重県津市 六火A遺跡 (穂積 2000より転載 一部修正)



島根県松江市 上小紋遺跡 (宮本・灰江 1987より転載)

0 25cm
1:10



上小紋遺跡 高床建築軸部構造模式図 (宮本 1987より転載)

第215図 礎部倉形壁板の参考資料 (3)

じ合わせ構造をもつ樋部倉矧技法が広く採用された可能性を窺わせる。いずれにしても、諏訪木遺跡例は「東日本では最古段階の縦じ合わせ構造をもつ樋部倉矧壁板」と評価できる。

ほぼ同時期の至近距離にある諏訪木遺跡と北島遺跡から、樋部倉矧という継手技法と、さらに工夫と手間が加えられた縦じ合わせ構造をもつ壁板が発見された意義は大きい。側面部のV字形状と対面のコの字形状から、諏訪木遺跡は桁梁材直下、北島遺跡は床材直上という部位まで特定される。余談ではあるが、V字の山・谷形状から礎材の諏訪木遺跡、雄材の北島遺跡という関係にあり、同時代の至近距離にある遺跡から雌雄両材が発見されたという、きわめて稀な例でもある。

さて、諏訪木遺跡の壁板を板倉造りの壁板と断定したが、遺跡から発見されるこの構造の建物遺構としては掘立柱建物跡が該当する。埼玉県では、古墳時代前期の掘立柱建物跡の発見例はまだ少ないが、諏訪木遺跡に近接する熊谷市・行田市小敷田遺跡（3棟、吉田1991）、熊谷市古宮遺跡（4棟、鈴木2004）、熊谷市天神東遺跡（1棟、栗岡1999）で知られている。

ところが、これらの掘立柱建物跡の柱間距離は1.6m～4.7mを測り、諏訪木遺跡から出土した樋部倉矧壁板幅（長辺）の1.84～5.4倍もある。この大きすぎる差には柱間距離＝壁板幅という関係が成立しないことを示唆し、当時の建物を復元するヒントとなる。つまり、遺構として残る柱掘形は通し柱の痕跡で、その間に1～3本程度の管柱を立てて、その間に壁板を落とし込んでいた構造が推測させられる。これを模式化したのが、第208図である。同時に、諏訪木遺跡から出土した壁板の長軸方向両端部付近の板厚差を、単純に隅柱と側柱に当てはめられなくなり、通し柱と管柱の関係であった可能性も浮上してきた。

現状では、一つの遺跡から同時期の建築材と建物遺構が発見された例は少ない。諏訪木遺跡でも

多くの建築材が出土しているにも関わらず、同時期の掘立柱建物跡は発見されていない。さらにマイナスの要素として、遺物としての建築材は二次的に転用・加工されたものが基本である。そのため、用途・部位・工法等の情報収集が妨げられ、建物構造の復元がより難しくなっている。

樋部倉矧の壁板の発見から、諏訪木遺跡の古墳時代前期集落には板倉造り建物が存在していたことが明確となった。これと連動するかのようになり、至近の北島遺跡からも諏訪木遺跡と酷似した縦じ合わせ構造をもつ樋部倉矧の壁板が出土している。ここから、周辺遺跡にも建築材の出土を期待させる。また、近接する諸遺跡からは同時期の掘立柱建物跡の検出例が増加し、これらの遺跡にも板倉造り建物が建造されていた可能性もある。但し、発見された掘立柱建物跡すべてが板倉造り建物であるわけでもなく、当時の各集落に普遍的に建造されていた確立は低いと思われる。集落規模からは、北島遺跡が当時の拠点集落であったことは間違いない。諏訪木遺跡をはじめ掘立柱建物を建造した諸遺跡は、北島遺跡を取り囲む衛星的な集落として位置づけることが可能で、古墳時代前期の社会を復元する糸口となる。

本稿では、①本来の形状が保たれた建築部材、②長軸方向両端部の板厚調節加工、③板側面部のV字谷形状、④平面形の大きな方形枿穴という視点から、板倉造り建物の縦じ合わせ構造をもつ樋部倉矧の壁板として報告した。

しかし、宮本長二郎氏から、六六A遺跡例等と比較すると、長辺の長さが短いことが指摘された。そして、枿穴の位置間隔から、本来の壁板を二等分に切断した可能性もたれた。これに対し、北島遺跡例とほぼ同規模であるという事実から、至近にある二つの遺跡から二等分された壁板材が発見される偶然性は低く、技術的な未熟さから長尺の板材が製材できなかったとする解釈をしていた。観察の結果、諏訪木遺跡・北島遺跡ともに切断痕

が確認された(註9)。また、諏訪木遺跡の場合には切断後に板厚調節のための二次加工が施され、再び建築材として再利用されていたことが判明した。おそらくは、北島遺跡例も同様で、建築材に二次加工を加えながら転用していた証拠となる。さらに、諏訪木遺跡と北島遺跡との一致する再利用方法から、ここには何らかのルールが存在していた可能性を窺わせる。

樋部倉矧の壁板の報告案に対し、今後も様々な指摘が予想され、再検討を要するであろう。その準備として、既出土の建築遺物の再精査を行っていく必要がある。また、同時期の建物遺構と建築遺物の発見例の増加にも期待したい。これらの新資料も加えて、改めて、出土した樋部倉矧の壁板の解釈を行う必要がある。そして、その延長線上には、当時の建物構造・建築技術等の復元を試みることがあり、今後の課題の一つでもある。

板倉造り建物の復元案(第208図)については、「穀倉」を前提としてイメージしたものである。しかし、発掘調査の成果からは、穀倉であったという考古学的な根拠はみつからない。今後の検討に伴い、復元案を改正する必要もある。

註

- 1 日本の木造建築の板壁には、大仏様や和様の建築に使われる横羽目と、禅宗様建築に使われる堅羽目がある。
- 2 芋矧(突付け矧)は、縦長方向の板側面に龜をかけて滑らかにし、板側面部の断面形では「コ+□」のように板と板を矧ぎ合せる方法。床板・羽目板に用いられる。
- 3 殺ぎ矧(羽打ち矧)は、芋矧と同様に縦長方向の板側面に龜をかけて滑らかにするが、板側面部の断

面形が△形になるように整形して矧ぎ合せる方法。板側面部の接着面積が、芋矧よりも広くなる。

- 4 違矧(合決・相決)は、縦長方向の板側面部を階段状に加工し、板と板を矧ぎ合せる方法。この方法は、家屋の外側の下見板や羽目板に適している。
- 5 本貫矧(突矧・印籠決)は、縦長方向の板側面部の一方を凸形に、他方を凹形に加工し、凹形の谷部に凸形の山部を差し込んで板と板を矧ぎ合せる方法。堅木の床板に使われる。
- 6 雁尖矧は、縦長方向の両方の板側面部を凹形に加工し、凹形と凹形を矧ぎ合せる時にできる穴に接合材(副木・へぎ板)を差し込んで接合する方法。主に、寺院・神社の建築物の床板に使われている。通常は、板材に比較的やわらかい樹種、接合材に硬い樹種が用いられる。また、強度を増すために、板と接合材の木目が交差するように加工される場合もある。
- 7 千切矧は、板と板を千切形の栓を詰めこんで矧ぎ合せる(連結させる)方法。千切とは、経糸を巻く織機の部品の一つで、両端が広く中央が括れた棒状のものである。
- 8 枘穴の大きさとV字形の暖味さから、縦じ紐による緊締に加えて、壁板と壁板の継ぎ目に帯状の板材(目板)を覆い被せ、この目板に木栓を打ち込んで壁板に固定する方法を想定していた。このように、壁板と壁板の継ぎ目を覆うことによって、接合部の強化と密閉性の向上が図られたと予想していた。この案に対し、宮本長二郎氏から建築技術として類例がないこと、出土した壁板に目板の当たり痕が見られないことから、否定された。
- 9 出土建築材に対して、「風触差による屋内外の判別」、「他の部材との当たり痕跡の見極め」、「切り口の良悪の区別から製材時の加工と転用時の加工を判別する」という考古学的視点とは異なる観察方法が教示された。

引用・参考文献

- 浅野晴樹 1989『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集
- 池谷初恵・芦川忠利 1996『西大久保・奈良橋向遺跡』静岡県二島市教育委員会
- 磯崎 一 2005『北島遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第305集
- 岩崎しのぶ・望月由佳子 1996『瀬名遺跡Ⅴ（遺物編Ⅱ）』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第79集
- 大谷 徹 1991『北島遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集
- 大谷 徹 2004『北島Ⅲ／田谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第292集
- 大野淳也他 2005『桜町遺跡シンポジウム 考古資料から建築材・建築技術を考える 記録集』桜町遺跡発掘調査団
- 小矢部市教育委員会 2005『出土建築材資料集—縄文・弥生・古墳時代—』
- 狩野隼他 1984『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町木製品・総括編』富山県上市町教育委員会
- 栗岡 潤 1999『天神東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第240集
- 黒坂敏二 2002『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集
- 駒宮史朗・島羽政之 1997『埼玉県指定史跡 中宿古代倉庫群跡 復元整備報告書』岡部町教育委員会
- 桜町遺跡発掘調査団編 2001『北陸の縄文遺跡 桜町遺跡調査概報』学生社
- 佐野五十三・中川律子 1996『角江遺跡Ⅱ 遺物編2 木製品』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第69集
- 寺社下博 2002『北島遺跡』平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書・熊谷市教育委員会
- 鈴木孝之 1998『北島遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集
- 鈴木孝之 2004『古宮／中条条里／上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第298集
- 宅間清公 2005『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第303集
- 竹中大道具館 1985『竹中大道具館 展示解説』
- 田中広明 2002『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集
- 田中広明 2004『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第291集
- 富田和夫・鈴木孝之 2005『北島遺跡Ⅶ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第304集
- 中村倉司 1989『北島遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第88集
- 奈良国立文化財研究所 1984『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 史料第27冊
- 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所 史料第36冊
- 樋上昇 2005『愛知県の概要』『出土建築材資料集』第2分冊P168～P183
- 穂積裕晶 2000『六A遺跡発掘調査報告（木製品編）』三重県埋蔵文化財調査報告第115～17集・三重県埋蔵文化財センター
- 松井 章 2000『馬首祭記論』『東北学』Vol.3 東北芸術工科大学東北文化研究センター P188～197
- 松田 哲 2007『諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第2号墳』平成18年度熊谷市埋蔵文化財報告書・熊谷市教育委員会
- 三宅博士・広江耕史 1987『北松江幹線新設工事、松江連絡線新設工事予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書』鳥根県教育委員会
- 宮腰健司他 1992『朝日遺跡Ⅲ』愛知県埋蔵文化センター調査報告書第32集
- 宮本長二郎 1987『上小紋遺跡出土建築部材について』『北松江幹線新設工事、松江連絡線新設工事予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書』鳥根県教育委員会
- 宮本長二郎 1996『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- 宮本長二郎 2003『六A遺跡出土建築材の復元考察』『六A遺跡発掘調査報告—資料分析・遺物観察表・写真図版編—』三重県埋蔵文化財調査報告第115-16集・三重県埋蔵文化財センター P1-9
- 宮本長二郎 2007『出土建築部材が解く古代建築』『日本の美術』第490号 至文堂
- 山田昌久編 2003『考古資料大観 第8巻 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館
- 山本 靖 2005『北島遺跡Ⅹ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第302集

- 吉田 稔 1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
- 吉田 稔 2003『北島遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集
- 吉田 稔 2004『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第293集
- 吉野 健 1999『前中西遺跡』熊谷市前中西遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書・熊谷市前中西遺跡調査会
- 吉野 健 2001『諏訪木遺跡』熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財報告書・熊谷市遺跡調査会
- 吉野 健 2002『前中西遺跡Ⅱ』平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書・熊谷市教育委員会
- 吉野 健 2003『前中西遺跡Ⅲ』平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書・熊谷市教育委員会
- 渡辺清志 2007『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集